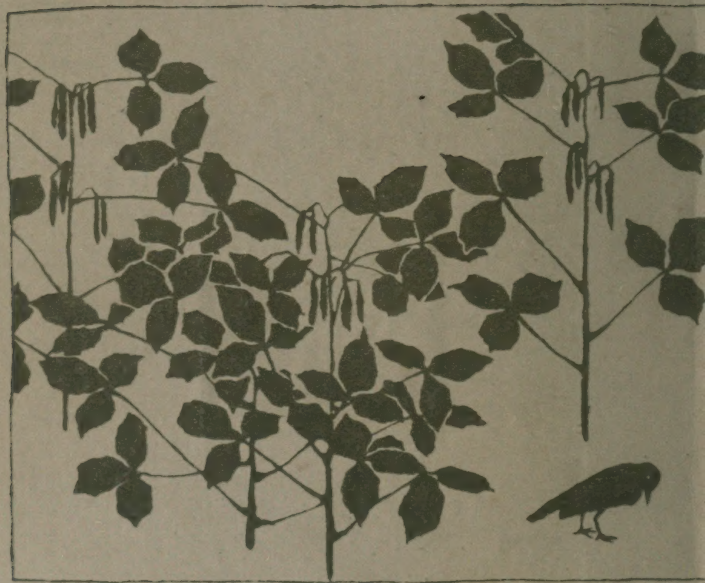


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 4393









わつさり  
あつさり

へりきまも

思はず

にせざる事

へりきまの皮

とは心

きり

心

のま

や

誰の

ま

ま

雙對不

向に... 三字 隸の

大... 三

大寶... 三

雙... 三

明... 三

明... 三

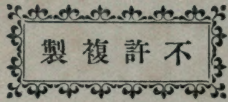
三

開新四十四年八月二十日  
開新四十四年八月二十三日  
開新四十四年八月二十六日

寶助 金八 益正 助

明治四十四年五月二十九日印  
明治四十四年六月三日發  
明治四十四年九月二十日再版印刷發行

刷 藤栗毛  
定價 金八拾五錢



不許複製

編輯兼  
發行者

東京市神田區錦町一丁目十九番地

三浦理

印刷者

東京市本所區番場町四番地

守岡功

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地

有朋書店

大賣捌所

東京市神田區裏神保町一番地

三省堂書店

同

大冢市東區南本町四丁目

三宅莊藏書店



わつさりー  
あつさり

へちまとも  
思はずー苦  
にせざる事  
へちまの皮  
とは心配な  
事を去るの  
意、狂歌に  
心にはへち  
まの皮をた  
やすなよ浮  
世の垢を落  
さんがため

北「何をへし折つた」

彌「今のぴしやくで、はつとへたばつたはずみに、かの天狗の面の鼻柱が、ほつきり  
といつたやうだ。あいたくくく」ト金玉をかよへて痛がるゆゑ、みなくをかしさ、  
どつと打笑ひて興に入りけるうち、ほどなく雨も雷鳴もやみ、空も青雲となりたるに、  
かはちや「うれしや天氣になつたさうな。ナント最一ぱいツツわつさりと飲みなほして  
いのわいの」ト又あらたに肴を取寄せ大笑となり、おのくよきほどに酒汲みかはし、  
それより打連れて長町へと歸りける。斯くて彌次郎兵衛北八は河四郎の方にまたく返  
留して、所々残る方なく見物したる内にも、二人とも江戸氣性の太腹中にて、かよる難  
澁の身をへちまとも思はず、洒落とほして少しもめけぬ様子に、河内屋の亭主大きに感  
心し、衣類など新しく着かへさせ、路用も十分に持たせ大阪を出立させける。

東海  
道中  
膝栗毛  
終

彌「拜むからもういつてくれるな。」

左「ソレ又光つた。」かみなりごろくくく。」

北「オ、こはやの。」ト後家の物眞似して彌次郎に抱きつくと、突きとばして、

彌「アイタ、。エ、何をしやアがる。あいたく。」

北「コレ、どこがいてへ。」

彌「この風呂敷に包んだ天狗の面が、痛くて堪へられねへ。」

北「ハ、。コリヤその筈く。」

左「時に、雨は止んださうぢや。この間、ちやと船へ出かけましよかい。」

彌「サア、早くめへりやせう。」ト一人せきこみ、先へ立ちて、女關の方へ出かける

と、大そうなる電光、ぴかりく、ごろくく、びしやくくくと頭の上へおちか

かる如き大雷鳴に、彌次郎わつというてそこへたばり、顔をしかめて、

彌「あいたくく。」

左平「何としたぞいな。」

彌「エ、何とした所か、へし折れた、へし折れた。」

彌「コリヤいと思ひつきだ。サアそんなら出かけやせう。」

左平「しかしお待ちなされ。どうぢややら雨が落ちて来たぢやないかいな。」

彌「雨でも鎗でも頓着はねへ。サアお立ちなせへ」ト一人氣をもみ、先へ出かけるころに、時ならぬ雷、彌次郎の頭の上にて、ごろくくくく

みなく「コリヤやくたいぢや。」

彌「くはばら、くはばら」トうろたへて驅けもどる。此うち雨は次第に大ぶりとなり、電光すさまじく、雷はしきりに鳴りつどけ、雨戸をくるやら窓をしめるやら、三文字屋の家の内ものも立騒げば、みなく「ひとつ所に寄りかたまり、

北「コリヤとんだ目にあつた。此雷鳴で羨しいはあら吉だ。今頃は船の中で、ごろく

びつしやりといふ度に、アノ後家めが、オ、こはなぞと、しがみつきをるだらうの。」

かへちや「ソリヤさうはかいの。アノ後家はあら吉にえらはまりぢやといふこつちやさかい、この雷鳴を幸に、食ひついたり引ついたり放れはしよまい。」

北「さやうく。アノまた後家が額付や生下りの鹽梅では、こたへられめへ、のう彌次さん。」

えらはまり  
—熱心なり  
との意



この意  
無心で  
大さじを







拂ふをまく  
といふ

やつとは一  
めつたには

くと、やがて奥座敷から庭におりて、かの後家はあら吉を伴ひ、腰元下女打連れて、何やらおもしろさうに笑ひざよめきて出かける體を、こなたより見て、

左平「アレく、あら吉はなるほどえい男ぢや。」

彌「アノ黒仕立の野郎か。ナニあれがいゝ男。くそが呆れる。色のなまじらけた、日影の瓢箪見るやうなしやつらだ。」

仲居「おまいさんそないにいうてぢやけれど、あないなえい男はやつとはござりませんわいな。そぢやさかい、あら吉に惚れん女は、おさかぢうには無いわいな。」

北「アレく、彌次さん見なせへ。何か後家がさよやいて、こちらの方へ指をさして笑つてゐるは、大方おめへのこつたらう。」

彌「いめへましい。河内屋の親方、おめへが恨だく。」ト無上に愚痴をいつて口惜しが  
る。後家は委細かまはず騒ぎつれて出てゆく。彌次郎うらめしげに、「モシく、わつち  
らももうけへりやせう。」

かはちや「えい事があるわいな。私が船待たしてあるさかい、皆一所に乗つて、敵等が  
船の邪魔してやるかいな。」

彌「コリヤ何のことだ。モシ、あら吉たア何の事でござりやすね。」

かはちや「アリヤあらし吉三郎というて、今での立物、年は若し男ぶりはよし、大阪一番の役者ぢやわいな。」

彌「ハア、そんなら後家どのが俄にうろたへて立つていつたは、その役者に惚れてゐると見えるわへ。」

かはちや「さよぢやあるぞいな。」

左平「コリヤア彌次さん、いかいお力落ちやわいな。」

北「ハ、ハ、ハ、おもしろへ、おもしろへ、コウ彌次さん、こよへ來がけに見たら、このちつと先に髮結床があつた。おめへ今行つて髮月代でもして來ねへな。」

彌「何とでもいやアがれ」ト面ふくらして小言いつてゐる内、番頭また出で來りて、

「河四郎さん聞きなされ。これぢやさかい、わしや心づかひぢやわいの。アノあら吉がえらい最辰ぢやさかい、幸のことぢや、これからあら吉と一所に、船でもういぬさかい、わが身は一人歩いていねてよ、わしばかりまかれましてわいな。もう御相談の事もあかん話ぢや。お先へ参りましょ。どなたもこれにござりませ」ト挨拶そこくにして出て行

まかれ云々  
「邪寃者を  
何げなく追

彌「コリヤこてへられぬ。ハ、ハ、ハ、」

北「靜に笑ひなせへ。肴の中へおめへの唾が入らア。」

彌「入つてもいよ。黙つてゐろへ。モシ、とかくこの男めは、わつちがする事にけちをつけてなりやせん。わつちはこれでも唄もうたひやす。三味もかぢりやすから、女中方をころくとおもしろがらせる事が得手者でござりやす。そんな時には、とかく彼奴めがやきもちを焼いて困りやす。」

こけ「ホンニお前さんは、どうやらおもしろさうなお方ぢやわいな」ト思ひの外うけのよさに、彌次郎は心のうちに、もう占めたと喜びゐるうち、後家が召使の女來つて、

「モシ、たゞ今あら吉が見えまして、さつきにからあつちやの座敷で、あなたのお出でなさるをお見うけ申しましたが、御遠慮いたしてをりましたけれど、ちよつとなとお伺ひ申して往のてよ、あつちやの座敷に待つてでござりますわいな。」

こけ「アノあら吉が來てかいな。コレハ河四郎さん、有難うござります。皆さんこれはへ、ハイさよなら」ト俄にそはくとして、挨拶もそこく、番頭引連れて立つて行く。彌次郎は呆氣に取られた顔をして、

あら吉一二世嵐吉三郎  
立役を得意  
とし藝に品  
位あり當時  
京阪劇壇に  
覇を唱へた  
り



左平「コレく、ソリヤ盃ぢやない。煙草入ぢや。」

彌「ホイ、是は取りちがへて麿相千萬。サア北八ついでくりや。」

北「おらア知らねへ。勝手に注いで飲みなせへ。」

彌「エ、しよにんな男だ」ト仲居に注がせ飲みほし、番頭へさすと、押戻して、

番頭「えらいお手際ぢやな。最一つお重ねなされ。」

彌「イヤもう、わつちはいつも酒を飲むと、だんく色が白くなつて、後にはとんと白

羽二重のやうになりますが、今日はなぜかこんなに眞赤になつて、こたへられませんか。」

ごけ「お相なといたしましよかいな。」

彌「ハイくくく、ノウ北八、あなたへお相をおたのみ申さうかの。」

北「勝手にしなせへ。」

彌「ハ、ハ、ハ、さやうなら憚ぢやけれど。」

ごけ「なんとまあ一ト盃をうける。」

かはちや「コリヤお二人して、あつちやこつちやへ、とんと婚禮の盃のやうぢや。」

ごけ「おいをかもし、オホホホ。」

れきーそば

こけ「お許しなされ。オホ、、、」

ばんとう「どなたも御免下さりませ。あつちやは女ばかりで、ねからはから御酒の相手がないさかい、幸と河四郎様のお出で、こなたの後室の大悦、ついては私も、お相など致さうと存じて参りました」

かはちや「サア、、、、もちつとねきへお寄りなされ、早速ながら持合せた盃、まづあなたへ」トこけの所へさせば、につこりとして取り上げ、

こけ「わたしもいこ酒が過ぎたさかい、もうそないにはようたべませんわいな」トいひつよ少し受けて飲み、「このお盃、御返盃いたしましよまいな」

かはちや「イヤ、わたしも先刻から、えらう過ぎました。マアどつちやへなとお差しなされ」

こけ「さよなら、あなた近頃、憚様ながら」ト彌次郎へさす。彌次郎は始終夢中となり

この後家の顔ばかり尻目にかけて、じろりくと見つめるたりしが、盃をさよれて、ぞつとするほど嬉しく、さうろたへ出し、

彌「ハイ、く、く、いたどきやせう」

かはちや「さよぢやわいな。時に、今その後家どのが、こよへ見える筈ぢやわいの。」

彌「ナニ、今こよへかへ。ソリヤ大變だ。ア、このなりでは詰らねへ。モシ 左平さん、

こよらに髮結床はござりやせんかね。」

北「エ、おきなせへ。むくろじは三年磨いても白くはならねへ。性の物を性でお目に

かけるがいよ。たとへにも、見ぬあきなひは出来ぬといふが、是ばかりは、見たら直

にあつちからお断りにあひさうな事だぜ。ハ、ハ、ハ、ハ。」

左平「時にむこの座敷から、えい年増が來をるわいの。」

かはちや「あれぢや、あれぢや。大方こよへ來るのぢやある。」

彌「コリヤ堪らぬ〜」ト無上に襟かきあはせ、俄に眞面目な顔してゐると、かの後家

といふは、すつかりとした上代物、生下りふつさりとして、色は雪の如く白く、ふたか

は目に愛嬌がほたり〜とこほれ落つるばかり。縮緬の無垢三ツばかり重ねて、黒

びろうどの帯前にむすび、桃色の縮緬に縫のある長じゆばん、裾からちら〜、すこし

ほろゑひきけんに番頭引連れ來ると、河内屋の亭主、出迎へて、

「コレハようこそ、さよあつちやへお出でなされ。」

あつちや  
彼處

むくろじ  
無患子、追  
羽根の玉な  
どにする黒  
色の木の實

たはめんくが己惚れてぢやさかい、えいぢやないかい。」

北「そんなら、男ぶりは五分々々にしたがいよ。年のわけへだけおれが行く。」

彌「イヤ、お年役におれだ。」

左平「かうさんせ。わし鬨を出ささかい、長いのを取らんしたのがお妾様ぢや。」

北「コリヤよからう。南無住吉大明神様、わたくしへ長いのをおさづけ下さりませ。」

左平「サア取りなされ。えいかいな、ソレそいくのすウ引。」

彌「コリヤ長いのぢや。しめたく一ト有頂天になりて喜ぶ内、河内屋四郎兵衛歸來り、

「サアでけたわいな、でけたわいな。番頭に掛合つて來たが、何ぢやある甘い話ぢや。

給金は望次第で、別にまた牛蒡と玉子代がなんほやら、爲着は後家御から年中やはらか

もの、何ほなと拵へしだい、三臟圓と巨勝子圓は、通でとて飲ませるといふこつちやわ

いの。」

彌「江戸にも、山東京傳の見せに、讀書丸といふ薬がござりやすが、コリヤア洒落でな

し、ほんとうに氣根をつよくすること奇妙といふ薬だから、ハテ氣根が強くなれば、何

もかも強くなるといふもんだによつて、是も取寄せて用ひませう。」

京傳云々—  
當時小説家  
はよく薬な  
どを賣りた  
り



と思つてぢやなら、わし世話してあぎよわいな。マア何ぢやあると、その後家どの見なさらんかいな。」

北「ナアニ、見ずともようござりやす。せうくはめつかちでも鼻つかけでも、そこにやア頓着はござりやせん。」

かはちや「ぢやてよ、その番頭が供して、あつちやの座敷へ来てぢやさかい。ドレ、わしがマアちよといて、よう聞糺してこうかいな。」

彌「ハイ、宜しくお頼み申しやす」ト一盃機嫌に、無上にのりが来て頼むゆる、河内屋は立つて奥の方へ行くと、後にて、

彌「コウ、北八、おれが行くのだぜ。」

北「氣の強いことをいふ。おめへ男妾といふ面か。つひぞ鏡を見たことはねへさうだ。」  
彌「ばかをいふな。男が悪くても手がある。手めへにやましたは。」

北「ナニましなものだ。ノウ左平次さん、おめへが女なら彌次さんに惚れるかわつちに惚れるか、どうだ。」

左平「わしやどつちへも氣はないわいのハ、ハ、ハ、ハ。しかし人は惚れいでも、おまいが



彌「手めへ飲んでさしやれ。」

北「もう口をかけるの。」

左平「お肴は何がよかる。」

北「何ぞ、腹にたまりさうな物をくんなせへ。」

彌「エ、きたねへ事をいふ男だ。」

北「へ、人のこたアいひながら、ソレ、まだ盃もいかねへうちに、おめへ肴をしてやるぢやアねへか。」

左平「コリヤ、えらいしゆみになつてぢやわい。」

彌「イヤもう、河内屋の親方のお陰でなりやこそ、こんなうめへ物も食ふやうなものなるほど錢のねへ旅は、愛いもの辛いものだ」トさすがの彌次郎、初めて弱い音を出ししよけ返りていふゆゑ、左平をかしさを隠して、

「ナント、おまいかたは大阪者にならんせんかい。」

北「イヤ、わつちらも何ぞ覺えた職でもあるといふけれど、是で食はうといふ事が一つもねへから、どこへ行つても詰らねへものさ。」







樂天云々―  
白樂天、日  
本人の才學  
を試みんと  
て我國に渡  
り、青苔如  
衣負巖背、  
白雲似帶圍  
山腰と吟じ  
たるに住吉  
の神漁夫の  
姿にて、苔  
衣着たる巖  
はさもなく  
て衣着ぬ山  
の帯をする  
かなと答へ  
たるに樂天  
驚きて逃げ  
歸りたりと  
いふ俗説

抑此大神は、ちはやぶる神代の御時、日向の國、小戸の橘の檍原より現れ給ひて、  
當社の御鎮座は神功皇后紀十一年、辛卯四月二十三日とかや。四社は底筒男命、中筒男  
命、表筒男命、神功皇后これなり。攝社、末社、總て三十餘前、巍々として連れり。まづ  
御本社にぬかづき奉りて、

海上をまもりたまへる神がきや、いとおだやかに見ゆる並松。

和かに歌と出かけて樂天の、顔をよごせしすみよしの神。

かくて御社内をめぐるに、際限なければあらましにして、出見の濱の高燈籠も指さし見  
たる迄にて、いそぎ三文字屋にもどりたるに、女、ばらくと立出で、

「お早うござりました。サアあつちへ御出でなされ。」

左平「アノ、河四郎さんはどちやいな」トいひつと、打連れて奥へ通ると、

かはちや「えらいお早いこつちやの。」

北「がうてきに腹がへつた。」

かはちや「マア一つあがりなされ」ト盃をさす。

北「彌次さん、お先へ。」

かくてそれより三人は、ほどなく住吉新家に至りけるに、けにも此御神の繁昌ましますことは、兩側の茶屋にあらはれ、いづれも家作美麗にして、赤前垂の女、門に立並び、「お休なく。お支度なさらんかいな。蛤のお吸物もござります。鯛も平目もござります。お入りな、お入りな。」

北「ア、どれもいよ茶屋が見える。御てへそうな。」

びちくくと客のはねこむ賑ひは、れうるさかなも新家町なれ。

此ところの名物は、金魚、酢蛤、ごろく煎餅、唐がらし、昆布、竹馬、糸細工などあきなふ家あまたある中に、料理茶屋は三文字屋、いたみ屋、分銅屋、戎屋なんどいへるが、わきて客のたえまなく、繁昌殊にいふばかりなし。

左平「モシく、爰が三もんじや。チトお待ちなされ」ト玄關より覗きて見れば、奥に長町の河内屋、はやこよに來りあはせ、

「コリヤ、左平次どの、早よごんしたの。」

彌「わつちらア、やうくたつた今めへりやした。先參詣致してめへりませう」ト是より、打連れて御社にいたる。







云々―寺よ  
り七月施餓  
鬼用に配る  
佛餉袋、檀  
家では寺の  
事なれば不  
承不承にこ  
の中に白米  
を一杯つめ  
るなり  
せりふ―理  
窟をいふ、  
議論する

障子せんば  
ん―笑止千  
萬の洒落

馬士「イヤ金玉はえいがな、膝の皿すりむいた。コリヤおまいがたは、何で此障子をわしが馬に打ちつけさんした。」

左平「わしや知らんわいの。」

馬士「知らんてよ、コリヤ誰が障子ぢや。」

おやぢ「わしがとこのぢや。」

馬士「見やんせ、こないに疵がついては濟まんわいの。障子に、今宮新家さいかちやと書いてあるさかい、これが證據ぢや。サアごんせく。何ぢやあるとこへいて、めきしやきと、せりふせにやおかんわいの。」ト障子をひつたくり馬につけ、細引にてからみ、委細かまはず、しやんくと曳いてゆく。

おやぢ「コリヤく、その障子どこへもて行きをるぞい。待てやい、待てやい。」ト追うて行く。みなく後より、

「てうさやようさ、まんざいらくぢや、まんざいらくぢや。」ト驅けて行く。

彌「ハ、ハ、ハ、馬方めが乙をやつた。ハ、ハ、ハ、ハ。」

美濃紙の破れかぶれと喧嘩せし、あとのしまつの障子せんばん。

馬士「イヤどした所か、あいたくく。コレ金玉がなうなつた。そこらにや落ちてな  
いか見て下んせ。」

おやち「ナニ金玉が、こよらにや見えんわいな。」

馬士「それでもどこへか。」

左平「袂にやないか見やんせ。」

馬士「ドレく、ない筈ぢや。廣袖ぢや。」

左平「コリヤこなさんもて來やしよまい。内へおいて來やせんかい。」

馬士「あほいはんせ、しかもわしや疝氣もちで大金ぢやさかい、こないに袋に入れて首  
にかけてゐるわいの。」

おやち「そしたら袋ふるうて見やんせ。」

馬士「ドレく、あるわいの。今のびつくりで、上の方へつるし上つたのぢやさうな、  
もみ出してこませ。イヤ出て來をつた、出て來をつた。」

北「ハ、ハ、ハ、なるほど大金だ。」

彌「せがきの袋と同じことで、不承々に一ぱいある。ハ、ハ、ハ、」

おやぢ「エ、こなんも阿房つくさんせ。こないに書いてあるは。コリヤわしがとこの看板ぢや。賣もんぢやないわいな。」

北「それでも、一分出して買うたを思いらア見てるたは。くそたれめが。」

おやぢ「おきくされ。こないな古障子。たれが百にも買ふものかい。大方、おどれら團子食ひをるととよ、はづしくさつたのぢやあるぞい。何ぢやあると、此障子おれが内までもてこい。サアあとへ戻りやく。」

左平「コレ了簡さんせ。ハテおまいの障子なら、こよからもていんで下んせいの。」ト障子を突きつければ突きもどし、かれこれとせりあふ所へ、馬方一人、馬を曳いてこよへ來かより、

「何ぢやい、何ぢやい。往來あけて下んせ。」ト曳いて通る鼻の先、障子をあつちこつちへ引張り合ひ、はふり出せば、この馬にあたり、ヒインくくく。ト驚きて跳上る拍子に馬方はねつけられ、三間向へのた打ちまはる。

馬方「あいたくくく。」

左平「コリヤどうしたぞいな。」



さる松一倭

童

聲あげさせ  
て泣かし  
て

北「コノさる松めらは、何ぬかしやアがる。」

さきのあひて「何ぢやい、おどれ病ひづかしくさるな。聲あけさせてこませやい。」

北「コリヤ江戸つ子だは。かたつばしから張飛すぞ」ト持ちたる障子を振りまはせば、

先の大勢の中に、今宮新家の権七といふあから顔のでつくりしたる親仁、北八を捕へて、

「コリヤ此障子は、どうしておどれがこよへもてうせたぞい。おれが内の障子ぢやわい。」

北「ばかアぬかせ。ナニおのれが所のもんか。」

おやぢ「イヤ、こないにおつきに書いてあるのが、おどれの眼にや入らんかいの。コレ

見い。善哉餅三五團子、今宮新家さいかちやと、しかもわしが書いたのぢや。今日この

衆と、住吉講の月參でいた留守に、ばよ一人おいて出たが、コリヤおどれら、盗みくさ

つてもてうせたのぢやな。」

北「ナニ、泥棒したと。うぬふてへ奴だ。コリヤア道で拾つたのだ。」

おやぢ「あほな事ぬかせやい。障子捨てて行くもんがあるかい。あんだからつくしやがれ。」

左平「コレく、伯父さん、コリヤかうぢやわいな。誰やらおまいのところで、この障子

買うてもて来てぢやが、道へすてたさかい、このお方がひろうて来てぢやあつたわいな。」

和中散―風邪の藥、薫は空に輪をかくより和にかけたるなり  
檀尻―江戸の山車、京の山鉾などの類

川太郎「おけく」トいふに、かの障子道の傍へ投げ出して行く。後より北八、

北「ナント、彌次さん、此障子を拾ひはどうだ。」

彌「イヤ、京の梯子に懲りてゐる。」

北「ハテ、二人でかはりく持つて、おいらも障子の陰を行かうぢやアねへか。おもしろい洒落だせ。」

彌「なるほど、今日がうてきに暖かで日向はのほせる。北八持つて來さつし。」

北「かはりく持つのだがいよか。」

彌「承知々々。コリヤ奇妙だ」ト北八に障子を持たせて、彌次郎その陰をゆくに、やが

て天下茶屋村なる、和中散是齋の見せさきに至りけるに、

麗かな天下茶屋から四方に名は、羽をのす鳶のわちう散みせ。

此内向の方より、下向の大勢づれ、

「てうさや、てうさや、まんざいらくぢや、まんざいらくぢや。ハ、ハ、ハ、アリヤ何ぢや

い。日傘の代りぢやな。アノもていきをる奴のつら見いやい。檀尻の印もちと、障子も

ていく奴に賢い面はないもんぢやわい。ハ、ハ、ハ、ハ。」

の四分の一  
一分と同じ

えらたかの  
數珠一粒の  
平たき數珠  
をいらたか  
の數珠とい  
ひ山伏など  
の所持する  
もの、こゝ  
にてはえら  
たか(甚高  
價)にかけ  
たり

は何ぞきよとい御趣向がござりましよいな。」

川太郎「わしや日向歩くとのほせて悪いさかい、コレ久助、コノ障子もてこんかい。コ  
リヤ、そちにも壹分やるは。その代り、住吉までコウ縦にしてもて歩け。オ、さうぢや  
さうぢや」ト障子一枚を縦に持たせて、その陰を行くといふ洒落なり、この川太郎とい  
ふは浪花名代の活物にて、かよるしやれをなし樂とし、その名残りたり。彌次郎北八、  
これを見てぎよつとし、

彌「イヤ、こいつはなか／＼おもしろい。」

北「上方もばかにやアされねへ。とんだ洒落者がある。奇妙々々」トだん／＼此人々  
の後につきて行けば、およそ六七丁も行きたりと思ふころ、かの先へ行く大盡川太郎、  
「イヤ、障子も少し鬱陶しうなつたわいな。」

久助「ちと開けましよかいな。お庭はいこ廣い、泉水は御前崎、淡路嶋が築山とは、偉  
いもんでござりますすわいな。」

川太郎「久助、もう其障子はほつてしまへ。」

久助「もうよござりますすかいな。」

# 十編 卷之下

末社―大盡  
を大神に譬  
へ、其縁語  
にてとりま  
きのものを  
洒落れて末  
社といふ

百疋十一兩

かくて三人は、それより住吉街道に出たるに、貴賤老若打まじりて、此御神に歩行をはこぶ。道すがらの賑ひ引きもきらず。こよに大盡風の男、末社あまた連れたるが、騒ぎたちて團子屋の門に立ちどまり、おのくかの團子一串づつ求めて、横ぐはへにしやれで出かける。この大盡の名は川太郎といふ。

川太郎「コレ、ばさまや、わしや團子より外に、買うて去にたいもんがあるが、賣らんせんか」

ば「ハイ、何なと買うておくれなされ」

川太郎「そしたら、此門に立ててある障子一枚賣つて下んせ。是やろわいの」ト前さけの胴亂より、金登歩出してやると、婆肝をつぶし、呆れた顔してゐるうち、川太郎自らその障子をはづしにかゝれば、末社ども驚き、

「コレハ旦那、こないな破れ障子、百疋とはえらたかの數珠ぢやわいな。しかし、これに



北「おれも家がねへがいよか。しかし、今普請最中だ。出来上つたなら呼びやせう。」

女「ソリヤどこに普請してぢやへ。」

北「イヤ所は何といふ所か知らねへが、爰へ来る道に橋普請してゐた所があつたが、あれが出来たら、その橋の下で祝言しやう。」

女「そしたら、わしも新しい鍔なと貰うて、きりもんの支度せうわいな。」

北「ドレ、結納に壹文やらうか。ハ、ハ、ハ、おれが乞食だと、手めへを女房にするものを。残念々々。」

女「ハア、お前さんは、アノわたしらが仲間の衆ぢやないかへ。」

北「知れたことよ。おいらアしらきちやうめんのお町人様だ。」

女「わしやまた、そないに垢ぢみた、しゆんだなりしてぢやさかい、仲間の衆かと思つたわいな。」

北「エ、いめへましい事をいふ。」

左「ハ、ハ、ハ、お見たて、えらいもんぢや。サア、ハ、ハ、ハ、お出でんかいな。お出でんかいな。」

しゆんだ  
けちな、見  
すばらしい

かいな。」

北「イヤ、打つ位ならこつちにもある。」

女「そしたら、おまいさん一つ打つてお貸しなされ。」

北「いよことをいふ、しかし貴様のこつたものを、打つて貸しやせう。ノウ彌次さん、見なせへ。乞食にしておくは惜しい器量だ。」

彌「ホンニ仇代物だ。コレ、手めへ男があるか。」

女「ハイ、亭主には去年別れましたわいな。」

彌「そんなら、又あたらしく片付けばいよに。」

女「さよぢやわいな。此間も世話やいてぢやお方があつてな、先の男もよい男ぢや、年

中裸でこそゐれ、てんでんまのおてこが、ねからえらい上手ぢやてよ、一生貰ひで

食せかねん男ぢやさかい、あこへ嫁かんかてよいうてぢやあつたが、肝心の家がないて

よ、よう参じませんわいな。」

彌「おれがいよ所へ世話をしてやらう。此男はどうだ。」

女「オホ、ハ、ハ、あのお方のとこへなら、わしやどうぞ嫁きたいわいな。」

仇代物—意  
氣な女

てんでんて  
んま云々—  
乞食が貰ひ  
あるく時に  
唄ひし文句

上宮太子  
聖徳太子

抑おさこの四天王寺てんわうじは、上宮太子じやうぐうたいしの御草創ごさうさうにて、由來ゆらいは太子傳記たいしでんきに詳くはしく見ゆみ。まことに日本最上にほんさいじやうの靈場れいちやうにして、堂塔だうたふの莊嚴しやうごんいふもさらなり。

何なんとなくこころは有頂天王寺うちやうてんわうじ、われをわするよありがたさには。

御境内ごけいだいの廣大くわうだいなる、記しし盡つくすべからず。大方たほかたに順拜じゆんはいし、こよにもいろくあれども略りやくす。それより安部街道あべかいでうに出いでゆく道みちすがら、畑はたうつ男おとこの唄うたふを聞きけば、

「坊ぼんさまよヲ、大たほんよヲ、ちよつちよとめさるまいかいの。コナ大たほんよ。」

彌や「とつさん、精せいがで出いやすの。もう何時なんどきだへ。」

男おとこ「アイ、きんのふの今時いまじ分ぶんぢやあるぞいな。」

彌や「おきやアがれ。お定さだまりの洒落しやれをいふは。時ときに北八きたはち、煙草たばこの火ひでも一つ打うたつせへな。」

北きた「向むかうに乞食こじきが呑のんでゐるから、吸すひつけなせへ。しかも女おんなの乞食こじきだ。」

彌や「ナニきたねへ。」

北きた「とんだ事ことをいふ。こつちの煙管きせるで吸付すひつけるものだを。ドレく、おいらが借かりてやらう。コレ、火ひを一つ借かさつし。」

二十一二計じゆんじの女のひにん「ハイ、いんまツイ消けしましたさかい。ちよと打うつて上もけましよ







ごんせく。お前方はどごちやいな。」

彌「わつちらア江戸でござりやす。」

こえとり「ハアお江戸はえい所ぢやけな。アノお江戸は肥が一荷なんほほどするぞいな。」

彌「わつちらアそんな事は知りやせん。」

北「コウ彌次さん、もつと後へ下つて行かう。」

彌次郎が袖を引いて、肥取のおやぢを先へやらんと、わざと小便をする。此内、暫くしてかのおやぢを先へやり、

彌「いめへましいおやぢめだ。おいらに糞の直段を聞いたとて、何の分るものだ。氣の

きかねへ。」トいひつゝもはや餘程隔たりしならんと、さつくとゆく向に、また今の肥

取のおやぢ待受けてゐる體に、

北「エ、情ねへ。あそこにまた待つてゐるやアがる。」

こえとり「サアく、ごんせく。お前方、又爰で道が知れぬかる。サアく、ごんせ

ごんせ。今見ればお前方、あそこで小便してぢやあつたが、お江戸ぢや、あないに皆こ

き放しにしてぢやさうな。もつたいないことの。マアお前方は一日に幾度ほどづつ、し

ヨイく、サツサく、評判々々。

彌「おいらは年中うそをつくが聞いてあきれらァ」

商賣しやうばいのうまみを見せてぜにかね錢金を、ぬれ手でつかむ粟餅あはもちの茶屋ちやや。

かくて境内けいだいを打過ぎ、馬場先通ばばさきどおに出でたるに、こよはすこしの遊所あそびしよありて、おやま錢子けいこのなまめき行きかふさま花はなやかなり。

左平さへい「時に、わしらはちよと此裏このうらに用事ようじがあるさかい、お前方まへがたは此通このごよりまつすぐに、先まへお出いでなされ。ツイこの先さきが天王寺てんわうじぢや。いつきにわし追たひつくさかい」

彌「よしく、お先さきへめへりやせう」トことにて左平さへい次に別わかれ、二人は話はなしつれて迎むかひゆくに、突當つぎあたりて少しすこしまがる所ところ、いづれへ行いきたるがよきや知しれざるゆゑ、先さきへ行く肥こ取とりのおやぢを呼よびかけ、

「モシく天王寺てんわうじへはどうめへりやすね」

こえとり「わしが後あとへついてごんせ」

北「エ、ついて来こいはあやまる。くさいく」ト後あとへ下くだらうとすると、肥取こねとりふり返かへりて、「コレイノ、わしや天王寺てんわうじのツイねきぢやさかい、つれまうていこわいの。サァく、

さんも中直りにお供さんせ。もう四ツ過ぢやある。いつきにお出でるがよございます」  
トいふに二人も幸のことなりと、その相談にきはまり、左平次とも互に挨拶して心とけ、  
やがて支度調へ、亭主は船にて行くとの事なれば、こなたは生玉天王寺をまはりて行か  
んと、又左平次の案内にてこよを立出で、高津新地にかより行くほどに、早くも生玉の  
社にまゐりて、

御普請もあらたに見えて金ものの、ひかりますなりいく玉のみや。

當社は生魂命化現の靈玉を鎮めたてまつるといふ。常に參詣の人多く、境内に田樂茶屋  
たて續き、見せもの、齒みがきうり、女祭文、東清七が浮世ものまね、その外さま／＼  
あるが中にも、栗餅の曲春は、此ところを元祖とす。向鉢巻に、手杵しやにかまへたる  
男、

えりにつく  
— 諂ひ媚ぶ  
る事  
あしがつく  
— 情夫の出  
来る事

「サア／＼、評判で／＼。元祖名代栗餅の曲春は生玉やが家の看板、ソレつくぞ、ヤレ  
つくぞ、アリヤコリヤつく／＼／＼／＼何をつく、栗つく、麥つく、米をつく。旦那は  
ん方には供がつく。若い後家御にやむしがつく。隠居さんは、ちよちんで餅をつく。お  
やまはお客のえりにつく。藝子にや又してもあしがつく。コリヤ麩の金だまへ砂がつく、



分限一長者  
と同じ、富  
豪

北「イヤ、このやろめは、ふてへ奴だ」ト立ちかよれば、左平次も一すぢでは行かぬ奴互に負けず、すでに摺合にもならんかと思ふ所へ、この河内屋の亭主、四郎兵衛かけ出で、左平を吐りちらし、北八を宥めて、委細のことを聞くに、此亭主の様子たのもしげに見え、ことに此家の主と見てとり、ふたりも奥底なく委細をかたり、身の上のすかんぴんなる事も打あけて頼みければ、亭主四郎兵衛わけよき男にて、ぐつと飲込み、

「よござります。ハテ萬兩分限でも、旅では金に困る事もあるもんぢやけにござります。此商賣いたせば、たとひどないなお方でもお客はお客、飯料がないてよそんなら出ていなしやれとは申しませぬさかい、何日なと逗留してお歸りなされ。」

彌「それは有難うございやす。もうそんなに長逗留しても詰りませんから、明日は出立いたしやせう。」

てい主「ハテ、せつかくお出でたもんぢや。ゆるりと御見物なされ。ホンニ住吉はまだぢやある。幸、今日わしも住吉へ行くさかい、お出でんかいな。しかし、わしははかまや新田の方へ用事が有るさかい、船でいこが、お前方は生玉天王寺かけて歩行でお出でなされ。新家の三文字屋といふ茶屋に、お待申しましょさかい、ノウ左平次どの、こな

あたぢやわ  
いな―あた  
はあたじけ  
ないの略

てんごう―  
冗談

「なんだ、拾五匁座敷代、三匁硯ぶた、壹匁五分すひもの、拾匁三分御肴いろく、貳匁五分御菓子、六匁八分六厘が酒、壹匁貳分四厘が蠟燭、メ四拾壹匁四分。ヒヤア目が出る、目が出る。」

北「コウ、左平さん、他國者だと思つて、あんまり人をばかにした。昨夜喰つたものが、何こんなにかゝるものか。總體上方者はあたじけねへ。氣の知れたべらほうどもだ。」

左平「イヤおまい方があたぢやわいな。何ぢやあると、くたものを拂つて下んせにや、わしが濟まんわいな。」

北「イヤおいらをあたじけねへとは何のこつた。ばかなつらな。」

左平「錢出してから何なといはんせ。あたけたいな。」

彌「コウ、左平さん、おめへいくら力んでも、此新町の書出しは違つてある。」

左平「違つたとは、何が違つたぞいな。」

彌「ハテ、わつちらが借りて來たは、子の四十壹匁四分、此書出しは亥の四十壹匁四分とある。」

左平「エ、おきくされ。てんごういはすと金出せやい。」

左平「サイノウ、そぢやさかい、アノ一人の年のいたお方が、どうぢややら氣の觸れたやうに見えるさかい、氣をつけさんしたがよいわいの。モシ雪隠へいたなら油斷さんすな。首なとくよりをろも知れんわいの。」

ほり出して  
こましたい  
—こますは

ばんとう「ソリヤ氣味のわるい。どうぞ早うほり出してこましたいものぢや」ト引分れて左平次奥座敷へ來り、

大阪詞、ほ  
りだしてや  
りたいの意

「モシ、早速ながら損料屋が勝手へ來ててござります。もうお脱ぎなされて、お戻しなされるがよござりませよ。」

北「アイ、けへしてくんなせへ。サア彌次さん、おめへも脱ぎな」ト二人ながら不承不承にぬぎて、もとの古布子を着る。左平次これを袖だたみとなして、

「ハイ、損料錢の書付でござります」トさし出すを、北八取上げ、

「なんだ、めて一貫八百文。こいつ高へく。ちとまけて貰つてくんなせへ」トやつつ返しついふ内、勝手より女來りて、

町  
九軒—九軒

「たと今新町の九軒から、御勘定をいたどきに參じたわいな」ト書付をさしおく。彌次郎取上げ、

びなせへ」

左平「ホンニ、わしもねから氣がつかなんだわいの。まあ何ぢやあると、ひとかへり戻りなされ、其着物の事ももあるさかい」ト一の富の目算ちがひ、左平次も、おのれが受合ひし損料の事も氣にかよひ、又彌次郎が、うかくと氣ぬけのしたる體に、もしや橋の上から、どんぶりとやりはせまいかと、心の中に油断せず、さまざまにいひくるめて、まづやうくと長町の河内屋につれ歸りければ、番頭はかの富のことも承知なれば、さだめし百兩せしめて歸りたらんと、出むかへて、

「コレハお早うござります。ソレ、女子どもお茶あけんかい。マア奥へく。時にお客様方は、何ぢややらおめでたい事があると、夜前ちらと聞きましたが、どうでござりましたな」

彌「イヤ一向やくたい、やくたい。しかし命に別條なく歸りやした」トひよろしくして二人とも奥へゆく。左平次番頭に嘯きて、

「イヤモ、偉いばんくであつたわいな」

ばんとう「おほかた十二支違ぢやあるぞい。ハ、ハ、ハ」

ばんく一番  
狂はせの略



さらすな  
—  
太い事をす  
るな

鶯のはし—  
齟齬する

北「何だ、いめへましい奴らだ。横つ面はりとばすぞ。」

ぼうつき「ア、いしこやの、どやいてこませ」トみなく、立ちかよるを、左平次中にいり、押宥めて、

「サアえいわいの。こちごんせ、こちごんせ」トむりに北八が手を引張り先へやり、彌次郎がよい／＼めきたる歩きぶりを介抱しながら、やう／＼と境内を出たれど、二人とも元氣おちて氣ぬけのしたる如く、ぐにやりとなりて、

「ホンニ勘平ぢあアねへが、する事なす事鶯のはしだ。今おもへば、昨夜の占者めがきつい事をぬかしやアがつた。」

百兩の的ははづれてあたらねど、よくあたりたるさきのうらなひ。

彌「エ、歌どころか。コリヤもう詰らねへものになつた。」

左平「サイノ、お氣の毒なこつちやわいの。」

北「コリヤ全體左平さん、おめへがわりへ、わつちらア他國もので、この土地の勝手は知らず、アノ札の十二支の理窟もいつて聞かしてくんなさると、何もこんな番狂はせはなかつたものを、いめへましい。いつそのくされに、是からどこぞ遊びにつれてあよ

北「イヤものの間違まちがひといふ事はありうちだ。そんなに安やすくいやアがるこたアねへぞ。」  
かう申「戯言たはこせいふと、どつき倒たふすぞ。」

左平「コレイナ、もうえいわいの。こちが悪い。ハテこない馳走ちそうにあうて、氣きの毒どくぢや  
さかい、しよことがない。サアくこち來きなされ。是これはしたり、彌次やじさんどしたもんぢ  
やぞい。サア立たちなされ、立たちなされ。」

彌「ア、コレく、北八おれが後うしろをかよへてくれ。」

左平「何なんぢやいな、おまい腰こしがぬけたかいの。」

彌「はつと思おもつたせいかして、どうも腰こしが延のされぬ。アイタ、ハ、ハ。」

北「エ、意氣地いくぢのねへこつた。サア立たちなへな。」

彌「コレサ、そのやうにひつばるな。あいたく」ト立上たつあがりしが、ひよろくとして歩ある  
かれず。せん方かたなくて四ツばひに立關けんかんまではひ出いれば、そろひのかんばん着きたる棒突ぼうつ  
の男おとこども、くちぐくに、

「偉わいあんだらぢやな。敵等てからは大方たほかたあないな事をいうて、酒飲さけのみにがなうせをつたもん  
ぢやあるぞい。晝盜賊ひるがんだうめが、やはなことさらすな。」

やはなこと

がついてあるわいな。一の富は子の八十八番。こなさん方のもてこんしたのは、亥の八十八番ぢやわいな。トいふはこの所の札はすべて十二支を後につけてあるゆゑ、同じ番號数の札十二枚づつあるゆゑなり。北八これを知らずうっかりとして、そこに心づかされば、この間違出來たるなり、兩人これを聞くより、はつと思ひぐんにやり投首して、北「エ、そんなら三文にもなりやせんか。彌次さん、コリヤどうしたものだらう。」

彌「ア、く〜どうといつたら、ねつからさつぱり力がおちて、おいらアもうどうも。」

北「エ、なんだ。おめへ泣くか業さらしな。」

かう中「コリヤこなさんたちは、よう札を改めてごんしたがえいわいの。えらい阿房な衆ぢやわいの。」

神主「いこやくたいぢや、とつとと出ていなしやれ。」

かう中「サアく〜いんだく〜。」

彌「ハイく〜。コリヤ思ひがけもない御馳走になりやした。なんなら十二支位は間違つてもようござりやすから、どうぞ今の金子を。」

かう中「阿房なことぬかしやアがれ。こよなならずめが。」

彌「ハイくくく」

かう中「さよなら、百兩の内廿兩ひきましてお渡し申しますさかい、それでよござりますかいな。」

彌「ハイく、どうなりとも宜しくなされて下さりませ。」

かう中「さよなら、その札をこれへお出しなされ。ひきかへに金子おわたし申しましよ。」  
北「ハイく、是にござりやす」トくだんの札を懐中より出してわたせば、講中手にとり見てびつくりし、

「モシ札は是ばかりかいな。」

北「ハイ、そればかりさ。」

かう中「コリヤ違うたわいな。」

北「ナニ違つたとはへ。アノ一の富は八十八番ぢやござりやせんか。」

かう中「さよぢや。八十八番ぢやわいな。」

北「そんなら何が違ひやした。」

かう中「コノ十二支が違うたわいな。當社の札には皆番付の上に、コレ見やんせ十二支



神主「さておのゝ方には、はじめて御意えます。拙者神職の名代でござります。先は

お悦申入れましよ。おめでたい事でござります。」

彌「ハイくく。」

かう中「金子おわたし申しましよ。」

北「ハイくくく。」

かう中「時にお願がござります。當社御覽のとほり大破につきまして、再建のため興行いたした富にござりますれば、お當りなされたお方へは、どなたへもお願ひ申して、百兩の内拾兩寄進におつき申しておもらひ申しますさかい、あなた方もさやうなされて下さりませ。」

彌「ハイくくく。」

かう中「まだ外にお願がござりますわいな。是もすべてさやうにいたします。金子五兩世話やきどもへ御祝儀といたして、おもらひ申したうござります。」

北「ハイくくく。」

かう中「まだ一つござりますわいな。今五兩あと札をおかひなされて下さりませ。」

ひらける瑞相、私などもあなた方にあやかるやうに、お盃いたどきましましたよかいな。」

彌「左様なら、憚りながら。」

かう中「イヤ、まづあなたへ。」

北「コレハ御馳走でござりやす、オト、ト、ト」ト下地は好きなり御意はよし、無上に

さいつおさへつ飲んでるうち、肴いろく出で、世話やき講中、かはりく挨拶に来

り、追従たらしくそやし立てて酒の相手となり、大方に生酔となりたる頃、

「御時分でござりましよ。麓末の出来合さしあけましましたよかいな」ト酒をひきて本膳をす

ゐる。

北「コレハいろく御念の入つたことだ。」

彌「もうお構なさいやすな。ハ、ハ、ハ、イヤモおもしろくて堪へられねへ」ト三人とも、

思ふさまに食ひしまふと、やがて膳もひけたるに、當社の神職と見えたるが先にたち、

講中二三人つきそひ、南鐮にて百兩さんばうに積み上げたるを、ふたわけにして目八分

に持出で三人の前へおく。彌次郎北八これを見るより、ぞくくとして有頂天となり、

にこくものにて控へると、

南鐮—二朱  
銀

北「へ、どうやら恥しいやうだハ、ハ、ハ。モシちとおたのん申しやす。わつちらア、昨日の一の富にあたりやした。金子をお渡し下さりませ」トいひ入れると、世話やき講中と見えたるが一人、羽織袴にてさつそく立出で、

「コレハようこそ、サア、こつちやへお通りなされ」ト玄關へ上けてしばらく待たせやがて又出できたり、「金子お渡し申しませよ。マアこつちやの方へ御案内いたしませよ」トうちつれて、ぐつと奥の二十疊ばかりの座敷へとほす。三人こゝに坐りて見まはすに、琉球表をけぬきあはせに敷きつめ、床の間、違棚のかけりきらびやかに、塵ひとつなき座敷の結構いふばかりなし。このうち十三四歳ばかりの美しき若衆が、黒袖にもえぎちやうの袴にて、茶煙草盆をはこび、次に吸物、すどりふた、銚子、盃をもちいづると、

かう中一人「たゞ今金子お渡し申しませよ。先、御酒一獻めしあがりませ。」

彌「コレハ、御丁寧な。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

北「ナニそれがをかしい事か。お辭儀なしにはじめなせへ。」

かう中「誠にはやこの多くの札数のうちにて、一の富にお當りなさるといふは、御運の

けぬき合せ  
に―すこし  
のすさまじ  
なく







膝栗毛十編 卷之上

子の刻—午  
後十二時

かくて三人は新町しんまちのあそびに、思おもひもよらず面目めんぼくを失うしなひしも、道みちすがら笑わらひの種たねとなりて、うち興かたじけなくじつと曲輪くるわを出いでたりしは、最早もはや子の刻こくす過ぎけるゆゑ、順慶町じゆんけいの夜見よみせもひけて往來わうらいさびしければ、おのく足あしをはやめて長町ながまちに立歸たちかへり、翌日あすこそは、かの百兩りやうをあたふまり、今宵こよひの恥辱ちじよくをすよがんと、胸工むねたくみして河内屋かはちやの奥座敷おくざしきに臥ふしたりけるが、何なにとなく心こころさえて寢入ねいりもやらず、漸やがやく一ばん鶏どりのうたふころ、とろくとまどろみたるが、早はやくも夜明よあけて、こよに泊とまり合あはせし旅人たびびと追々おしくた起出たいで、はなし聲こゑするに、彌次郎やじろ兵衛べゑ北八きたはちも目めざめて床とこを出いづれば、左平次さへい目をこすりながら出いで來きり、はやとくくと勸すすめたつるにぞ、ふたり食しょくじ事もそこく、支度しだく調ていへ、昨夜さくやの損料そんれう着物ものひ引ひつぱり、立出たちいで急いそぎはせ行くまよに、頓やがてかの座摩ざまの宮みやなる富會とみくわい所にぞいたりける。

北「急いそぎ候さうらふほどに、もうこれだく。サア彌次やじさん入はいらねへか。」

彌「手てめへ先さきへ入はいれ。」

とつと云々  
—全くくだ  
らぬ事ぢや  
埒もない事  
ぢや

彌「オヤ、何で此羽織に十文字がぬひつけてある。」

左「ハ、ハ、コリヤモウ、とつとねからやくたいぢや。ハテ旅のお方々ぢやもの、そなに着物用意してお出でるお方ばかりもないもんぢやさかいそれで損料借つてお出でぢやわいの。」

北「ナニ、おいらが損料の着物きて来るものか。とんだ事をいふ。」

左「イヤもう、そないにいはんしてもあかんわいな。長町の損料屋のきりもんには、みな十の字の印ついてあること、敵等よう知つてぢやさかい、それであないにいふのぢやわいな」ト十の字のわけさらりと分り、二人にはかに大へこみとなり、北八なまなかの事いひつのも、今更恥のうはぬりし、くしやく、思ふ内にもをかしくなり、さうく支度して、こそくとこよを出かけけるに、そりやお歸りぢやと、仲居ども大勢目ひき袖ひき、笑ひかくしておくり出るにぞ、三人やがて表にたち出でて、  
損料のきものみか太夫まで、かりてみたりの不首尾たらしく、  
十の字のしるしありとは露しらず、借りし羽織のうらめしきかな。  
かく打興じつと長間さして急ぎける。

ふんばりめ  
ら—江戸詞  
にて卑しき  
娼妓を罵る  
言葉

粹すぢやぞへ、無粹むすぢやぞへ。

北「ハテ、ぬしの知つた事ぢやアねへ。無粹むすでもさんずるでも頓着どんぢやくはねへ。サアふんばりめら、十の字たア何のことが、ぬかせく」トわめき散らすを、彌次郎やじちろう左平次さへいじいろいろに止めても、酒機嫌さけけんにて一向いっかうに合點がてんせず。せひく、十の字のわけを聞かねば、了簡りょうけんならぬとの事ゆゑ、左平次さへいじもしち面倒めんどうに成り、この上うへはせん方かたなしとて、

左「コレく、仲居衆なかるしゆ、あないにおつしやるものを、しよことがない、十の字じの事こといはんしたがえいわいの」

仲る「そぢやてよ、それがまあ」

北「早くぬかせ」

仲る「いふたら又またお腹はらたちなますぢやある」

彌「はらア立つても、わつちが吞の込んでゐるから、念晴ねんはらしにいつてしまひなせへ。おいらもどうか聞ききてへやうだの」

仲る「さよならいうてのけるぞへ。アノナ、十の字じとは是これぢやわいな」ト二人ふたりのぬぎおきたる羽織はおりの裏うらをひつくり返かへして見みせる。

方へちどまる。

左「おさむかる。一つ上りなされ。」

北「彌次さん、其盃を取つてくんな。」

彌「ナゼ、手めへ手を延すことはならねへか。そこにある。取りやな。」

北「いまくしい。おめへまでが、おいらをへこませるな」ト此うち、なかる、かの酒のかよりし着物を洗ひ、火に干して干あがりたるを持來り、

仲る「サアく、十の字がよござりますわいな。オホ、こちやいやいな。あなたのそのなりは何でおますぞいな。オホ、ト無上に笑へば、北八むつとして、

「コリヤ、うぬらはさつきにから、おれが黙つてりやア十の字だの何のと、おいらに符帳をつけて慰みものにしやアがるが、何でおいらが十の字だ。それをぬかせく」ト

何がな、あたりまなこにねぢかよる。仲るども困りはて。

「ツイてんがうにいうたのぢやさかい、お氣にあたりましたら、堪忍しておくれなませ。」

北「イヤおくれなますめへ。何でも其十の字のわけを聞かねへ中は了簡かならねへ。」

左「ハテえいわいな。そないにおまい腹立つてぢやと、いんまの先のお侍のやうに、無

てんがうに  
—冗談に





えて吉一例  
のもの

北「コレサく、よいといふに。」

彌「ハテ、コリヤ北八、えて吉ぢや。しみがついては、ナ、ソレ。ちよつくりとそこの所ばかりゆすいで貰ふがいよはな。ハテ火鉢でなりとあぶれば、ぢきに乾ることだ」ト損印のゑ後で喧しからうと、目顔で知らせて北八にぬけと教ふる。北八大きに困りはて、

北「エ、なんの、ちつとばかり酒のしみたぐらる。」

彌「ハテさて、ちつとでも後がきはづいちやア、ソレ、わるいぢやアねへか。仲居家、大儀ながら、ざつとつまみ洗してやつてくんな。」

仲る「ハイく、サアおぬぎなませ。」

北「ハテ扱、情ない事をいふ。もうよいといふに」トいろく、いひ紛らかして、ぬぐまいとすれども、とうく二人して帯をとき、むりにぬがせた所が、下には女の着物をきてる。袖小さく桁の短い所をかくさんと、北八兩手をちどめて尻ごみする。彌次郎不思議さうに、

彌「オヤく、手めへなんだ、女の着物をきてるるか。」

北「エ、とんだ事をいふ。もうくひとつ脱いだら寒くてならねへ」トだんく、後の

浪花方言に  
見ゆ

あぶら云々  
—世辭をい  
ふ

きはづく—  
きはだちて  
目につく

北「ナニ、十の字とはおれがことか。コリヤありがてへ—ト己があそばれる事は知らず  
盃をとり上ぐると、仲居銚子をとつて注ぐ時、北八、此仲居の膝をちよいと抓ると、

仲居「オ、いた」ト飛びのく拍子、盃にさはり、北八の膝の上へばつたり落ちると、  
そこら中酒だらけに成る。

仲居「オ、せうし。お氣の毒なこといたしたわいな。」

今一人の仲居「めつさうな。氣をつけさんしたがよいわいな。あなた、じみくしておわ  
るかる。そして酒のかよつたのは、きはづくものぢや。ちやと、くよみ水でなと洗うて  
あけさんせ。」

仲居「ホンニ、ざつとなと洗うて参じやう。おぬぎなませ」ト立ちかよりぬがさうとす  
る。北八は下に女の着物をきてるゆるゑ、上着をぬぎては格好わるしと、仲居をはねのけ、  
北「イヤ、洗はずとよしく、コリヤほんの不斷着た。」

仲居「ハテ、御遠慮はおませんわいな、おぬぎなませ、おぬぎなませ」トこの仲居ども  
二人、北八の着物、これも裏に十の字のしるしあるを見てやらんと思ひ、うなづきあう  
て、むりに二人して帯をときにかよる。北八肝をつぶし、

おます—今日なほ大阪地方一般に行はる、昔は島原遊廓にてのみ行はれたる由

でたのぢやあろ」ト仲居とし小さな聲にて嘸き笑ふ。すべて長町の損料にては、着物羽織とも、裏には白糸にて十文字のしるしをつけおくと見えたり。をりくく長町通の旅人は是を借著して新町などへ行くことあれば、此さとのものども皆かねて承知してゐることゆゑ、かくは嘸き笑ふと見えたり。左平次はこれを聞きつけ、心の内にをかしく思ひをれども、彌次郎北八は露知らず。

彌「ナント女中しゆ、此くるわ中に、大夫はいくたりほどある。みな惣揚にして遊んだらおもしろからう。」

北「わつちらが逗留の内、どうぞみんなへ、そろひの爲着でも残して行きてへもんだ。ノウ彌次さん。」

仲の「ソリヤお嬉しうおますわいな。ソノきりもんの裏に、十文字の印つけてかいな。」  
 今一人の仲の「コレイナ、そないな事いはんすな」ト袖ひきて笑へども二人は一向知らず。  
 「ナニ、裏に十の字とは、何かあたりのある事だな。畜生めが。成ほど、おめへなぞはいろがあらう。がうてきに仇物だ。ドレお盃いたときやせう。」

仲の「オホ、、、えらいあぶらいひなます。さよなら十の字のお方へあぎよわいな。」

左「マア、今宵は御見物のみのこつちやさかい、あすの夜さりなと、おゆるりとお遊びなさるがよござりましよ。」

彌「ナゼ、今夜でもいよぢやアねへか。」

左「ハテマア、わし次第にしておきなされ」ト心に一物あるゆゑ、これぎりにしやうとする。彌次郎もくさん違ひて不承々に、

彌「そんなら、酒でもたらふくやらかしやせう。」

仲ゐ「藝子さんは。」

左「イヤ、それもえいわいの、お急ぎぢやさかい。」

北「こけへ来て、酒ばかりぢやアはじまらねへ。何ぞ呼ばにやアこよのうちへ氣の毒ぢやねへか。」

仲ゐ「何のまあ、サアお一つお上りなませ。ホンニお羽織お取りなませんかいな」ト仲居ども二三入立ちかゝり、彌次郎北八に羽織をぬがせてたよみながら、羽織の裏にしるしあるを見つけて、くつく笑ひ出し、

仲ゐのいさ「コレ見いな。十文字の糸ぬひがあるわいな。大かた損料の着物借つてお出

たらふく—  
十分

客「イヤ、わいどもそれでづるといふではななばい。たんだ此廓ども、脚ふりにづらんばいといひをつたのぢや。もうよかばい、よかばい。」

引ふね「よう世話やかしてぢや。サアあつちやへお出でなませ」ト大勢に引立てられ、かしこの座敷にゆく。さてこなたには大夫十人ばかり、次の間に詰めかけ控へるるト銚子盃を別にもち出で、仲る帳面と硯箱をひかへ、

仲る「あふぎやの折琴さん。これへおかし」ト呼び出せば、折琴大夫座敷に出で、盃をとり飲むまねして下におき、仲居の顔を見てにつこり笑ひ立つて行く。

仲る「つちやの雛松さん、これへおかし」ト此内だんくと、大夫一人々々出で初の如く皆々盃をとり、飲むまねしてゆく。彌次郎北八は是を珍しき事におほえ、こよにもさまざま無駄あれども略す。

仲る「どなたぞお氣に入りましたかいな。」

北「イヤもう、のこらす氣に入つた。そのうち三番目に出たは何といふ女郎だの。」

なかる、帳面をとり、  
「ハイ、西の扇屋の東路さんぢやわいな。」



しゆんで  
しらけて

額風呂―湯  
なく湯氣に  
て蒸し垢を  
浮かす風呂  
當時三助は  
客の脊中を  
流しながら  
節おもしろ  
く唄をうた  
ひたる由  
あんがいお  
ろよいこと  
―その様な  
過言

たいこもち「コリヤしま主が無調法。ナントかういたしましよかいな。どうやらお座敷

がしゆんで来たさかい、是からわつさりと、額風呂へなりこみの例の、フカく、フツ、

カホカく、けつこうく、なぞはどでござりますぞいな。」

客「何ぢや、額風呂といふは、売ふろのことぢやな。こやつ、わいどもをのろまぢやと

思ひをるか。客共に向つて、あんがいおろよいことぬかいてよかばいものか。づくにう

ども、にやいてくれるぞ」ト此客人は腹立ち上戸と見えて、無上におこり散らし、みな

みな止めるを突退け突退け、ぜひ歸らうと大もめの最中、相方の大夫引船、禿をつれて

こよに來ると、

仲る「ソレく、大夫主が來なましたわいな。」

大夫「オ、しんど、おまいさん何ぢやいな。」

仲る「今おかへりなますとて、えらうお腹立ててぢやわいな。」

大夫「おまいさんもマア、こちや洲濱のうちかたに出てぢやさかい、ちとの間待つてお

くれなませと、いうておこしたぢやないかいな、それに今お歸りなますは何のこつちや

いな。それほどこちがお嫌なら、サアお歸りなませ、お歸りなませ。」

ぼうぶらー  
 南瓜  
 よかことー  
 善い事  
 だりがてい  
 ー草臥れた  
 こんがいー  
 この様に  
 しゆんすめ  
 ー相方の娼  
 妓  
 がらりうー  
 叱られやう  
 なじかいー  
 なぜかい  
 づらんばい  
 ー歸らう

れちや。コリヨ合コリヨ合コリくく、もちこい、コリヤ、脊戸せきどにや小屋こやかけ、龜女かめぢよが  
 ばんそくばつたのづうからす、ほうぶら枕まくらにへこといて、そこねい、こよねい、すりさる  
 き、これしこよかことしてのけた。ソコ、ヨツチヨン、トオチテンくく、

皆々「ヤレヤ、でけました。」

客「ア、だりがていく。こんがい酔よひくらひをつて、わいどものしゆんすめにからり  
 うばあてや、おとろしくく。」

げいこ「オホ、。、。何なにいひなますやら、こちやねからよめんわいな。」

客「なじかいく。」

げいこ「オ、すかんやの。アノお顔かほ見なませ。えらいおつきな目めして、ひかる様に白  
 眼らんでぢやわいな。」

客「イヤ、こやつふたうなやつ。わいどもの顔つらよりお身みのつら何なんちや。鰻わなとうどもの  
 横よこさるきせるやうな佛頂面ぶつとうめんして、おもしろうないぞ。わいども最早もはやづらんばい。づるぞ  
 づるぞ」ト以もつての外ほかむかばら立ちたちて立上たがるを、仲居なぐゐども引止ひきどめ、  
 「コレイナア、おまいさん、そないに何なんでお腹はらたちますぞいな。」



大坂

新町

左史

屋中

の巻



南—島の内の遊廊をさす

ぢんぢばしより—翁端折

左「そしたら仲居衆、大夫さんがたマアかりにやらんせ。」

なかる「ハイかしこました」トたつてゆく。此内酒肴出で、なかる共相手に呑みかけてゐると、隣座敷には、ぐつと西國方のお侍と見えたる客人、太鼓持藝子ども引寄せて

大騒ぎにしやれちらすを、襖のこなたよりそつと覗きみれば、

藝子のうた「三すぢほどある薄鬢のあたま、やがてすほらに鳴鐘ならば、權八がよからうけんれど、是から貞月と、いうておくれの神かけて、願ひら〜と。チツンシヤン。」

たいこ惣八「イヨ〜、おしまさん、ソリヤ南の權八めが摺ものの唄ぢやな。」  
げいこ「さよぢやわいな。東南さんの手をつけてぢやあつたわいな。」

客「コリヤ〜、我どもが、是からおくに踊どもをどるての、サア三味引きだいてたもれ」ト此内、客人たつて手拭をかぶり兩の耳を出し、羽織を横ちよに肩先を出しかけ、ぢんぢばしよりして手に扇をもつト、藝子が三味線、「トオチテン〜。」

客うた「コリヨ合コリヨ合コリ〜。もちこいかツコ、ヨツチヨン。」

三味「トオチテン〜。」

うた。「すやまお龜女は、すやまの山の古狐、龜女しりよふれ。かんべまくれ。ちやちよ



一箱一千兩  
箱なり  
生得一うま  
れつき

彌「御亭主さんか。わつちらア、今度江戸から仕入に上りやしたが、御當地は初めてでござりやす。逗留のうちには、どうせたびくめへりやせうからお頼み申しやす。その代り、わつちらアちよつと來ても、はした金つかふ事は嫌だから、むだ使ひの一箱と二箱は、別に爲替に振つてよこしてあるから、そこは一向未練なしさ。しかし生得が商人といふものだから、初からさうはいきやせぬによつて、マア今宵は、おめへの方でも随分安あがりに負けてくんませへ。ハテ後の爲だから、ノウ左平次さん」

左「さやうく。斯ういたしましよ。夜前お着きなされて、お草臥れでもあろさかい、マア今宵は大夫さんがた借つて御らうじて、御酒一つ上つて、お歸りなさるがよござりましよ。ハテまアあすの夜さりなと、お供いたしましよかい」トこよにて左平次ふと心づき、今宵金をつかはせた所が、ひよつと、あすの百兩、どういふことにて間違はまいものでもなし。手に入らぬうちは不定なりと、順慶町のト篋屋が言葉おもひ合せ、安心ならねども、今更このまよにも歸られず、ちよつと一ばい呑ませて連れて歸る目算のゑ、かくはいふと見えたり。

彌「いづれとも宜しく〜」

六字店―六  
字は鹿子の  
宛字なり、  
鹿子位とて  
下品なる娼  
妓を置きし  
店  
揚屋―大阪  
にては揚屋  
と置屋とあ  
り、揚屋と  
いふは遊女  
を置かず座  
敷を貸すの  
みなり

左「モシく、こよが皆揚屋ぢやわいな。」

北「なる程ほどで、こそうなやてへほねだ。」

左「サアく、こよぢやく、おまい方はそこにお出いでなされ」ト二人ふたりを立關けんくわんに待たせ

おきて、左平次一人、吉田屋の勝手口かたてぐちへ入り、かくと云いひいれる。この所ところは長町ながまちの河

内屋ぢやより、をりふし客きやくをおくりこす内うちなれば、左平次手紙てがみをもち來りて渡わたしけるゆゑ、

亭主ていしゆ早速さつそく羽織袴はりはかまにてむかへに來り、

ていしゆ「コレハはやうお出いで下くださりました。コリヤく、仲居なかくんども御案内ごめいなん申まうさんかい

サアお通とおほりなされませ。」

彌や「そんなら許ゆるしなせへ。コラ、北八きたはち來こねへか。門口かどぐちに立たちはだかつて、花屋はなやの柳やなぎぢや

あるめへし。」

左「コリヤでけましたハ、ハ、ハ。サアお出いで」ト立關けんくわんより上あがり、幾間いくまもく、こえて行ゆ

くほどに、ぐつと奥座敷おくざしきのはなやかなる所ところに案内あんないすると、左平次はわざと二人ふたりを大盡風だいじんふう

にもてなし、はるか末座まつざにすわる。仲居なかくんども茶煙草盆ちやんそうぼんをもち出でるうち、

ていしゆ「ていすめでござります。御ごひいきにようこそ、有難ありがたうござります。」

福と申して、誠に降つて湧いたやうな幸が來ると見えます。」

北「コリヤ奇妙、よく當りやした。」

うらなひ「しかし、變卦は乾の卦、乾は、けんけれつ象、本卦の坤と變卦の乾と合し

てこれを考ふる時は、易に曰、乾坤二つの間をぬけ、離の卦にあたつて中たえたり。さ

ては玉なき売鐵砲と申す事ごされば、萬事にお心をつけらるゝがよござります。」

彌「こいつはすこたんく、さういふわけぢやアねへ。もうこつちの手へ握つたも同然

だものを、延喜のわるい。」

うらなひ「イヤ、そこであたるも八卦、あたらぬも八卦。」

北「もうよしなせへ。十六文たどすてた」ト小言いひながら、こよを打過ぎゆくほどに、

はや新町橋をうち渡りて瓢箪町にぞいたりける。さてこの曲輪は、寛永年中にはじめて

御免許あり。田甫をひらきて新に町を建てたりしより、新町と呼んで廓の總名となせり

とぞ。昔より今に至るまで繁昌いふばかりなく、兩側の六字店賣物に花をかざりきらび

やかに並びたるを、壹軒々々に差覗きつよ、それより阿波座、越後町を見物し、局女郎

の袖ひくを罵り興じて行くまよに、やがて九軒町にいたれば、

新町―本名  
を瓢箪町と  
いひ大阪第  
一の遊廓な  
り  
阿波座―新  
京橋町新堀  
町をいひ、  
小店多し

ひとつ云々  
—桃太郎の  
童話をかけ  
たり

ひとつ下されと犬めがとり貝は、さてもよいきみ團子ならねど。

それよりも往來を押分けゆくさきに、編笠ふかく打かぶりたる卜筮者の、口から出次第、「サアく、御遠慮はない。お出でなされ。當卦、本卦、すみいろの考、濃いか淡いを當てるが奇妙、うせ物は存ぜず、預りものは仕らず、待人は遅いか早い、来るか來んかの二ツ、あたるも八卦、あたらぬも八卦、どつちやでも見料は十六銅ヅツ申しうくる。こればかりは違はござらぬ。サアく、これへく。」

彌「ナント北八、おいらがあした百兩とる事、知れるか知れねへか、何もなぐさみ、見てもらはう。」

北「コリヤおもしろへ。」

彌「モシ、わつちが運を見てくんなせへ」ト十六文出せば、卜筮者、彌次郎の顔を横目に見ながら、箸木をとり算木をならべ、しばらく考へ、

「ハ、ア、是はおまい、とひやうもない偉い仕合なことがでけるわいな。」

彌「さやうさ、大きに心あたりがありやす。」

うらない「そぢやあるぞいな。卦は坤の卦、坤はこんくはい、俗に申す狐、すなはち狐

すしや、竹たけの皮かはにつよみて出すを、彌次郎やじらうとりてみちくゝ食くふ。

北「コレ、おれにもよこしねへ。」

彌「あとで竹たけの皮かはをやらう。」

北「エ、むしのいよ、こつちへ」ト取りにかゝる。彌次郎やじらうやるまいとする所ところに、下したから犬いぬがひよいと飛びつき引ひつたくるト、

彌「アイタ、ゝゝ。」

北「どうした彌次やじさん。」

彌「いめへましい。畜生ちくしやうめにしてやられた。」

犬「わんく。」

彌「エ、こいつめが」ト足あしでけると犬いぬは逃にげる。おつかけるはずみに井戸いど側がはへ又またぐわつたり。「ア、いたく。コリヤとんだ所ところへ井戸いどを出だしておきやアがる。四ツ辻よつ辻のまん中なかに」

左「コリヤ井戸いどの辻つじといふところやわいな。」

北「いよきみだ。おれに食くはせねへ報むくだは。」





くるま一車  
蝦  
はつの身一  
締の切身

たいたの—  
上方詞にて  
煮たるもの

つるを聞けば、

「ヤア、大きな鯛ぢやア〜。鱧ぢやア〜。くるまやア〜。このしろやア。はつのはつ身みのきりうりやア、きりうりやア。」

さつまいもうり「ほつこり〜。ぬくいの上あがらんかいな。ヤアほつこりぢやア、ほつこりぢやア。」

上かanya「ぬくい〜、鯡にしんのたいたの、あんばいよし。」

「ヤアまけた〜。しんまいの煎いり殻がらぢやア、煎いり殻がらぢやア。」

すしうり「御評判ごじやうはんのちくらずし。鯖さばぢや〜。烏貝せりがひやア〜。」

北「アレ、彌次やじさん見なせへ。アノ鮓すしは京きやうで食くつたが飛とんだよかつた。一つやらかさう。夕飯ゆふめしも食くはねへで腹はらがへつた。」

彌「ホンニさうだ。モシ、これはいくらだね。」

すしや「ハイ、そつちやが四文もん、こつちやのが六文もんぢやわいな。」

彌「オットよし〜。コウ北八きた、そんなに暗やみと取とつて食くふな。また長町ながまちで菓子くわしを食くつたやうな目めにあはうぜ。モシ、こけへ參拾貳文もんばかりを包つんでくんな」ト錢ぜにをはらへば、

干鯛の仕切  
に行かう—  
瘦せてみす  
ぼらしいと  
の意

おひやりち  
らかし—御  
世辭をいひ  
もちあげる

北「けちな羽織だ。干鯛の仕切に行かうといふなりだ。」

彌「人の事をいふ手めへの風は、蕪木寸伯さまの代脈に來たといふ風だ。ハ、ハ、ハ、」

左「お支度がよござりますなら、參じやうわいな。」

北「オヤ、おいらはまだ湯へ入らなんだ。」

彌「ばかアいはずと、サア〜出かけやう」ト打連れてこゝを立つ。左平次は二人が

百兩の富に當りしにつけこみ、何でも割前をせしめんとて、無上におひやりちらかし、

この宿の番頭へふきこみ、新町揚屋への手紙をもらひて、打連れ此所を出かける。

かくて三人は足も空に長町を北へ、境筋ますぐに行けば、早くも順慶町にいたりける。

名にしおふ此所は夜見せ繁昌の町筋にて、兩側に内見せ出見せ、尺地もなく萬燈を照

し、吳服屋、道具屋、袋物、櫛笥、玳瑁、珊瑚、馬瑙の類あるかとおもへば、その隣に

は鹽、小桶、飯櫃、すりこ木、杓子など、或は神棚もとめて代錢をはらひきよめて行

くあれば、佛像買うて尻くらひ觀音と、不足錢あたへて走るもあり。傘の買人に下駄を

はくあれば、草履の賣人に草鞋はくあり。兩替やは目を皿になして天秤を打ならし、

金物屋は口を利刀にひとしく切物を商ひ、肴屋、代物は腐れたれども、賣聲はねて呼立

北「イヤ、この小紋がよからう」ト引立ててみれば女の着物なり。

左「ハ、ハ、ハ、わしや男のきりもんかと思つて、とて来たわいの」

北「よし、斯うしやう。小袖一つぢやアしみたれだから、此女小袖を下に着て、上はふとり縞ときめやせう」ト二つ重ねて着替へ、帯をめてゐるところへ彌次郎湯より上り來り、

「オヤ左平さん、早いな。エ、北八めが着たはく。男ふりがいよから、どこへ出しても借着したとやつぱり見えるく」

北「しやれずと早く支度をしねへ」

彌「おらア此黒いやつか、よし、旦那と見えるやうにお太刀一本、かうきめて行くは」

北「コレサ、おめへ着物を着ねへか。裸身にその脇差をさして行くつもりか。醫者が清盛さまの脈を見に行きアしめへし。とんだうろたへやうだ」

彌「時に羽織は」

醫者が云々  
—清盛火の  
病ゆゑ醫者  
は裸で脈を  
見るなり

左「おまい様は此ぬき紋にしなされ」





戸水坊  
並居の  
山宗



にある遊廊  
にて風呂屋  
の名残なり

い  
つち  
—  
番

北「そんなら、早く〜」ト二人は奥へ通ると、女來りて、

「モシナ、お湯にお召しなさらんかいな。おひもじかア御膳に致しましよわいな。」

彌「イヤ、飯も咽へは通らぬ。何だかそは〜して、しかし、湯へはちよつと入つてこやう。」

北「おそくなる、湯もいよぢやアねへか。」

彌「イヤ、貌ばかり洗つて來る。」

北「おきやアがれ。ハ、ハ、ハ、」トこの内、彌次郎は湯にいりにゆく。しばらくして、左平次損料物を風呂敷に包みて走り持來り、

「お待ちかねであつたぢやあろ。」ト包をとけば、北八かれこれとひねくり廻し、

北「モシ、無意氣物ばかりだね。」

左「ぢやてよ、是がいつちえいのぢやわいな。おまいには此黒袖がよかる〜。」

北「なんだ、途方もねへ紋所だ。そして丈がてんつるで、袖はてへそうに大きい。これを着たら無鹽の奴胤といふものだらう。そつちの縞はなんだ。」

左「ふとりぢやさうな。」

て、前に島の内あり、うしろに坂町あり、おやま藝子のなまめき行きかふ様にぎやかなり。

いつとても調子くるはじ三味線の、だうとんほりのにぎはひはそも。

其日もはや七ツさがり、大西の芝居打出して櫓太鼓の音喧く、評判ちや、評判ちやの聲木戸口にあふれて、見物もどよみつれ押しあふ中を、やうくすりぬけ、すりぬけ行くまよに、角の芝居、中の芝居の看板さへも目につかず。若太夫、竹田の切狂言もうち出しまへ、いろは茶屋の仲居、赤前垂と俱に毛氈を引きすりて走り、島の内の迎ひ駕ハイく馬ぢやくにつれて揉まれ行くほどに、はや日本橋近くなりて、往來も空きたりければ、頓て走りいだして行くまよに、はや長町の宿に着きたりける。左平次先に立ちて、

「サアく、お歸りぢや。」

やどの女ども「お早うござりますます。」

北「アイく、是は左平さん御苦勞。時に今の損印の理窟はどうだらう。」

左「かしこまりました。いつきに詮義して參上わいな。」

大西の芝居、角の芝居、中の芝居、若太夫、竹田―道頓堀の南岸、戎橋の間に軒を並べ、角と中とは大芝居、大西は中芝居、若太夫竹田は小芝居也島の内―道頓堀の北岸

北「イヤ、こいつらア何ぬかしやアがる。」

うしろの人「おまいのこつちやないわいの」ト一目散に逃げてゆく。

北「エ、いめへましい奴らだ。今に見ろ、明日はどんな物着るとおもやアがる。」

左「ハ、ハ、ハ、コリヤ無賤ながら、おまい方がそないにしゆんだなりして、縮緬ぢやの、

羽二重ぢやのというてぢやさかい、笑ひくさるのぢやが、コリヤ敵等が尤もぢやわいな

ハ、ハ、ハ、時に、是からあみだ池へ参じて、砂場の和泉屋をお目にかけていな。」

彌「イヤ、宮寺も厭きはてた。それよりか、早く新町へ行ってへものだが、あすの晩ま

ではがうてきに待遠な。」

左「さよなら斯ういたそかいな。わし、何と損料のきりもの借つて上げるさかい、それ

着て今宵新町へお出でなされ。お金は後でもだんない。わしが親方の知つてぢや揚屋へ

行くさかい。どして明日は百兩お取りなさるのぢやもの、何ぢやあるとさうしなされ。」

北「コリヤおもしろへ理窟だ。」

彌「いか様なア。そんなら直に歸つて、おめへにその算段をして貰ひやせう」ト有頂天

になり、心齋橋筋を南へ、早くも道頓堀にいたりければ、誠に當地第一のさかり場にし

しゆんだな  
りしみた  
れな風

どしてど  
ちらにして  
も

龍紋—白絹  
の上品なる  
織物、綾紋  
の訛

きめの判官  
—主馬の判  
官の洒落、  
刀をさすな  
一本きめこ  
むといふ

彌「そんなら明日のことにしやう。北八、手めへは何にするつもりだ。」

北「着物のことか。さればの、結城のぐつといきな縞で三枚ばかり、羽織は龍紋のこりこりするやつ、芥子あられなぞが、金持らしくてよからうぢやアねへか。」

彌「イヤ、それでは店者めく。そんな着物きたら、コレおまい、ゆうべは何ほ出

た、ヨの字かキの字か、こちやホ久の代物で位出たさかい、えらい徳したなどと、符帳でしやれやうといふ風だから納らねへ。おいらは縞縮緬そろへに黒羽織、お太刀一本

ちよいときめの判官もりひさは妙であらう。たどしはぐつと大ふさげに、緋鹿の子のへ

りとりむく、上に結城の棒島、對の羽織はあんまり利いた風であらうか。八丈もやほに

なつた。唐棧はおやちめく。南部縞はもう湯屋にぬいであるやうになつたから、恐れる

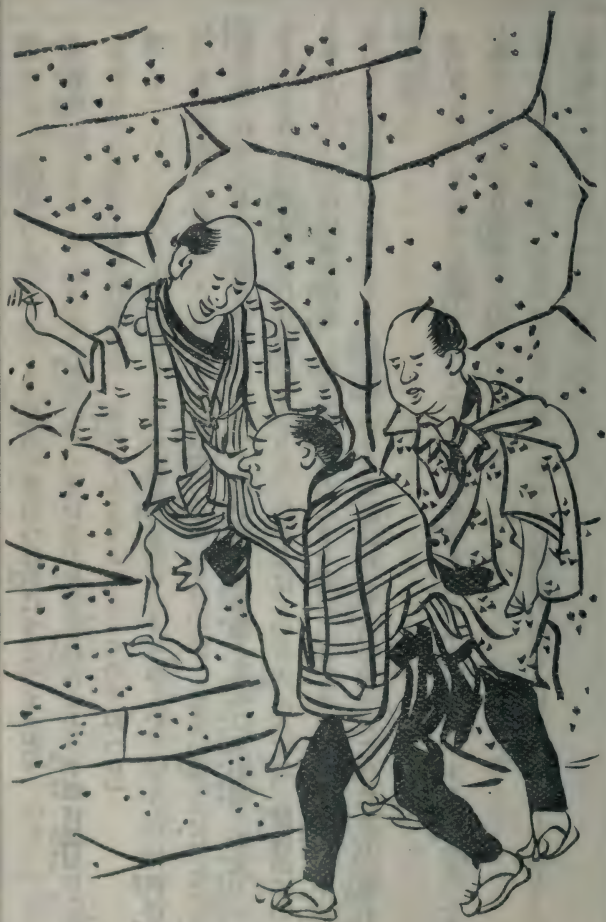
恐れる。」

北「さうさ、なるほど着やうといふと、まさか着る物もねへもんだ。」ト夢中になつて話

しゆく。あとから往來のもの、

「きるもんがなかア、やつぱりその後におつきな紋所のある、幟の染かへしを着てるさ  
んすがえいわいの。ハ、ハ、ハ。」





ト是これから新町しんまちとやらへ、女郎買ぢやうかうかひにやらかしはどうだ。

北「おもしろへ。すぐに行かうかノウ左平さへいさん。」

左「ソリヤお出でなさるはえいが、無駄むつたながら、おまいさん方のがたそのなりぢや、とつともうあかんぢやないかいな。ソリヤ局女郎つばねぢやうらうなどとお買ひなさりや格別かくべつ、店みせつきぢやてよ、ちと身みなりあんぢやうして、あすの夜よさりなどとお出でなされ。」

彌や「コリヤなるほど、おめへのいふ通りだ。ハテ、百兩ひゃくらうといふ金かねが取れるものを、とても買かふなら、その太夫たひふとやらを買かつて見る心こころいきだ。」

北「オヤ、もうくらそばへて來たの。」

左「ソリヤ其筈そのはずのこといひの。わしお供ともして、九軒けんの揚屋あひやどつこへなどお連れ申まうそ。時に、是これが大丸屋だいまるや、ナントえらいもんぢやあろがな。」

吳服店大丸屋「あなた、是これへく。何なんでござい。お入りな、お入りな、お入りな。」

彌「ナント北八きたはち、こゝへ今着物いままものを誂あつらへて行かうぢやアねへか。」

左「ハ、ハ、おまいさんもまんがちな。あすの事ことになされませいな。」

北「さうさ。今いまにア限かぎらねへ。サアくあよびなせへ。」

まんがち一人を押しつけて何事もわれ先にするをいふ

あかん—不可、仕方なし  
局女郎—長屋女郎ともいひ下等の遊女  
くらそばへて—氣が大きいくなり贅澤をいふ

## 九編 卷之下

座摩の社—  
延喜神名帳  
にのり居る  
神社、大阪  
南渡邊町に  
あり、正し  
くは牛カス  
リと讀むべ  
し

かくて彌次郎兵衛北八は、おもひもよらず百兩の富にあたり、忽ち勢をえて、座摩の社地をいでしより、煮うり茶屋に入りて酒汲みかはし、ほろ酔機嫌となり、心おもしろけに浮かれ立ちて、案内者の左平次にひかれ、難波御堂の穴門より御境内を順拜しながら、お婦美さまときけば女の名にも似て、あらありがたの穴かしこなり。

それより仁徳天皇の社にまゐる。これは世俗に博勞の稻荷といふ。博勞稻荷は別に境内にあり。

博勞のいなりといふもことわりや、繪馬うりて食ふみせも見ゆれば。

門前の田樂茶屋「お入りな、お入りな。田樂の焼きたて上らんかいな。」

北「エ、知れた事をいふ。田樂のさめたのがいけるものか。」

芝居の木戸「サア今が盛衰記、無間の鐘ぢや。評判でく。」

彌「無間の鐘もすさまじい。こつちは百兩取つてゐるは。途方もねへ。コウ北八、ナン

でも、無證據ぢやわいの。」

彌「奇妙々々。がうてきにおもしろくなつたはへ。」

北「あしたは百兩、久しぶりの對面。」

彌「エ、久しぶりもをかしい。つひぞあつた事もなくて。ハ、ハ、ハ、ト勇みよろこび、  
やがてかしこの茶屋に入りて、まづ前祝と酒くみかはしぬ。

あこーあそ  
こ、彼處

「コレく、靜しづかになされ。そないにいふなら、ひよつと捨すてた主ぬしがきよつけて、出でまいものでもないさかい。何なんぢやあるとわしが挨拶あいさつぢや。半分はんぶんづつ分けなされ。そしてわしにもちとはおくれぢやあるな。」

北「ソリヤアおいらが承知しょうちの助すけだ。何なんにしる善ぜんは急いそげだ。金かねはどこで請取うけとるのだらう。」

左平「ソリヤ、あこの世話せわ人のをる處ところで渡わたしをりますわいな。」

北「そんなら、そけへ行いつて見みやう」ト打連うちつれて、その處ところへゆきてみれば、

口 上

當日殊ついで之外混雜まじり仕候しこうに付

當り札ふだの御方明日四ツ時

金子御渡可申候以上

月 日 世 話 人

かくの如ごとく下札さげふだしてありけるゆゑ、扱さては今日けふの事ことにはいかずと、まづ神前しんぜんにまゐりて、

御神みかみの利生りしやうかくべつありがたや、

罰はちにはあらであたる富札とみふだ。

かく詠いじて大おほきに勇いさみたち、社内しゃない残のこらず順拜じゆんはいして表おもての方に

たちいで、

北「ナント、其内そのうち捨てた奴やつが金受取かねうけとりにいきはせまいか。」

左平「ソリヤ氣遣きづかひないわいの。往いたとて、札ふだと引替ひきかへにせにや渡わたさんさかい、なんほ當人たうじん



まひて、第一番よりだんく當り札の番付、一々記して正面に貼りつけあるを見れば、一の富八十八番と筆太に書きたりける。彌次郎餘りのことに呆れはてて、「エ、く、いめへましい。おらアもういつその事坊主にでもなりてへ。とても運のひらける時節はねへ。」

北「ハ、ハ、そんなに力を落すめへ。おれが百兩取つたら、おめへにも三兩や五兩は貸してやる。コレ見なせへ」トかの拾ひし札を出してみせる。

彌「ヤア、く、手めへ拾つて来たか。出かした、出かした。こつちへよこせ。」

北「イヤさうはなるめへ。おめへの捨てたものを、後からちやつと拾つて来たなら、コリヤおいらに授かつたのだ。」

彌「イヤ、く、ひつきやうおれが先へ見付けて拾つたりやこそ、又手めへの手へも入つたといふものだから、もとはおいらが物だ。」

北「それでも、おめへ一旦すてたぢやアねへか。」

彌「ハテ、さういはずとマアよこせ」トむりにひつ取らうとする。北八、いかな遣るまいとせりあふを、左平次とどめて、

札を以て當  
籤者とし多  
額の金額を  
與ふ  
くわんげ富  
―當時は官  
許に非れば  
富を行ふを  
得ず、大寺  
大社修理の  
費に備へん  
爲に官に請  
ひ富札を賣  
り富に當り  
たるものよ  
り寄附をう  
けたり之を  
勸化富とい  
ふ。

左平「コリヤ座摩の宮の札ぢや、しかも今日つく日ぢやわいな。大方、今頃にもうついでしまふたぢやろぞいな。」

彌「さうさ、どうせ落すくらゐのもんだものを、からつほの札であらう。へちまにもならねへ」トそのまゝ捻りて打捨てるを、北八後よりちやつと拾ひて懐中し行くほどに、やがてかの座摩の社にいたりけるが、今日はくわんげ富の當日、殊に今つきしまひたると見えて、群衆下向おびたゞしく押し分けられず。その中に人の話しながら行くをきけば、

「ア、残念な事したわいな。あの八十八番、すでのことにわしが買ふ所ぢや有つたわいの。あれ買ひそこなうたはこちの運の來らんのぢや。買うたら第一番で金百兩取りをつたものを、けたいがわるい」ト話しながら行くを彌次郎聞きつけ、ぎよつとして、「北八聞いたか。今の札を打ちやらなんだらよかつたもの。エ、どうしやう、後へ戻つてももうあるめへか。」

北「ナニ今まであるものか。」

彌「エ、ノ、残り多いことをした」ト後振返りくく神前にいたり見るに、富はつきし

あんだらく  
さい馬鹿  
らしい

富一今日の  
勤業債券の  
如き組織の  
もの即催主  
より富札を  
發行し之を  
買はしめ一  
定の期日に  
其買主を集  
め各人の所  
持せる札と  
同一の記號  
を一切混同  
し箱に入れ  
てこれを上  
より錐にて  
つき刺し之  
に當りたる

ちがひぢや、コレ屑屋さん、こちが悪い、許しなされ」

くづや「ちやてよ、あんまりな童ぢやわいな。あんだらくさい」

北「ハテ、間違ぢや。その雪駄をけへしてくんない」

くづや「嫌ぢやわいの。こちをはきもん直しぢやといひくさつて、こちや外聞が悪いわ

いの」ト腹立つを、北八左平次がやうくと斷りいひて雪駄をとりかへし、それより彌

次郎は藁草履をもとめて穿き、雪駄は腰にはさみて、天神橋を南へうち渡りて横堀通を

たどりのゆくに、こよに人だちさわがしく、喧嘩と見えて、くちんくわめき罵りて打合ひ

打合ひ、往來いやが上にかさなり騒動するに、彌次郎北八も人におされて、行きぬけん

としたるが、何か紙につよみたるもの足もとに落ちてあるゆゑ、彌次郎何心なく聞き見

れば、**㊦**八拔公番かくの如くかきたる札なり。今は絶えてその事なしといへども、此

時分は、座摩の宮に富のありし時節にて、往來の人々の群衆に取り落したると見えたり。

遙にこよを行過ぎて、

左平治「モシ、今あなたのお拾ひなされたのは、富の札ぢやないかいな」

彌「さうだらう、コレ八十八番とありやす」



天海  
了却  
の  
景





わたなべ—  
大阪の穢多  
村

は一向に合點ゆかず。賣る人の方から直段をねざるは珍しいと、をかしさ半分、何にし  
ても損のいかぬことなれば錢を差出し、

「ハイ、そしたら二十四文にまけて上げて買ひましよかいな」ト二十四文彌次郎に渡  
し、雪駄を取り荷の中へ入れて行かうとする。

彌「コリヤ、まつたく。おれに錢をよこして、その雪駄をどうするのだ」  
くづや「ハテ、買うたのぢやわいな」

彌「飛んだことをいふ。鼻緒がぬけたから直してくれろといふのだはな」

くづや「イヤ、こなはん、わしをはきもん直しぢやと思つてかいな。コレ、紙屑買はわ  
たなべから出やせんぞへ。あたけたいな童ぢやわい」

彌「イヤ、このよこつたふしめが、なぜそんならデイ〜といつて歩くのだ」ト力みか  
かるを、左平次おしとめ、

「ハ、アきこえた。コリヤおまいが麁相ぢや。わしやさつきにから變つたことぢやと思  
うてるたが、アノお江戸ぢや、はきもん直しがデイ〜といつて歩きをるといふこつち  
やが、當地では屑屋どのが皆デイ〜といつて歩くことを、御存じないさかい、御了簡

かみくづかひ「デイ〜、デイ〜。」

これは大阪にては紙屑買、かくの如くデイ〜と呼んで歩くを、彌次郎は江戸の格で雪駄なほしと思ひ、呼びかけて、

彌「コレ〜、此雪駄頼みます。」

かみくづかひ「ハイ、コリヤかたしかないな。かたしではどうもならんわい。見りや、その穿いてぢやも、鼻緒がどうやら損ねさうぢや。一所にさんせ。」

彌「ホンニ、こいつも今にぬけるは。とても事に一所にしていくらだ〜」トいふゆゑ、紙屑買是を買ひ取る心にて、ひねくりまはし、

「コリヤいこ安いが、えいかな。」

彌「さうさ、何でも安いがいよ。」

かみくづ「さよなら、四十八文ぢやが、どうぢやいな。」

彌「イヤ、それでは高い〜、廿四文ばかりでよからう。」

かみくづ「エ、〜、じやら〜いうてぢや。」

彌「ハテサ、ほんとうに二十四文、二十四文」ト無上に穿物をつき付けるゆゑ、紙屑買

かたし〜片足

じやら〜  
一冗談

尾ひれの見ゆる一みなの立派なるをいふ

と心こころにかしく、打過うちすぐるるとて、

眞黒まっくろになつてはらたつ喧嘩けんかして、あほよくと烏からすめかする。

それより此橋このはしを北きたへおり、市いちの側通かたまりを行ゆくに、爰こゝは青物あせものの市いちたつ所ところにて、殊ことごとに繁昌はんじやうの地ちなりけり。

あをものうりかひながら商人あきんどに、尾ひれの見ゆる市いちの側かたまち。

ほどなく天満宮てんまんぐうの御社みやしろにいたるに、まことや神徳しんとくの彭々ほうほうたるは、參詣さんけいの人ひとどよみにあら

はれ、料理茶屋れうりぢややの赤前あかまへだれ門かどになまめき、水茶屋みづぢやや、楊弓場やうきやうばのかんばり聲往來こゑわうらいの心こころをうご

かせ、或あるひは山海さんかいの珍物ちんぶつ、見せもの、芝居しばゐ、輕業あわぎ、曲馬乘まがはのり、境内けいだいに充滿みちみちたり。

なにひとつ御不足ごふそくもなきごはんじやう、まことに自由自在じいうじざいていぜん天神。

かくて社内しゃないことごとく順拜じゆんはいし、靈府れいふの女をんなの眞白ましろき顔かほも横目よこめに見みなし、小山屋こやまやの門かどをも空ただ

しく打過うちすぎ、天神橋通てんじんはしどほりに出いでたる時とき、彌次郎兵衛やじろべゑの穿はきたる雪駄せつた、いかゞしてや横鼻緒よこはなを

ぬけたりければ、

彌や「しまつた。京みやこのものは油斷ゆだんがならねへ。がうせへに請合うけあつて賣うりやアがつて、いま

いましい」ト呟つぶやく向むかより、

天満橋にいたりける。まことや淀川の流ひろく、行きかふ舟ども漕ぎちがひ、棹さしあひて唄ひ、あるひは遊山船に三味線太鼓はやし立てて行くを、橋の上より往來の人立ちとまりて、

だて一奢る

「ヤアイく、おどれら、そないにだてくさつても、内へいんだら借銭乞にせがまれて、吼えをろがな。えらい阿房ぢや。あほよくく」

ふねの中より「何ぢやい、そちが阿房ぢやわい」

はしのうへ「何ぬかしくさる。おどれらが阿房ぢや」

いしこやの  
—生意氣な

ふねの中「オ、いしこやの、阿房くらべせうかい。こちにはよう叶やしよまいがな。はしのうへ「何の、おどれらに負けてえいものかい。こちや阿房の偉いのぢや」ト無上に力みかへる。此男の連、

「ハテえいわいの。こなはんが偉い阿房は、皆知つてをることぢや。ほつておかんせ」ト

引張りてつれて行くと、後から往來の人くちんぐくに、

「ヨウく、阿房のえらいの、阿房のえらいの。ハ、ハ、ハト此内、彌次郎北八も群集

に押されながら、この橋にさしかより、橋の上と船との喧嘩、いづくでもよく有るやつ

に押されながら、この橋にさしかより、橋の上と船との喧嘩、いづくでもよく有るやつ

亭主はしり來りて、

やくたいぢ

や—だいな

つれもうて  
—つれだつ  
て

つけがわり  
い—間がわ  
るい

せつちん—  
先陣にかけ  
たり

「コリヤ何ぢやいな。雪隠の戸がやくたいぢや。」

北「イヤ、全體おめへがたア、こんな両頭の雪隠にしておくから悪い。」

ていしゆ「そぢやてよ、二人つれもうてせついんへ行くといふ事があるもんかいな。あほらしい。」

彌「かんにしてくんなせへ。わつちらが悪かつた」ト膝頭をさすりく、店の方へ出て來れば、

左平「何となされたぞいな。」

北「うち身には酒がいよといふことだ、早く一杯呑ましてくんな。」

彌「こよはつけがわりい。又先へ行つて呑みやれ」トこの所の勘定をして、早々出かけるト、酒屋の亭主、不承々に挨拶もせず、小言をいひながらふくれ返りてゐるを、二人はをかしく、こよを立出づるとて、

出ることの遅い早いであらそひし、これ宇治川のせつちんかそも。

それより谷町通を安堂寺町より番場の原に出で、話しものしてたどり行くほどに、順て



中だて、オ、うれしく〜」

北「氣のなけへ、何のこつたな。」

彌「末はかうぢやになア。さうなるまでは、とんといはずに濟まぬぞへと、誓紙さへい  
つはりか、嘘か、まことか、どうもならぬほどあひに來た。」

北「エ、コリヤ早く出ねへか出ねへか」トいへども、内にはさつぱり何の音沙汰もな  
きゆゑ、北八せつこみて、「どうだ、もう出たか、エ、コリヤ彌次さん、彌次さん」ト  
いふうち、暫くム、ントンといふ音して。

「ふうつウリ、悟氣せまいぞと、たしなんで。」

北「コレサ、どうするのだ。」

彌「もう、とつくにいとが、まちやれ、山づくしまでやらかさう。」

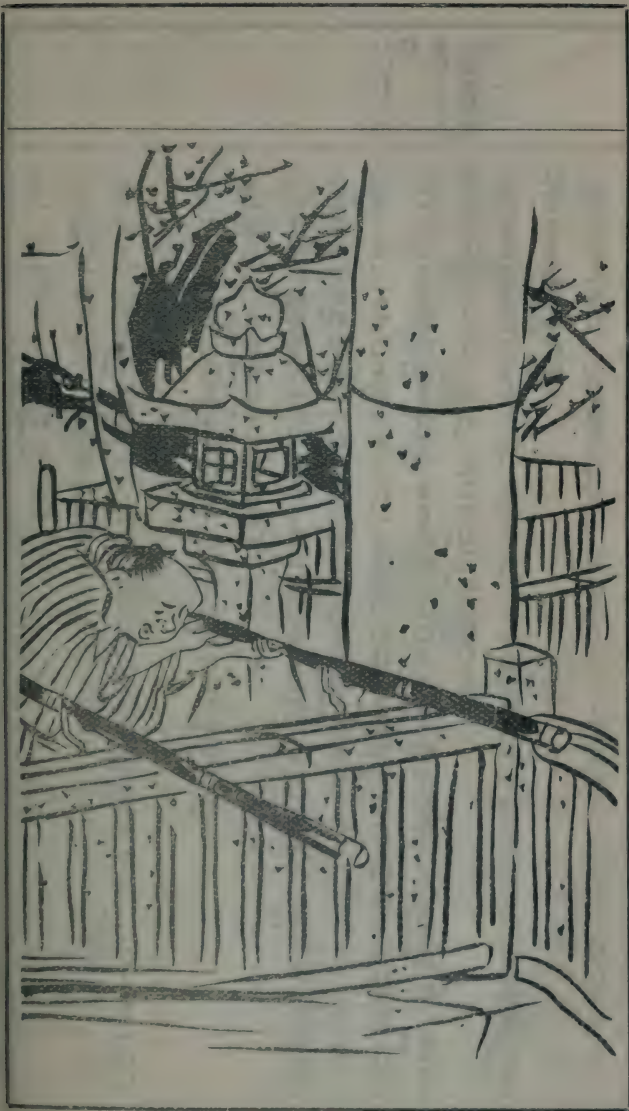
北「エ、ばかな事をいひなせへ」トいひさま、むりに戸を強く押せば、掛金はづれて  
北八雪隠の中へころけこむと、彌次郎も酒屋の方へ戸をあけて出る拍子、戸ははづれて  
倒れる。その上へ北八ぐるめ、どつさりと雪隠の戸は破れる。

彌「アイタ、〜、〜」

山づくし  
戀の手習の  
次の段、道  
成寺の後段

の  
園  
の  
内  
を  
庫





北「ハイく、コリヤ行止りだ。」

いんきよ「その戸をあけて行かんせ。」

北「ハ、ア、また元の雪隠へ入らにや行かれねへか」ト雪隠の戸をあげにかよると、内に、

「エヘンく。」

北「南無三ばう道がふさがつた」トいふを聞きて、雪隠の内より、

彌「北八か、乙な方へ出てゐるの。」

北「イヤ、彌次さんだな。おいらア戸迷ひをして飛んだ日に逢つた。早くそこを通して

くんねへ」ト戸をあげにかよる。彌次郎内より掛金をかけ、

彌「イヤ、もちつと待つてくれ。そして、いけむこたア大毒だといふことだから、ひと

りでに出てくる時節を待つてゐるのだによつて、少し暇がある。ア、退屈だは。金にう

らみでも語らうか。北八、そこで口三味線頼むぞ。」

北「エ、飛んだことをいふ。はやく出なせへ出なせへ」ト外から押せどもあかず。内に

は悠々と道成寺の唄、

「戀の手ならひ、つひ見ならひて、誰に見しよとて臙脂鐵漿つきよぞ。みんな主への心

いけむ—力  
む  
金にうらみ  
—長唄道成  
寺の一節

あんない左平次「マアあなたから。」

彌「そんならお先。オト、ア、ア、いゝ酒だぞ。コリヤ北八、早く出ねへか。酒がみんななくなる。早くく」トせりたてられ、北八雪隠の中にて、呑みたくて堪へられず、

北「オ、合點だ、今出るぞ」トうろたへて戸をあけ、ずつと出た所が、不思議なるかな酒家の内にてはなし。そもくこの雪隠は二軒前の雪隠にて、此酒屋と裏に住む人の家と兩方にて使ふ雪隠なれば、あなたにもこなたにも兩口あるゆゑ、北八うろたへて入りし方の戸をあけず、向の戸をあけ出たるゆゑ他所の内なり。隠居らしき爺様一人、何やら小細工してゐたりしが、北八を見て肝をつぶし、目鏡の上からじろくと見るに、北八もうろくと一向に合點ゆかずまごつく中、かのいんきよ

「モシく、こなんは誰ぢやいな。」

北「ハイ、是は違つたさうな。モシ、酒屋へはどう参りますへ。」

いんきよ「ハ、ア、よめたわいの。こなんは表の酒屋のお客ぢやな。其縁側を左にとつて、すぐに行かんせ。」

こなんーこ  
なさん、あ  
なた



めがねや「ソリヤおまい、大阪の繪圖で見てかいな。」

彌「さやうく、ハ、ハ、ハ。先お宮へまゐらう。ハ、ア、いかさまいよお宮だ」ト三人とも神前にぬかづき奉り、

もろくの神に脊くらべしたまはど、さこそたか津のみやのたふとさ。

是より境内の石段を西におりたち、谷町通に出でたるに、何とやら腹さみしくなりたれば、幸と居酒屋めきたる店を見付けて立寄り、

彌「モシ、何ぞありやすかね。」

さかやのていしゆ「ハイ、煎殻に鳥貝、鯉の昆布巻ぢやわいな。」

北「さつぱり分らねへ。その中うめへ物なら何でもいよ、出してくんない。」

ていしゆ「ハイく、いつきにあぎよわいな。」

彌「イヤ、いつきんはいらぬ、三合ばかり頼みます。」

北「時に尾籠ながら用たしに行つて來やう。雪隠はどこだ。オ、あるぞく」ト縁先よ

り向へまはりて雪隠へ入ると、此内こなたには酒肴出でたるに、

彌「マア一つはじめなせへ。」

煎殻—油を  
とりし鯨肉

いつきん—  
一升

みつちやー  
あげた

ほつこりー  
さつま芋の  
ふかしたる  
もの

しるなさる  
—小便する

いろは—料  
理屋の名

遠目がれのいひたて「サア、見なされ見なされ、大阪の町々、蟻の這ふまで見えわたる。

近くは道頓堀の人ぐんじゆ、あの中に坊様が何人ある、お年寄にお若いしゆ、お顔のみ

つちやが何ほある、女中方の器量不器量、ほつこり買うて喰てござるも、濱側でしよな

さるも、橋詰の非人どもが繻紵の虱なんほ取つたといふまで、手に取るやうに見ゆるが

奇妙。また風景を御覽なら、住吉沖に淡路島、兵庫の岬、須磨明石、大船の船頭が飯何

杯くた、何くた角くたもいつきに分る。まだ、不思議は、此日鏡をお耳にあてると、

芝居役者の聲色、つけ拍子木のかたり、残らず聞えて見たも同然。お鼻をよすれ

ば、いろはの鰻のほひぶんとあがつたも同然。たどの四文では見るがお徳ぢや。

千里一目の遠目鏡、これぢや、これぢや。」

彌「めがねやさん、音に聞いた新町とやらも近く見えるかね。」

めがねや「さよぢや、このお山のツイねきに見えるわいな。」

彌「それぢやア、ちかく見えるのぢやアねへ。遠く見えるのだ。」

めがねや「なぜもし。」

彌「ハテ、此高津と新町との間は、たつた壹寸貳分ほかねへもせぬものを。」





次といふとぞ、これより人名に假用せしならん

たかきやに  
―たかきや  
にのほりて  
見れば煙た  
つ民の籠は  
賑ひにけり

彌「イヤ一そくでいよ。おいらは京雪駄買つて來た。どうも藁草履ではみすく、田舎ものの上方見物と見えて悪い。」

北「ナニ、旅で見えもへちまもいるものか。」

左平次「お支度がいなら出かけましょかいな。」

彌「サア、早くめへりやせう。」

ばんとう、女ども「いておいでなされませ」トこれより三人うちつれて、宿を出かけ

て、

左「ナント斯ういたしましよ。天王寺生玉は住吉御參詣の時にお参りなされ。今日はこ

つちやの方へ參ぜうわいな」ト長町道を北へ樋のうへより高津新地に出で、まづ高津の

御宮にまゐる。こゝは昔仁徳天皇の、たかきやにのほりてみればと詠じ給ひし舊地にし

て、今に繁昌いふばかりなし。社内に、豆腐田樂の茶屋、參詣の人をよぶ聲、

「サア、おはいりな、おはいりな。これへく。お休みなくく。」

寄進じやうりの木戸「今ぢやア、紙屋徳兵衛天満やおはん、かはらやばし白木屋の

段、次は千本櫻の天川屋、辨慶の切腹、出語ぢやア、出語ぢやア。」



償ひて

まじりにわめき散らせば、北八いろくど断りいひ、さまざま宥めすかして、やうくと納得させ静まりければ、彌次郎も心の中にをかしさ紛らかして、

彌「イヤモウ面目しでへもねへのさ」

人の骨くふもことわり若いとき 親の臍をもかじりたる身は。

此彌次郎が口ずさみに 丹波の人も心とけて笑を催し、漸く機嫌なほりて打臥したるが、

程なく一するの夢さめて夜明けければ 勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな膳を

すうるに、三人とも食ひしまひ 丹波の人は高野へ出でのき 彌次郎喜多八は二三日返

留のつもりゆゑ、けふは爰もとの名どころ一見せんと支度する内、番頭出でて、

「コレハお早うござります。今日はどつちやへぞお越しでござりますかいな。さよなら

御案内の者お連れなさるがよござりませよ」

彌「ホンニそれをお頼み申しやす」

ばんとう「畏りました。コレく左平次どの、ちよとごんせ」ト勝手より案内の男。「あ

なたがたが案内頼むとおつしやつてぢや」

北「モシ、藁草履二そく買つて來てもらひてへの」

左平次—大  
阪詞にてい  
らぬ世話を  
やくを左平

知音—親し  
き者をいふ  
伯牙彈琴の  
故事より出  
づ

つつばつた  
—思にせま  
る  
大切ない—  
大切なに同  
じ

まどうて—

たんば「何のこつちやとは情ないわいの。ソリヤわしが知音女房ぢやわいな。そのいれもの蓋をよう見やしやれ」トいはれて彌次郎飛んで起き、行燈の前に持行き、かの蓋の書付を讀みて見れば、

彌「ハア、秋月妙光信女。ヤア〜、そんなら此曲物はおめへの内儀様の骨だな」

北「ナニ骨とは、コリヤ大變々々。道理で胸がむかつく。エ、どうしやう。」

たんば「わりさまたちの胸のわるなつたより、わしの胸がつつばつたわい。コリヤわしどもの村の所法則で、その骨を高野へ納めにもて行きよるのでござるわいの。ようマア大切ない佛を、なんぜ食ひよつた。わりさまたちは眞人間ぢやありやしよまい。鬼か畜生か、どしたのぢややい。どうしたのぢややい」ト袂を顔に押當てて、おい〜と泣く。彌次郎もをかしさ半分に腹たて、

彌「エ、むづかしいこたアねへ。おめへがさつき柳行李をあけた時、ころけ出たを知らずに居たのはそつちの無調法。それを砂糖漬だと思つて食つたのがわつちの兪相。ソリヤ五分々々だ。何もいさくさはねへはな」

たんば「イヤ〜きかん〜。もとの通りにまどうて返しや〜」ト息せいはずつて、涙

き寄せたは」ト夜着の中から、小さなまけものを取出して見せる。

北「オヤ、そりやさつきあの人の出した砂糖漬ちやアねへか」

彌「コリヤ聲が高い。柳行李の側に出てあるを、さつきから睨んでおいたからよ」

北「コウ 一ツよこしねへ」

彌「までく」ト行燈暗く遠ければ、委細は分らず、かのまけものの蓋をとりて、一つ掴んで口にかつちり。「コリヤかたいは」

北「ドレく」ト曲物を引取り、これも掴んで口にぐしやりにちやく。「エ、なんだ、いつそ灰だらけなものだ。ベツベく」

彌「コリヤ砂糖漬ちやアねへ。何だかをかしたにほひがする」ト胸を悪くして、ゲイゲイといふ聲を聞きつけて、丹波のおやぢ目をさまし、この體を見るよりびつくりして跳起き、

たんば「ヤアくく、わりさまたち、コリヤなにしよる。わしが女房をなんぜ食ひよる」

彌「ナニ、おめへの内儀様たア何のこつた」

いつそー江  
戸詞、大層

いにしな一  
歸りぎは

ものした一

盗んだ

源四郎する

一「まじし

盗も事をい

ふ

下つ腹に云

云一老狼は

腹下に毛な

しといふ、

古狐、古狸

などいふに

同じく食へ

ぬ奴の意

は、あないに目の見えんふりして出てぢやわいな。爰の内かたで過ぎられますさかいににしなには、いつもあないに勝手を手傳うていんでぢやわいな。」

彌「ヤア、さてはおいらが事をよく當てた筈だ。目が見えるものを。」

北「そんなら、おいらがものしたのも、ものしやアがつたにちけへはねへ。」

女「オ、をかし。お前さんがたの源四郎してぢやくわしんぢやてよ、私もこないに貰ひ

ましたわいな」ト袂から出して見せ、打笑ひ勝手へゆく。

北「大笑々々。」

彌「やつぱり、あつちが下つ腹に毛のねへのだはハ、ハ、ハ。」

ろくろくに按摩はとらずくわし迄も、こちに目のないゆゑにとられた。

斯く打興じつよ、それより三人とも蒲團ひつかぶり打臥したるに、丹波の人は早先に高

駢かき出せど、二人はいまだ寐入もやらす彼是と話しあふうち、裏通の畑に犬の聲きこ

え、割竹の音、時の太鼓もはや九ツの數打過ぐる頃、北八頭をあけて、

北「コレ彌次さん、おめへごそくと何をする。」

彌「なぜかあんまり寐られねへから、ふつと思ひ出して、コレ見や、足でこんな物を搔

たんば「ソリヤいんまの按摩とりめが、とていんだもんぢやある。ハ、ハ、ハ。イヤこよにえい物ものがありよる」トうしろの柳行李やなぎりをあけて、小さなまげものを取り出し、「サアサア、コリヤ道修町の店たなでもらうてきよつたさたう漬づけぢや。茶ちやの子こにひとつやらつしやれ。」

北「コリヤありがてへ。彌次やじさんどうだ。たんとやらかしねへ。」

たんば「イニヤ、そないにくて貰もらうてはならんわい。こちくされ」トひつたくりて早々さうさうにしまふと、この内うち、女おんな、蒲團ふとんを引きずり來りて、

こちくされ  
—こつちへ  
下され

「もう、御床おどこのべましょかいな」トそこら取りかたづけるうち、勝手かたてより今一人いまひとりの女枕おんなまくら蒲團ふとんを持來り、投りこんで行くを見れば、やつぱり今の按摩とりなり。みなく、肝かんをつぶし、

彌「モシ女中むすめちゆう、今そこへ來た女おんなは、さつきの按摩ぢやアねへかの。」

女「さまぢやわいな。」

北「どうして目めが見える。」

女「アリヤお客きやくさんがたへ出るに、目めあきではお心こころおきがあつて悪いわるさかい、お座敷ざしきへ



くわしうり「そぢやてよ、上りなされたものを、しよ事がないぢや無いかいな。オホ、」  
彌「イヤ、オホ、、所ぢやアねへ。飛んだ目にあはせる」ト小言をいひながら、せん  
方なく錢を拂ひやると、此内、按摩は揉んでしまふト、

北「按摩さんはいくらだ」

あんな「ハイ、お二人でおあし一すぢおくれいな」

北「ナニ五十ツツか。コリヤ高い」トこれも後では是非なく、百文出してやると、  
二人は立つて行く。

彌「上方の女にやア油断がならねへ。しかし菓子賣めが、おいらをいよやうにしたと思  
つてけつかるであらうが、さうは虎の皮、こつちにも荒神様があらア。馬鹿なつらな。  
とつくに上菓子をこよにはへ付けておいたを、知らぬやつさ」ト後を探すに、先刻の菓  
子見えず。北八も同じくこよにおいた筈だと探ぬるに一向見えず。勝手より女、茶碗と  
薬罐を持来りて、

「御退屈様でござりましたよ。お褒ばながでけました」トおいて行く。

北「エ、今があるところやうどいよのに、どうした知らん」

さうは虎の  
皮—さうう  
まくはゆか  
ぬ

ねきへよて  
云々―そば  
に寄つて下  
さらんか

わりさまた  
ち―お前様  
たち  
くちまつ―  
口車といふ  
が如し

彌「オヤ、もうしめへか。」

あんま「サアあなた、わしがねきへよてかしんかいな。」

北「ソレ、よしかく。」

くわしうり「ちやくく、最一つ上りなさらんかいな。」

あんま「おなべさん、御馳走なされ。此お方々はえらい御心よしぢやわいな。サアあな

たお横に。」

北「もう肩はしめへか。がうぎにはしよるの。」

たんば「コリヤ、わりさまたちの、くちまつにかよつて、えらう、くわしん喰てのけた。何

ほぞい。」

くわしうり「ハイく、お三人様で二百四十八せんでござりますわいな。」

彌「ヤア飛んだことをいふ。何そんなに食ふものか。北八はいくつだ。」

北「さればの、いくらであつたか。」

たんば「わしは四文のを五つくたから、ソリヤ二十やるぞ。」

北「そんなら、あとは二人で出すのか、ばかくしい。菓子よりか旅箱の方が安い。」

夢中作左衛門—夢中の洒落、承知を承知の助といふが如し

もむない—まづい

の按摩、手を出して其菓子をそつとひつたくり、袂へ入るゝを北八一向に知らず。彌次郎も同じく菓子三ツ四ツ取出すに、勝手より人音するゆゑ、ちやつと箱はもとの如く重ねておき、かの菓子は後の方へかくすを、按摩とり、これをもそつとせしめて袂に入るを、彌次郎も一向に夢中作左衛門なり。此うち菓子賣の女、茶を汲んで盆に乗せ持來りて、

くわしうり「サア、ぬくいのを上りなされ。」

彌「せつかくお前來なさつたものを、満更すけなくもしられめへ」ト菓子箱の中より、「これはいくらだ。」

くわしうり「ハイ、四錢づつぢやわいな。ソリヤもむない。こつちや上つてみなされ」ト並べたてて勧むるに、彌次郎も北八も丹波の人も、てんでに取つて食ふ。

北「コウ待ちねへ。無上に食つて數が知れめへ。」

くわしうり「よ、ござります。なんほなと上りなされ。こちやたゞでも上げよわいな。ノウおたしさん。」

あんま「さよぢやわいな。サアよ、ござります。こつちやのお方、揉みましよかいな。」

彌「約束だから仕方がねへ。爰へ来てくんない。」

あんま「オホ、、、、、それへ参ぜうかへ」ト彌次郎が後へ廻りて揉みにかよると、此

内、女の菓子賣、箱を重ねて持來り、

女「ようお泊りぢやわいな。くわしん買うておくれんかへ。」

北「ヒヤア、だんく〜と出て來るは。なかく〜いゝ菓子だぞ。おめへわつちらに賣る氣

か。」

くわしうり「さよぢや。こちやお前さんがたに賣りたうて賣りたうてならんさかい、や

うやう走りまうて参じたわいな。」

彌「上方の女中は手があるの。」

くわしうり「手も足もないが、むちやにお前さん方に惚れたのぢやわいな。さう思うて、

どうぞくわしん買うておくれや。ドレぢやく〜汲んで参じやうかへ」ト菓子箱を突出し

おいて勝手へゆぐト、

北「エ、面の憎いほどしやべる奴だ」トいひつゝ彌次郎に目くばせして、そつと菓子

の箱の下に重ねてある箱より、何やら菓子を五ツ六ツ取出し、後へちやつと隠すト、か

ちやく〜  
上方方言、  
お茶

菓子  
くわしん〜

きついはい  
よく當る、  
えらいの意

いつかいー  
大きな

いこーいか  
うの略、大  
層

北「コリヤきついはい。男おとこはいと男おとこだらうね。」

あんま「さよぢや、お顔かほはよう道具だうぐがそろうてぢや。」

北「缺かけてあつてつまるものか。」

あんま「お目めが、えらいいつかいお目めぢやあるがな。そしてお鼻はなが。」

北「高たかいか低ひくいか。」

あんま「かういうたらお腹はらがたとか知しらんが、たしかに獅子舞鼻しし まひはなぢやあるぞいな。」

たんば「ハ、ハ、ハ、きよとい、きよとい。」

彌「おいらはどうだ。」

あんま「あなたは、いこ老おきなけておいでぢやわいな。お年としは四十ばかりで、お色いろが黒くろうて

鼻はなの開ひらいた、髻ひげだらけなお顔かほぢやあるがな。」

北「奇き妙めう々々。」

あんま「そして、ほやけぶとりによう肥こえてるなさるぢやある。」

彌「イヤ違ちがつたく。おいらはひんなりとして色男いろおとこ。」

北「嘘うそをつく。コリヤ按摩あんまさんが勝かちだ。揉もんでやりな。」



あんま「お療治はよござりまするかいな。どうぞ揉ましておくれんかいな。」

彌「イヤ按摩さんか、おめへ女だの。しかも生てるらア。北八どうだ揉まねへか。」

北「こつちから揉んでやりてへ。」

あんま「オ、をかし。何いひぢややら、お前さんがたはお江戸ぢやな。わしやアノお江戸のお方が好きぢやわいな。殿たちは男らしくて、物ゆうてぢやとこが、えらいすつぱりとしてよいわいな。」

北「おめへ、さつぱり目が見えやせんか。見ると此内に飛んだいゝ男がゐるに、見せてへなア。」

あんま「そぢやあるぞいな。」

彌「ナント按摩さん、この男よりわつちがいゝ男か、さうして年はどつちがわけへ。あてて見なせへ。當つたなら二人ながら揉んでもらひやせう。」

あんま「ソリヤ、いつきにあてるわいな。」

北「コリヤおもしろへ。サアおいらは幾つぐらゐるだ。」

あんま「待ちなされ。お前さんは二十三・四。」

すつぱり  
さつぱり

わせさつし  
やいーいら  
つしやい

わごりよた  
ちーお前さ  
んたち

ることなれば。

ばんとう「お許しなされませ。どうぞモシ御窮屈にござりましょが、御一所になされて下さりませ。」此旅人は丹波の人

旅「だんないてや。サア、此方へわせさつしやい。」

北「これは御免なせへ。」

彌「モシ、わつちらア二三日も逗留して、所々見物がしたいからお頼み申しやす。」

ばんとう「ハイ畏りました。先ゆるりと」トいひすてて勝手へゆく。

たんばの人「コリヤわごりよたちは、どこから来よりました。」

北「わつちらア江戸でござりやす。おめへは。」

たんばの人「わしは丹波のさよ山在郷。今度高野へ行きよります。コリヤあぢいな縁で

相宿しよりますわいな。」

彌「とかく旅は道づれ、お心安いがようござりやす」ト此内、やどの女

女「まよ上げましよかいな」ト三膳もち来りする。食事の内、色々あれども略す。やがて飯もすみ湯へも入つてしまふト、大あばたの女按摩、嫌らしき風にて探りく来りて、

にぞつれ行きける。宿引さきに驅けぬけて、

「サア〜お客様を御供して来たわいな。」

宿屋の番頭「これはようお出でなされました。おいくたりさままでござります。」

同行云々

すべてこの所は忠臣藏の洒落

いこー大層

彌「ハイ同行四拾七人。」

ばんとう「ナニ四拾七人様。コレ〜おさんどのや 大勢様ちや。西の奥の間を打抜い

て明けさんせ。よう綺麗に掃出したがよいわいの。コレ久三、お足お洗ひなさるお湯は

どうぢやいぬるてもだんない。水なとうめて上げませい。はやう〜。時に、もし、そ

の四十七人様は、いこお後かいな。」

彌「イヤ 是は先達て鎌倉へ發足。われ〜兩人はこれより泉州堺の天川屋へ。」

ばんとう「エ、何のこつちやいな。やつぱりお二人かいな。コレ〜おつんや、お二人

ぢやといな、こつちやのお一人居しやしやる狭いとこにさんせ。」

おつん「ハイ〜、御案内致しましよかいな。」ト此うち兩人は足を洗ひ上りて見る

に、此宿は當所隨一の大家にして、およそ間數七八十もありといへり。兩人女につれら

れて行くに、奥の口元の六疊ばかりなる小座敷へ入る。外に一人この間に泊り合せ



八折家  
糸栗  
の字





# 膝栗毛九編 卷之上

うかむ瀬  
天王寺の西  
にありし有  
名なる料理  
屋、うかむ  
瀬といふ盃  
を藏す  
顔みせ—江  
戸には中村  
市村森田三  
芝居の俳優  
毎年十一月  
に入り代り  
て芝居をす  
之を顔見世  
といへり

押照るや難波の津は海内秀異の大都會にして、諸國の賈船、木津安治の兩川口にみよしを並べ碇をつらねて、こよにもろくの荷物を鬻ぎ、繁昌の地いふばかりなし。殊更花の春は川船に棹さして天保山にあそび、櫻の宮、引船の茶店に酔を催し、夏は大川松ヶ崎の納涼、難波新地松の尾登加久に螢をかり、豆茶に腹をこやし、秋はうかむ瀬大津湯の月、冬は解船町の雪景色、四季をりくの眺おほかる中に、目枯れぬ花の曲中は、いつもさかりの春の如く賑ひ、道頓堀の芝居は、つねも顔みせの心地して群集絶えず。かよる名譽の地を見残すも本意なしとて、かの彌次郎兵衛北八なるもの、伏見の畫船に途中より飛乗して、早くも大阪の八軒屋にいたり、爰より船を上りたるは最早たそがれ時にして、東西を知らず南北を辨へざれば、人に尋ね問ひつゝ長町をさして行くほどに、境筋通を南に向ひ日本橋へ出でたりければ、宿引どもこよに居合せ、兩人を見かけて宿の相談をしに來るに、早速きはまり、すぐさま此長町の七丁目なる分銅河内屋といふ

東寺―大宮  
の西、八條  
の南にあり  
空海の創建  
此歌に鬼を  
出せしは羅  
城門と混じ  
たるならん

もとの千本通に出で、今宵は島原の廓中を見物して、安見世もあらば一宿せばやと申合  
せて 往來の人に道すがらを尋ね、千本さがりて行くほどに、町をはなれて東寺に至る。

手折らんと手を出す人ぞ鬼ならめ、東寺わたりの花のさかりに。

それより玉生寺に参りて、こよに、霞簀、門先に立てよせあるあやしの茶見世に引きこま  
れて、その夜の宿とさだめ打臥したるが、あくる日島原を見物し、朱雀野より丹波街道  
をよこぎりに淀の大橋にいたり、爰より下り船に打乗りて大阪へと赴きける。

やがて側近くなれば、二人とも並んで馬の陰に隠れ行くと、ちやうどかの梯子を預けた茶屋の前にいたりて、馬は立止りて動かす。二人は驅けぬけて茶屋に見付けられてはせんなしと思ひ、同じく馬の横腹の方へついて立止りる。博勞、馬を打ちて、「エ、このならずめは何しをるのぢや。日が暮れるはやい」ト打てども動かす。やがて馬は小便をしやア〜。彌次郎北八にとばしり跳ねて小便だらけとなり、彌「エ、コリヤ又なさけない目にあふことだ。」北「ア、くさい〜。ソレ彌次さん、おめへの方へ流れるは。」彌「畜生めが飛んだ目にあはせる。これは〜」ト飛び退けば、向の茶屋の門先にゐる女が、目早く見つけて、

「モシナ〜、こつちやでござりますわいな。サアお入りなされ。」

北「ソリヤこそ見付けられた。」

彌「コリヤ堪らぬ〜」ト一目散に驅けいだせば、茶屋の亭主飛んで出で、

「コレナ、梯子がござりますわいな。オ、イ〜」ト呼びたつれど耳にも入れず、二人は眞黒になり逃げてゆく。兩人はやう〜と息をはかりに驅け出して、下の森を打過ぎ、

北「アイ、お世話になりやした。サア、彌次さん行かねへか、どうする、どうする。」

はじめから人を茶にして何ばいも、やたらにめしを空也寺の僧。

これによりまた天神の社内に歸りたるが、東の門より一條道に入る道を知らず、うかくともと來し南向の門を入りたるに、思はずもかの梯子を預けし茶屋の門口近くなれば、彌次郎兵衛心づきて、

「さて、さつきの梯子がやつぱりあそこに立てかけてある。エ、こつちの方へ來なんだらよかつたものを。北八また後へもどらうか。」

北「なるほど、あそこへ休まずに直通にしたら、ひよつと見付けた時、例の梯子持つて行けといふだらうし、というて又跡へ戻るも業腹だ。どうぞ、いよ智恵がありさうなものだ」ト立止りて思案してゐるうち、右近の馬場の借馬一疋、博勞がひいて來るをより、「イヤア、いよ事があるぞ、いよ事があるぞ。アノ馬の横腹の方にくつついて茶屋の前を通れば、馬の陰になつてゐるから、よもや見つけはしめへぢやアねへか。」

彌「オ、サ、それがいよ、コリヤ大でさだく」ト後より來る借馬を見合せるうち、

博勞一馬を  
賣買する人

の拂すれば、

彌「ソリヤあんまりだ。お飯はおめへ方がしこたま食つて、わつちは、たつた一膳か二膳食つたもの、二ツわりとは不承知だね。」

もつかい「何いはんすぞいな、一座で飯盛さんしたものの、よう食はんはお前方の勝手ぢやないかいな」ト遣つつ返しつ、これも理詰に彌次郎せん方なく、とうふく二ツわりにしてこの所の拂をなしければ、僧二人は、早くも先に立ち出て行きたるに、

北「ハ、ハ、ハ、いゝ見せものだ。サア彌次さんどうだ、行かねへか。」

彌「オ、サ、行きてへが、あんまり食ひすぎて動かれねへ。どうぞ手を引いてそろく立たせてくれ。」

北「エ、意氣地のねへ、サア立ちなせへ。」

彌「コレサ、手荒くしてくれな。飯が口から出るやうだ。」

北「テモ汚ねへ事をいふ。サアく立ちなくく」トいひつゝ彌次郎の手をとり引立つれば、やうく立ち上りて出かける。

女「おゆるりとお出でなされ。」



すましたー  
清めた

アすましたわいの。おつもりぢや、おつもりぢや。」

彌「イヤ、もういかぬ。そして汚ねへ。人が雪隠へ行つた手を洗つた手水鉢ですました井、それでどうして食へるものか。」

やつかい「そしたら此茶碗で。」

彌「イヤ、もう腹がさけるやうだ。それに聞きなせへ、今の一杯やらかしてゐた時、何か懐の中で、ぶつつりといふ音がしたから探つて見たら、越中禪の紐が切れる位に腹が張り切つて来たものを。もうくお許しく。」

やつかい「ハ、ハ、もうよしなされ、おつもりぢや。コレ女中、なんほぢや、勘定してくだんせ。」

女「ハイ、御一所にいたしましよかいな。」

やつかい「そぢやわいな。」

女「御酒とおでんの代物は八十文でよござりますが、お飯は五百七十二錢頂きたうございます。」

やつかい「ソリヤ氣疎う安いもんぢや。割合にいたそかいな」ト此代錢勘定して、半分





一本木—純粹

りぢや」ト無理無體つきつけられ、彌次郎面倒なりと、がまんを起し、やうくと食ひしまへば、

やつかい「も一つやらんせ。お鉢のかはりめぢや」

彌「イヤ、もうく御免々々」

やつかい「コリヤやくたいぢや。お前は田舎者ぢやな。麥や挽割のまぜたのを上りつけ

てるさんすさかい、こないな一本木の米ばかりの飯は、よう上らんもんぢやあるぞいな」

彌「ナニ、わつちらア猪の牙のやうな飯でなくちやア食ひやせん」

やつかい「さいな、これが猪の牙ぢやわいの」

彌「そんなら、おめへ、替目の相を頼みやす」

やつかい「ソリヤよいわいな。とても事に、大きなもんでおつもりにしよぢやない

かいな」ト菜漬の入れてありし井をうちあけて飯を盛り、へろくと食つてしまひ、持

戒坊へ廻すと、これもしこたまよそつて食ひしまひ、

「サアあぎよわいな。イヤ飯でにちやくする」ト縁先の手水鉢へ井をいれ洗ひて、「サ

しこたま—  
澤山

「これも酒ぢやと、つけさしぢやけれど、飯ぢやさかい食ひさしぢや。」

彌「エ、おめへのその髭むしやくしやと、不掃除な口中で、食ひさしはあやまるの。しかも、ソレく水漬をたらしてさ。」

もつかい「ナニいうてぢやぞいな。そないな事いうて、飯盛附合がなるかいな。早う食はんして、誰になと差さんしたがよいわいな。」

彌「ソリヤ情ない。さてく飯盛といふものは汚ねへものだ。もうくわつちは御免なせへ。」

やつかい「イヤ、お前麥飯を摺鉢に四五はいも食はんしたと、いうてぢやないかいな。卑怯な事いはんす。かうさんせ。一拳いかんせ。」

彌「そんなら拳で参らうか。」

もつかい「よかろわいの。その代り、否應とんと云はさんぞや」トかの茶碗の上へ盛りそへて、「サアく、薩摩拳ぢや。サンナ。」

彌「ムメでく。」

もつかい「トウライ、えらいか、えらいか。サアく上りなされ。その癖お鉢のおかは



やつかい「サアはじめんかい。イヤ亭主役ていしゆやくにわしからやろわいな」ト茶漬茶碗ちやつけぢやわんに飯めしを盛おつてさつくと食くひしまひて、「サアくお前まゐさそかいな」ト彌次郎やじらうへかの茶碗ちやわんをつきつけて、杓子しゃくしを取り、「酒盛さかもりならお酌しやくといふところ、飯盛めしもりぢやさかい、お杓子しゃくしいたしましよかいな」ト彌次郎やじらうが持ちたる茶碗ちやわんへ飯めしを盛もりつける。

彌「コリヤわつちが食くふのかね」

やつかい「さよぢや、さよぢや」

彌「ハ、ア聞きこえやした。盃さかづきをまはす心こころだね」ト彌次郎やじらうかの一いぱいの飯めしを食くひしまひて、茶碗ちやわんを役戒坊やくかいぼうの方かたへさすと、

やつかい「コリヤきやうとい。おさへましよかい」

彌「イヤまづく」

もつかい「はて、おまい最も一いぱい重かさねなされ。わし助すけけてあぎよわいな」ト無理むりに又一また一いぱい盛もり付つけると、

彌「そんなら、おめへ助すけけてくんなせへ」ト飯めしの盛もつてある茶碗ちやわんを持もつ戒かいに渡わたせば、持もつ戒かい坊ぼう、三口くちほど食くひて、

山のやうに盛つて食ひをる。わつちも絶食同然でゐるが、麥は大好物で堪へられやせんから、せめて一摺鉢もやつて見やうと、食ひかゝつた所が口あたりがいよから、するすると何の事なしにすべりこんで、とうぐ、摺鉢に五六ぱいも食ひやしたらうが、今ではとんと食がへりやした。」

やつかいばう「ソリヤお前も飯は素人ぢやないわいの。ナント飯盛さんせんかいな。」

彌「アノ飯盛がこゝにもありやすかね。」

やつかい「ハ、ハ、ハ、お前のいつてぢやのは道中の飯盛ぢやある。そぢやないわいな。こちとらが仲間でするは、酒呑む衆が酒盛といふかして、飯を互に食ひあふを飯盛といふわいな、ちとやて見やんせ。幸、こちもまだ飯が食ひたらんさかい、相手ほしさの玉手箱ぢやわいな。」

北「どうやらおもしろさうな事だが、それは如何するのでござりやすね。」

やつかい「マア何ぢやあるとやて見なされ。モシ女中、ちよと来てくだんせ。お鉢のお

かはりぢや。」

女「ハイ、」ト飯鉢に一ぱい持來ると、

飯盛—下女  
にて情を賣  
るもの

相手ほしさ  
の玉手箱—  
あけてほし  
さの玉手箱  
の洒落

たきて無常  
の和讃を唱  
ふ、これを  
踊り念佛と  
いふ、徒弟  
等茶筌を作  
り市中に賣  
れり  
齋非時—時  
非時にて僧  
家の食事を  
齋といひ正  
午を過ぎざ  
るを法とし  
午後なるを  
非時といふ

やつかい「さればいな、こちの宗體しうたいでは、どしたこつちややら、代々だいご皆みなえらい大食たいしよくで、飯めしぢやあるが何なんぢやあるが、何なんほでもよう食くふさかい、齋非時さいひじに呼よばれて行いても、しひつけられて、もつと食くふやどうぢやいなと、人毎ひとごとにいうたを、すぐすぐに空也堂くうやだうといふわいな」

もつかいばう「そぢやさかい、コレ見みやんせ。ちよとこよへ來きても、二人ふたりでお鉢はち三さんばい食くうたわいな」

彌や「ソリヤ途方とほうもねへ大たぐらひだ。尤もつともわつちらも食くつたものさ。いつやらも信濃しなのへ行いきやした。ナニがあつちは飯めしどころでござりやすから、先朝きんあさすつと起たきると、茶受ちやうけにとて座頭ざせうの天窓あたまほどある握飯にぎりめしを出だしやすが、あつちの手てやいは、子供こどもでさへそれを十四五ほどづつも食くひやす。わつちは折をりわるく氣分きぶんが悪わるくて、ろくに食くもいけやせなんだが、十七八斗はかりも食くひやしたらう。さうするとやがて飯めしが出来できたとつて、その亭主ていしゆがいふには、江戸えどのお客きやくはお鹽梅あんばいが悪わるいといふ事ことだから、今朝けさは麥飯むぎめしを炊たきましたとつて、何なにか、とろよ汁じるをすつたほどに、摺鉢すりばちの二十にじゅうばかりもそこに並ならべてあると思おもひなせへ。さうすると椀わんへ盛もるが面倒めんどうだと、家内かないの奴やつらは皆みなその摺鉢すりばち一いつつづつ引受ひきうけて、麥飯むぎめしをその中なかへ

次郎北八これを見て肝をつぶし、をかしさ半分、不思議さうに伺ひ見れば、

やくかい「ハ、ア、なる程よう結びくさつた。わしや又こちの弟子坊に結はせをるが、もうく月代がむちやぢやさかい、見て下んせ、いつの間にやら、こないにすりこかしをつたわいな」トこれも頭巾を取れば、鬘はほんのくほにある剃下奴なり。彌次郎餘りに合點のかず、堪へかねて、

「モシお隣のお客様、わつちらは遠國の者でござりやすが、所々歩いてゐるうち、いろいろ様々な珍しい事も見聞しやしたけれど、御出家方の髪結うたを見るは、まことに今がはじめ、どうも合點が行きやせぬ。卒爾ながらお前方はどこのお方でござりやすね。」

やつかいばう「ハ、ア、この頭の御不審かいな、こちや空也堂の僧ぢやわいな。」

彌「なる程な、話に聞いてるやした、かの茶筌賣のお方だな。」

やつかい「さよぢやわいな。こちの宗體は昔から山緒があつて、こないに身には染衣を着しながら、天窓は大俗凡夫ぢやわいな。」

彌「それで聞えやしたが、なぜ又お前方のゐなさる所を空也堂といひやすね。」

空也堂一四  
條坊門にあ  
り、開山は  
空也上人即  
時宗也、此  
徒弟は髪を  
蓄へ鬘をた

彌「ハア、此鮎がおめへの心意氣とはどうだ。」

女「私はナ、お前さんが川鮎といふこつちやわいな。」

彌「コリヤ有がてへ、そんならおめへにも上げやせう。」

女「オホ、。此生姜が何としてお前さんの心ちやへ。」

彌「わしやはぢかみイ。」

北「ハ、。こじつけるもんだ。時に女中、田樂で飯を早くくんなせへ。」

女「ハイ、。只今」トやがて女、田樂と飯を持ち来る。二人は食事しながら見れば、

衝立の向に、さもむさくろしき出家二人、麻の衣のよごれたるを着て、是も田樂にて飯

食ひながら、一人の僧のいふを聞けば、

「ナント役戒坊、貴様髪はどこで結ふぞいの」

やく「オ、持戒坊、わりさまも私が結ふ所で結はんせ。あこはきやうとうよう結ふわい

の。わしや久しう、のんこ鬘に結うてぢやあつたが、今ははやらんさかい、コレ見やん

せ、雷子に結うて貰うたが、えらう氣持がようて堪らんわいな」トいひつと淺黄の頭巾

をとれば、此坊様身には麻の衣着ながら、頭は卷鬘にて芝居のやつしといふ髪なり。彌

のんこまげ  
—伊達風の  
髪なるべし  
やつし—色  
男役



三ツぼしの  
紋―渡邊家  
の定紋

綱つなの名はいまだにくちぬ石燈籠いしどうろう、むかしをいまに三ツぼしの紋もん。

東向觀音ひがしむきくわんおんは梅櫻うめざくらの二樹じゆをもつて、菅神御手くわんじんたんでづから刻きざませ給たまふ所ところなりといへり。

御利益ごりやくは四方よもにかをれる觀世音くわんぜん、梅うめさくらにてつくりたまへば。

それより社内しゃないをぬけて平野ひらのの社やしろにまゐる。此御神このだんかみは四座よざにて、今木神いまきのかみ、久度神くごのかみ、古開神ふるあきのかみ、

比咩神ひめのかみなり。

こよろよく飯めしくふために本膳ほんぜんの、ひら野のの神かみをいのりこそせめ。

こよに紙屋川かみやがはのほとりに二軒茶屋にけんちやあり。二人ふたりは空腹くうぶとなりたるに、支度したくせんと此茶屋このちやに

入れば、女をんなども出迎いでむかへて

女をんな「ようお出いででたわいな。ツイト奥おくへお出いででなされ。」

彌やん「何なんぞうめへ物ものがあるかね。飯めしも食くひたし酒さけも飲のみたし。マアちよびとした物もので一いぱ

い早く頼たのみやすぞ。」ト奥おくの縁先ひんさきに腰こしをかけると、女銚子をんなてく盃しやくづきをもち出いづ、肴さかなは干鮎ほしあゆの煮にび

たしなり。

彌やん「早速さつそくこれはありがてへ。女中ぢやうちゆう、一つ注つぎねへ。オットありやす、ありやす。」

女をんな「お肴さかなあぎよわいな。コリヤ私わたしが心こころのたけぢやぞへ。」



かんせ。」

彌「エ、北八か、悪い洒落をするなへ。」

北「ナニおいらア知らねへ」トいひざま、憎さも憎し、かの年増女の尻を抓つてやらう

と、側目をしながら側により、年増の尻と思ひ、おぶつてゐる子の尻を思ふさま抓ると、

子「ア、いたいく」トわつと泣く。

としまの女「誰ぢやいな。悪い事さんすわいな。」

おぶさつてゐる子「アノをぢさんが抓つたわいのう。」

女「エ、すかん人さんぢやわいな。」

彌「かんにしなせへ。さりとは外聞の悪い男だ」ト足早にすごくくと此所をすぎて、南

の御門より入りて天満宮の本社へまゐる。

おまもりを首にかけつゝたふとまん、さいふの宮をうつす神垣。

北野天満宮は、昔近江國比良社の神主良種、神勅を蒙り、朝日寺の僧最珍右京の文字等

と力を合せて靈祠を作り、天徳三年右大臣師輔卿、魏々たる大夏を改め營みたまふ。今

の北野宮これなり。社頭に渡邊の綱が納めしといひつたふ石燈籠首むしてあり。

さいふ―財  
布と太宰府  
をいひかけ  
たるなり

七軒辰一遊  
廓歸りの意  
なるべし

腰がふなつ  
く—江戸詞  
の腰がふら  
つく、ふら  
ふらする

来てかしん  
かいな—來  
て下さいな

馬のかけを乗る人「ヒヤアドウくくく」

見物の鬨の聲「ワアイ引」

見物「皆えらい下手ぢや。七軒辰かして腰がふなつきをる。アノ莨菪玉見るやうな天窓の親父めが、えらうよう乗りくさるわい。」

見物「アリヤ知れたこつちやわいな。博勞の親方ぢや。」

見物「かいな。アレあつちやの男見やんせ。手綱をあやに取つてあないな手つきしてをる。アリヤ大方織屋の手傳ぢやあるぞい。そしてアレく十二坊の弟子坊が、珠数つまぐるやうな事して手綱持つてぢやわいな。」

北「おれも一鞍乗りてへな。向に見てるる姉様に」ト人ごみの中、女つれが二三人立つて見てるる後へまはり、見物しながら前になる娘の尻をちよいと抓る。

娘「オ、いたやの、誰さんぢやいな。コレおまるさんこち来てかしんかいな。」  
まる「何ぢやいな。」

娘「誰ぢややら私がおいどを抓つたわいな。」

としまの女「ソリヤ女のない國で生れた人さんぢやあるぞいな。構はんすな、投つてお

おいて、困らせてやりなせへ。」

彌「ナアニ困るもんだ。おきに賣つて錢にするは。あの野郎めに梯子までたど取られて詰るものか。やつぱり擔いで行かう。」トそれより道をたづねく、行くほどに、北野天満宮社内へかよる道に、茶飯田樂を賣る茶屋おびたどしくあり。赤前垂の女軒に出で、「あなたお休みみんかいな。茶飯おでん上らんかいな。茶上つてお出でんかいな。」

彌「モシく、わつちらア天神様へ參詣して、けへりにおめへの處で休みやせうから、此梯子をこよに置いてくんない。」

ちや屋「ハイく、お預り申しましょわいな。お早ういてお出でなされ。」

彌「おたのみ申しやす。」ト梯子をちや屋のかどに立てかけておき、行き過ぎて、「ヤレヤレ重荷おろした。なんのけへりに寄るものか。ナント北八、梯子を捨てた智恵はどうだ。」

北「ハ、ハ、おもしろくもねへ。」ト供養塔前より右近の馬場にいたる。此處はいつも借馬あまた出で馬の稽古あり。見物夥し。「オヤ凄じい人だ。何かあるさうだ。」ト立寄りて人を押分け見れば、







せへ。こつちでも立替へた事がありやす。

與太「ソリヤ上げるのがあらば上げるさかい、いひなされ。算用は算用ぢや。マアこちへ取るのが此通ぢやさかい、斯うしましよわいな。はしたをまけてあぎよわいな。貳百文くしなされ。」

彌「エ、外聞の悪い。その時取ればいよものを」ト小言八百いへども合點せず。かれこれとせり合うた所がはてしつかず、彌次郎面倒なりとて二百文出してやるト、

御きんとう  
—勘定の正  
しき事にい  
ふ

與太「ハ、ハ、ハ、コリヤ御きんとうぢやわいな。是からお前方は天神様へいかんすぢやろ。そしたら序に平野様金閣寺へ行かんしたがよいわいな。おそなるさかい、早ういて戻らんせ。」

彌「大きにおせわ」ト脹面して立出づれば、隣の酒屋より北八によつこり出で來りて、

北「どうだ、御馳走がありやしたか。」

彌「いめへましい目にあつた。何の手めへが尋ねて寄らずともいよものを、錢貳百たど取られた。」

北「ハ、ハ、ハ、どうして、どうして。いよは其代りにアノ梯子の厄介物をこよに打捨つて

彌「もう歸りやした。」

與太「はてさて根から知らなんだわいな。いつの間にいんでであつたぞいな。」

彌「今松茸のお吸物の出た時、中座いたしやした。」

與太「ソリヤ残多い。後段にまだお菓子のお話いたそもの。」

彌「イヤもう、さきほどから大きにお馳走になりやせぬ。お陰でひもじい、お暇いたしやせう。」

與太「イヤお待ちなされ、よい所へお出でたわいな。ちとお話があるわいな。アノ伊勢の古市でおつき合ひ申した時のこといな。あの時の入用金壹兩ちやあつたがな、わしや算用違して金壹分貳朱こちから出して置いたさかい、コレ見なされ、道中の小遣帳におやまやの書付も、何もかもこないに細かに書きつけておいたが、うちへ戻つて算用して見ると、お前方一人前百二十四文づつ、わしの方へお貰ひ申さねば算用が合はんわいな。僅かのこつちやさかい、どうしてもだんないが、取るに如くはないさかい、お二人分貳百四十八文お貰ひ申しましたよかいな。」

彌「エ、おめへも今となつてきたねへ事をいふ。そればかりの事、うつちやつて置きな

だんない、  
 大事な、  
 差支ない

四條の生洲  
—高瀬川筋  
の川邊にあ  
りし料理店  
婦人と音曲  
とを入れざ  
りしにて有  
名なる家な  
り

與太「イヤ、あこでは小賣は致しませんわいな。折角のお出で、お煙草でもあがりなされ。」  
北「煙草はこつちのだから勝手にいたしやせう。」

與太「おまい方せめてもちつと先へ寄つてお出でなさると、きやうとい物があるわいな。  
桂川の若鮎、生きてをるのを鹽焼か魚田にすると、根から葉から甘い何のといふやう  
なこつちやないわいな。イヤまだ四條の生洲が近いとお供していこもの、あこの鰻は加  
茂川でさらして、とつと違つた物ぢや。きやうとう甘いかな。そしてあこは玉子焼をえ  
らうようして食はすわいな。何ぢやあると是ほどに大きう切りをつて、ほつほと息の出  
るのを南京の薄鉢に盛つて出しをるが、甘いというては根からくよんでもつやうぢやわ  
いな。ホンニそれよりまだ秋にお出でなさると、とりぐの松茸ぢや。當所の名物でこ  
れが又外にはないわいな。新しいのをすましの吸物にして、ちよつと山葵おとして酒の  
肴にいたそなら、とつともうなんほ食うても根から厭がないわいな」ト話ばかりして何  
も出さぬゆるゑ、北八こらへかね、そつとぬけ出で隣の酒屋へ呑みに行く。話に入  
て與太九郎は一向北八の逃げたるを知らず。  
與太「イヤ、最一人のお方はどこへ行かんしたぞいな。」



與太「何のいな、サアこち入りんかいな。」

北「ハイ お久しうござりやす。」

與太「イヤ、これはくまだ表にお連様があるさうぢや。」

北「二人ばかり、誰もをりやせん。」

與太「それでもアリヤ何ぢやいな。」

彌「梯子のことかへ。」

與太「何ぢや梯子おもたせかいな。コリヤきよとい。」

北「イヤ、おめへの處は中立賣、ひよいとあがる所だといひなすつたから、もしも高い

所なら梯子かけて登らうと思つて、わざく求めて持参いたしました。」

與太「ハ、ハ、ハ、コリヤおでけぢやわいな。時に何もお愛相がない。お支度はどうぢや

いな。」

彌「アイ、今朝宿屋で食べたまよ、中食はまだいたしやせん。」

與太「ソリヤお樂ぢやわいな。酒なと上げたいが、この邊に酒屋はなし。」

北「酒屋はぢつきにお隣にあるぢやアねへか。」

おでけ—大  
出来

難なんやあらんと受うけ付けざれば、せん方かたなく又またかの梯子はしごをうち擔かつぎ、この處ところを立たいで、

北きた「ナント、今日けふはどつちの方ほうへまごつくのだ。」

彌やま「イヤ、まだ東山ひがしやまに見物けんぶつしてへ所ところがあるが、マア今日けふは北野きたのの天神様てんじんさまへ行きやせう」

トだんく道みちを尋たづねて堀川通ほりかはごほりに出いで、

北きた「時に思出おもひだした事ことがある。ソレ伊勢いせの古市ふるいちで京きやうの人ひとと一座ざしたが、慥たしかにその人ひとは千本せんぼん

通ごほりなだちうり中立賣ちゅうりゅうとやらいつたが、北野きたのの天神様てんじんさまへ行く道みちだといつたぢやアねへか。」

彌やま「オ、サ、邊栗屋へんぐりやの與よ太九郎たけ丸か。」

北きた「ソレく、そいつが所ところへ尋たづねて行いつて、酒さけでも呑のんでやらうぢやアねへか。」

彌やま「ナニ、あたじけなすびが呑のませるものか。」

北きた「ところをおいらが術じゆつに懸かけて呑倒のみたふさう」ト往來わうらいの人に千本通せんぼんごほりを尋たづね中立賣ちゅうりゅうにいた

り、邊栗屋へんぐりや與よ太九郎たけ丸の方かたへやうくと尋たづねあたりて、例れいの梯子はしごを軒のきに立たてかけて、

彌やま「御免ごめんなせへ」ト格子戸かうしをあけて入れば、

與よ太九郎たけ丸「誰たれぢやいな。コリヤ珍めづしい。ようお上のほりぢやわいな。」

彌やま「扱さてマア、伊勢いせでは大たきにお世話せわになりやした。」

あたじけな  
すび—強欲  
者

候。然る上者、已來御宿御無心申候共、梯子抔決而持參致間敷候。爲後日仍而  
如件。

月 日

當人 彌次郎兵衛

證人 北 八

此證文にて事をさまり、宿の娘も次第にこよろよく、中直りの酒汲みかはして夜も更け  
ければ、二人はやがて打臥したるに、ほどなく夜あけて、家内の人々おきたちたる物音  
に、目をさまし、支度調べ、そこく立出づるとて、

彌「コレハ大きにお世話になりやした。殊にいろくな事でお氣の毒な」  
ていしゆ「御機嫌ようお出でなされ」

女ばう「モシく、お梯子がござりますわいな」

彌「イヤ、もうそれはこちらに置いてくんなせへ。今日は所々見物して、晩程またお世  
話になりやせうから」

ていしゆ「イエくお持ちなされ。そしてこちや晩ほどは、おさし合があるわいな」ト  
一體亭主はこの二人を胡亂に思ひるたりし故、梯子も預かる事氣味わるく、いかなる後



と、碌でもねへ事を始めたからこの騒になつた。もとは手めへが發頭人だから、解死人はそつちへ譲るぞ。」

北「オヤ飛んだ事をいふ。當人はおめへだはな」

彌「そんなら拳をして負けた方が解死人だ」

北「ばかアいひなせへ。おいらア知らぬく」ト此内醫者も來り、藥など與へ、さまざま介抱するうち、娘やうく息ふきがへせば、皆々あんどし、彌次郎胸なでおろし落付きて、此上はあやまるに如くはなしと、北八を頼み、だんく詫言してあやまり、證文を書きてやうくと此いさくさ収りける。尤も北八が印にて、しかつべらしく書きたるその證文、

一 札之事

一我等此度ひらがな盛衰記淨瑠璃之内、安壽の役相勤候所實正也。然る所、梅が

え無間之鐘相撞候節、其金是に罷有趣申之、打替之鳥目投出し候。逆梯子爲

候故、丸哲どの陰囊御釣上被成、并貴殿息女へ怪我爲致候段、全右梯子鴨居へ打掛

候より事起候趣、預御腹立無申譯段々誤入候所、御了簡被下忝存



と記せり、  
生意氣など  
いふ意なり

してぢやわいな」ト涙ぐみて騒げば、亭主もうろくして、

「コレ見やんせ。もしも娘めが死にをると、こなさんは解死人ぢや。さう思うてるやんせ」  
女房「アレくたはいがないわいな」

ていしゆ「コリヤ目がまうたのぢや。ヤアイおとらヤアイ、おとらヤアイ」

女房「いとイのう、いとイのう」ト夫婦は娘を掻き抱き、水よ氣付よと騒ぎたちて泣き  
わめけば、彌次郎は俄にうろたへ出して、

「エ、コリヤ北八どうしたものだらう。おらアもうこよにやアゐられねへ」

ていしゆ「コリヤく、おとら死んでくれな。どうぢやぞやい」

女房「おとらイのう」

ていしゆ「おとらやアイ」

彌「エ、なさけない。コリヤ堪らぬく」トうろくして立つたり、ゐたり騒ぎたつと、  
ていしゆ「コレ、こなさんどつちへもやる事ならんぞ」

彌「ハイくどこへも行きはいたしませぬ。コリヤく北八、ぜんてへ手めへが悪い。  
何の有體にいへばいよものを、ちやらくら嘘をついたから起つて、無間の鐘だの何の

の生れ、色にそやされこんななられた云々をもぢりしなり

ちよこー猪口才

ぼやいてー小言いうて

いしこやのー浪花方言に、自慢らしきをいふ

彌「ハ、ハ、ハ、人の娘に怪我さしたとは、わしやどうやらはづかしい。」  
ていしゆ「イヤわらひ所かいな。總體こなさんたちはけたいたいぢやぞや。」

彌「けたいとは何がけたいだね。」

ていしゆ「何がとはちよこいうてぢや。よう思うても見さんせ。わしや此年まで宿屋してをつたが、終に梯子もてきた客を泊めた事はないわいな。いつたい遠國のお方が、何しに梯子をもて歩かんすやら、こちやとんとよめんわいな。もしも屋根から躍りこむ衆ぢやないかと、家内のもんがぼやいてぢやあつたが、成程奇怪なことしかねん衆と見えるわいな」ト亭主やつきと成り、少し言葉あらくしくいふ。此をどりこむとは、上方にては夜盜の事ををどりこみといふ故なり。もとより彌次郎兵衛むかはらたちなれば、

彌「イヤ、おめへをかきな事をいふ。わつちらアしらきちやうめんのお旅人様だ。おつに捻くつた事をいふと了簡がなりやせぬぞ。」

ていしゆ「オ、いしこやの、何いうたてよ、こなたたちが梯子持てござんしたから、起つた事ぢやわいな。」

女房「これいなアそないな事に構はずと、こち来て下んせ。娘がアレくひよんな目つき

えだが、それをほんのくほへ貼ると金がさがる。」

ていしゆ「何いはんすぞいな。錢膏藥首筋へ貼つたてよ、何さがるものかいな。」

北「ハテさがる理窟だ。なぜといひなせへ。錢が上れば金がさがる。」

ていしゆ「エ、何のこつちやいな。」

ぐわんてつ「ア、わしやどうやらよいやうぢやが、娘さんはどうぢやいな。」

やどやの女房「コレ、誰なと一走り寸伯さんへいてたもらんかいな。」

ぐわんてつ「わしやもうよいさかい、醫者様よんでこうわいな。その代りお寺へは誰な

と外の者をやらんせ。」

ていしゆ「エ、何ぬかしくさるぞい。」

北「ホンニお氣の毒なこつた。娘御はどこを打ちなすつた。」

ていしゆ「ひはら、えらううちをつたてよ、痛がりますわいな。」

彌「痛いひはらは都のうまれ、人にどやされ、ひよんな目にあはれて、お笑止千萬な

ことだ。」

ていしゆ「イヤお前、人の娘に怪我さして口台所ちやあるまいかな。」

痛いひはら  
云々―長唄  
腕久に、自  
體我等は都

ひはら―傍腹にて、俗にいふよこはら

争ふ拍子に、鴨居にかけたる梯子はづれて、彌次郎兵衛ひつくり返りどつさり落ちると、梯子は丸哲の上になり、娘も、ひはらの骨を打たれてわつと泣き出せば、彌次郎腰骨を撫でさすりながら、

彌「アイタ、ハ、ハ、」

ぐわんでつ「ア、ウ、く、」

ていしゆ「どうしたぞやい、どうしたぞやい」ト家内中がうろたへたちて、煙草盆ひつくり返すやら、行燈を打壊すやら、座敷中たゞ眞暗となりて、泣くやらわめくやら大騒となる。亭主漸く燈を持來り、

「ア、コリヤ娘めはどうぢやい。イヤ梅が枝がをかきな目をしをるわい。コレノ、氣を確かにせいやい。」

ぐわんでつ「ア、くくるしい。あしや悔りしてはつとほもうたへいやらして、ひん玉が上の方へつツたわいな。アイタ、ハ、ハ、」

彌「ソリヤ困つたものだ。モシ、御亭主さん、梅が枝が金玉をつるし上げました。」  
北「金玉の上つたにはよい事がある。先刻見ればことの見せに、錢膏藥といふ看板が見

娘―關西地方にては娘のことをイトといふほもうたへいやら―思つたせいやら







ほれより云  
云一これよ  
り小夜の中  
山

てありしを提ひつけ来きたり、鴨居かものにうちかけ二階かいの氣取きどりにて、彌次郎中段やじらうちうだんに上りながら、手拭てぬぐい  
をたよんで大盡風だいじんふうにちよいと頭あたまにのせて、

「サア、源太げんたが母ははの安壽あんじゆの役やくだ。サア和尚をしやうやらかしねへ。」

ぐわんてつ「傳つたへ聞く、無間ふけんのひやねをつけば有徳自在うとくじざいの心こころのまよ、ほれよりはよの中山なかやま  
へはるかみちの道みちは隔へだたれど、ほもひつめたるあが念力ねんりき、此このひようづ鉢はちをひやねとなぞらへ、  
ひしにもせよ、ひやねにもせよ、心こころざすところはふけんのひやね」ト煙管たばこおつ取りいろ  
いろある。此時このとき彌次郎梯子やじらうはしごの上うへより、うちがへの錢ぜにをばらくと投なげ出しながら、自身じしん  
に淨瑠璃じやうるりかたる。

「そのかねことにと、三百文ちひゃくもんうちがへの錢ぜに投なげ出す。みやまおろしに山吹やまぶきの、花吹散はなふきちり  
すやうにはあらで。」

ぐわんてつ「こととに三文もん、かしこに五文もん、拾ひろひはつめてひやん百銅ひゃくどう、コリヤ雇やまはれの賃ちん  
錢せん先取さきどりとは有難ありがたい」ト搔かき寄よせて袂たもとに入れんとするを、彌次郎梯子やじらうはしごの上うへから丸哲ぐわんてつを引捕ひっさ  
へ、

「ソリヤやるのぢやアねへ。おれがのだ」トひつたくらうとするに、丸哲ぐわんてつはやるまいと

へ貰はれた  
はとなり

北「ア、コリヤ寄るなく、臭くてならねへ。そつちへぐつと寄つたく。がうせへに臭い梅が枝だぞ。」

ぐわんてつ「ひよりやぎごえませぬへんださん。」

北「エ、寄るなといふに、コリヤ手短にやつてくれう。コリヤ坊主、イヤ梅が枝、産衣の鎧はどうした。」

まげた一質  
に入れる

ぐわんてつ「ひちなん即滅と、三百目にまけたわいの。」

北「ナニ打殺した。ソリヤなぜに。」

山歸米一瘡  
毒の妙藥

ぐわんてつ「そもや私が便毒から、骨疼になつて、山歸來飲むほどに、飲むほどに、氣種はしくく、此ひやなを助けたいばかりに、ひやねならたつた三百目で、低いひやなを落すか、ア、ひやなが惜しいなア。」

ひやな一鼻  
ひやれ一金

三下りうた「二八十六でふみ付けられて、二九の十八でつひ其心、四五の二十なら一期に一度、わしや帯とかぬ。」

ぐわんてつ「エ、何ぢやの、人の心もひらずにふたいくつさるほんにひよれよ。」

彌「イヤまつた」トこれも堪へられず、勝手に行きで以前の梯子、店の間に横倒しにし

は出たら目にやるがいよか」

ぐわんてつ「ひよござります、ひよござります。サア、おとらさん、へん太の出端からやて下んせ。」

彌「ハ、ハ、ハ、髭むしやくしやの梅が枝もいよが、源太が職を染返した着物きてるも珍しい。」

北「コレ、東西々々ト此うち娘淨瑠璃をかたり出す。」

「夜ごとくに通ひ来る、梶原源太景季、ちとせがおくを伺へば、ちやうどよい首尾さいはひと、すつと通れば梅が枝は、炬燵にとんと身をそむけ、そらさぬ顔でふくませる。」  
北「コレ、何がきけんにいらぬやら、めつきりと持たせぶり、われらがやうな浪人の、徴びた衿にはつかれまい。」

じやうるり「すんどたつを待たしやんせ。」

ぐわんてつ「ざひきばかりをふとめるひやすで、けふ爰ほらはれたは、女でひらせて合點ぢやないか。」

じやうるり「にくい男と目にもろき、涙は戀のならばせなり。」

ざひき云々  
座敷ばかり勤める筈で今日こゝろ

假名盛衰記  
 淨瑠璃の名  
 竹田出雲、  
 文耕堂等の  
 合作なり  
 宮芝居一村  
 の鎮守祭な  
 どに野天に  
 てする芝居  
 又大阪の天  
 滿天神、座  
 摩神社等の  
 社頭におり  
 し芝居をも  
 宮芝居とい  
 へる由  
 おちを取る  
 一喝采を博  
 す

つけて、チ、チン、ア、三百兩のかねがほしいなアなぞと、その坊様にやらかして  
 貰はにやアならねへと云ふものだから、むづかしい。

ていしゆ「イヤよござります。此ほんもありやうは、馬鹿村變之助と申して、以前は宮  
 芝居の女形をやりをつた者ぢやさかい。えらでけぢやわいな。幸こちの娘めが、今無間  
 のかね習うてぢや。何もなぐさみ、ちよほ語らしてやらしましよかいな。」

丸てつ「ひやりましよとも、ひやりましよとも、わしふめがえをひやるさかい、どなた  
 ぞへん太をやて下んせ。」

彌「コリヤおもしろい。鼻くたの梅が枝に、北八源太は手めへが相應だ。」

北「エ、ばかアいひなせへ。悪いしやれだ」ト眞面目になり小言いつてゐるうち、亭主  
 が指圖に十三四の娘三味線を抱へて來ると、うちの女房、下女、飯炊まで次の間にかた  
 まり、丸哲坊をそよのかしながら見物する。彌次郎をかしく、

「コレ北八、アノ通り内儀様や女中たちが見物してぢやが、一番おちを取る氣はねへか  
 どうだ」ト袖を引かれて北八少し浮かれが來て、

「いかさま見物が多いと張合がある。まよ源太におれがならう。その代り、いひぐさ



ひやう—よ  
う

の頃六十近き、薄汚れた髭むしやくしやの大坊主壹人誘ひ來りて、

ていしゆ「イヤもうめしあがりましたかいな。時にたゞ今お話し申しましたは、此ほん

でござりますすわいな」ト引合すれば、此坊主鼻ひしやけにて鼻聲なり。

「ハイ、是はひやうお泊りなはれました。愚僧名は丸哲と申します。内かたの旦那どの

がお話しゆる参りました。」

彌「コレハ御苦勞。サア〜これへ〜」

北「コリヤ御亭主さん、だん〜お世話が氣の毒な事がありやす。」

ていしゆ「何ぢやいな。」

北「イヤ、無躰ながらアノお方では間に合ひますめへ。なぜといふに、ちつとばかり若

人狂言でもしたといふやうな坊様でなけりやアなりやせん。」

ていしゆ「ソリヤどしたもんぢやいな。」

北「イヤ、さつきお話し申した通り、さきの親元へ行つて、のほりてへが金がねへとい

ふ返事した上で、かの息子が三百兩なければ上られねへといふものだから、その心意氣

をせにやなりやせん。所でかの盛衰記の梅が枝が無間の鐘の所作事、撞木を柄杓とこじ

へあるに、又生きた坊様を取込んでどうするものだ。ノウ彌次さん。

彌「イヤ、ソリヤ手めへの係だからおいらは知らぬが、何にしろ其坊様を早く頼むがよささうなものだ。」

北「エ、おめへまでが飛んだ事をいふ。」

ていしゆ「ハテ今あなたのいうてぢや通りなら、ぜひともお頼みなさるのぢやないかいな。」

北「それはさうだけけれど。」

ていしゆ「何ぢやあると、私へお任せなされ。」

北「そんな事より、おらア早く飯が食ひてへ。」

ていしゆ「御膳も令あけますが、坊様はどうぢやいな。」

北「オ、サ坊様、早く食ひてへ腹がへつて堪へられぬ。」

ていしゆ「ハイ、畏りましたわいな」ト勝手へ立つて行くと、ほどなく女飯を出す。食事の内さまぐ、無駄あれども、餘りくだくしければ略す。やがて膳をひきたるに、宿の亭主は北八がちやらくらに乗つた顔して、慰み半分、これもぶしやれものなれば、年

かすりー上  
前をはねる  
をかすりを  
取るといふ  
やすりなど  
にて金を磨  
り取るより  
起りし言葉  
故に又ヤス  
リともいふ  
此所にては  
儲けといふ  
ほどの意

へもよう入るまいに、さぞ御難義にあつたぢやあろ。」

北「イヤなかくさうでもござりやせぬ。道中するには梯子を持つて歩くが、とんだ調

法なものさ、馬などに乗るに梯子をかけて乗ると、途方もねへ乗りよくて、そして川々を

越すに徳な事がありやす。大井川でもあべ川でも臺越といふをすると、川越の賃錢が四

人前に、かの臺の賃が一人前出やす所を、梯子持参といふものだから、川越の賃錢ばか

りで臺の賃がかすりになりやす。おめへ方も是から、もしも道中しなざる事があるなら

かならず梯子は持ちなざるがいよ。コリヤ人の氣のつかねへ調法な物でござりやす。」

ていしゆ「イヤ誰も道中するのとて、ナニ梯子もていこといふ氣がつくものかいな。ハ、

ハ、。時に只今おつしやつた坊様は、ことでお雇ひなざるのかいな。」

北「さうさ、是非雇はにやア成りやせぬ。」

ていしゆ「さよなら幸のこつちやわいな。私方に世話いたして置きをります、よい坊が

ござりますわいな。是をお連れなされませ。只今お引合せ申しましたよかい」ト立上らん

とする。北八肝をつぶし、

北「モシ〜待つてくんなせへ。今急には入りやせぬ。厄介物の梯子を引受けて困るさ

梯子ばかりよこした心は、上つて来いといふ心意氣でござりやせう。そこで又その息子が返事をよこしてへが、同じくこれも無筆で、いろはのいの字も書けねへ癖に、飛んだまけをしみ、わつちらが今度御當地へ來るといつたら、幸の事だからことづけてへ物があるといふによつて、随分何でも届けて遣らうといひやしたら、聞きなせへ、きたねへ乞食坊主一人とアノ梯子をよこして、是を親父の方へ届けてくれるといひやす。そこでわつちが、コリヤア梯子はいよが、坊様は生きてゐる人だから、持つて行くに難義だといひやすと、其男のいふには、そんなら梯子ばかり持つて京へ行つたなら、どうぞ坊様を一人頼んで、その坊様に撞木ばかり持たせて、梯子と一所に親父の所へやつて下せへといひやすから、ソリヤアなぜさうするのだと聞きやすと、イヤ京の親もとから上つて來いといつてよこしたから、その返事だと頼まれて持つて來やしたのさ。」

ていしゆ「ハ、ハ、ハ、梯子をやつて上れといふは聞えてぢやが、そのお返事に梯子と又坊様に撞木計もたして遣るとはどうぢやいな。」

北「ソリヤ上りたいが金がないといふことろ。」

ていしゆ「ハ、ハ、ハ、でけましたわいな。しかしはるくの道中、梯子の事なりや柳行李

さがる所に、きやうとう綺麗な湯がござります。これへなとお出でなされ。」

北「おいらアいよから、彌次さんお前行くなら行つて來なせへ。京の水で洗ふと、がうせへに色が白くなるといふ事だぜ。」

彌「この上白くなつちやア詰らねへからよしやせう。」  
ていしゆ「時にあなた方は、近在から御出でかいな。」

北「イヤ、わつちらア江戸でござりやす。」

ていしゆ「かいな、私は又梯子をお持ちなされたさかい、コリヤ近在のお方で、お宿へ買うてお歸りなさるのかと存じましたが、どして江戸のお方が、梯子を何なされますぞいな。」

北「イヤ、これには譯がありやす。アリヤ江戸からことづかつて來やしたのさ。」  
ていしゆ「ソリヤ何としてあないな物を。」

北「きよなせへ。わつちらが心安い者だが、生れは此京の人で、今江戸に世帯を持つてゐるやす所へ、京の親元の方からはるくと、アノ梯子を磨がせてよこしやした。そのわけはかの親御が無筆といふ事で、人に手紙を書いて貰ふも面目ねへと云事かして、アノ



## 八編 卷之下

既にその日もはや西におちて、家ごとに灯火を照らし門さす頃、三條小橋を打渡りてかの旅籠屋の方に着きたるに、

やど引「サア〜お泊り様ぢやわいな」

やどやのていしゆ「コレハお早うお着きでござりますわいな」

彌「アイお世話になりやす」

ていしゆ「お荷物は」

北「此梯子一丁」

ていしゆ「コレハ氣疎いお荷物ぢやわいな。コレ〜おたこや、奥へ御案内申さんかい、

女「ハイ〜お出でなされませ」ト奥へ案内するに連立ち、一人は座敷へ通ると亭主來

りて、

「今晚はお客様がいかう少うござりますさかい、お湯は焚きませぬ。ツイあとの小橋

彌「とまりく」

やど「こちの内方うちかたへお出いでんかいな」

北「おめへどこだ」

やど「ツイあごぢやわいな。サアくお出いでんかいな、お出いでんかいな」ト打連うちつれて大おほ橋はしの方ほうへゆく。

彌「エ、おいらが知るものか。馬鹿な面な。」

わうらい「えらい顔な童ちや。たよんでこませやい」トいづれもきかぬ氣の者と見えて、

大勢どやくくと立ちかよれば、北八とめて、

「コリヤアこつちらが悪かつた。どなたも御了簡下さりませ。サアく、彌次さん歩び

なせへ。」

彌「いめへまし奴らだ。北八、どうも一人では持たれぬ。あの方へ肩を入れてくれぬ

か。」

北「ドレく、コリヤアおれまでを飛んだ目にあはせる。」

是もまたはなしのたねよはるくと、京へのほりし梯子一脚

彌「エ、歌どころぢやアねへ、どうぞ打捨つてしまひてへものだが」ト今は二百の錢も

惜しからず、厄介物の梯子、打捨つて行かんと往來少なき横町へ入り、そつと据ゑおき

逃けんとすれば、折悪しく人に見付けられて、とがめられてせん方なく擔ぎ歩き、又何

方へぞ捨てんくと思ふうち、うかくくと三條通に來りければ、宿引と見えたる男、

「モシナ、お前様方お泊りかいな。」







ふぬけ―間  
拔と同じ  
べらさく―  
痴漢、べら  
ぼう

わうらいの人「コリヤ何ぢやいな。あぶなうてならんわいな。」

彌「ハイ、向がさつぱり見えねへで歩かれぬ。」

わうらいの人「コリヤじやうもんが行くさうぢや、お水もて出やしやんせんかいな。」  
じやうもんが行くとは、火事があるさうなといふ事なり。

わうらい「どこにじやうもんが行くぞいな。」

「アレ、あこへ梯子持て行くわいな。あほよく。」

彌「何ぬかしやアがる。」

わうらい「ふぬけな童ぢや、ハ、ハ、ハ。」

彌「イヤ、このべらさくめら」ト梯子を頭へのせたなりに、ぐつと振返れば、その梯子  
後先にて往來の頭をこつつり。

わうらい「アイタ、何ぢやい、どめつさうな。此人中で長い物横たはしにしくさつ

て、えらい馬鹿ぢやな。天窓どやいてこませやい。」

彌「ナニ戯言ぬかしやアがる。」

わうらい「わしが額の痰瘤がなうなつた。そこらにや無いか見て下んせ。」

見高い京の人たち、何事やらんと折重なりてぐるり取巻くに、彌次郎兵衛逃げられもせず、大きに困りはてさまぐくに言譯し、又張込いつて見ても一向きよいれず。相手は皆女のことなり、喧嘩にもならず。せん方なく錢二百文出してやり、とうく梯子を買取り、人の見る前捨てられもせず。見物どつと笑ひてちる。

彌「こいつは意氣地もねへ目にあつた。北八、そこらまで擔いでくれ。」

北「エ、飛んだ事をいふ。おめへ持ちなせへな。」

彌「又一番へこんだ、業腹な。」

梯子の親――  
輻廣き梯子  
を親梯子と  
云ふよりか  
けしならん

いかにせん梯子の親とこのやうな、厄介ものをひきうけし身は。

かくて四條通を寺町へさがりて行くみちくも、梯子の持ちおもりして喰きながら、

「ナント北八、手めへ附合を知らぬものだ。ちつとばかり持てくれろへ。」

北「いかさま、おめへ心からとはいひながら氣の毒なこつた。さぞ重たかる。かうしなせへ、アノ女どものやうに頭へきけて持つて見なせへ。」

彌「なるほど、なるほど」ト手拭をたよみ頭へのせ、その上へ梯子をのせ兩手に持ちそへ行くと、

ひかれやう  
—京都にて  
は叱るをひ  
かると云ふ

彌「いや〜」

女「よいわいな。是もていんだらひかれやう。二百にまけてあぎよわいな。」

彌「ヤア、まけるか、情ない事をいふ。」

女「きやうとう安いもんぢやわいな。」

彌「いくら安くつても、梯子買ってどうするもんだ、内もねへ癖に。」

女「よいわいな。サア持ていなんせ。」

彌「こいつはあやまる。有様は、おいらは旅の者で、今宵は三條に泊らうといふのだから、梯子を買つても仕方がねへ。」

女「何いはんすぞいな。いらん物をつけさんす事はないわいな。」

彌「ソリヤもう、直をつけたが不肖だから、いらねへ物でも袂か懐へ入る物なら買つてもやらうが、何をいつても此梯子だから恐れる〜。」

女「それぢやてよ、私らを黽らんしたのかいな。こちや商賣ぢやわいな。そないな事いやぢや。持ていなんせ。」

ト女ども四五人、口々に喧しくしやべり立ちて、彌次郎を中に取

巻き攻め立つる。すべて此女商人は、皆いたつて氣の強き者ゆゑなかく合點せず。物







女「お前さんがたア、どうぞ、此連木買うておくれんかいな。」

彌「ナニ、すりこ木か。ア、買ひてへがコリヤア細い。わつちらが所ぢやア、何でも材木のやうな、そして四角なすりこ木でなくちやア間に合はねへ。」

女「オホ、々、四角にした連木でおむし播らんすなら、大力播鉢も四角ぢやあろわいな。」

彌「さうとも、さうとも。おいらが所ぢやア穴蔵で味噌を播る。」

女「オホ、々、きやうといきさくなお方ぢやわいな。アノ連木お嫌なら、梯子買うておくれんかいな。」

彌「ハ、々、はしご、おもしろへ、いくらだ。」

女「今日は何もよう賣らんさかい、安してあぎよわいな、六匁下んせ。」

彌「二百ばかりなら引受けやうさ。」

女「アノぢやらくくいうてぢや事わいな。もちと買うて下んせ。」

彌「いやだく。」

女「お前さん、こないに味ようしてあるわいな。モシ、五匁にあぎよかいな。」

味よう一工  
合よく

れんぎす  
りこぎ

「はしご買はしやんせんかいにやア。連木いらんかいにやア。」

北「コウ、見ねへ。がうせへな物を頭へのつけて行くは。」

彌「アノまア、尻を振るさまはい、ハ、ハ、ハ。」

女商人「薪木買はしやんせんかいにやア」トゆきくして河原に出ると、かの女どもおのおのこよに荷をおろし、すり火打にて煙草などのみて休む。

彌「ハ、ア、さすがは都ぢや。どいつも小綺麗な面つきだ。ちと冷かしてやらうか。」  
北「また、お前へこまされやうと思つて。」

彌「ばかアいふな。手めへぢやアあるめへし」ト煙管を出し、女商人の側へ寄り、「御無心ながら火を一つ。バツバくく。時におめへがたア、飛んだおもてへ物を、よく頭へきけて歩きなさるの。」

女「さよぢやわいな。」

北「此位な物を、おいらなんざア廿貫目や三十貫目ある石を、頭で振廻したものだ。」

女「お前さんは饅飩屋の粉ひきぢやあるわいな。」

彌「エ、手めへ黙つてゐるへ。」

彌「飛んだ事をいふ。そんな事があるもんか。何でも食つた物の代は二朱ばかりやらう。」

男「イエ、さよぢやなりませんわいな。ハテ、高いと思召すなら、あがつた物を残らずお戻し下さりませ」ト此一言に困り、彌次郎兵衛やつきとなりてせり合うた所が理窟づめにあひて大閉口となり、まじくすれば、

北「エ、面倒な。彌次さんはじまらねへぜ。」

彌「いまくしい。言分があれど勘定づくで恰好がわるい。了簡してやらう。よく覚え  
てゐやアがれ」トにらみ廻して立上り、はうくこの所を出づれば、  
女「ようお出で、またお近いうちにへ。」

彌「糞をくらへハ、ハ、ハ。」

又しても祇園の茶屋に田樂の、みそをつけたる身こそくやしき。

それより境内を出で、もとの四條通を行くに、日もはや七ツさがりとなれば、急ぎ二條に宿を求め、足休めんとたどり行く先に立ちて、近在の女商人、いづれも頭に柴、薪  
或は梯子、連木、槌などを頂きて四五人打連れだち、

彌「成程々々、食つた物は高が知れてある、拂ひやせう、いくらだ。」

男「ハイ、七拾八匁五分でござりますわいな。」

彌「途方もねへ事をいふ。おいらを盲だと思ふか。コレエ、たつた五百か六百が物を食はせておいて、大それた事をぬかしやアがる。」

男「イヤ、私方では何ぢやあると、お肴は大坂から歩行荷で取寄せますさかい、駄賃がえらうかよりますわいな。」

彌「肴はそれにもしてやらうが、青物は高が知れてある。アノはじめに出した菜のしたし物はいくらにつく。」

男「ハイ、あれはな、七匁五分。」

彌「ヤア、あれが七匁五分だア。あんまり人をうつむけにしやアがる。三文か四文が物だ。」

男「そないにおつしやりますな。ありや京の名物で、東寺菜と申しますわいな。私方では別につくらせまして、虫のくた菜は退けますわいな。そして莖も太い細のないやうに、選出して上げるわいな。むさいお話しやが、糞も絹ごしにかけますわいな。」

うつむけに  
云々―馬鹿  
にする

たら、これが三匁五分と貴様がいつたにちけへはあるめへ。そこでめた所が拾貳匁五分渡したから、いひ分はあるめへ。」

女「オホ、、、、ようぢやらくくと、てんごういふお方ぢやわいな、オホ、、、。」

彌「イヤ、ホ、、、ぢやアねへ。ほんとうに持つてけへる」ト眞面目になつて風呂敷に

包まうとする故、女肝を潰して、

「モシナ私のいうたは、お肴の事でござりますわいな。」

彌「ハテ、肴の直段聞く氣なら、此硯ぶたに盛つてある肴はいくらだと聞きやす。それ

を此硯ぶたはといつたら、貳匁五分だといつたぢやアねへか。」

女「そぢやてよ、それがまあ。」

彌「ナニいさくさがあるもんだ」トやつつ返しついでところへ、委細をきいて前垂した

る男、勝手より出で、

「ハイ、これはあなたの御尤、よござります、お持ちなされませ。その代り、道具の代

物は頂きましたが、上つた物のお拂はまだ頂きませんわいな。それを御勘定くださりま

せ。」

てんごう  
冗談

いさくさ  
いひぶん







慾な事をす  
ると

秤に添へて

銀玉にて

勘定する時

は秤にて何

匆と定むる

が京阪の習

慣なり

まひて、

彌「サア、女中勘定を頼みます。」

女「ハイ、それへ」ト書附を秤に添へて持ち来る。

彌「ドレ、北八見や、ざつとした所が此書附だ。」

北「オヤ、拾貳匆五分だア。がうせへにたけへく。貳朱位のものだ。彌次さん、ま

けて貰ひなせへ。」

彌「イヤ、安いものだ。ソレつりを持つて來な。サア、北八荷物ができた。これ

を皆持つてけへるのだぜ」ト硯ふた、大平、井などをみな鼻紙にて拭きかたづけるゆ

ゑ、

北「彌次さん、それをどうする。」

彌「コレ女中、コリヤ皆持つてけへりやすぞ。」

女「イエ、それは。」

彌「ハテ、さつきに此井はいくらだと聞いたたら、五分だといつたぢやアねへか。そし

て硯ふたはといへば、貳匆五分だといふ。よしか。大平が三匆、よしか。此鉢はと聞い

おむしー味  
贈

彌「こいつは變な田樂だ。」

女「ソリヤ葛ひきぢやわいな。おむしのは只今。」

彌「田樂はいくらツツだ。」

北「ハ、ハ、ハ、いかに先へ直を聞くがいよとつて、田樂は聞かすといよぢやアねへか。

サアーばい始めねへ。」

彌「オットく、なるほどいよ酒だ。水ツほくてねから飲めぬ。もう一盃つどけやう。」

北「コレ、おめへ小言をいひながら獨りで呑む。ちとこつちへよこしねへな。」

彌「時にこれではいかぬ。モシく、何ぞ肴を一つ。」

女「ハイく、」トやがて硯ぶたを持ち來る。

彌「この硯ぶたはいくらだ。」

女「ハイ、貳匁五分でござります。」

北「こいつは高べく。」

彌「へ、うつちやつて置きや。餘りあたじけなくしやアがると、おれが困らせてやる仕法がある。」トだんく肴を出すことにその直段をきよて、出ただけのもの残らず食ひし

あたじけな  
く云々ー強

豆腐の二軒  
茶屋云々

女「ハイ、く。」

彌「京では何でも他國者と見ると、途方もなく高く取るといふことだから、油断はならぬ。」

北「ホンニそれ、く、三文でも割をくつちやア業腹だ」ト此うち、女、盃をもち出で、口とりに菜の浸物、井に入れ持出で、

女「たゞ今お田樂がでけます。マア一つあがりなされ。」

彌「よし、く。モシ女中、酒はいくらづつだの。」

女「ハイ、く、わたくしの所の御酒はよござります。六拾匁がへでござりますといな。」

彌「エ、それぢやア分らねへ。此井はいくら。」

女「それかいな、五分でござりますわいな。」

北「飯を早くたのみます。」

女「ハイ、く、かしこまりました」ト膳を二ぜんに、飯ばち、田樂を持ち、「ハイ、おでんが出きました。」

六拾匁がへ  
一六拾匁即  
一兩なれば  
一樽一兩の  
酒なり





北「コリヤどうする。」

さじきばん「お前、狂言の邪魔になるわいな。こちへごんせ。」

見物「そいつ、早ういなせやイ。」

北「何ぬかしやアがる。」

さじき「ハテよいわいな。」

彌「コリヤ、貴様たち此男をどうする。」

さじき「イヤ、お前もごんせく」ト二人を宙に釣上げ下へひきおろし、口々に何のか

のとべちやくちや丸められ、のほせ上り、せん方なく、エ、面倒だと兩人小言たらく

芝居出て、祇園町の方に赴く。

北「エ、業ざらしな。ハ、ハ、ハ。」

木戸錢を棒に古手の布子にて、しばらくも紺のだいなしにせし。

それよりゆきく、て祇園の社にまるる。御本社ごほんしやの中央ちゆうあうは大政所おほまんどころ、牛頭天皇ごうづてんわう、東の間ひがしは

八王子わうじ、西の間にしは稲田姫いなだひめ、聖武天皇しやうぶてんわうの御宇ごよう、吉備大臣きびだいじん、唐土たうどより歸朝ききやうの時とき、播磨はりまの廣峯ひろみね

に垂跡すゐじやくし給たまふを崇あがめ奉たてまつれりといふ。其外そのほか攝社せつしや、末社まつしや、記しるすに違いさまあらず。參詣さんけい日々ひびに群ぐん

彌「大方役者の仇名だらう。」

北「そんなら今出た役者が盲録だな。ヨウく、盲録ありがてへぞ」トいふと、見物にどつと落が来て、狂言は見ずに北八の方ばかり見て、とつくと笑ひながら、

「イヤ、向棧敷の盲録様、おほでけ、おほでけ。」

見物「あほよく、向棧敷の盲録の阿房ヤアイ。」

北「何だ、向棧敷の盲録たア何のこつた。はなつたらしめら。」

彌「ハ、、、、はなつたらしたア手めへのこつたは。」

北「なぜく。」

彌「上方で盲録といふは折介のことだが、手めへ、紺の看板を着てゐるから、それでみんなに冷かされるのだけは。」

北「エ、さうか。そんならとつくにさう言つてくれよばいよに。」

見物「あほよく。」

北「イヤ、こいつはふてへ奴らだ」ト無上に力むと、見物みなく、騒立ち、喧嘩よくと大騒動となると、棧敷番四五人來り、北八を捕へ引出さんとする。

「イヨ大根ウ。十抱ひとからげぢや。」

北「ナニ、大根とはアノ役者のことか。何のこつた。」

見物「ヨウでけますの。」

北「ありがてへと申しやす」ト此北八、いたつて芝居好ゆゑ、幕があくと夢中になり、何もかも打忘れて、無上に大きな聲してほめる故、見物みなくをかしがり、北八の方を見てゐると、北八「ヨウく、大根めく。」

此大根といふ事は、上方にては役者の下手なものを大根といふ。北八、そのわけは知らず。人が大根々々といふを、きいた風に役者さへ見ると大根々々と呼立つるを、見物、北八を小ばかにして、

折介—中間  
の下等なる  
もの

「イヨ盲録さまア」ト北八を笑ふ。上方にて盲録といふは、江戸にていふ折介といふ事也。北八、紺の布子を着てゐるゆゑ、見物、看板着たると思ひてかくいふなれど、北八、盲録のわけを知らねば、

北「彌次さん聞いたか、こつちの役者にはいろくくの變ちきな名がある。大根だの盲録だのと、よもや俳名ぢやアあるめへ。」

もつけな顔  
云々―思ひ  
もよらぬ幸  
に喜びしな  
り

太郎兵衛「しかし冷めはせんかいな。モシ、お銚子ごとそれへあぎよわいな」ト茶屋の土瓶を北八に渡せば、もつけな顔して受取り、注いで飲めばぬるい茶なり、

北「エ、茶ださうな。ベツペ〜」

太郎兵衛「おぬるなつたぢやある。」

北「とてもぬるい序に、どうぞ是へその徳利のをうめて下さりませ。」

太郎兵衛「これはしたり。コレ見なされ、こないになつたわいな」ト徳利を逆様にして見せる。

彌「ハ、ハ、業さらしな。」

北八小聲に「いめへましい。饅頭一ツ棒にふつた」トぶつ〜口の中に小言いひながら脹れてゐると、此内樂屋にて、拍子木カツチ〜。

見物「イヨ、口上さあア。」

口上「東西々々」拍子木カツチ〜と此内口上もすみ、幕の中にて太鼓、てんでん、てれ

つくてん〜。拍子木、カツチ〜、カチ、ハ、ハ、三味、ツ、テン〜。幕開く、花

道よりしだしの役者、大勢出ると見物、わる口、

棒にふつた  
損をした



て小聲こごえになり、

「彌次やじさん見ねへ、うまさうに飲みをるが羨うらやましい。」

彌「エ、いめへましい事をいふ男をとこだ。」

北「コレ、おぼうさん、おまん一つ上げやせう」トおのれが食残くひのこした饅頭まんじゅう一つ、隣棧まなりさじ敷しの子供こどもにやる。これにてあしをつけて、酒さけを飲のまうといふ下心したこころなり。

あしなつけ  
て縁えんにし  
て

太郎兵衛「コレハお有難ありがたうござりますわいな。」

北「おめへがたアよいものをあがりなさる。」

太郎兵衛「おまいも御酒たさけは好きかいな。」

北「さやうく、飯めしよりは好物かうぶつさ。」

太郎兵衛「ソリヤよいお樂たのしみぢやわいな。權兵衛ごんべさん、も一つ頂いたすかうかいな。オト、

ト、コリヤよい酒さけぢやな。」

權兵衛「さよぢや。ホンニお隣まなりのお客きやく、御退屈ごたいくつぢやある。これなと一つあがらんかい

な」ト茶碗ちawanをさし出す。北八、手てに取るより早く頂いたすきて、

「ハイ、有難ありがたうござりやす。」

隣棧敷の見物「コレ、饅頭まんじゅうやさん、どしたもんぢやぞい。こちの辨當べんたうへし潰つぶしぢや。」

商人「ハイ、お許ゆるしなされ。」

彌「アイタ、、がうぎに足あしを踏ふんだ。」

商人「ハイこれはモシ、ちとお許ゆるしなされ。」

北「コリヤどうしやアがる。人の頭あたまの上うへを金玉きんぎょを引きすつて通りやアがる。エ、汚きたねへ

汚きたねへ。」

隣棧敷の見物太郎兵衛「オ、權兵衛ごんべゑさん、何をなに買かうておいでたぞいな。」

權兵衛「太郎兵衛たろうべゑさん待つてぢやある。わしや今いま、あこの棧敷さじでな、氣疎けそう味あじいもの喰く

てぢやさかい、ソレ見みてるて遅おそなつたわいな。サア、こないなもんぢや」ト竹たけの皮かわ

づつみを出す。

太郎兵衛「ハア、鯖さばのすもじかいな。コリヤきよとい、きよとい、その飯めしは辨當べんたうの代かりに

して、魚さかなはへがして酒さけの肴さかなにさんせ。それがよいわいな。」

權兵衛「さよぢや。竹たけの皮かわはもていで、草履ぞうりの鼻緒はなぢたてるわいな。イヤ、時ときに一盃はいや

ろ、な」ト小ちひさな猪口ちちぐちを取出とり出し、風呂敷ふろしきに包つみし徳利とくりより注ついで飲のむ。北きた八はちこれを見み

煙草盆の代りに火繩を持ち來れりそれより出方を指して火繩といへり

へりまの大根―練馬の大根の洒落

の手にひつぱり、引連れて芝居へ入り二階へあがると、棧敷番來り二人を向棧敷の前側へ入れる。尤も幕の内にて中賣商人聲々に、

「みづから宇治山、みづから宇治山」

「饅頭よいかいな」

「ちやアあがらんかいな。ちやく〜どうぢやいな」

「番付、繪本々々」

彌「がうぎに大入だ。しかし江戸の芝居の半分でもねへ」

北「ア、退屈だ。一ツぱい飲みたくなつた」

彌「おらア腹がへりまの大根だ。菓子でも買つて食はう」

商人「みづから宇治山」

彌「何だ、手づからうちやる。勝手にさつせへ」

商人「饅頭どうぢやな」

北「こいつがいつち分つて居る。コレ、饅頭三ツ四ツくんなせへ」

商人「ハイ〜、三文ツツでござります」

て來やう。」

彌「ナニ、うつちやつて置きやれ。皆手めへがべらほうから起つた事だ。先は商賣だもの仕方がねへ。」

北「エ、いめへましい。」ト眞面目になりて、つきながら四條通に出づれば、名にしおふ川東の生粹祇園町の繁昌は、兩側の芝居、櫓太鼓を打交へ、てんから、てんからの音勇しく、狂言の名代看板はなやかに、對のはで模様着飾りたる東西の木戸番、鹽辛聲にて、

三五郎、あら吉、友吉  
嵐三五郎  
嵐吉三郎、  
藤川友吉、  
皆當時有名  
なる京阪の  
俳優  
火繩―昔は  
劇場内にて

「サア、評判ぢや、評判ぢや。今が三五郎の腹切ぢや、腹切ぢや。此あとが、あら吉と友吉が所作事、評判々々々々」ト呼びたつる。江戸で火繩といふは、京、大阪にては皆女なり。北八彌次郎兵衛が袖をひいて、

女「モシナ、お前さん方、一幕見てお出でんかいな。」

北「いかさま、ナント彌次さん、京の芝居もひとときり見やうぢやアねへか。」

彌「おもしろからう。女中いくらで見せる。」

女「よござりますわいな。私がどうなとするさかい、マアお出でなされ」ト二人を兩方





形のつけた  
るもの  
宮川町一祇  
園の近傍に  
て有名なる  
野郎かげま  
の巢窟

合せて見榮はりながら、向より来るおやま藝子に擦れちがひ通れば、一人の妓ふりかへり北八を見て、

「はつねさん、見なませ。あの人さんの着物におつきな紋がついてぢやわいな。オ、をかし、オホ、、、」

はつね「ホンニあほらしい人さんぢや。オ、すかんやの。オホ、、、」ト打笑ひ行過ぐ。彌次郎兵衛も心付きて、

「オヤ、北八、手めへの着物を見や。脊中のよこちよに大きな紋所がくつ付いてるらア」

北「どこにく〜」ト振り返りてよく見れば、のほりを紺に染めたる布子ゆゑ、ちよつと見では知れねども、日あたりへ出ると大きな紋所ありくとすいて見ゆる。

北「コリヤ大變々々」

彌「ハ、ハ、ハ、裾の方には鯉の瀧のほりが見えるから、こいつ幟のはぐらかしものだな」

北「エ、古着屋めが、とんだ目にあはしやアがつた。道理で安いと思つた。ぶんのめし

老一くわん  
—老一官、  
國姓爺合戦  
中の人物

紺の看板—  
中間などの  
着る紺の短  
き服、背に  
主人の紋な  
ど染めたり  
紫帽子—女

「どうも此男は口が悪くてなりやせん。了簡しなせへ。そして何角と面倒な、その布子も壹貫にまけてやりなせへ。」

ていしゆ「よござります。朝商ちや。まけてあぎよわいな。シヤンくくく。」

北「まづは布子にありついた」ト彌次郎に代錢を拂はせ、かの布子を着て彌次郎兵衛に木綿合羽をかへし、此内を出るとて暖簾を見れば、とらやとあるに思ひよりて、

和藤内三貫あまりの古布子、老一くわんにもとめこそすれ。

それより北八は忽ちに元氣をえて、

「ナント彌次さん、凄じからう。古着屋めをちやらほこではぐらかして、壹貫に見落し

は安いもんだ。見なせへし、まだ衿垢もつかねへものを。」

彌「紺の看板を見て、おいらがお供のやうで丁度いよの。」

北「時に、こゝらは何といふ所だの。がうてきに意氣な女がちらくするは。」

彌「ハ、ア紫帽子の野郎どもが見えるから、大方宮川町といふ見當だ。」

北「くるぞく。美しい妓どもが来る。いと時おいらア着物を買つてよかつた。まんざ

ら裸の上にその木綿合羽ちやア、あいつらに擦れちがつて。外聞が悪い」ト俄に襟かき

後家の質屋  
云々―後家  
の質屋は目  
が利かず踏  
倒す事多き  
なり

あたけたい  
な―不埒な

ても一〇より外は貸すめへから、貳朱ばかりに買はにやア損がいく」

ていしゆ「何いひぢやぞいな。後家の質屋へもていても、金壹分は物いはず貸すわいな」

北「とんだ事をいふ。どうして壹分貸されやせう」

ていしゆ「ナニ、壹分つかん事はありやしよまいがな」

北「それとも、おめへぢきに受けなざるか」

ていしゆ「受けるわいな」

北「さういつてもあてにやアならねへ。それよりか、此間の股引の出入はどうしなざる。

そして拾の時貸もあるし、それもおめへ、子供衆が脾胃虚して煩つてる上、内儀様が

疫病で死なれたけれど、佛かよへて葬禮を出す丁面が出来ぬと、たつてのお頼みの為貸

して上げたものを、義理の悪い。いつそのこと此布子は、その拾のかたに只取つておき

やせう」

ていしゆ「ア、これ申し、とつともう、やくたいもない事いうてぢやわいな。わしが喚

が、いつ疫病で死んだぞいな。あたけたいな事はんすわいな」ト亭主大きに腹立て

る。彌次郎兵衛をかしく、

おひえー木  
綿の縮入

ほこしていなれましたが、そのお方がもう着物買うて着いでもだんない、毎日こよの内へ日向ほこしにこうわいなと、こないにいうてぢやあつたわいな。」

北「エ、じれつてへ、コリヤア賣らねへのか、どうだな。」

ていしゆ「ハイく、かうぢやわいな。」

北「安くしてくんねへ。」

ていしゆ「ソノ紺のおひえぢやな」ト算盤ばつちく。「三十五匁、とんとぎりくぢやわいな。」

北「高いく。わつちらは江戸の者だが、古着は商賣がらでいくらも取扱つてゐるか、やるもんぢやアねへ。ほんとうの所をいひなせへ。」

ていしゆ「ハイ、御商賣がらとあれば、お前様も古着屋なされてかいな。」

北「イヤ、わしは質商賣さ。」

ていしゆ「質とあれば何かいな、おとりなさるのか、置きなさるのかいな。」

彌「おくのが此男の商賣さ。」

北「それだから質におく時の算用からしてかよらにやア買はれやせぬ。此布子はどうし

お家さま—  
江戸の御内  
儀、おかみ  
さん

ていしゆ「長吉、そりやおぬるいちやないかいな。なぜ熱い茶あけんぞい。」

小ぞう「イヤ、お家さまが朝は茶粥ちやさかい、茶焚くなどおつしやつてで御ざりま  
す。それは昨日焚いたまんまの茶でござりますわいな。」

彌「いかさま、昨日のお煮花ほどあつて、とんと河童の尻のやうだ。イヤ尻の序に、尾  
筋ながら御亭主さん手水に行きたい。おうらをちよつと。」

ていしゆ「ハイく、雪隠へお出でかいな。」

小ぞう「雪隠はぬるうはござりませぬ。よう沸いてちやあるぞいな。」

ていしゆ「ナニ雪隠を誰が沸したぞい。」

小ぞう「それちやてよ、今のさき私が参じたさかい、すぐ行て見なされ、ほつほと煙が  
出てちやある。」

ていしゆ「エ、むさい事いふ奴ちや。」

北「そんな事より此布子はいくらだへ。早くきめてくんねへ、寒くて堪へられぬ。」

ていしゆ「お寒くば、もつとそつちやへ寄りなされ。そないによう日がさしてちやわい  
な。昨日も着物買ひにお出でたお方が、コリヤ氣疎い暖い内ちやてよ、そこに一日日向



がめられて、北八あたりを見るに湯屋でなし。

北「エ、いめへましい。湯屋かと思つた。」

ていしゆ「ハ、こちの暖簾にゆの字があるさかい、それで銭湯かと思つてぢやの、アリヤ濟生湯といふふりだし薬の名ぢやわいな。」

彌「ホンニ、こいつは大笑だ。」

北「また一倍寒くなつた。いめへましい」ト小言いひながら行くさきに、しみたれの古着屋一軒あり。見せ先に古布子、古袷つるしあり。北八彌次郎兵衛をくどきて、布子一枚求めんと件の見せに立ち、ひねくり廻して紺の布子を取つて透し見て、「モシ、この布子はいくらだね。」

ふるぎやのていしゆ「ハイ、こつちへお掛けなされ。コレ、お茶もてこんかいな。お煙草の火もないわいな。赤いの一つ、ちやと下んせ。」

北「イヤ茶も煙草もいりやせん。コリヤアいくらだといふに。」

ていしゆ「ハイ、そりやきやうとうよござります。お安うしてあけうわいな。」

小ぞう「ハイ、お茶あがりなされ。」

にしみわたり、五條の橋にさしかかりたるに、此所はいにしへ牛若丸の千人切したまふ所とあれば、北八しをくくと打かたぶきて、

かゝる身はうしわか丸のはだかにて、辨慶縞の布子こひしき。

かくて東にわたりて、河原院の舊跡、門出八幡も直通となして、高瀬船の綱に曳かれてたどりゆく道すがら、

北「思へばくつまらねへ事になつた。どうぞ古着屋でも見つけたら、どんなでも縮入が一枚ほしいが、彌次さん、いよ智恵はねへかの。」

彌「ナニ、買はずともいよにしたがいよ。江戸つ子の拔参りに、裸になつてけへるはあたりめへだは。」

北「それだとして寒くてならねへ。」

彌「そんなら幸こよに湯屋がある。ナント、ちよつくり暖つて行かねへか。」

北「ホンニ、こいつは奇妙々々。彌次さんお先へ、ありがてへト一日散に、ある格子づくりの内の暖簾をくどりてすつと入り、驅上つて裸にならうとすれば、その亭主でいしゆ「モシく、こなさん誰ぢやいな。何さんすのぢや、何さんすのぢや」トと

河原院―五  
條橋通萬里  
小路東にあ  
り、融大臣  
が鹽竈の景  
を移したる  
にて有名な  
り





# 膝栗毛八編 卷之上

御影堂―五  
條橋西の町  
にあり、堂  
守扇を賣る  
本尊に善光  
寺の如來を  
うつし作る  
故に御影堂  
といふ  
庭訓往來―  
僧支慧の作  
りし消息文  
集

或人の句に、花尊都に本寺々々かなと詠みたりしは、實にも寺院堂塔の廣大無邊にして、その莊嚴麗秀なるいふもさらなり。殊に花の春紅葉の秋は、東西南北に名だたる勝景の地ありて、加茂川名酒の樽とともに人の魂をとばしめ、商人のよき衣着たるは他國に異にして、京の着だふれの名は益西陣の織元より出で、染色の花やぎたるは、堀川の水に清く、釜もとのお白粉、川端の五倍子粉は雪をあざむき、御影堂の扇、伏見の團扇に、風匂ふ香堂前の粽、丸山輕燒、大佛餅、醍醐の獨活芽、鞍馬の木芽潰は庭訓往來にいちじるく、東寺の蕪、壬生の茶は名物選に鼻たかく、そのほか名産奇製の品物あまたある都に、たま〜入込む騷客の兩人、彌次郎兵衛喜多八とて、ぬけ參りの刷毛序にまぐれ出たれども、淀川の下り船にかどちがひして荷物を失ひ、五條新地の一ツばい機嫌に、はや呑込して丸裸となりたる北八の名にも似ず、同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借せしほどの仕合なれば、かゝる洛陽の地もおもしろからず、うかく〜と新地もどりの朝風身



二十五年

...

諸侯の國を治むるに當りては、その國を治むるに當りては、

由緒を察すべし、其の源を究むべし、其の流を順ふべし、

其の法を遵ふべし、其の義を履ふべし、其の禮を敬ふべし、

其の信を立ふべし、其の仁を施ふべし、其の智を盡ふべし、

其の勇を發ふべし、其の節を守ふべし、其の廉を立ふべし、

其の恥を知ふべし、其の忠を盡ふべし、其の孝を立ふべし、

其の悌を立ふべし、其の信を立ふべし、其の義を履ふべし、

其の禮を敬ふべし、其の智を盡ふべし、其の勇を發ふべし、

序

穆王は、駿に御して、王母が桃を甘んじ、靈鷲の説法を聴くも、ひとへに名馬の功によれり。こゝに彌次郎兵衛喜多八は、心の欲する所に隨ひ、膝栗毛に乗りがくるまよ、四方に奔走して果もなきは、八駿にも勝りてたのしかるべし。かの生暖磨墨ならば、八十うぢ川の争もあるべきに、人喰ひ馬にも合口同士、勝手次第の道艸は、これ此栗毛の徳ならずや。盡きぬ趣向に八編の緒を、作者の乞ふに任せ、予も又乗りかよつて筆を揮事然。

文化辰春

龜山人述

膝栗毛

五六六

北「ハイ有難うございやすが、私はやはり裸が勝手でござりやす。」  
彌「けへぶんのわりい男だ。おいらが合羽を貸してやらう。」ト彌次郎が木綿合羽を取つて北八に打着せる。

うとましやかいたる恥も赤はだか、合羽づかしき身とはなりたれ。

はては大笑となり、二人はやうくのことにて此所をのがれ立出でけるとなり。

ての事もありやせまい。いなしてやろかいな。」

北「それは有難うございやすが、わつちやア此裸の儘ではけへられやせん。」

ていしゆ「いなれざいなんすな、いなんすな、こちにもいひ分があるさかい。」

北「イヤ、そんならめへりやせう。」

十「サア、いなんせ。あたあほらしい衆ぢやわいな」ト二人繩をといてやる。

彌「北八、手めへのお陰で飛んだ目にあつた。」

北「おめへよりか、おらア此通り着物を取られて、ハアくつさめ、オ、さむく。」

ていしゆ「ハ、、あんまり可哀さうぢや。何なと一枚くれてやろかい。」

北「有難うございやす。どんな物でも、どうぞ頂かして下さいやせ。」

ていしゆ「エ、みだれめがいふやうな事ぬかしけつかる。ときに似合うたやうに納屋

の菰一枚もて来てやれやい。」

下男「イヤ、こよに昨日の俵がある。これを着ていかんせ。」

北「ナニそれを着るとか。エ、情ないことをいふ。」

ていしゆ「折角おれが心ざしぢや、着ていなんかい。」

食  
みだれ一乞



北「イヤ、わつちらは全體、金毘羅信心でござりやすが、是まで願をかけやすに、人と違つて水をあびて寒い目をしてはきよやせぬ。何でも着物をたんと着て、殻汁に熱燗をひつかけた上、炬燵へ首つきのたくり込んで願ふと、すぐに御利生がござりやすから、せめて着物は着ずとも、一盃熱くして下さりませんか。」  
ていしゆ「エ、尻ねずりくされ。」

彌「イヤ、御尤でござりやす。わつちこそは此男めがまきぞへ、ほんの災難。そしてこんな目にあひますと、持病の癩がさしこんで、アイタ、ハ、ハ、ハ、」  
ていしゆ「癩が痛いなら、胴中の繩をもちと堅うしめてやるかい。」  
彌「イエ、ハ、ハ、ハ、わつちが癩は甚句をどるとをさまりますから、どうぞ此繩といて下さりませ。」

十「ハ、ハ、ハ、コリヤねからやくたいな奴らぢやわい。勘太さん許してやらんせ。たかで敵等はえらい阿房ぢや。なるほど吉彌めにたらかされくさつて、きりもん貸したまでのこつちやあるぞいな。」

ていしゆ「サイナ、そないにいはさんすりや、いかさま賢うも見えん童たちぢや。さし

やくたい  
埒もない

十「店主呼んで預けさんせ。」

ていしゆ「旅のもんぢやてよ嘘つきさらして、ほんまのうちをえいはんわいの。」

十「ソリヤ氣の毒なもんぢやわい。」ト二人が縛られてゐる側へ來り、「コレ、こなんた  
 ちは悪い合點ぢやわい。ソリヤはて、友だちづくなら頼まれまいもんぢやないが、も  
 うこないにばれては、しよ事が無い。有様にいうて、めんくの身ぬけするがえいわい  
 の。」

彌「イヤ、わつちらは、からきしも何も知りやせん。たど泊つたばかりで疑うけたと  
 いふもんだから、何卒あなたのお取りなしで、わつちらを助けて下さいませ。コレ手を  
 合せて拜みたくても縛られてゐるから、足を合せて拜みます。コリヤ、北八もお頼  
 み申せ。」

北「ハイ南無金毘羅大権現様、此災難をまぬかれますやうに、なむきみやうちやうらい、  
 なむきみやうちやうらい。」

ていしゆ「何ぬかすぞい、金毘羅様祈るなら、そないなこつちやきかんわい。幸おどれ  
 裸でゐるから、水あびせてこまそ。垢離とつて祈りくされ。」

北「サア、貴様たちは、おつにいひかけをするな。」

ていしゆ「願たよかすな。しよびきおろせ」トみなく立ちかゝり、北八を手ごめにす。このどさくさに彌次目をさまし、この體を見て跳ね起き、飛んで出で、

彌「コリヤおれが連だが。うぬら此男をどうする」ト亭主を突退くると、

料理番「イヤ、こなやつも同盗ぢやある。二人ともにひつくよれ」トいづれも小力の

あるものども、彌次郎、北八を兩方から引立て下へおろし、細引をもつて遂に二人を

ぐるく巻に縛りたるに、彌次郎は一向合點ゆかず、委細の事を聞きて仰天し、北八も

今更おやまに着物を貸したるあやまりを後悔し、疑うけたる上かゝる目にあひ、くやし

けれども理の當然にいひわけたよす、臺所の柱につながれたる面目なさ。殊に夜もあけ

放れて、近所の者どもおひく見舞に來るうちに、これも此商賣屋の亭主と見えて少し

口でもきかうといふ男、名は十吉

十「わしや今聞いたが、吉彌めがきよとい事さらしたけな。その手引した奴らはどうし

たぞいな。」

ていしゆ「あこに括つて置いたわいの。」

きよとい事  
—えらい事

ら、下へさういつてくんなせ、早く〜」

女「マア何にいたせ、そないに申しませう」ト下へおりる。程なくこの亭主と見えて、

おにぶとりの襦袍を着たるでつくりとせし大男、料理番、男ども二三人引連れ、どやど

やと二階へ來り、亭主、北八の枕元に立ちはだかり、

「コレ、吉彌にきりもん貸したといふ童は、こなはんかいな。」

北「オ、おれだ〜」

ていしゆ「おどれかい。ほてくろしい事さらしたな。マア起きくされ。ドレ顔見せさら

せ。」

北「イヤ、この才六めらは何で己をそのやうにぬかしやアがる。」

ていしゆ「ぬかしたがどうすりやア、おどれ、吉彌めにきりもん貸して欠落させをつた

からは、行先は知つてけつかるぢやある。有體にほざき出してくされ。」

北「飛んだ事をいふ。なにおれが知るものか。」

ていしゆ「イヤ〜、そないにぬかしさらしても、われが人に頼まれて、糸引きくさつ

たに違はないわい。」

糸を引く一  
手引する

ほてくろし  
い一腹黒い

ねて無上じやうに手てを叩たたくと、下したより女房にようぼうかけ上あがりて、

「どなたぞお呼びよなされたかいな。」

北「オ、こよだく。コレ、わつちがおやまは先刻さつき下したへおりたが、それなりで顔かほ出だしもしねへ。ちよつくり呼よんでくんなせへ。」

女「サ、その事ことで下したは大騒たはさわぎでござんすわいな。」

北「なぜく。」

女「アノおやまが男おとこのきりもん着きて走はしつたさかい。」

北「ナニ、走はしつたとは逃にけたのか。ソリヤ大變たいへんだく。その男おとこの着物きものといふはおれがのだ。」

女「かいな。ソリヤ又また、何なんとしてお前まへさんのを着きていたぞいな。」

北「イヤ、下したへ行いつてみんなを騙だまして來くるから、借かしてくれろといつたによつて。」

女「それで貸かしなかつたのかいな。」

北「さうさ。時ときにそのおやまの欠落かけ落ちしたは、こつちにやア知しらねへこつたから、何なんでもこよの抱かかへ違ちがはあるめへ。着物きものはせひとも、爰こゝの内うちからどうぞして貰もらはにやならねへか



丑の刻―午  
前二時

才さいのなき代物しろもの、北八きたに着物きものを脱ぬがせて投なり出だし、おのれも帶たじをときて、北八きたにおのが着物きものをうち掛かけ、さながら深ふかきなじみの如ごとくうちとけたる體ていにもてなしけるゆゑ、北八きたうつよを抜ぬかしてうち臥ふしけるが、夜よも次第しだいに更ふけゆくまよに、犬いぬの遠吠とほほびものさみしく、時ときの太鼓たいこも、はや丑うしの刻こくばかりなるに、吉彌きちや、目めをさましよ様子やうすにて、

吉「モシナ〜、よう寝ねてぢやな」北「ア、〜、何なんだ〜」

吉「わしや手水てみづにいてくるぞへ」ト起上たきありたるが、枕元まくらもとに投なり出だしてある北八きたの着物きものきて帶たじをひきしめ、「お前まへさんの着物きもの、ちよと借かしておくれ。わしやこれ着きて殿どのたちのふりして、下したの衆しゆをだましてこまそわいな」

北「よく似合にあつた。奇妙きめう々々」

吉「頭つらがこれぢやあかんわいな」ト手拭てぬぐひを取りて打冠うちかむり下したへおりたるが、北八きたはそれより寝ねもやらず、待まてど暮くらせどかの吉彌きちやは一向いっかうに來きたらず。さては外ほかに客きやくにてもあるやと暫しばらく待まちるたるに、はや七つの鐘かねも鳴なり、ほどなく夜よも明あけなんとするに、北八きたこらへか

七つ―午前

一分—十五  
匆にあたる

しんきやの  
—心氣の音  
讀、じれつ  
たい

燭代、まけいの何のとおしやんす事はないわいな、そして皆上りなされた後で高いの安いのとおしやんしたてよ、あかんこつちやないわいな。」

彌「エ、面倒な、ソレ壹分持つていきな。はした位はまけなせへし」ト金一分投り出してやる。女房、不承々に取つて下へおけると、彌次郎呆氣にとられて、顔つきぐにやりとなり、「ア、飛んだ目にあつた、ノウ北八。」

北「併しおらア惜しくねへ。どうかおつにもてさうな鹽梅だ」ト此内、北八の相方吉彌來つて、

「オ、しんきやの、あこに私ひとりおかんして、こよに何してぢやぞいな。サア休みんかいな」ト手を取りて、おのが方へ引きずつて行く。

北「コリヤ、おれが帯を解いてどうする」トわざと彌次に聞えるやうに聲高にいふ。女、北八を引きこかし、

「よいわいな。今宵はいかうぬくいぢやないかいな。お前さんちつとしてゐなされ、私があぢようするわいな」トすべて上方筋のおやまは初對面から帯紐をときて、うちとけたる體に客をもてなすこと定まれるおきての如し。中にもこの吉彌は大年増にて、如

定 つとめ一勘

ろくあれども略して、こよに蒲團をしき並べ腰屏風にて間をしきる。このうち四十ばかりの女、こよの女房と見えてつとめを取りに來り、屏風をあけて、

女「おゆるしな。」

彌「オ、だれだ。」

女「ハイ、おつとめを頂きに參じました」トかきつけをい出す。彌次ひらき見て、

「なんだ、四匁ツツ八匁の揚代は聞えたが、四匁かちんなんば、二匁すし、壹匁八分御

酒、五分蠟燭、メて十六匁三分、コリヤとんだ話だ。雑用は別に取るのか。おらア又、

酒も肴も揚代のうちかと思つた。コレく北八、この通りだ。」

北「ドレく、何だ、コリヤおめへがたア、わつちらを他國者だと思つて、酒代を別に

取るさへあるに、がうてきにたけへもんだ。此四匁かちんなんばといふはアノ大平の事が、

餅ならたつた三ツ四ツいれて、葱のちつとばかりさらへ込んだ物を壹匁つつとは、なる

ほど京のものはあたじけねへ、氣の知れた根性骨だ。蠟燭までつけるこたアねへ、こん

な物はまけにしておきなせへな。」

「ホ、ホ、京の者を悪うおしやんすお前さんが、しゆみぢやわいな。五分ばかりの蠟

しゆみ一客  
番の意

せうし—笑  
止  
あも—餅

吉「オホ、い、ソリヤ歌賃ぢやわいな」トこれは上方にてするなんば餅とて、葱をいれたる雑煮餅なり。此おやま下戸とみえて、おのれが好物ゆゑに客にすよめて取寄せたるなり。北八かちんといふ事を知らず、

「ハア、かちんといふは聞いたこともねへ、どんな肴だの。」

吉「オ、せうし。あもちやわいな。」

北「ム、鱧か。ドレく、ヤアこりや餅だく。」

彌「おきやがれ、上方者は氣がきかねへ、酒の肴に餅とはどうだ。是で酒が飲めるものか。」

金「外のお肴いうてさんじやうわいな」トすぐに下へおりたるが、ほどなく井物を持つて来る。中には上方にはやる鳥がひの鮓なり。此おやまの好きと見えて、此鮓をいひつけやりたるなり。

北「なんだコリヤ、ばかの剥身を鮓につけたのだな。」

金「とりがひのおすもじぢやわいな。」

彌「出す物も出す物も變ちきな物ばかりで、もう酒も飲めぬく。」トこの内、むだもい

おすもじ一  
鯨におなじ  
婦人の詞な  
り

吉「さういうてやるかいな、お肴は何にせうぞいな。」

金「角のおすもじがおいしいぢやないかいな。」

吉「わしやア、かちんなんばがえいわいな。」

彌「かちんでも家賃でも頓着はねへ、早くしてくんな。」

吉「いつきにさんじるわいな」ト、此おやま酒肴をいひ付けに下へおりる。後に残りし

おやまは、此内帯のあひより鏡を出し、行燈のそばへより顔をなほす。やがて下より銚

子盃をいだす。大平が一人前に一ツづつひろぶたにのせ持出す。彌次郎肝をつぶし、

「なんだ、大平を人別割とは珍しい。京はあたじけねへ所だと聞いたが、こよらは又が

うせへだ。」

北「四百には安いもんだ」ト此二人は、酒も肴も揚代の四百の中だと思ひ、無上に安い

とほめる。

金「サア一ツあがりなされ。」

北「はじめやう。オト、ハ、ハ、ひらは何だ。ハ、ハ、葱にはんべいは聞えたが、こつ

ちでははんべいを焼くと見えて、眞黒に焦けてるらア。」



北「どうした。」

女「オホ、おあぶなうござんす」ト煙草盆たばこぼんを持って来る。此内このうちおやま二人、一人名

は吉彌きちや、今一人は金五きんご、いづれもふとり袖縞つじまじまやうの着物きものに、くろびろうどのはんえり、

梁はりのつかへるほどのひくき二かいを、しやんと立つてあるくしろもの、片手かたてに着物の襖つま

を横よこの方ほうへ引上げて来り、オ、しんどといつて坐る。

北「とんだ暗くらい行燈あんどんだ。サアもつとこちらへ寄りなさらんか。」

吉彌「お前まへさん方がたどこぢやいな。」

彌「されば、どこやらであつた。」

金五「オホ、六角かくの朝市あさいちにこないなお方かたがよう見えてぢやが、訛なまつてぢやさかい、

大方旅たほかたたびのお方かたぢやあるぞいな。」

吉「六條様でうさまへ御出ごいでたのかいな。」

彌「マアそこらのものよ。」

吉「モシナ、酒一つあがらんかいな。」

彌「さうさ、酒さけが早く飲のみてへの。」

六條様—東  
西兩本願寺  
をいふ、六  
條にあれば  
なり

オ、しんど  
—心勞の轉  
だもい、せ  
つないの意  
なれど輕し

うだ。」

北「いかさま、何も荷物<sup>にもの</sup>はなし、まんなほしにそんな事<sup>こと</sup>もやほでねへ。」

女「サアはいりんかいな。」

彌「はいる事<sup>こと</sup>ははいらうが、こよはいくらだ。」

女「オ、かたやの、お泊<sup>とま</sup>りなはるかいな。」

彌「もちろんさ。」

女「まだ初夜<sup>しよや</sup>前<sup>まへ</sup>ちやさかい、七匁<sup>もんめ</sup>ツツおくれんかいな。」

北「上方<sup>かみがた</sup>のおやまは直切<sup>ねき</sup>つて買<sup>か</sup>ふといふ事<sup>こと</sup>だ。半分<sup>はんぶん</sup>にまからねへか。」

彌「何がなし四百<sup>よひゃく</sup>ツツなら泊<sup>とま</sup>つて行<sup>い</sup>かう。それで出来<sup>でき</sup>ずば、御縁<sup>ごゆゑん</sup>がねへとあきらめやう

さ。」

女「よござります。おはいりなされ。」

北「それでいよの。ちやうどおやまさんも二人<sup>ふたり</sup>あらア」トこの内<sup>うち</sup>へあがると、女<sup>おんな</sup>が二階<sup>かい</sup>

へ案内<sup>あんない</sup>するに、屋根裏<sup>やねうら</sup>の低<sup>ひく</sup>き二階<sup>かい</sup>にて、彌次郎<sup>やじら</sup>頭<sup>あたま</sup>をこつつり。

「あいたしこ。」

初夜まへ—  
亥二刻(午  
後十一時)  
より子二刻  
(午前一時)  
までを初夜  
と云ふ、夜  
半以前





すつほかし  
—でたらめ

彌「ヤア、こよは三條ではござりやせぬか。ソレ見や、北八、さつきの女どもが飛んだ  
すつほかしを教へやアがつた。」

すまふ「貴様たちはどつから來たのぢや。」

「清水の方から。」

すまふ「ワハ、ハ、ハ、てつきり狐にがな抓れくさつたもんぢやあるぞい。えらい暇つひやしな。ほつておけ、ほつておけ。さりと阿房な奴らぢや」ト打笑ひて行過ぎる。彌次五條の橋に來り、いまくしい番くるはせな目にあうたと、小言いひながら橋向に渡り、そここよまごつく中、往來の賑かなるにうかれて、思はずも橋の袂を左の方へうかれゆくと、何かは知らず、兩側に掛行燈軒ごとに照し三味線の音にぎはしく、ぞめき唄に頬かぶりせし男どものちらつくに紛れて覗きあるく。この所は五條新地とて、すこしのながれを汲む遊所なり。家ごとにかどの戸をたてたるが、潜戸ばかりを開きて、門口にたちたる女のさよやかなる聲して、モシナくと彌次郎が袖をひくに、振返りて潜戸の内を見れば、店村のおやま並びるたりけるにぞ、

彌「ナント北八、こよはおやまやと見えるが、いつそのくされに今宵はこよに泊りはど



あんだら—  
馬鹿野郎

どたまにや  
して—頭を  
なぐつて

きやれ。」

往來の人「イヤ、こいつが粗雑そんざいなものぬかしやうぢや。こゝなあんだらめが。」

北「ナニ、あんだらたア何なんの事ことだ。道みちをきくから教をしへてやるのだけは。」

往來「イヤ、細言こまごせぬかすない。どたまにやしてこまそかい」ト此男このをとこのつれと見えたるが

二三にんた人立ちかゝるを見れば、いづれも見上みあぐる如ごとき大男おほをとこども、腰こしに長脇差ながわきざしをよこたへ、ものいひ格好かつかう、いかさまにも相撲すまふとりらしき者ものとも共なれば、北八きたやち忽たちまちしよけ返りて、

北「ハイ御免ごめんなせへ。」

彌「こいつは生酔なまろひだから、どなたも了簡れうけんしてくんなせへ。」

すまふとり「イヤ、了簡れうけんならんわい。おどられたちはどこぢやぞい。」

彌「イヤ、旅たびの者ものでござりやす。」

すまふ「旅たびの者ものなら宿やどがあらう。ソレぬかしくされ。」

彌「是これから此この三條でうに宿やどを取らうといふのでござりやす。」

すまふ「何なにぬかすぞい。此この三條でうにとは何なんのこつちやい。こちとらは今いま三條でうの編笠屋あみがさやから

出て來たものぢや。こゝは五條でうの橋はしぢやわい。」



か「トやがてかの女中のそばへ走り行きて、「モシ、ちとものがおたづね申したい。これから三條へはどうまるりやすね」ト聞くに、この女中御所方と見えて、とんだ横柄なり。

「わが身三條へゆきやるなら、この通をさがりやると、石垣といふ所へ出やるほどに、それを左へゆきやると、ツイ三條の橋ちやわいの」ト一體御所方の女中は、人を何とも思はず、ちときいた風の男と見るとわるく冷かす風のゑ、五條の橋を教ふる。

きいた風―  
生意氣  
おほふな―  
大風な

北「ハイ、これは有難うござりやす」ト何も知らねば禮をいつて暫く行過ぎて、「彌次さん、アリヤア何だらう、がうてきにおほふな女どもだ」

彌「とんだ安く取扱はれやアがつた。業さらしめ。ハ、ハ、ハ、トそれよりやがて、かの石垣といへるを打過ぎ左の方へ、教へられたる道筋を三條へ行くとこよろえ、早くも五條の橋にいたりし頃は、はや日暮れて、

往來の人「モシ、しる谷の方へは、どう参りますな」

北「ハア、わがみ、しる谷へ行きやるなら、この通をすぐに行きやると、ツイしる谷へ出やるほどに、ソレ轉んだら起きていきや。牛の糞をふんづけたら遠慮なしに拭いてい

いつきーぢ  
きに

じやうだん  
な―ふざけ  
た

彌「イヤ、わしは前かたは一時に小便の二斗や三斗する分は、ねから苦にも思はなんだものだが、どうした事やら、近年は小便つまりでさつぱり出ぬには困りはてる。」

こえとり「ハイ、小用つまりならえい事があるわいな。いつきにようなるこつちや。」  
彌「どうするとよくなるの。」

こえとり「アノ酒屋などで、酒の樽の香口から思ふやうに酒の出ん事があるもんぢやわいな。そないな時は樽の上の方へ、雖もみして穴あけると、ぢきに下からシウ〜と、酒が走るものぢやさかい、おまいの小用のつまらんしたのも、額口へ雖もみさんしたら、すぐに小用が通じるぢやあるぞいな。」

北「ハ、ハ、ハ、こいつは出来た。時に遅くなつた。サア行きやせう」ト二人引別れゆく向  
の方より、かつぎを着たる女が二三人づれ、さすが都女郎の風俗しなやかに、いづれ  
も色白く、すきとほるばかりの代物。北八腰をぬかして、

北「ヒヤア〜、いきな女がくる。きれい〜。」

彌「じやうだんな女どもだ。みんな着物をかぶつて来るは。」

北「あれが被といふものだの。アノウつくしいやつと、おれがものをいつて見せやう

中間「お心ざしはおかたじけなうござりますが、それではお氣の青様ぢやわいな。」

北「ハテいゝはな。どうせわつちも有合せたもんだから、あまり輕少なれど。」

中間「さよなら、お小便いたときませうかいな」ト小便たごを北八の前へ持つて來りなほす。

北「イヤ、やつぱり夫におきなせへ。わつちがのは一二間づつ向へ走ります。」

こえとり「コリヤきよとい、きよとい。イヤおまいのは地ではないわい。とかく小便は關東がよござります。地のは薄うて直打がない。」

北「もちつと早いとまだ出たものを。わつちは生れついて小便近いから、不斷小便桶を首にかけて歩いた男さ。」

中間「そりやお羨しいこつちや。」

こえとり「さよなら、おまい此桶を首にかけてお出でんかいな。わしやどこまでもお供していいわいな。」

北「イヤ、近頃はそのやうにもねへのさ。」

こえとり「お連様もあるさうぢや。モシ、おまいも序に手水してお出でんかいな。」

地—此土地  
即京都をさ  
す。地酒な  
どの地と同  
じ



あかんわい  
—つまらん  
の意

茶粥—京に  
ては前夜の  
茶を煮返し  
残飯などを  
入れて食す  
とてよく悪  
口にいふ、  
茶の煎汁を  
入れてたき  
たる粥

中間「うちどめに屁が出たから、もう小便はこれぎりぢやわいな。」

こえとり「コリヤあかんわい。ま一度よう骸をふつて見さんせ。」

中間「ハテ小便くすねて何にせうぞへ。有丈したんでのけたわいの。」

こえとり「それぢや大根三本はようやらんわいな。二本もていかんせ。」

中間「コレ 小便は少うてもこちとらのは代物がえいわい。よその茶粥ばかり喰つて

をるのとは違うで、こちや肉ばかりくてをるがな。」

こえとり「それぢやてよ、あんまりぢやわいな。」

中間「ハテ喧しういはんすな。内へもていんで水ませりや、三升ばかりにはなるぞいな。」

早う三本くさんせ、くさんせ。」

こえとり「そないにくせく」というたてよ、これでくさるもんぢやないわいな。そこら

へいて茶など飲んで来て、まちつとやらんせ、やらんせ」トやつつ返しついうてるを、

二人はをかしく見てゐたりしが、

北八「モシく、幸わつちが小便したくなつたから、無躰ながらおめへがたに上げやせ

う。これをたして大根三本とりなせへ。」

唐茄子が笛  
云々唐人  
が喇叭笛を  
吹きし見世  
物ありたり  
それをいひ  
しものか

「大根小便しよ、大根小便しよ。」

北「ハ、ハ、ハ、唐茄子が笛を吹いた見せものは見たが、大根の小便するのは、つひぞ見た

事がねへ。」

彌「あれが、かの大根と小便と取替にするのだらう。」

こえとり「おつきな大根と小便しよ、小便しよ。」ト呼んで行くこなたより、お中間らし

き、しみたれの男が二人、

「コリヤく、わしら二人がこよで小便してやるが、その大根三本おくさんかいな。」

こえとり「マア、こち來てして見さんせ。」ト此所の辻子へ二人をつれてゆく。辻子は江

戸でいふ新道なり、彌次郎北八これを見て、どうするのだ知らんと後よりついて行き、

立止り見れば、

こえとり「サアやらんせんかいな。」ト小便たご下し直すすと、

一人の男「アリヤ、わし先やるわい。」トこのたごの中へ二人ながら小便してしまふと、

肥取たごをかたけみて、

「もう是限で出んのかいな。」





又係板  
陶器師の巻

づくにうめ  
が―木菟の  
如く肥滿せ  
る入道、坊  
主の悪口

北「ハア、今の坊様はどけへ行つた。まだ中回向もすまぬうち。」

番僧「ナニ戯言をいふのぢや。爰をどこぢやと思つてぢやぞい。」

北「ハイ、こゝは清水、あつもりさんの墓所とけつかる。」

番僧「コリヤおのれ氣が間違つてをると見える。」

北「氣ちがひゆるゑに、此百萬遍。」

番僧「ナニぬかしくさるやら、とつとと出ていなんかい。こゝは御祈願所ぢやぞ。」ト聲

高にいふうち、勝手より坊主きて追拂ふに、二人ははうくこの坂をおり立つて、

北「づくにうめが、とんだめにあはした。」

舞臺から飛んだはなしは清水に、ひやかされたる身こそくやしき。

此山内を下り行くさきに、清水焼の陶造、軒をならべて往來の足をとどむ。此所の名

物なり。

天道のめぐみもあらんすゑもの師、大日やまのつちを製せば。

かくて其日もはや七ツ頃とおほしければ、急ぎ三條に宿をとらんと道を早め行く向より、

小便桶と大根を荷ひたる男、



下んせ。」

北「コリヤおもしろからう。彌次さん、おめへもこけへ掛けなせへ。サア〜なむあみだアんぶつ。」

僧「とてもものことに鉦いれてやろわいな」ト無上に鉦を打鳴らし、「ハア、なまいだア。チヤン〜。」

北「コリヤがうてきにおもしろくなつた。なまだア〜。」

僧「わしや手水して來るうち頼みます」ト北八に鉦をつきつけ、どこやらいてしまふ。北八夢中になり、

北「ハアなまだア。チヤン〜、チキチンチヤンチキチヤン。」

彌「手めへ、鉦の叩きやうが下手だ。こつちへよこせ。」

北「ナニ如才があるもんか。チヤン〜、なまだア〜、チヤン〜」ト夢中に叩きたて騒ぐ故、内陣の番僧出で來り、この體を見て肝を潰し、

番僧「コレナ〜、わごりよたちはどしたもんぢやぞい。勸化所にあがつて無作法な」トしかられて二人は心づき、きよろ〜して、

わごりよ一  
和御察、御  
前達の意

百萬遍—數  
人にて念佛  
をあまたた  
び唱ふる事  
もと北白河  
智音寺にて  
衆僧千八十  
個の大珠數  
をくりて百  
萬度念佛す  
る佛事より  
起る

僧「百萬遍をはじめたわいの。」

北「百萬遍はじめてどうした。」

僧「鉦をたよいて。」

北「鉦をたよいてどうしたね。」

僧「なむあみだんぶつ。」

北「それからどうだね。」

僧「なむあみだんぶつ。」

北「コレサ、百萬遍の後はどうしやした。」

僧「なむあみだんぶつ。」

北「そのあとは。」

僧「ハテせはしない。百萬遍ちやわいな。マア念佛すましてからのこといひの。」

北「エ、その念佛百萬遍すむまで待つてゐるのか、途方もねへ。」

僧「イヤこなさん、聞きかけた事は、根ほり葉ほり聞かんせにやならんといふたちやないか。まちと辛抱して聞かんせいな。退屈なりや、こなさんたちも百萬遍手傳うて

僧「飛んでおちたわいな。」

北「落ちてそれからどうしたね。」

僧「ハテ、根どひする童ぢや。此女中は罪障が深いさかい、佛の罰で目を廻したわいな。」

北「鼻は廻さなんだかね。」

僧「イヤ、瘡と見えて鼻はなかつたわいな。」

北「そして氣がつきやしたか。」

僧「氣がついていんだわいな。」

北「いんでどうしたね。」

僧「さてく、しつこい人ぢや。それきいて何さんすぞい。」

北「イヤ、わつちが癖として聞きかけた事は、金輪際聞いてしまはねば氣が済まぬとい

ふもんだから。」

僧「それならいうて聞かそかい。それからその女中が、全體其下地もあつたかして、俄

に氣が違つたわいの。」

北「ハテナ、氣が違つてどうしたね。」

金輪際—佛語、百六十万由旬の地底をいふ、底の底までもの意

傍かたはらの小高こたかき所に机つくえをひかへたる老僧らうそう、參詣さんげいを見かけて、

「當山たうざん觀世音くわんぜおんの御影みかげはこれから出ますぞ。誠まことに靈驗れいげんあらたなる事は、盲めくらがものいひ、啞だし

の耳みみがきこえ、歩あるいて來た躰みでりがなほる。一たび拜はいする輩ともがらは、いかなる無病むびやう達たつしや者なりとも、

たちまち西方さいほう極樂ごくらく淨土じやうどへすくひとらんとの御誓願ごせいげんぢや。どなたも頂いたすいてお歸かへりなされ、

冥加みやうが錢せんは澤山たくさんにお心こころもち次第しだい。御信心ごしんじんの方はござりませぬかな。」

北きた「よくしやべる坊主ぼうずめだ。時ときに彌次やじさん、かの噂うはさに聞きいた傘からかさをさして飛とぶといふは此この

舞臺みだいからだな。」

僧じやう「昔むかしから當寺たうじへ立願りふぐわんの方は、佛ほとけに誓ちかうて是これから下したへ飛とばれるが、怪我けがせんのが有難ありがたい

所ところぢやわいな。」

彌や「爰こゝから飛とんだら體からだが微塵みぢんになるだらう。」

北きた「をりくは飛とぶ人ひとがありやすかね。」

僧じやう「さよぢやわいな。えては氣きのふれた童達わらたちが來きて飛とびをるがな、此間このあひだも若い女中ぢよもぢやうが飛と

ばれたわいな。」

北きた「ハア、飛とんでどうしやした。」

えては—よ  
く

彌「ハ、ハ、ハ、なるほど上方者は氣が長い。あんなうすのろい喧嘩が、どこにあるもんだ。」

北「あの中で、損徳を考へてやめにしたから大笑だ。」

公家衆のいます都はおのづから、喧嘩やめるもうたとよみなり。

かくうち興じ早くも清水坂にいたるに、兩側の茶屋、軒ごとに煽きたつる田樂の團扇の音、喧すしきまで呼びたつる聲々、

「モシ、おはいりなされ。茶あがつてお出でんかいな。」

「名物なんば饅餡あがらんかいな。お休みなされ、お休みなされ。」

彌「何ぞ食つてもいよが、もつと先へ行つてからの事にしよ。」トほどなく清水寺にいたり、境内をめぐり音羽の瀧を見て、

名にしおふ音羽の瀧のあるゆゑか、のほりつめたる清玄のこひ。

本堂は十一面千手觀音なり。むかし沙門延鎮が夢中に得たる靈像にして、坂上田村丸の建立とぞ。北八彌次郎兵衛、しばし此寶前に休みなから、

境内にうゑし櫻はすき間なく、てもたくさんな千手くわんおん。

清玄の戀—  
櫻姫清玄の  
俗説に鯉の  
瀧上りをか  
けたり

うたとよみ  
—勘定づく  
にて得のあ  
る方をとる  
といふ所に  
用ふる言葉



やめにして  
こまさうか  
い—こま  
は上方の卑  
言、やめに  
してやらう

さかなや「オ、寄つたがどうすりや。」

しよく人「おのれ、今おれが事を阿房とぬかしをつたが、何でおれが阿房ぢやぞい。」

さかなや「阿房ぢやさかい阿房ぢやわい。」

しよく人「何ぬかしくさる。さういふわれが阿房ぢやわい。」

さかなや「イヤ、こちや阿房ぢやない。かしこぢやわい。」

しよく人「われがかしこなりや、おれもかしこいわい。」

さかなや「オ、われもかしこいカ、そしたらこの喧嘩やめにせうわい。」

しよく人「サア、ひよつと互にせりあうて、着物でも引きさいたら損ぢやさかい、やめ

にしてこまさうかい。」

さかなや「えらう遅なつた。もういんでこまそ。」

しよく人「おれは、われがいにくさる道ぢやほどに、つれだつていんでくりよわい。今

日はえい天氣ぢやあつたな。」

さかなや「暖うてえいわいわい」ト互に挨拶して、この二人連れだちて歸る。見物もこ

そこそと、ちりぐくに皆歸りければ、彌次郎北八腹をかよへて、

十兵衛「またんせ、今に打合ふぢやある。」

見物「イヤ、わしや内に客ほつておいて来たさかい。」

十兵衛「そしたら其お客つれてごんせ。序にうすべりなと一枚くさんせんかい。」

又「こちらの方にゐる見物、軒の下につくばひ、ひけをぬきく、

見物「見なされ、あつちやの童かどうしても偉い奴ぢやわいな。」

見物「イヤ、こつちやの男もえらい願ぢやわいな。」

見物「ホンニ、その願で思ひ出した。お家はどうぢやいな。痛所はえいかな。」

見物「ハイ、おかたじけなうござります。とんとよいやうであつたが、昨日からえらう

わるなつて、ツイゆうべ死にましたわいな。」

見物「ソリヤおまい御愁傷ぢやある。御葬禮はいつぢやいな。」

見物「今出しますとこぢやあつたが、偉い喧嘩があると人が走るさかい、わしもツイい

て見て戻るほどに、それまで待てというておきましたわいの。」トおのく、氣の長いもの

ばかり、いうくと見物してゐると、かの職人の男

「コリヤ、ヤイ、まちつとこつちやへ寄りくされ。日向がなうなつて寒なつたさかい。」

お家—おか  
みさん

おきくされ  
—江戸詞の  
ばかをいへ  
に當る

かいいい—  
さうかいい  
いの略

さかなや「おきくされ。おのれ二十四にしちやえらう若い。嘘つきくさるな。」  
しよく人「何いふぞい、ほんまぢやわい。前厄でことし嗅めを死なしたわい。」  
さかなや「ソリヤえらい力落しあつたぢやある。えいきみさらしたな。」  
しよく人「イヤ、そればかりぢやない。乳のみくさる餓鬼めがあるさかい、えらい難儀な目にあうたわい。」

さかなや「そぢやあるわい。おりやわれに二つ上ぢやわい。」

しよく人「さうぬかしくさりやわれも若い。うちはどこぢやぞい。」

さかなや「一條猪熊通東入所ぢやわい。」

しよく人「かいいい、あこに盲目で目の見えん寸伯といふ針醫があるがな。」

さかなや「オ、針醫がありやどうすりや。」

しよく人「イヤ、こちらの一家ぢやさかい、おのれ通りくさるなら言傳してこまで。」

さかなや「いやぢやわい。何のわれが言傳、誰がいをぞい、えらい阿房めぢやな。」

見物の人欠伸しながら、

「十兵衛さんもう去のかい。」

るに、二人は押分けく、てこれを見れば、かの喧嘩の一人、肴屋とみえてそこに盤臺などおろしてあり。相手は職人ていのをとこ、いづれも屈竟のわかものなり。されど都は人の心も悠長にして、喧嘩とみゆれど、さのみ頭から叩きあひもせず、日常のよき處に二人むかひあはせて、

さかなや「コレイノ、わが身の方から行當りくさつて、そないな事いふもんぢやないわい。おのれ、天窓打いてこまそかい。」

こなんーこ  
なさん

あひて、しよく人「おきくされ。こなんが手の動くのに、こちやぢつとしてるやせんわい」  
トいひつよ手拭を丁寧に折りて鉢巻をする。

さかなや「よう願ならすわろぢやな。一體わりやどこのもんぢやい。」

しよく人「おれかい、おりや堀川姉が小路さがる所ぢやわい。」

わりやーわ  
れにて今の  
お前にあたる

さかなや「名は何といふぞい。」

しよく人「喜兵衛といふわい。」

さかなや「年はいくつぢや。」

しよく人「二十四ぢやわい。」

三十三間堂  
—後白河天  
皇の勅願に  
て創建、長  
さ六十六間  
蓮華王院と  
いふ、中に  
一千一體の  
佛像を安置  
す

ら骨が今にぴり／＼する。」

傘さして出るお鼻よりはしらなる、あなおそろしや身をすほめても、

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、蓮花王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見ん、三十三間堂のながさを。

これよりこの御門前を北へさして行くに、往來殊に賑しく、けにも都の風俗は、男女と

もにどことなく柔和温順にして、馬士、歩荷持までも、洗濯布子の粘こはきを、をりめ

高に着なして、あのおしやんすことわいなと、なまめきたるもをかしく、ふたりは興に

乗じ、目に見るものごとに珍しくたどり行くうち、俄に往來騒立ちて、老若打まじり走

りゆく人ごとに、

「ホウホ、よい／＼、えつこらさつさ、ホウホ、よい／＼、えつこらさつさ。」

「むしやう人がかけるは何だ。イヤ向に何かあるさうで凄じい人だ。モシ／＼、何で

ございやすね。」

向より来る人「あこにえらい喧嘩があるわいの。」

北「京の喧嘩、珍しからう」ト足早に行き見て見るに、見物山の如く、往來もならぬ位な



こだはつて  
—つかへて

彌「エ、いめへましい事をいふ。むだ所ぢやアねへ。北八、早くどうぞしてくれぬか。北「まちなよ。ハ、アおめへ脇差の鐙が横腹へこだはつていてへのだ」ト手を差入れてひねくり廻し、やうく脇差をぬいてとる。

彌「いかさま、これでどうか寛ぎがあるやうだ。」

北「ドレく、イヤ、時にどなたぞ前の方から押出して下さいませ。わしが足を持つて

こつちへ引出しますから。ヤアえんさア、ヤアえんさア。」

さんけい「ソレ出るわいの、まぢつとぢや、いけません。」

彌「ア、ウ、ハ、ハ。」

北「ハ、ハ、ハ、出る奴がいけむから大笑だ。」

彌「ア、いてへく。」

北「しめたぞ。えんやア、えんやア、ソリヤ出たぞく」トやうくの事にて引出せば

彌次郎は大汗をふきく、ほつと溜息つきながら、

「ヤレく、ありがてへ。コリヤどなたも御苦勞でござい申した。わつちや伊勢の泊で産をしやしたが、産むよりか生れる身はよつほどせつねへ。コレ、着物が擦切れてあば



京

大佛

堂

乃



戸詞にては  
借りて、上  
方詞にては  
借つて

土砂—弘法  
大師が加持  
土砂を死體  
にふりかく  
れば硬直を  
和ぐ

わいの。」

北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命があるめへ。」

さんけい「されば、そこはどうも請合れんわいの。」トこのうち田舎道者、

一人「コリヤハア氣の毒なこんだアのし。わしはハア遠國のもんだアから、何にも知り申さねへが、人の難儀さつせるこんだア、愚意のういつて見ますべいか。」

北「どうぞあの人の助かる事があるなら、いつて聞かしてくんせへ。」

だうしや「ハアそれだアからのこんだアよ。あんでもあのふとの足の先さを切割らつせへて、山椒粒のう挾まつせへたら、ふとりでにつん抜けべいのし。」

北「ハ、ハ、そりや蛇が女に見こんだ時のことだらう。どうせそんな事であらうと思つた。」

さんけい「コリヤわしが智惠借そわいの。何ぢやろとあのさんの體を和かにして、引出すがよかろさかい、かうさんせ、土砂とて来てかけさんせいの。」

ぬなかも「すんだら土砂のウぶつかけずと、一ばんの桶さア買つてきなさろ。手足をちとべしをん曲けたらはいのし。」

へ。コリヤいよ算段がある。」

そばに見てゐたりし、參詣の人を頼みて、

北「モシ、どうぞこつちらから、おめへ引張つて下さいませ。わしがあつちへ廻つて、足を引きずり出しますから。」

彌「ばかアいふな。兩方から引張つては出る瀬がねへ。」

北「出るせがなくても、兩方から引張ると、前へ廻つたり後へ廻つたりする世話がなく  
ていよはな。」

あの人  
あの方  
さんけいの人「イヤ、兩方からあの方の骸を引延したら、ツイ出られさうなもんぢや  
あろぞい。」

北「コリヤいよことがある。酔を一升も買つて来て、彌次さん、おめへに呑ませやう。」  
彌「なぜ、酔を呑むとどうする。」

北「ハテ、酔をのむと瘦せるといふことだから。」

さんけいの人「ハ、ハ、ハ、そないな事いうたてよ、いんまの間に合ふこつちやないさか  
い、かうさんせ、どこぞへいて樋借つて來さんして、頭を後の方へ打込まんしたがよい

借つて一江



彌「あとの方ほうから足あしを引ひいてくれろ。」

北「承知しょうち々々」トうしろへまはり、兩りやうの足あしをとらへ、「ヤアえんさア、ヤアえんさア。」

彌「あいたく。」

北「ちつと堪こらへなせへ。よつほど出でかけたやうだ。ヤアえんさア、ヤアえんさア。」

彌「ア、待つてくれ待つてくれ。腰骨こしほねが折をれるやうだ。コリヤやつぱり前まへの方ほうから引ひきだしてくれ」トいふゆゑ、北八きた又前またまへへ廻まはり、兩手りやうてを捕とらへて引ひく。

北「ヤアえんさア。ヤアえんさア、ソレ又またこつちへよつほど出でて來きた。」

彌「コリヤたまらぬ。アイタ、ゝゝ。北八きたこれではいかぬ。初手しよてのやうに、又またあとへ引ひきもどしてくれ。」

北「エ、いろくなことをいふ」ト又後またうしろから足あしをとらへ、「ヤアえんさア、ヤアえんさア。」

彌「まてくく。コリヤどうでも前まへの方ほうから引ひいてもらはう。」

北「エ、そんなに前まへへ廻まはつたり後うしろへ廻まはつたり引ひきだしては引戻ひきもどし、いつまでも果はてしがね

北「オヤ、アレみんなが柱の穴をくどつてゐるは。」

彌「ほんに、こいつは奇妙々々」ト此御堂の柱のもとには、丁度人のくどるだけ切抜きし穴あり。田舎道者ども戯にこれをくどりぬける。北八同じくくどり、

「コリヤおもしろい。併しおいらはくどれるが、彌次さんは太つてゐるから抜けられぬへ。」

彌「おれだとしてナニこれが」ト北八を引きのけ四ツ這になつて、柱の穴へからだ半分ほど入れかけて、一向にぬけられず。あとへ戻らうとするに脇差の鐙が横腹につかへて痛みこらへ切れず。彌次郎顔を眞赤になし、「アイタ、コリヤひよんな事をした。」

ひよんな事  
飛んだ事

北「オヤどうした。ぬけられぬへか。」

彌「コレ、手をひッぱつてくりや。」

北「ハ、ハ、こいつはをかしい」ト彌次郎の両手をぐつとひつばる、

彌「アイタ、ハ、ハ。」

北「よわい男だ、ちつと辛抱すればいよ。」

# 七編 卷之下

大佛殿—天  
正十四年豐  
太閣の建立  
せるもの

大佛殿方廣寺、本尊は盧舍那佛の座像、御丈六丈三尺、堂は西向にして東西廿七間、南北は四十五間あり。彌次郎北八こよに法施し奉りて、

彌「ナント話に聞いたよりか、がうせいなもんぢやアねへか、アノかうしてござるお手のひらへ覺か八覺しけるさうだ。」

北「狸の金玉と同じことだな。」

彌「もつてへねへ事をいふもんだ。アノお鼻の穴から人が傘をさして出らるよと。」  
北「ソリヤアまだしも、人がさして出るからいゝが、おらが方のほうだら八が鼻の穴か

らは、瘡がひとりでにふき出したは。」

彌「ばかアいふな。お後へ廻つて見やう。オヤお脊中に窓があいてるらア。」

北「あれは大方汐を吹くところだらう。」

彌「鯨ぢやアあるめへし。」

かく詠<sup>よ</sup>みて山門<sup>さんもん</sup>のうちに<sup>い</sup>入り、やがて御堂<sup>みだう</sup>にのほりける。

いな。」

北「エ、コリヤなさけない事をいふ。こいつはもう飲めぬ。」

彌「おらアつい飲んでしまつた、いめへましい。サア行かう。」

北「婆さんいくらだ。」

ばら「ハイ、六文ヅツくだんせ。」

北「水洩はおまけだの。アイおせわ。ペツく」トこよをたち出で振返りながら、

くりごとに涙をませて水ばなも、すよりこんだるうばが醜。

かくて二人は、足にまかせて辿り行くほどに、だんく都近くなりて、往來ことに賑し

く、人の風俗も自然と温順にして、しかも衣装は花やぎたる女のよそほひに、うつよぬ

かして見とれ行くうち、早くも大佛前にいたりて、

北「オヤく、がうせへなお寺だ。アレ山門の上から佛さまが覗いてる。」

彌「ハア、これがかの大佛だはへ。なるほど話にきいたよりは、がうてきなものだ。そ

してこの石を見や。えらいく。」

大佛の御堂は雲に入るとてや、これはおほきなもよの天上。

石一石座を  
いふならん  
高八尺基周  
卅九丈五尺



―調子はづ  
れの下卑た  
る太き聲

みつちや―  
江戸詞のあ  
ばた(痘痕)

に同じ

いつかい―  
大きい

つて、色いろが黒くろうて、鼻はなは獅子鼻ししはなとやらで、目めのいつかい所ところまでが、其そのまよぢやわいな、  
其そのまよぢやわいな。」

彌や「それぢやア、わつちが顔かほの悪い所わるどころばかりがよく似たの。」

北きた「わる所ところばかりも氣きがつえよ。いよ所ところは一つもねへもせんものを。」

ば「そればかりぢやないわいの。アノ片かた小鬚こひげのはけさんした所ところまでが、あないにも似に  
るものかいな。」

彌や「人の顔かほの店たなおろしが濟すんだら、その醜みにくさを早くくんな。」

ば「ほんに忘わすれたわいな」ト茶碗ちawan二つに醜みにくさを汲くんでさし出す。二人ふたりながらこれを飲の  
んで、

北きた「がうぎに薄うすい醜みにくさだ。」

ば「薄うすうもなりましたぢやある。わしや悲かなしうて、ツイ涙なみだをその中なかへ落たしたわいな。」

彌や「エ、とんだことを、涙なみだばかりならまだしも、見みりやアおめへ水漬みづはを垂たしてゐるが、

それも此中このなかへおちやせんかね。」

ば「わしや見みなさる通とほり、三ツくちぢやさかい、漬ひな水みづと涎よだれを一つにその中なかへ落たしたわ

て、をかきな目つきをすらア。」

彌「ばかアいへ。婆さんどうだ。早くくんない。」

ば「「まちつと待つておくれんかいな」トいひつゝ此婆、彌次郎の顔を見ては泣き、見  
ては泣きする故、不思議におもひ、

彌「ばあさん、どうぞしたか。おめへ目がわるいのかね。」

ば「「わしやお前の顔を見て、いかう悲しうてならんわいな。」

彌「ソリヤどうして。」

ば「「ワア、イ、く。」」

北「こいつはをかしい。婆さん何が悲しい。」

ば「「わしが此あひだ一人の息子を失うたが、その息子にアノお方が似たところそいへ、  
似たところそいへ。」

彌「ハアおいらに似たとかへ。それぢやおめへの息子もいゝ男であつたらう。惜しい事  
をした。」

ば「「ソレ、そのどうまん聲のものいひから、お前のやうに、やつと荒いみつちやがあ

どうまん聲

いやいな  
朝比奈にか  
けたり

藤の森—藤  
森神社あり  
祭神不詳或  
はいふ稻荷  
大明神なり  
と、有名な  
る伏見藤尾  
の稻荷には  
あらず

北「いやいな三郎よし秀でもとまらんのだ、エ、はなしやアがれ。」  
女「オ、こは」トおつばなして内へはいる。  
北「ハ、ア、こよがあとで聞いた墨染だな。」

すみぞめのおやまのかほの眞白さは、石灰藏のねすみごろもか。

深草の里は、家毎に焼物、土細工を商ふ見ゆれば、

やきものの牛の細工に買ふ人も、よだれたらして見とれこそすれ。

かくて藤の森にいたりけるに、

稻荷山松のふぐりにかよれるは、ふどしのさがり藤のもりかな。

こよに稻荷の社を伏し拜みつよ、

北「ナント、そこらで一ツぶくやらうぢやアねへか。」

彌「よからう、よからう」ト葦簾かけたる茶店にはいりて、

彌「オヤ、醴があるの、婆さん一ツばいくんな。」

ば「ハイ、ぬくうしてあけよわいな。」

北「コウ彌次さん、こよの婆さんが、おめへに氣があると見えて、アレこつちばかり見

淀の車―淀  
の川瀬の水  
車、唄にも  
うたはれ有  
名なり、都  
名所圖會に  
淀の城郭の  
汀には水車  
あり云々

彌「まよよどうするもんだ。金は胴巻に入れて持つてゐるから、たゞ包は手めへとおれが着替ばかりだ。うつちやつてしまへ。そこらは江戸つ子だは」ト惜しけれどもせん力なく、これから又船に乗つて、大阪へたづねに行くもばかくしいと、すぐに京へ行くつもりに相談きめて立出づれば、この人々もそれぐにこゝを立出でけるに、北八彌次郎きぬけした顔付にて、ぶらりくくと京街道にさしかより、

伏見出て淀の車がまたあとへ、まはりまはつて來たは何事。

それより伏見の町を打過ぎ、墨染といへる所にさしかよりけるが、爰はすこしの遊所ありて、軒毎に長簾かけ渡したる内より、顔のみ雪の如く白く、青梅の布子に黒天鷲絨の半襟まで、お白粉べたくつけたる女走り出でて、彌次郎が袖をとらへ、

女「もしな、はいりなされ。ちよと遊びんかいな。」

彌「なんだ、よせへく」ト振切れば、又北八をとらへ、

女「おまいさん、どうぢやいな。」

北「かうぢやいな」トべかこうする、

女「オ、すかんこぢやいな。」

まゝの皮—  
どうでもよ  
いとの意、  
まゝの革財

布なども  
いふ

おさか—大  
阪をつめて  
いふ

北「ホンニさやうでござりやせう、わつちも船に乗つた時は暗がりではあるし、取違へたことは知らず、どうやら居どころも違つたやうでございやしたが、乗合のことだから、まよの皮とそれなりに草臥まぎれに、ツイ寢てしまひやして、今朝こゝへ來て見りや、乗合の衆のうちに見知つた顔がひとつもねへは、不思議な事だといつてゐやしたのさ。」

彌「さういへばなるほど、今のさき船のあがり場で、ハテ見たやうな所だと思ひやしたが、見た筈だ、やつぱり初手の伏見だもの、ハ、ハ、ハ、必竟それゆゑ、お前方の包をわつちらがのだと思つて、粗相いたしやした。」

北「これでものがさつぱり分つた。」

彌「イヤ分ることア分つたが、おいらが包はどうしたらう。」

太「それも分つてあるわいな。おまい方の乗らした下り船に包ばかり残つて、今頃は

おさかの八軒家に、風呂敷包がうろくと、おまい方を尋ねてゐよぞいな。」

人々「ハ、ハ、ハ、」

北「とんだ目にあつた。いめへましい。」



てきら―彼等、匹偶を仇と云ふに義同じ云云、又轉じて彼といふ事を敵といふ(俚言集覽)

彌「さればかうと、此間ソレどこでか泊つた時、甲子だといつたぢやアねへか。」

北「ソレく、あの茶飯はうまかつた。」

彌「ひらの牛蒡の大きさ、あいつは珍しい。」

みなく、「ワハ、ハ、コリヤどうでも、てきらは本氣ぢやないわい。ワハ、ハ、ハ、」ト腹筋をよつて大笑する。この中でも年ばへの太郎兵衛、暫く考へて、

太「ハ、ア聞えた事があるわいの。なるほど餘りかしこうも見えん童たちぢやさかい、人のもの手盗へるほどの働きはありやせんわい。コリヤかうぢや。コレそこな童たち、ゆうべ伏見から乗らんして、途中で船のかよつた時、用たしにがな堤へでも上らんした事があるがな。」

彌「さやうでござりやす。」

太「ソレ見やんせ。こつどらに乗つた船にも、あの時上りをつた人が大分ありをつたが、やがて船が出るといふと皆うろたへて乗りをつた、其時こなたたちは下り船と上り船を取違へて、めんくの乗つて來た船と心得、こちの船に乗らんしたものでがなあるぞい。」

あんだらつ  
くせー馬鹿  
をいへ

彌「ホンニ、コリヤ間違つた。ソレ戻すぞ。おいらがのはどこにある。」

權「あんだらつくせ。ナニおどれらが包を誰が知るぞい。」

彌「こいつは詰らねへ。北八どうした。」

北「おめへ、おれがのも取つて一所に包んで、側においたぢやアねへか。どうしておら  
が知るものだ。」

彌「ハテめいような。モシ、いよくこよは伏見に違ねへかね。」

みなく「ハ、ハ、ハ、何ぬかしくさるやら。アノ顔見やんせ、けたいな顔ぢやな。」

北「イヤ、こいつらはふてへ奴らだ。」

みなく「太いも細いもいるこつちやないわい。たかでおどれら奸盗ぢや。包に別條な  
いさかい許してこます。とつとよ出ていにくされ。」

彌「コリヤア飛んだ目にあふが、さつぱり分らぬ。北八どうしたのだらう。」

北「されば、わつちも分らぬ。ぜんてへ昨夜は何日だつけ。」

彌「ム、かうと、ゆうへ、あの時分に月が出たから、大かた廿四五日あたりだ。」

北「今月は大きか。昨日は何の日だねへ。」





太「何いはんすやら、桃山の狐になつたまゝれたもんぢやあるぞい。皆こち退いてるやんせ。」

つがもれへ  
—有名なる  
江戸詞、わ  
げもないと  
いふ事、つ  
きなしの轉  
訛  
詮索  
せいらく—  
「何ぢやい、何ぢやい。何せりあうてぢや。そんな事より、こちやどえらい目に合うたわいの。こちとらが包を船で失うたさかい、いんま先までそのせいらくしてをつたが、根から葉から知れんわいの」トいふうち、一人が彌次郎の傍にある包を見つけ、

「イヤ權介さん、あこにあるわいの、そぢやさかい私がいふまいことか、先へ上つた衆を問うて見やんせといふたぢやないかい。」

權「ホンニこれぢやわいな」ト取りにかよれば、彌次郎ちやつと控へて、  
彌「コリヤ何ひろぐ。此包はおいらがのだけは。」

權「ナニぬかしくさる。おどれら、やばなこと働きくさるな。コリヤ見い。風呂敷の端にこちの名が書いてあるわい」トいはれて彌次郎びつくりし、よくくみれば自分の包でなし。肝を潰して、



太「ハ、ハ、ハ、さういうてもくれんがよい。ハ、ハ、ハ、」

此話を聞いて彌次不思議さうに、

彌「モシ、あなた方が今いひなさつた虎屋といふは、たしか大阪ではございやすね。」

六「さよぢやわいの。」

彌「その虎屋の饅頭忘れたとおつしやつた河六とやらは、どこでございやす。」

六「コリヤ日本橋北詰、東へ行くところぢやわいの。」

彌「その日本橋北詰、東へ行く所迄は爰からいくら程ございやすね。」

六「ことからは十里ぢやわいの。」

彌「はてなア、大阪は思ひの外廣い所だノウ北八。」

北「ナニサ、いと加減に聞いてゐなせへ。わつちらを冷かすのだはな。爰から十里あつ

てたまるものか。途方もねへ。」

太「イヤ、おまいはことをどこぢやと思つてぢや。ことは伏見の京橋ぢやがな。」

彌「ナニ伏見だ。コリヤ北八がいふ通、貴様たちやア人をばからかすな。おいらアゆう

べ伏見から船に乗つて來たのだはな。」

長町—大阪  
にて旅人宿  
の多き所

新町—遊廓

あこ—彼處

女「ハイく」トたきたての飯に八はい豆腐の平をつけて持つて来る。これは伏見の船宿のおさだまり也。此兩人初めてなれば、こんな事は知らず、もとより大阪へ着いたとばかり心得、平氣にて、

彌「けふは斯ういたそ。是から長町の分銅河内屋とやらいふ宿屋へ行つて、あれも大和の初瀬の茶屋でよこした書付の所だから、あそこへ泊つてすぐに芝居でも見やうぢやアねへか。」

北「おいらアまた新町とやらを早く見てへ。」

彌「オ、それも満更でねへの。ア、アツ、アツ、アツ、がうてきにあついで汁だ。ベツくべツ。」

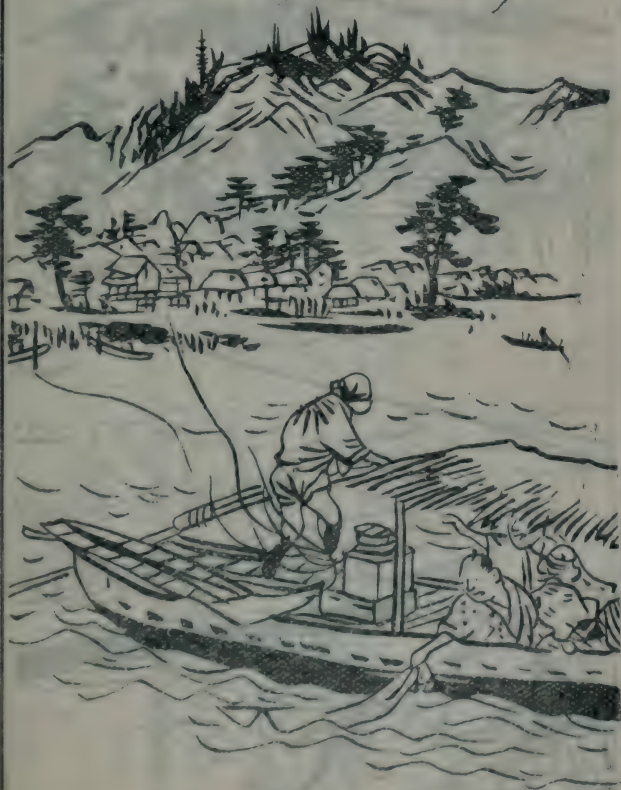
此傍にも船あがりの四人づれ、同じく支度しながら、

「太兵衛さん、おまい虎屋の饅頭はどうしたぞいの。」

太「六兵衛さん、聞かんせ。けたいなこつちや。昨日わざくあこへいて買うて来て、とんと河六に忘れたわいの。」

つれ「ついで一ト走りいてとてごんせ。茲からわづか十里ほかないもせんもの。」

因  
下  
新  
乃  
号



陸川の  
之  
登り  
舟  
の  
景



彌次郎北八も暗がりまぎれ、そこら探り廻して、手ざはりよく似たればとて、人の風呂敷包をわが包と心得、引寄せてすぐにそれを枕として打臥し、それよりは前後もしらず高躰なり。さるほどに船は右に棹さし、左に綱引きのほるに、早くも八幡山崎を後になし、淀堤を打過ぎ夜も明近くなりたる頃、伏見にこそは着きたりける。苦もる影も白く、烏の聲告けわたるに、船着きたりと乗合みななく、目を覺まし立騒けば、北八彌次郎苦打ひらきて、笠風呂敷包を手に引提げ、船頭があゆみ板わたすを打渡りて岸に上り船宿にいたるに、乗合の人々つゞいて爰に來るを見れば、見知りたる顔一人もなし。是は不思議と、そこらうろく見廻しながら、

彌「ナント北八、おいらに酒を飲ませた隠居どのはどうしたの。」

北「さればの、そしてアノ長崎者や越後道者どもは來さうなものだが、大方爰へよらずに行つたと見える。おいらはゆるりと爰で支度して出かけやうさ」トもとの伏見に着きたること一向に氣が付かず。

船宿の女「どなたもお支度あきよかいな。」

彌「オイ、爰へ二ぜん頼みます。」



一刻を千金  
—東坡の詩  
に、春宵一  
刻値千金

三十石—淀  
川の船は積  
荷三十石な  
り

て、  
彌「ナントいよ景色だ。どこらでやらかさう。」

北「オットそこには水溜がある。もつとそちらへ。ア、なるほどいよ月だ。」

一刻を千金ツツの相場なら、三十石のよど川の月。

かく口ずさみて、思はず勝景に見とれるたるが、このうち岸にかよりるたりし船も、追々こぎ出す様子に、北八彌次郎が乗つたる船も今出ると見えて、船頭ども、もやひ綱を解き棹さしのべて、二人を呼びたつるに、いづれの船にも乗合の内、土手に上りたるものども一時におりたち混雑し、彌次郎北八やう／＼のことに人を押分け、飛乗りたるは大坂八軒家の上り船なり。此二人、あまり船頭によびたてられて大きにうろたへ、今まで乗りて来りし伏見の船と心得、その次に並びてかよりるたりし大坂の上り船にとびのりたるが、苦の内暗く、間違ひたる船とも心付かず、ことさら此船にも乗合のうち、堤に上りたる者も二三人あれば、それらかと思ひて船中にも互に顔も形も知れざれば、これをとがむる者もなく、その中船は出るにまかせ、おの／＼宵より話しつかれたるにや、押合ひへし合ひ、互に足をやりちがひとなし臥したりける。

あまり過ぎたるとおほしき頃、漸く雨やみ雲きれて、月の影八幡山にさし出でたるに、船中おのく勇みたち、彌次郎北八も苦ひきあけ顔さし出して、この景色ながめるたるが、

彌「ハアもう何時だらうな。時に北八、又困つたことがあるわい。雪隠へ行きたくなくなつた。」

北「エ、汚ねへ事ばかりいふ。」

彌「どうも船ではできぬ。イヤ幸こよにかよつてゐるうち、ちよつくり土手をへあがつてやらかして來やう。」

北「ホンニ、よその船でも人が手水にあがる様子だ。早くさうしなせへ。イヤわつちもお相伴がしたくなつた。モシ船頭さん、ちよつと上つて來たいがいよかねへ。」

船「用たしになら早ういてごんせ。わしらが今飯くしてしまふと、いつきに船を出ささかい。」

彌「草鞋はどこだ。」

北「ナニサ跣足であがらう。乗る時足をすよけばいよにト兩人船より堤にあがり

彌「イヤ、こいつらアいはせて置きやア途方もねへ奴らだ。横つつらア張り飛ばすぞ。」  
のり「コレく、おまい腹たてさんすな。アリヤ、こよのあきなひ舟は、あないに物を  
ぞんざいにいふのが名物ぢやわいの。」

彌「それだとしてあんまりな。」

商「ワアイ、あほよく」ト潜ぎだしてゆく。

彌「コリヤ待ちやがれ。阿房たア誰がこつた」トひとり力んで、思はず立上がる拍子に、  
乗合の膝をふんで、どつさりこける。

越後の人「アイタ、、、、コリヤわしが膝頭ふんだ。」

長「うんどもが、頬、大分うつた。アイタ、、、。」

彌「コリヤ御免なせへ」トやうくに坐る。かくて船はひらかた過ぎたる頃、雨催の  
空俄に暗くなり降り出し、あはやと見るまに篠をつく大雨となり苦を漏れば、乗合は  
上を下へと騒ぎたち、船頭もかくては、はたらき自由ならず。やがて堤に船を潜  
ぎよせ、暫くかゝりて見合せけるが、こよは伏見と大阪の半途にして、上り船も下り船  
もみな落合ひ混雑し、がたびしと岸によりて今やと霽を待ちたるに、およそ一時

かゝりて一  
碇泊して

もむない—  
味無し

ちうつるば  
つてん云々  
—何にもせ  
よそんな言  
方があるか  
げんさい—  
私娼をいふ  
人の妻を罵  
る詞  
蒲鉾—蒲鉾  
小屋、乞食

彌「イヤこのべらほうめ、何をふざきやアがる。」

のり「この汁は、もむない代りに根からぬるうていかんわい。」

商「ぬるかア水まはして食ひをれ。」

のり「何ぬかすぞい。そして此芋も牛蒡も腐つてけつかる。」

商「その筈ぢや。えい所は皆内で煮いてくてもしまふわい。」

長崎の人「イヤこやつ、大膽なやつよヲ。いかなちうつるばつてん、そのぬかしやうば

い。」

みち「天窓打してやつてくれべいか。」

商「ちよございぬかさすと、早う錢おこせいやい。コレ、そこな親父錢どうぢやい。」

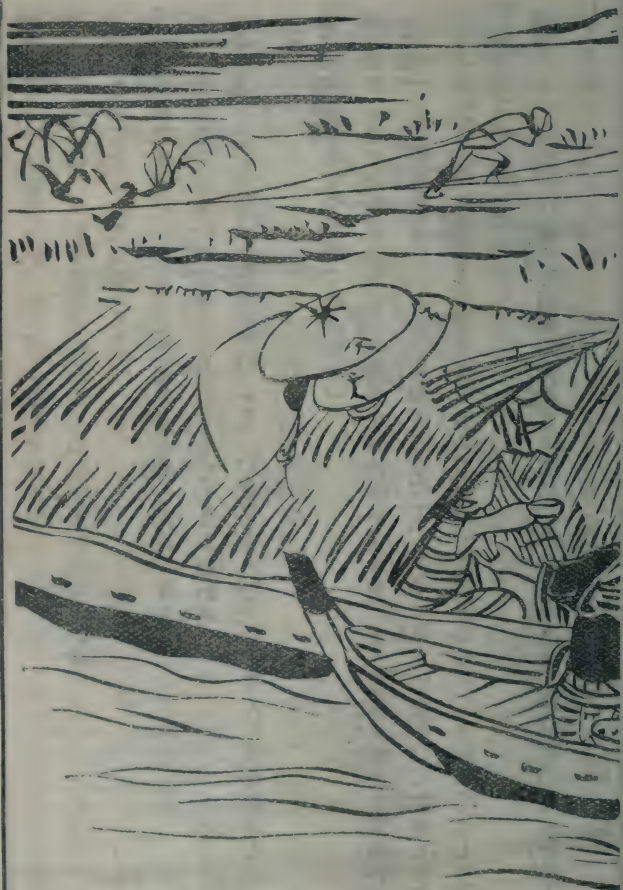
おやぢ「この奸盗めらは、たつた今取りくさつて、コリヤ早ういねやい、定めしおどれ

がけんさいは、晝は袖乞して生米がな食ふさかい、今頃はふつくと腹ふくらして、白

い泡ふいてるよぞい。」

商「オ、われが内は大方四條の蒲鉾ぢやある。雨が降りさうぢや。水の出ん先早うい

にくされ。」







ひらかた―  
河内茨田郡  
牧方、淀川  
の東岸  
ふさる―寢  
る  
がさつ―ぞ  
んざい  
うせい―來  
れ

北「ハ、ハ、あの病人の顔を見な。瘡と見えて頭から首筋のあたりまで、じくじく」  
彌「エ、ハ、もういつてくれるな。咽がさけるやうだ。エ、苦しい。ゲエイ〜」  
北「とかくおめへは小便がたよる。船ではもう禁便にするがよい。そこで一首うかんだが、どうだ〜」

せうべんを人にのませたそのむくい、おのれも呑んでよいきびしよなり。

此騒動に船中おの〜眠を覺まし大笑となるうち、船はひらかたといへる所近くなりたると見え、商船こよに漕寄せ〜、

商人「飯くらはんかい。酒のまんかい。サア〜みな起きくされ。ようふさる奴らぢやな」ト此船につけて、遠慮なく苦ひきひろけわめき立つる。この商船は、ものいひがさつにいふを名物とすること、人のよく知る所なり。賣言葉に買言葉なれば、  
のり合「コリヤ飯持てうせい。えい酒があるかい」

北「いかさま腹がへつた。爰へも飯を頼みます」

商人「われも飯食ふか。ソレ食へ、そつちやの童はどうぢやい。やい、ひもじさうな顔してけつかるが、錢がないか」

取次ぎて、

彌「サア 隠居様あけませう。」

いん「イヤ お前一つ飲んでおこさんせ。」

彌「ハイくさやうなら、モシ、その尿瓶こちらへ。」

病人の所のおやち「ハイくそれへ」ト尿瓶を送りもどすと、北八取つて彌次郎兵衛八なみなみと注いでやる。彌次郎一息にぐつと飲んで、茶碗をなげだし。

彌「エ、こりや飛んだこつた。ゲエイく。」

北「彌次さん、どうした。」

彌「どうした所か、コリヤ酒ちやアねへ。小便だく。」

おやち「ハ、ア これはしたり粗相しました。わしがとこの御病人の尿瓶と取違へました。サアく酒のはことにある。ソレとりかへて下んせ。」

北「ハ、く、こいつ大できく。」

彌「エ、もう どうしたらよからう。此位なら、おれが小便を飲むはまだしら、アノ病人めが、エ、悪臭い。ゲエイく、ベツくく。」

ふとつーひ  
とつ、一杯

こなんーこ  
なさんの略  
あなた

ふ「ヤレふとつ、いたどくべいとこと」ト茶碗をとる。北八尿瓶から注ぎにかゝる。「ソ  
リヤ小便のするやきたごぢやアござらないか」

北「ナニ、この尿瓶は新しいから綺麗さ」トついでやれば、ぐつと干して、

ふ「ア、えいことんく、サア長崎の兄貴さ、やらつしやるか」ト茶碗を廻せば、長崎  
の人うけて、

長「ナイ、コリヤ氣のとんくうなことはよチ」

いん「だんくそつちやのお方へ上げてくだんせ」

長「しからばあんたへさんじますたい」トその次の人へさす。是は病人と見えて、色の

青ざめたる垢だらけの男、襟に眞綿をまきて、蒲團によりかよつて、尤も四人前ばかり

借切にして、介抱のおやぢと二人連にてゐるが、

病人「わしや酒はいかんさかい こなん一ついたどかんせ」ト供のおやぢにゆづる。先

刻より尿瓶の綺麗なる事もきよるたる事なれば、一向構はず、

「モシく、憚ながらその尿瓶こつちやへ下んせ。手酌にやりましょかい」ト此おやぢ

酒すきと見えて續けて二杯やらかし、だんく茶碗をもとへ送りかへせば、彌次郎兵衛

彌 そんなら、モシ御隠居様、やつぱり今のきびしよとやらになさいませ。」

いん「きびしよは川へほつたわいの。尿瓶の方が新しいさかい、綺麗ぢやわいの」ト樽の酒を尿瓶にあけて、火鉢の上にかける。「長松、そこな茶碗おこせ。サア、くほんまの酒ぢや、ソレおまい方差そかい」ト茶碗を差しいだす。彌次郎ちやつと引きとり

彌「いたゞきやせう。」

いん「虫のえいお人ぢや。肴あぎよかい。煎売あがるかいな。」

彌「ハイ、これは何でござりやす。」

いん「ソリヤ鯨の油とつた後の身ぢやさかい。煎売といふわいな。」

彌「いゝものでございやす。サア北八差さうか」ト北八へ茶碗をまはし、尿瓶を取りて注ぐ。新しき尿瓶ときよて、なるほど大事もあるまいと、一ぱい引受けてぐつと飲んでしまひ、「小便のまさらぬ酒は、また格別だ。ハイあけやせうか。」

いん「みな乗合のお衆へ一つよ上げてくだんせ。」

北「さよならお隣の」ト次にゐる越後の人にさす。



いん「長松よ、脊中たよいてたも。ア、むさや。ゲエイ〜」トこのうち、隠居はやう  
くに吐いてしまひ 川の水にうがひし口をあらひて、「どうちや、そつちやのお方はえ  
いかいの。」

北「どうやらかうやら能くなりやした」ト口をそよぎて眞面目な顔。彌次郎は心の中に  
をかしさ隠してゐる 隠居結構人と見えて格別腹もたてず、

いん「イヤモウ お互にどえらい目にあうたこつちや。口直しに後の酒やりたいが、爛  
をする物がなうなつた。どうせうぞいの。」

長まつ「そしたら、こつちやにあるほんまの尿瓶で、酒の爛いたしましよか  
い。」

いん「ホンニさうぢや。ほんまの尿瓶の方が綺麗ぢや。藤の森で今日買うて来たまよで、  
まだ一度も小用せんさかい、それで爛せうわい。」

北「滅相な、あやまりやすね。」  
彌「ばかアいふな。茶は土瓶の茶がうまし、酒の爛は尿瓶のことだ。」

北「ナニ 尿瓶の酒が飲めるものか。」

あやまりや  
すー閉口す  
る

よからう知らん。モシく、どなたぞ丸薬でも御所持なら、すこしく下さいましな。

のり合「ハイどうも小便の當つたによい薬は持ちませんわい。」

彌「ソリヤア困つたものだ。」

北「彌次さん、苦をちいと捲つてくんない。」

彌「どうする。」

北「小便を。」

彌「するののか。」

北「吐くのだけはな。」

彌「ドレ、船縁へぐつと顔を出してやらつし。おれが捕へてゐてやらう。ソレよしか、シイ引くくく。どうだまだか。エ、川の中だから犬がゐるねへでわりい。」

北「ナゼ、犬がゐるとどうする。」

彌「てめへ小便を吐くの、白コイくくくくと呼んでやるに。」

北「エ、ばかアつくす。ゲエイくく。」

聞えたーそれ  
でわかつた

いん「あがらんのかいな。」

北「ナニ浴る位さ。彌次さんなぜ飲まねへ。酒といふと一番に咽をぐいぐいするおめへが、コリヤ何でも變ちきだは。」

いん「ハ、ア聞えた事があるわいの。今そつちやのお方が、暗がりて尿瓶を間違へて、この中へ小用しこみやさんせんかいの、どうも小用臭いと思うたが、コリヤおまいさうぢやさかい、飲まんのぢやあろぞい。」

北「ソリヤ知れやせん。桑名のわたしでも、此人が船の中で小便して、大騒をやりまし  
た。そのくらへの粗相はしかねん人さ。エ、汚ねへ。ゲエイ〜。」

いん「道理こそ、きびしよに何か一ツばいあると思うたが、わしや又此童めが、水入れておきをつたと思つて川へほつたが、どうも小用のおどもりが残つてあつたものぢやあ  
ろぞい。」

北「飛んだこつた。胸がむかくくする。」

いん「ア、こりや、ゲエイ〜。」

彌「これはお氣の毒な。モシなんぞ薬でもあがりやし。しかし小便のあたつたには何が

けたいな  
あやしい、  
をかしな

いんきよ「もうでけたさうぢや」ト菜籠の煮しめなど出し、隠居、盃に少しついで「ドレお爛見ましよかい。イヤこれはけたいな香がする。ペツくく、コリヤ酒がわるなつたのか、よもやそぢやあるまい。一つおまい飲んで見てくだんせ」ト北八に盃をさす。

北「ハイ、これは、オト、ト引受けてぐつと飲んでしまひしが、何とやら鹽ぼのきやうにて、變なほひのする酒だと心に思ひながら、胸をわるくして撫でさすり、撫でさすり、「ハイいたゞきました」。

いんきよ「お連のお方にあけてくだんせ」。

北「そんなら彌次さん、ソレ」ト盃をまはす。彌次郎は先刻よりこれを見て、不思議におもひ、何でもあれはおれが小便をしたのだはと、心の中に二人が顔をしかめるを見て、可笑しさ堪へられず。それと知らずに、あの中の酒をば北八がのみたるを、噴きだすほど可笑しく、ぢつと堪へるたりし所、北八盃をさしければ、

彌「イヤ、おらア御免だ。なぜか今宵は酒が飲みたくねへ。お盃ばかり、ハイそれへ上げませう」。

彌「ハアこよにござりやした。こいつは尋常なしびんだはへ」ト手の所を口とこよろ  
え前まへにあてがへども、穴あななければ、さては口くちにこめてある栓せんが、奥おくの方ほうへ引ひ込んだもの  
であらうと、指ゆびをいれて突つきまはすうち、頻しきりに小便せうべんがもるやうになり、心こころはせく、蓋ふたの  
落ちたをさいはひ、ハ、アこよにも口くちがあると、うへの方ほうからシウくと小便せうべんをしてし  
まひ、「ハイ、有難ありがたうございやした」ト隣となりへそつとやつておく。隠居いんきょやがて起たきなほ  
り、

「コリヤえらう寒さむなつた。長松ちやうまつ おきて火ひをともさんかい。酒さけなとやろわい。コレ、目  
イさまさんか、さまさんか。コリヤやくたいぢや」トそこを探さぐりまはして、火鉢ひばちの火ひを  
つけ木ぎにうつし、小提燈こちやうちんをともして船梁ふなはりにぶら下げ、きびしよを取とつて、「ヤア、コリヤ  
何なんぢやい。ハ、ア、茶ちやをたくつもりで水みづがな入れて置たきをつたさうぢや」トいひつと筈さ  
の間あひだからきびしよを出だして、彌次郎やじろうがしこんだ小便せうべんを川かはの中なかへ打うちあけてしまひ、すぐに  
樽たるの酒さけを入れ火鉢ひばちの上うへにのせながら、  
「モシ、江戸えどのお客きやく、酒さけ一口ひとくちどうぢやいな。」  
北「コレハお嗜たしなでございやすね。」



けてもらひてへの」

せんどう「あがるのかいの」

彌「小便々々」

せんどう「エ、船べりへちよくこなつて、ひよぐらんせ、ひよぐらんせ」


彌「それが出來りやアいひ分はねへ。ア、もうく出さうになつて來た」トうろくする。此彌次郎北八、艫の間と胴の間の境の所にゐるが、胴の間三人前借切にして、十

二三の前髪つれたる隠居らしきぢいさま、宵より彌次郎北八と話などしてゐたりけるが、先刻より蒲團かぶりて寢轉びながら、

いんきよ「モシく、おまい小用にお困りなら、不躰ながらわしが尿瓶借してあぎよかいな。コレく長松よく、イヤこいつもう寢くさつたさうぢや。モシそこらにあるぞ

いの、だんない、そつちやへ持つてかんせ」

だんない  
大事ないの  
略、差支な  
し  
の意

彌「それは有難うござりやす」ト暗がりまぎれに隣をさぐり廻せば、箱火鉢の後に  
圖の如くの土瓶あり。上方にてはこれをきびしよと云ふ。江戸にもたまさか見えたり、  
彌次郎これを尿瓶と心得、取出して、  


大阪「わし一つやろわいの。」

京「うた「是はねつかからでませぬ。さて又次の役者、名は誰ぢやいな。」

大阪「やつぱり今のぢや」ト此大阪者は江戸にもゐて、聲色も満更でなければ、わざと文句もそのまゝにていふ。

大阪「まんまと奪ひ取つた此一くわん、これさへありやア出世の手がかり。大願成就かたじけないトハ無調法。」

のり合「イヨかうらいやア。」

京「コリヤきよとい、きよとい。大阪のお方がほんまぢや。おまいのは高麗やとは聞えんわいな。」

彌「聞えん筈だ。コリヤア信州松本の者で、幸四郎が弟子の胴四郎が聲色だ。」

京「そんなこつちやあるぞいな。ハ、ハ、ハ」ト船中、彌次郎のへこんだのを可笑しがりどつと笑ふ。彌次はしよけてだんまり。此内船ははや淀を過ぎて、

彌「時に北八、飛んだ事を忘れた。船に乗る前に小便すればよかつたものを、例のとほり船ではどうもあぶなくてしにくい。困つたものだ。コレ船頭さん、ちよつくり船をつ

高麗屋―五  
世松本幸四  
郎、敵役を

得意とし其  
藝風豪放な  
以て聞ゆ

みそ―手前  
味噌、自慢

堺町葺屋町  
―もと堺町  
に猿若座、  
葺屋町に市  
村座あり、  
あはせて二  
丁街の芝居  
と云ふ

彌「声色も二十や三十ばかりは使ひやすが、誰にしやう、源之助か三津五郎か、イヤ高麗屋にしやせう。しかし江戸役者はお前方にやア分らねへから詰らねへ。」

大阪「ハテえいわいの、一つやりなされ。」

彌「みそぢやアねへが、声色は江戸でも一番といふ男さ。誰でも後を唄ふ人があると、すつぱりやつて見せるがなア。」

京「後を唄ふとは呼出しのことかいな。わし遣ろわい。口三味線ぢや。チ、ツ、ンチンシヤン。」

うた「これはおえどの堺町や葺屋町に名も高き、役者声色はどうぢやいな。誰ぢやいな。松本幸四郎でせい。チ、ン、ン、チン。」

のり合「イヨ松もとヲ。」

彌「まんまと奪ひとつた此一卷、是さへありやア出世の手がかり。大願成就かたじけない。」

京「コリヤやくたいぢや。わしや江戸に五六年ゐて此間戻つたわいな。高麗屋はそないな口跡ぢやないもせんもの。」

よつばらか  
んだ―久し  
ぶりだ

越後の人「わしもやるべい。皆それから、トコントントコントンと、  
長崎「よかく」。合點あらう。」

乗合みなく、手を打たよき「トコトン、トコトン。」

ゑちごうた「お長な、よつばらかんだ、まめでたかお長な。」  
のり合みなく、「トコトン、トコトン。」

ゑちごうた「新潟一ばん、水牛のくしを。」

のり合「トコトン、トコトン。」

ゑちごうた「主にさつくればいと、六百文で求めた。」

のり合「トコトン、トコトン。」

彌「ハ、ハ、おもしろへ、おもしろへ。」

京「イヤ、江戸のお客に何ぞ所望をしようやないかい。」

彌「ソリヤもう琴、三絃、鼓弓、何でもちつとづつはやりやすが、こゝにやアそんな物は

ねへからはじまらねへ。」

京「おまいの口癖では聲色が出るぢやある。誰なと江戸役者やりなされ。」

―坐つて  
かいな―左  
様かいなの  
略

うんども―  
自分共  
はうぶら―  
南瓜  
かみさし―  
筭

よんによう  
―大分  
しやんす―  
色女

大阪「わしや道頓堀」

京「かいな、どとんほりの衆は皆藝者ぢや。ナント、こよで何なと一つやりなさらんかいな。」

長崎の人「コリヤよかたい、船中のねぶり目ざましに、彼方衆一つツツ藝能やらしやつたらよかいたい。うんどもは長崎のもんぢやが、能毛川島のほうぶら枕で、かみさしほつきりでも遣らうばいよヲ。」

越後の人「コリヤえいことんし、わしどもは越後のもんだが、長崎の兄さがやらしやつたら、わしも國風のおけさ松坂でもかたるべいとこと。」

北「こいつはおもしろい。マア長崎のお客から始めなせへ。」  
長崎の人「よかく、これしこやらうばい」ト無上に手を打叩き、

うた「おまへよかはたわしよ振捨てて、よんにようしやんすとちぎらんす。コリヤ、蛙々が飛ぶなら桶かぶせ。それでも飛ぶならきねおけ、きねおけ、コリヤくくく。何ぢやいな。」

のり合「イヨく、えらでけぢや。」



みづから—  
昆布を結び  
山椒を入れ  
たる菓子

平座—あぐ  
ら  
あんぢよう  
—味よくに  
て、工合よ  
くの意  
いしかつて

のり合「コリヤえらう詰めくさつた。船頭さん、蒲團一つ借さんせ。」

せんど「ソレ取らんせ。サアく皆えいかな。下にゐてくだんせ。苦ふくさかい。」

あきん人「錢かいなされ。錢はよござりますかかな。」

同「みづから砂糖餅、みづから砂糖餅。」

同「爛酒よござりますかいな。あんばいよし、あんばいよし」ト此内船頭も船に苦をふ

いてしまひ、竿さし出して、

船頭「ふねは追風に帆かけて走る、われはこがれて身をあせる。ソウレソレくく。な

んぞい、コリヤえらう空がわるなつた。降ろか知らんわい。」

のり合「船頭さん、昨夜はちうじやう島ぢやある。精進が悪いさかい、コリア雨ぢやあ

ろぞいのハ、ハ、ハ。時にどなたも平座かいてるなさらんか。今の内あんぢようせんと、

後に工合がわる成るさかい。」

京の人「コレ、おまいちと退いてかさんせ。粽の上にいしかつてぢやわいな。」

大阪の人「コレヤ不調法、とかく乗合はお互に何ぢやあると、不肖してくれなされ。」

京「よいわいな。おまい大阪はどこぢやいな。」

は神酒として徑四寸計の酒樽を持ち参したり

八軒家―大  
阪天満橋南  
詰にあり伏  
見大阪間の  
曳船の乗船  
場

へげたれ―  
悪口、原意  
は吝嗇者

宇治にかより、こよより都におもむかんと急ぎけるほどに、やがて伏見の京橋にいたりけるに、日も西にかたぶき、往來の人足はやく、下り船の人を集むる船頭の聲々やかましく、

「サア、今出る船ぢや。乗らんせんか。大阪の八軒家ぢや。乗て行んせんかい。」

彌「ハ、ア、これがかの淀川の夜船だな。ナント北八、京から先へ見物するつもりで来たが、いつそのこと此船に乗つて、大阪から先へやらかさうか。」

北「それもよからう。モシ乗合もありやすか。」

せんどう「さうはかいの、乗るなら早う乗らんせ。急に出すさかい。コレ、草鞋といて乗らんせ。偉いへげたれぢやな。」

北「エ、何をぬかしやアがる。氣のつえよべらほうだ。」

彌「コレ北八、手めへの包も一所に、おれが風呂敷に包んでおかう。」

北「船頭さん、コリヤアどけへ坐るのだ。」

せんどう「そこな坊様のねきへ割込まんせ。」

北「御免なせい。ヤアえいとな」ト二人ながら艫の間へ割込みすわる。

# 膝栗毛七編 卷之上

聾の笠印―  
當時は聾な  
らぬ者が殊  
更に笠へ聾  
と記し道中  
他人より話  
しかけらる  
るを避くる  
事ありたり  
わざくれ―  
好事、もの  
ずき  
金毘羅参云  
云―金毘羅  
へ参るもの

こころわき  
諺に云、旅の恥は書捨ててゆく、落書の國所は欄干にとどまり、おのづから往來同國  
の人の目を慰め、被り行く聾の笠印は、わざとおのれ一人の心を喜ばしむるも、皆とも  
に驛路のわざくれ、相宿の木枕に結ぶ縁は出雲の帳外、二寶荒神の隣同士は、長家の附  
合の外にして、其心々に出る儘をしやべり、あくまでに喰ひ、掛取道連にせざれば三  
十日の愁にあはず。米櫃脊負つて出でざれば鼠追ふ世話もなく、名にしおふ東男も薩  
摩芋に髭を撫で、花まだき京女郎も團子の串に頭かき、知らぬ火のつくすたはけに欠落  
して走るあれば、雲井路の道草食ふ遊山旅ののろつくあり。並松の根に腰打かけて金毘  
羅参りの樽を開き、街道の真中にひよくり出して、諸社順拜の鈴口を振る、鞆中の有様  
まことに命の洗濯もの、引つぱり股引草鞋に、何國までも足にまかする雲水のたのしみ  
えもいはれず。こゝに東の都、神田の八丁堀に住む彌次郎兵衛北八といへる二人連のな  
まけもの、神風や伊勢参宮より足曳の大和路をまはり、青丹よし奈良街道を経て山城の

だけの所御辛抱御一覽のほど、ハイおたのみ申しますと志可伊布。

維時文化丁卯正月

十返舎一九

序

長いはく、此作者のながきこと、支體は心と俱に長く、鼻の下は禪のさがりと侔しく長し。酒のあとをひくことは、行坐を飛脚にやりたるよりも長く、借金をひきずる事は、淋病やみたる牛の小便よりも長し。去に仍つて膝栗毛の尾に尾をひいて、長道中の今に歸らず、漸く五編目に至りて伊勢路に筆をおくと雖も、例の長尻しびりをきらして、京へ登るの趣向を考へ、下手の長喙を七編とし、御見物が長喜世留の掃除し給ふ紙屑を賣出すも、固より爪の長き熊手性長居はおそれも承知之助、ひとつ長屋の佐次兵衛とは隣同士の彌次郎兵衛、せめて四國は廻らずとも、京大阪はあたりまへ、是



ざんざんさの  
聲—ざんざ  
めく聲にて  
さわぐ音な  
り

「コレく婆様、さつきにから尋ねてをるに、もう生れたわいの、早うく」ト婆を引

立てつれ行けば、勝手の方はざんざの聲、

「めでたい、めでたい。三國一の玉のやうな男の子が生れた」ト喜の聲ともに、亭主に

ここにこして立出で、

「コレハお客様お喧しうござりませう。先私妻も安産いたしました」トいふうち、彌

次郎も雪隠よりいで、

「さてくめでたい。わたしも今雪隠でおもいれ安産したら、忘れたやうに心よくなり

ました。」

ていしゆ「それはあなたもおめでたい。」

北「おたけへにめでたい、めでたい」トこれより喜の酒汲みかはし、取上婆の間違やら

何やらかやら話しあひて、大笑となりける。めでたし、めでたし。

「コリヤ北八どうする。ア、いてへく。」

ばく「そないな氣の弱い事ではならんわいな。ぐつといけまんせ、いけまんせ。」

彌「こよでいけんでは堪るものか。雪隠へ行きてへ。放したく。」

ばく「雪隠へいてはならんわいの。」

彌「それでもこよではいけむとこよへ出る。」

ばく「出るからいけまんせといふのぢやわいの。ソレウ、ンウ、ン、ソレウ、ン、ウ

、ン、ン。そりやこそもう頭が出かけた、出かけた。」

彌「アイタ、ン、ン。そりや子ではねへ。それをそんなに引張らしやんな。ア、コレいて

へく。」トもかく。構はず婆はぐつと引張れば、彌次郎腹をたて、「エ、この婆め」ト横

面をはり飛ばす。婆あきれて、

「この血ちがひは」トむしやぶりつく。かゝる騒の最中、勝手の方には、はや女房の安

産と見えて赤子の泣く聲すれば、

ばく「そりやこそ生れた。イヤこよぢやない。どこぢやぞいな、どこぢやぞいな」トう

ろたへ廻るうち、彌次郎も頻に痛み雪隠へ走りこむ。亭主は勝手より飛んで來り

血ちがひ一  
血にて逆上  
せる人の意

北「彌次さん、どうだ〜」

いしや「コリヤ堪らん〜。病人の側にはをられぬ」トさう〜逃出して歸ると、勝手

の方には、ヤレ取上婆様のお出でと、下女のおなべがうろたへて、婆の手をとり、是へと、彌次郎が蒲團かぶつて寝てゐる處へつれて來ると、

取上婆「これはしたり。寝てるさんしてはならんわいの。サア〜起きさんせ、起きさんせ」ト彌次郎を引きずり起せば、顔をしかめて、

彌「アイタ、い、い、」

ば「辛抱さんせ、コレそこな人、菰はどうぢやいな。」

彌「アイタ〜」

ば「そこぢや、そこぢや」トこの婆もうろたへた上、一體目が少しうとく、内の産婦と間違へ、彌次郎が腰を引立て〜、「サア〜みな來さんせんかいな。コレ〜、こゝ來て、誰ぞ腰を抱いてくだんせ。さあく〜早う〜」トせきたつるにぞ、北八はあきれかへり可笑しく、こりやどうしをる知らんと、とほけ顔で彌次郎が腰をいだきて引立つれば、

りかけたる  
ならん

枳穀―鬼こ  
くの洒落

はやめ―早  
薬のことに  
て産を促す  
薬なり

いしや「知れた事、山梔子。」

北「印判に毛の生へたは。」

いしや「半夏。」

北「鬼が屁をひつてをるの。」

いしや「それは枳穀。」

北「ハ、ハ、おもしろい、おもしろい。時にお薬は。」

いしや「煎じやう常の如し。生薑一へぎお入れなさい。」

北「山葵ではわるうござりまするか。」

彌「ばかアいふな。これは有難うござります。」ト此内、なにやら勝手の方俄に騒がしく、人の足音とんく響きて、亭主の聲として、

「コリヤ〜。おなべやい、おなべやい。取上婆どのへ人をやれ。ソレ久介は湯をわかせ。はやめはあるか。早う〜」ト騒ぎたつうち、こなたでは彌次郎が頻に腹痛みだして、

彌「アイタ、〜。」

いしや「見えん筈ぢや、つれて來んさかい。藥箱は私<sup>くすりばこ</sup>がもて來たわいの」トさけて來た風呂敷包<sup>ふうろしきづつみひら</sup>を開き藥箱<sup>くすりばこ</sup>を取出す。

女「オ、をかし。あなたは竹<sup>たけ</sup>の匙<sup>さし</sup>で煎豆<sup>にまめ</sup>盛るやうにしてぢやわいな。」

上「ハア聞えた。藪醫者<sup>やぶいしやさま</sup>様だから、そこで竹<sup>たけ</sup>の匙<sup>さし</sup>をお使<sup>つか</sup>ひなされると見<sup>み</sup>えた。そしてあなたのお藥袋<sup>くすりぶくろ</sup>には繪<sup>え</sup>が畫<sup>か</sup>いてござりますが、どう致<sup>いた</sup>したのでござりますね。」

いしや「イヤお尋<sup>たづ</sup>ねで面目<sup>めんぼく</sup>ないが、生得<sup>しやうとく</sup>手習<sup>てならひ</sup>をいたした事<sup>こと</sup>がないさかい。」

北「ハ、ア、あなた無宿<sup>むしゆく</sup>ぢやな。」

いしや「さやうく。かいもく字<sup>じ</sup>が讀<sup>よ</sup>めぬ。むしくぢやさかい、それでかやうに藥<sup>くすり</sup>の名<sup>な</sup>を繪<sup>え</sup>に畫<sup>か</sup>いておきますぢやて。」

北「これはおもしろい。さやうならその道成寺<sup>だうじやうじ</sup>の繪<sup>え</sup>は何<sup>なん</sup>でござります。」

いしや「コレハ桂枝<sup>けいし</sup>ぢやて。」

北「關魔<sup>かんま</sup>様は大<sup>た</sup>かた大黃<sup>だいわう</sup>でござりませうが、コノ犬<sup>いぬ</sup>が火<sup>ひ</sup>に當<sup>あた</sup>つてをるのは。」

いしや「陳皮<sup>ちんぴ</sup>々々。」

北「コノ産婦<sup>さんぷ</sup>の側<sup>そば</sup>に小便<sup>せうべん</sup>してゐるは。」

無宿—無筆  
の誤

桂枝—肉桂  
なり、中村  
富十郎(俳  
名慶子)の  
當り藝、道  
成寺なるよ



北「さやうでござりませう。血の道はこゝの内儀の事でござりませう。この男はそれではござりませぬ。」

いしや「さよぢやコリヤ私が間違ぢやわいの。しかし何なら、貴様もそれにして置かんと、薬盛るにも一所にして、面倒になうてよいがな。」

北「なるほど、コリヤお醫者様のおつしやる通り、彌次さんおめへも血の道にして置かがいよねへ。」

彌「飛んだ事をいふ。男に血の道があつて堪るものか。」

いしや「イヤ、外の病氣もおもしろかる。何もわしが稽古の爲ぢや。一體貴様は何病ぢや。」

蟲がかぶつて—腹痛

彌「私は先刻から蟲がかぶつてなりませぬ。」

いしや「大方コリヤ腹の中でかぶるぢやある。」

彌「ハイおつしやる通り、腹の外ではござりませぬ。」

いしや「さうぢやある。コレ、女中、供の者に藥箱おこせというて下んせ。」

女「ハイ、かしこまりました。イヤもしお供の人は見えませんわいな。」

おこせ—よこせ

見<sup>み</sup>ることを、どうも忘れてならんわいの。しかし見<sup>み</sup>ずとも知<sup>し</sup>れた事<sup>こと</sup>ぢやが、序<sup>いで</sup>に見<sup>み</sup>て進<sup>しん</sup>じやう。病人<sup>びやうじん</sup>はどれにござる。」

北「ハイ、只今<sup>ただいま</sup>雪隠<sup>せつちん</sup>へ参<sup>まゐ</sup>つてをります。コレく彌次<sup>やじ</sup>さん、お醫者<sup>いしやさま</sup>様がござつた。早く出<sup>で</sup>なせへ、出<sup>で</sup>なせへ」ト大<sup>た</sup>きな聲<sup>こゑ</sup>をすれば、彌次<sup>やじ</sup>郎<sup>らう</sup>雪隠<sup>せつちん</sup>の中<sup>なか</sup>から、

彌「イヤまだ出<sup>で</sup>られぬ。お醫者<sup>いしやさま</sup>様をどうぞこれへお出<sup>い</sup>で下<sup>くだ</sup>さりませ。」

北「エ、めつさうな。お醫者<sup>いしやさま</sup>様がそこへ行<sup>い</sup>かれるものか。無<sup>む</sup>賤<sup>じ</sup>な事<sup>こと</sup>をいふ。」

彌「そんなら、いま出<sup>で</sup>るく」トやうく雪隠<sup>せつちん</sup>より出<sup>い</sup>づれば、醫者<sup>いしや</sup>しかつべらしく彌次<sup>やじ</sup>郎<sup>らう</sup>の脈<sup>みやく</sup>をみて、

「ハ、ア、貴公<sup>きこう</sup>はコリヤ血<sup>ち</sup>の道<sup>みち</sup>ぢやわいの。とかく臨月<sup>りんげつ</sup>などには起<sup>た</sup>ちるものぢや。」

彌「イヤ、私<sup>わたくし</sup>孕<sup>はら</sup>んだ覺<sup>は</sup>はござりませぬ。」

いしや「ナニ懐胎<sup>くわいたい</sup>でない。ハテめんような。イヤコリヤわしが師匠<sup>ししやう</sup>がわるい。廣小路<sup>ひろこうぢ</sup>の伊賀越屋<sup>いがこゑや</sup>から呼<sup>よ</sup>びにおこしたが、あこの病人<sup>びやうじん</sup>は産月<sup>うみづき</sup>ぢやさかい、大方<sup>たは</sup>血<sup>ち</sup>の道<sup>みち</sup>が起<sup>た</sup>つたのぢやある。そのつもりで藥<sup>くすり</sup>を盛<sup>も</sup>るがよいと教<sup>おし</sup>へておこしたが、そりや貴公<sup>きこう</sup>の事<sup>こと</sup>ではなかつたわいの。」

貴様—當時  
は目下なら  
ぬ人にも用  
ひたり

いしや「ハテ、達者な人の脈から見くらべねば、病人の脈が分らんわいの。先貴様お見せなされ」ト北八の脈をとり、暫く考へ、「ハ、アなるほど、貴様なんともないやうぢや。」

北「さやうでござります。」

いしや「お食はどうぢや。」

北「ハイ、今朝ほど飯を三膳、汁を三ばい食べました。」

いしや「さうである。さうである。平は大方一杯ぢやある。かへては参るまい。」

北「さやうでござります。」

いしや「さうぢやある。さうぢやある。此脈體ではどこも何ともない様ぢや。」

北「さやうでござります。」

いしや「ナントよう當りましたらう。およそ醫は意なりと申して、脈體を以て勘考いた

す所が第一でござる。氣遣ない。もはやお暇いたさう。」

北「モシく、病人を御覽じて下さりませ。」

いしや「ほんにさうぢやあつた。わしは變つた癖で、とかく病家へまるつても病人の脈を

北「どうだ、湯でも茶でも酒でも飲みたくはねへか。」

彌「ばかアいふな。アイタ、ハ、無上に腹がごろく鳴る。北八雪隠はどこにある」たづねてくりや。」

北「おめへどこに置いた、袂にでもねへか。」

彌「阿房つくぜ、ナニ雪隠が袂にあるもんだ。どこにあるか見てくりやといふ事よ。」

北「ハアさうか。ドレ見てやらう。あつたく、アレ縁側の先に落ちてある。」

彌「まだぬかしやアがる。アイタ、ハ、」トやうくの事に立上り用違にゆく。此うち宿屋の女勝手より出で、

女「ハイお医者様がお出でたわいな。」

北「サアくこれへく」ト此内、近所の醫者の弟子と見えて焦茶の木綿紋付に、黒縮緬の肩のひけたる羽織をひつかけたる坊様、

「エヘンく、これは不順な天氣あひでござる。ドレお脈を」ト北八のそばへ坐り、北八が脈を見やうとする。

北「イエ、私ではござりませぬ。」

ていしゆ「サアお入りなさんせ。ソレおなへ、奥へお供せんかいやい。」  
女「ようお着きでおます。」

北「サア彌次さん上んなせへ。」

彌「アイタ、ゝゝ。」

北「エ、汚ねへ顔をする。おめへコリヤ何ぞの罰があつたのだらう。」

彌「ナニサ、罰をくつた覺はねへ。大方今朝の飯があつたのだらう。」

てい「おまんまも上りつけなさんと、當る事がおましよわいな。」

北「ア、コリヤ、意氣地のねへこつた。サアく、奥へく。」

彌「アイタ、ゝゝ」ト北八に介抱せられ座敷に通る。亭主も荷物をはこび、

「さぞ御難儀でおましよ。お薬でもあがりましたか。幸私所の妻が、今月臨月でお

ますがな、昨日からちとすぐれませんで、いんま醫者様をよびに參じたが、あなたも

見とお貰ひなさんせんかいな。」

彌「それはどうぞお頼み申しやす。」

てい「かしこまりました」ト勝手へ立つて行く。彌次郎は頻に苦しがる様子に、

おましよー  
ございませ  
う



日にましてひかり照りそふ宮ばしら、ふきいれたまふ伊勢のかみかぜ。  
 ことにあさひの宮、豊の宮よりはじめて、河供屋ふるどの宮、高の宮、土の宮、其外、  
 末社ことごとく記すに違なし。風の宮へかよる道に、御衣裳川といふあり。

引きずりていく代かあとをたれたまふ、御衣裳川のながれひさしき。

すべて宮めぐりのうちは、自然と感涙肝に銘じて、ありがたさに眞面目となりて、洒落  
 もなく無駄もいはねば、暫くのうちに順拜をはりて、もとの道に立出で、頓て妙見町に  
 かへり、ことにてかの上方者と別れ、彌次郎北八兩人のみ、藤屋を晝たちとして外宮へ

まゐる。是すなはち豊受太神宮なり。天神七代のはじめ、國常立の尊と申せし御神なり。

神聖の宮、寶劍の宮、その外あまたの末社を拜みめぐりて天の岩戸にのほりたるに、彌

次郎兵衛いかどしけん、しきりに腹痛みてなやみけるゆゑ、さうく、此所をたち、傍に

休みて丸薬など用ひ、とかくするに堪へがたければ、いそぎ廣小路にいたり宿をからん

と、そここよを見廻すうち、ある宿屋の亭主、

「モシく、御泊りぢやおませんかいな」

北「アイ、つれのものが少し蟲がかぶるさうだから、宿をお頼み申しやす」

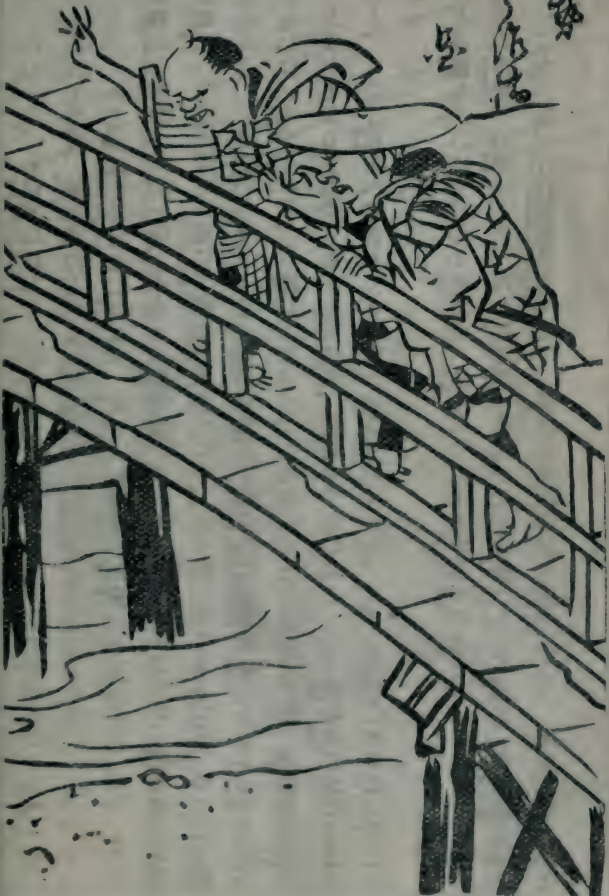
豊受太神一  
 天照大神の  
 御食津神に  
 して伊弉諾  
 尊の御子な  
 る和久産巢  
 日神の御子  
 なり、國常  
 立尊云々は  
 妄説



作勢

定作

の息



とど一頭

網の目にか  
れとまる一  
網の目に風  
とまるの語  
呂、古今六  
帖に、あみ  
の目に吹き  
くる風はと  
まるとも人  
の心はいか  
が頼まむ

上「よいわいな。お前方の錢ぢやてよ、わしが錢ぢやてよ、變りやせんわいの。」  
彌「それだとして、餘りあたじけねへ。」

上「ナニ、わしが此前參宮した時はな、聞かんせ、偉い阿房ぢやあつたわいな。とど、  
錢五貫か十貫投つたわいの。あんまり顔の憎いほどよう受けをるさかい、何ぢやろと今  
度は網破つてこまそと、懐に丁銀が一枚あつたを、ツイ投つてこましたら、やつぱり網  
で受けくさつたさかい。コリヤどうぢやいな、丁銀投つたら網が破りよかと思つたに、  
根からたはいぢや。どして網にとまりくさつた知らんといふたりや、下にをる奴め  
が、ソリヤとまる筈ぢやとぬかしくさる。何故ぢやといふと、ハテ網の目にかねとまる  
ぢやと、えらう私をへこましくさつたわいの、ハ、ハ、ハ、サア、行こわいな、行こわ  
いな。」  
なけ錢をあみにうけつゝ往來の、人をちやにする宇治橋のもと。  
これより内宮一の鳥居より、四ツ足御門、さるかしらの御門をうち過ぎ、御本社にぬか  
づきたてまつる。これ天照皇大神にて、神代よりの神鏡神劔をうつて、鎮座したまふと  
ころなりと。

編笠あみがさをきたる男おとこさよらをすりて、

「ヤレふれく、五十鈴川いすずがは、ふれやく、千早振神ちはやあらかみのお庭にわの朝清あさきよめ、するやさよらのえい

さらく、えいさらさ。ソレでんちうちや、はりひぢぢや。やてかんせ、やてかんせ。」

彌やじ「ソリヤやてかんすぞ、しかも四文錢もんせんだ。」

乞こ「四文錢もんせんなら、つりを三文もんくだんせ。」

彌やじ「こいつ蟲むしのいよことをいふ。時にこの橋はしは宇治橋うぢはしといふのか。」

上うへ「さよぢや。アレ見みさんせ、網あみで錢ぜにをよう受うけてぢや。」

彌やじ「ドレく」ト橋はしの上うへより覗のぞきみれば、竹たけの先さきに網あみをつけ、旅人りよじんの投錢なげぜにを受うけとめる。

上うへ「彌次やじさん、小錢こせんがあらばちつと借かさんせ」ト彌次郎やじらうが錢ぜにを借かつて、さつくと投なり

つける。下したには皆みなくうけとめる。「えらうおもしろいな。よう受うけくさる。もちつと投なつ

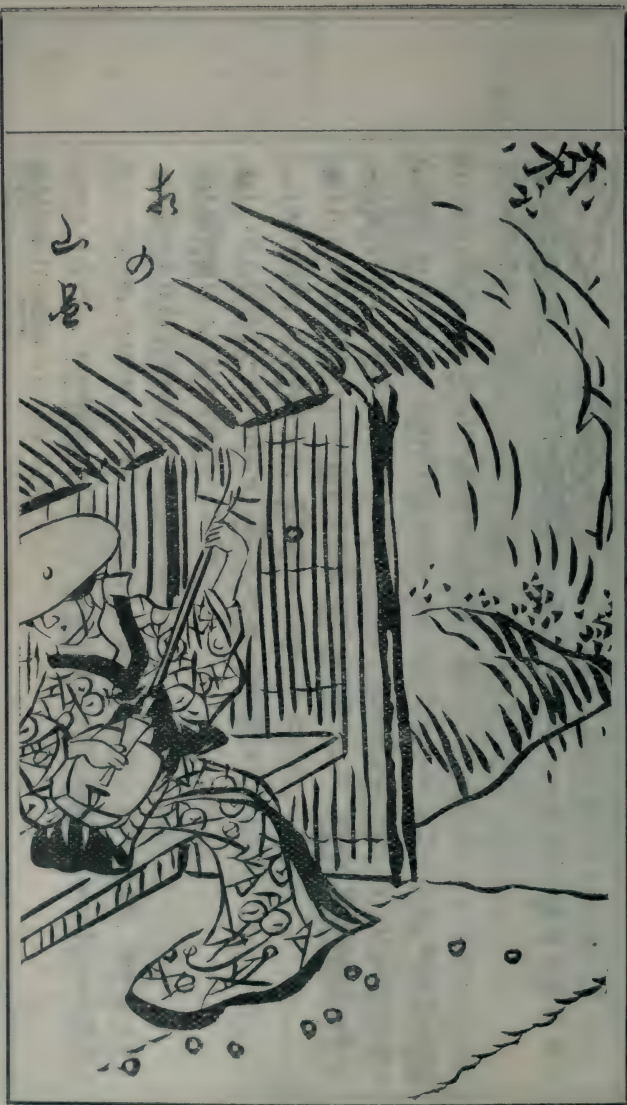
てこまそかい。コレ北八きたはちさんお前まえもちと借かさんせ。ソレ又またぼるぞく。ハ、ハ、ハ、えら

い、えらい。」

彌やじ「コレ京きやうのお人ひと、おめへ人の錢ぜにばかり取とつて投なげる。ちとおめへの錢ぜにをも投なげなせ

く」







石―意趣に  
掛けたり

やてかんせ  
―やつて下  
さんせ

彌「ア、いてへく。」

とんだめにあひの山とやうちつけし、石かへしたる事ぞをかしき。  
かくて爰を打過ぎ、中の地藏町にいたる。左の方に本誓寺といふ勝景の地あり、また寒  
風といへる名所もあり。五知の如來、中河原さまく記すに違なし。夫より牛谷坂道に  
かよれば、女乞食どもけはひ飾りたるが往來に錢を乞ふ。又十一二三の女子ども、紙に  
て張りたる笠の彩れるをかぶりて、

「やてかんせ。お江戸さんぢやないかいな。さきなてさん、はないろさん、頬かぶりさ  
ん、やてかんせ。投らんせ。」

彌「やかましい。つくなく。」

こつじき「アノいはんすこといな。お江戸さんぢや。ちやと下んせ。」

「エ、ひつぱるな。ソレまくぞく。」トよい加減にばらくと錢を投り出せば、乞食ど  
もめい／＼拾ひて、

「よう下んしたや」トひとり／＼禮をいふ。この先に又七八才ばかりの男の子、白き鉢  
巻をして、袖無羽織にたちつけなどはきたるが、手にさいはひ扇などをもち踊る。後に

お杉お玉―  
古市、相の  
山に小屋掛  
し旅人を見  
かけては三  
味を弾出し  
錢を乞ひし  
女、その歌  
は所謂相の  
山節なり

さし―青緋  
にて、錢を  
さしたるも  
の

や見せいでして めい〜小屋に引立つる。古のお杉お玉がおもかけをうつせし女の二上り調子「ペンペラ〜、チャンテン〜」ト無上に弾きたつる唄のしやうかは何とも分らず。往來の旅人、この女の顔に錢をなけつくる。それを顔にてよける。

彌「あつちらの新造が罽へぶつつけてやらう」ト錢二三文なけると、ちやつとよけて當らず。ペンペラ、ペンペラ。

北「ドレおれがあてて見せやう。ハアこれはしたり」

上「何として、お前方がどないに投りつけさんしても、てきらがさすもんぢやないわいの」

彌「今度は見なせへ。ハアこれわいな」

北「オヤ〜、さしぐるみやらかしたな。それでも當らぬ。コリヤしやうがある。あんまり顔がにくい」ト小さな石ころを拾ひて投げつくと、かの女口にてちよいと受け投げ返せば、彌次郎の顔へびつしやり。

北「ハ、ハ、ハ、こいつは大笑だ」

前へぐつと差出し、

「さあらば禪をまるらさう。ソレ取らんせ。どうぢやいな。」

初「オ、くさ。」

北「ハ、、、彌次さん手を出しなせへ。」

彌「エ、情ないことをいふ。おれがのぢやアねへといふに。」

北「そんなら、お前のをまくつて見なせへ。」ト彌次郎が帯解きにかよれば、振り放してそのまよ逃げ出して行く。

みなく「オホ、、、ワハ、、、」ト大笑して送り出る。三人とも此所を立出づると、

彌「エ、いめへましい。北八めがおれに赤恥をかよしやがった。」

北「松に禪のぶらさがつたも珍しい。」

ふんどしをわすれてかへる浅間嶽、萬金たまをふる市の町。

かくて妙見町に立歸りたるに、其日は空も景色いと長閑なれば、急ぎ内外の宮めぐりをせばやと、支度あらましにして立出づるに、行くほどなく今戻りし古市の上り口に、は

萬金たま  
萬金丹、淺  
間嶽の名物



保の松原にあり、天人羽衣をその枝にかけたリといひ傳ふ

そぢやてゝ—それだと

きりもの—着物

北「彌次さんおめへのぢやアねへか。」

初「ホンニそれいし、あのさんの禪ぢやないかいな」ト彌次郎が顔を見て笑ふ。彌次郎は背に櫛子よりすてたる禪庭の松にひつかよりて、ぶら下りるるを可笑しく思ひながら、流石それともいはれず、平氣にて、

彌「ナニ途方もねへ。あんな汚ねへ禪を、ナニおいらがするものか。」

初「そぢやてよナ、昨夜わしがこのお客さんのきりものをぬがすとてなア、よう見たがあないな色の禪ぢやあつたわいな。」

京「オ、さうぢやあるぞい。」

「ばかアいはつせへ。おらア木綿禪は嫌だ。いつでも羽二重をしめてるる。」

初「オホ、うそやの、あれぢやいし。」

北「いかさまおいらも見覺がある。確にあれだらう。それが嘘なら、彌次さん、おめへ今裸になつて見せなせへ。今朝ア宿入の奴様で、振つてゐるに違はねへ。」

初「さうじやいし、オホ、これいし、久助どん、その禪はお客さんのぢや。とてくだんせ」ト庭の掃除をしてゐる男を呼びかけて、かの禪をつつかけて取り、櫛子の

七ツ—午前  
四時

し、後先を見廻し人の見ざるに安堵して、仲居の跡に引添ひゆく。かくて夜も更け渡るに奥の間の川崎音頭もおのづから静まり、旅客の囁の聲喧しく、鐘の音もはや七ツ響きて、鶏の聲萬戸にうたひ、夜も白みかゝる明窓の障子に驚き、起きあがりて目をこすりながら、

京「サア〜どうぢやいな。起きさんせ。もういのわいな」

北「彌次さん日が出たア。けへらねへか」ト兩人彌次郎が寝てる所へ來りおこす。彌次郎おきて、

彌「ヤレ〜、ぐつと一寢入にやらかした」

おやま「これいし、今日もゐさんせ」

彌「途方もねへ。けへる〜」ト皆々支度して出かける。おやまども送りて、廊下に出で、一人のおやま欄子窓より庭の方をのぞき、

「これいしく、アレ見さんせ、庭の松に禪がかよつてあるわいなア」

彌次郎の相方おやま初江「のいてかんせ、ほんにいやいな。誰ぢやいな」

彌「ハ、ア、こいつは可笑しい。羽衣松ぢやアねへ、禪かけの松も珍しい」

羽衣松—三

初「そぢやさかい、こよにゐさんすか。」

彌「ゐるとも、ゐるとも。」

仲「初江さん、もう堪忍してやらんせ。」

ふぢ「サアく、よござります。これへく」ト彌次郎が手を取り、もとの所に引据ゑる。

北「ハ、ハ、ハ、おもしろへ、おもしろへ、彌次さん斯うもあらうか。」

「むくつけき客もこよひはもてるなり、名はふる市のおやまなれども。」

この一首にみなく、笑を催し、藤屋の亭主、仲居どもがそこら取りかたづけて、それぞ

れに座敷を儲け、酔倒れたる上方者を引立てて案内するに、北八も俱に出行けば、あと

に彌次郎兵衛ひとり残りたるに、

女「サアく、お前さんもちとあちらへ。」

彌「ドレ行きやせう。どこだく」トいひながら立つて行く。此彌次郎いたつてはえも

のにて、かの糞しめたる如き禪しめたるが、ことの外氣にかより、ひよつと見付けられ

たら恥のかきあけならんと、懐の中にてそつとはづし、榎子の窓より庭の方へ投げ出

名はふる市  
客を振る  
にかけたり

ばえもの  
ばえは榮な  
り、みえ坊  
をいふ  
榎子の窓  
格于窓

これいし、  
何ぢやいし  
—いしは廓  
詞にて意味  
なし

ま初江立出で、

初「これいし、何ぢやいし。」

彌「とめるな。よせへ〜。」

初「お前さんばかりそないになア、歸る〜といはんすがな、わしがお氣に入らんのかいし。」

彌「イヤさうでもねへが、こよを放せ〜。」

初「わしやいやし」トまた出かけさうにするを引捕へ、無理むたいに羽織をぬがせる。

彌「イヤ羽織をどうする。よこせ〜」トいひながら紙入煙草入をとられる。「コレサおらアけへる〜。」

初「情のこはい人さんぢや」トいひながら。帯をぐつと引きほどき着物をぬがせやうとする。彌次郎は垢染みたる越中禪をしめてるたりし故、裸にされたら詰らぬと、大きに辟易し、着物を兩手におさへて、

彌「コレ〜、もう堪忍してくれ。」

た」

女「そして此お方は、京のお方ぢやといはんしたに、物いひがいつの間にやらお江戸ぢやわいな。」

彌「べらほうめ、この忙しいに京談が遣つてゐられるものか。」

女「あんまりお前さん方がいさかうてぢやさかい、ソレ見さんせ、おやまさん方は皆逃けて行かんしたわいな。」

彌「いめへましい。もうけへるべい。」

女「マアようおますがな。」

ふぢ「モシかうしよかいな。これから柏屋の松の間をお目にかけてうわいな。たどし麻吉へお供しよかいな。」

彌「嫌だく。おらア是非けへるく。」

ふぢ「ハテよござります。」

彌「イヤとめやアがるな。いめへましい」トすつと立つて歸らうとする。仲居ども立ちかよりていろく挨拶し、とめてもとまらず、振放し出かけるところへ、相方のおや

いさかうて  
—争うて



古布  
秀隆  
の圖





彌「エ、喧しい。よくしやべる野郎だ。」

北「おらアそんな事より、太鼓の間が見てへ、太鼓の間はどうだく。」

女「太鼓の間とは何ぢやいし。鼓の間の事かいな。」

北「オ、その鼓々。」

上「イヤ鼓ぢやあるが何ぢやあるが、此邊栗屋與太九郎が相方ぢやわいの。」

彌「コレ悪くしやれるな。何でも鼓の間はおれがのだ。わるい敵役ぢやアねへが、いや

でも抱いて寐る。」

ふぢ「ハ、、、あの廣い鼓の間をかいな。」

彌「オ、廣くても狭くとも頓着はねへ。おれがものだ。」

上「イヤくくくそりやさよんわい。」

彌「ナニさよんことがあるものか。誰が何といつても、京都千本通中立賣とちめんや彌

次郎兵衛様が相方だは。」

上「イヤ此お江戸神田八丁堀、あがる所邊栗屋與太九郎の買うたのぢや。」

北「ハ、、、おめへ方は何をいふやら、どつちがどうだかさつぱり分らなくなつ

さよんわい  
—させない  
承知しない

鬚一わけと  
いふは上方  
方言也

が相方あひかたと思おもひるたりし故ゆゑ、さてこそこのいさくさ起りたり。仲居なから彌次郎やじろうをなだめて、  
「これいし、アノおやまさんはな、此人このひとさんの相方あひかた、お前まへさんはこの島田しまだ掘ほりさんぢやわいな。」

彌や「ばかアいふな。此中このうちでアノおやまが目めについたから、それでおれが盃さかづきを差さしたに違ちがひはない。そこで、わしがおやまかいな。」

上うへ「ハテ悪い合あ點てんぢやわいの。こなさんは、アノ江戸えどはどこぢやいな。」

彌や「江戸えどは神田かんだの八丁堀ちやうぼり、とちめんや彌次郎やじろう兵衛べゑ様さまといつちやア、ちと捻ひねくつた奴やつこ様さまだ。」

上うへ「その江戸えどの神田かんだ八丁堀ちやうぼりとちめんや彌次郎やじろう兵衛べゑといふ捻ひねくつた奴やつこ様さまが、京都きやうと千本通せんぽんちゆう中立賣なかつちやうり、ひよいと上のぼル所ところ、邊栗屋へんぐりや與太九郎よたけうらうが相方あひかたのおやま、勢州せいしゆう古市ふるいち千束屋せんさくやの。」

彌や「エ、何をぬかしやアがる。邊栗屋へんぐりや與太九郎よたけうらうもあきれらア。」

上うへ「イヤ、こよなお江戸えど神田かんだ八丁堀ちやうぼりとちめんやの彌次郎やじろう兵衛べゑどの、京都きやうと千本通せんぽんちゆう中立賣なかつちやうり上のぼル邊栗屋へんぐりや與太九郎よたけうらうを、京都きやうと千本通せんぽんちゆう中立賣なかつちやうり上のぼル所ところ、邊栗屋へんぐりや與太九郎よたけうらうと呼よびすてにさんしたの。そこで以もつてからに、京都きやうと千本通せんぽんちゆう中立賣なかつちやうり。」

仲居―遊廓  
等にて遊女  
を助け客を  
とりなす女  
中

てつぺん―  
最初

さりやくし  
て―作略し  
て

ける。彌次は、はじめにわが盃を差したるおやまゆゑ、自分の相方と思ひるたりしに、京の男、わが相方のやうにいふ故、やつきとして、

彌「コレ京のお客、ソリヤわしが相方のおやまさんぢや」

上「イヤ何いはんすぞいの、コレ女中のお仲居、お前名は何というてぢや」

女「ハイ、きんといふわいな」

上「ソレく、勢州古市千束屋の仲居おきん女郎に、京都千本通中立賣ひよいと上ル

所、邊栗や與太九郎が、先刻内々ひきあうて置いた、アノ美しい可愛らしい、辨才天女

のお辨女郎といふおやまさんは、則京都千本通中立賣」

彌「エ、喧しい。千本も百本もいるものかへ。何でもかうしよ。てつぺんにおれが盃を

さしておいた」トいふは、江戸にては女郎の座敷になほると、直に盃をさして相方を定む

れども、この邊にてはさやうの事はなく、たゞ内々にて、茶屋の女房、或は女などに囁

きて、あれは誰これは誰と相方をきはめておく故、京の人、先刻仲居にかたりて、此中

にていつち上代物を自分の相方と定め、残を彌次郎北八とおのれがさりやくして、き

はめておきし故、彌次郎はその事一向知らず、江戸の格にて盃をさしたるおやまを、わ



いせおんどうた「涼風や、ちりもはらうて木がくれの、池にうかべる月の顔、けはひはさとのいろくくに、ヨイくヨイくヨイくヨイヤサア」

上「イヤア、奥で踊をはじめをつたさうぢや。こちもコリヤおもしろなつて来た。ちと、おつきなもんでやるわいな」

彌「さうさ、飛んだおつに浮かれて来た。もう京談も何も面倒になつた。ヨイくヨイヨイ、ヨイヤサア」

上「イヨく、トテチンくく」

又おくのうた「めだつ浮名もおもしろき、やはらぐ歌や三味線に、足もしどろに立ちかへり、またも今宵の約束は、ヨイく、ヨイく、ヨイヤサ。トテチンく」

上「コリヤえらいく。時にと、下拙の私めが相方のおやまさんは、コレおまい名は何といふぞいの、何ぢやお辨、有難いの。誰あらう、勢州古市千束屋のお辨女郎といふ、美しい可愛らしい女の辨才天女様は、忝なくも尊くも、京都千本通中立賣ひよいと上

ル、邊栗屋與太九郎様の相方ぢや。ちとねき寄らんせんかいの」ト手を取り引寄せ

この京の人は、酒に酔ふと何でも丁寧にくどくいふことが癖にて、だんく管を巻きか

れき―根際にて、そば、かたはら

六條數珠屋  
町、わたし  
がとくさん  
云々―梅川  
忠兵衛道行  
の文句を思  
ひよせしな  
り

ふち「京のお店は、たしか六條數珠屋町であつた。」

彌「さいの、私かとよさんやかよさんは、さぞや案じてるやさんすぢやあるに、こないにおやまばかり買うて、とつともう偉いやくたいぢや、やくたいぢや。」

女「これいし、皆お出んかいな」ト呼びたつる聲に四五人たち出で、

「どなさんもようござんした。」

彌「ハ、ア、どれもえらい出來ぢやな。」

上「番頭さん、盃をちとあつちやへ差さんせ。」

彌「アイ、もし一つあけうかい」トその中で一番美しいやつへさして、にこくしてゐる。

る。

北「おいらは、太鼓の間が見たいがどうだ。」

上「また太鼓の間といはんす。鼓の間ぢやわいな。」

女「鼓の間には、これもお江戸のお客さん方が、子供衆寄せて踊らせてぢや。アレ聞か

んせと」ト此内、大鼓の間にて踊りはじまると見えて、三味線の音きこえる。チ、、、

トテチンく。」

言葉

衆女衆しゆをなごしゆ ちよと来ておくれんかいの、わしや何ぢややら、とつともう早はやえらう明あきがかわくさかい、茶ちや一つもて来ておくれんか。

女「ハイ〜。」

彌「ナント京談偉きやうだんゐらいか〜。へ、畜生ちくしやうめが。」

上「イヤ、きよとい〜、できた〜」ト此内このうち、酒肴さけあはなをもち出いですよめる。藤屋ふぢや始めて

だん〜に廻まはすと、京きやうの人引受ひきひきうけて、

「コレお仲居なかつ、おやまさんはどうぢやいな。お江戸おゑどの偉ゐらいお店の番頭ばんとうさんぢやさかい、

何ぢやあるとおやまんのありたけ出ださんせ。お氣いきに入いると百日ひゃくにちも二百日にひゃくにちも御逗留ごまじりゆうで、お

金かねの入事いりごとは根ねから葉はから、とんとお構かまひないお方かたぢや。」

ふぢ「さよぢやわいな。私わたくしが去年きょねんお江戸おゑどへ参まゐじた時とき、お店の前まえを通とおほりましたが、なるほ

ど偉ゐらい大家たいけぢや。あなたの御支配ごしはいなさる方ほうは兩替店りやうがへてんと見えましたが、これもおつきなお

店たなでおますわいの。」

彌「ナニサ、格別かくべつえらい店みせではないわいの、間口まぐちがやつと三十三間さんじゅうさんけんあつて、佛ほとけの數かずが三

萬三千三百三十三人まんさんさんさんさんじんぐらしぢやさかい、えらい賑にぎやかなこといな。」

三十三間云  
云一京の三  
十三間堂の  
佛の數三萬  
三千三百三  
十三體あり  
といふ俗説  
による

## 六編 卷之下

妙見町のうへはすぐに古市にて、倡家軒をならべ、弾きたつる伊勢音頭の三味線いさましく、うかれくて千束屋といへるに至れば、女ども皆々走り出で、

「ようござんした、直にお二階へ」

ふぢやのていししゆ「おつれ申してもよいかな。 サア御案内いたしましたしよ」ト亭主を先に

各二階へ上り座につく。

上「時に彌次さん、かうしよぢやないかいな。 お前方をお江戸で偉い大きな店の番頭衆

にしやうぢやないかいな」

ふぢや「そないな事がよござりましたよ」

上「しかし、訛らんしてはあかんわいの。 上店といふもんぢやさかい、京談でやらんせ

にや工合が悪かろがどうぢやいな」

彌「そんな事は持つて來いだ。 すつぱりとわつちが上方でやらかしやせう、コレく女

上店—上方  
に本店を有  
する店  
京談—京都

上「御亭さん、御亭さん、ちよと来ておくれんかいな。」

この宿のていしゆ「ハイく、御用でおますかいな。」

上「お江戸のお客が、是から山へのほろといな。」

妙見町の通言に、古市へゆくを山へのほるといふ。

てい「よござりませう。供して参りましょ。」

上「アノ牛車樓か千束亭にしよぢやないかいな。」

北「太鼓の間とやらは何屋にありやす。」

てい「太鼓のやおません、鼓の間の事かいな。ソリヤ千束屋でおますがな。」

上「その千束屋がよござりましょ」トみなく、支度するうち、はや日も暮れて、時分は

よしと亭主を案内として三人とも出かけ行く。



北「イヤもう、物をいふさへ頭へひどけてならぬ。彌次さん、どうぞこの難義を助かるしやうはあるまいか。」

彌「ドレ、おれが緩くしてやらう」ト髪の毛の根をもつて、いやといふ程ぐつと引立てる。

北「アイタ、どうする、どうする。」

彌「これでよからう。」

北「ア、ちつと首が廻つて来た、エ、飛んだ目に遇はしやアがつた。」

あなどりしむくいし罰があたりまへ、ゆだんのならぬ伊勢のかみゆひ。

みづから斯く詠みて打笑ひつゝ支度仕廻ひ、はや膳もひけたるに、いづれも打寛ぎて話の序に、

上「ナント、今宵これから古市へいこかいな。」

彌「まだ宮巡りもせぬ先に、もつてへねへやうだが、まよのかは、やらかしやせう。」

上「いて見やんせ。わしやあこで、年々すてた金が千や二千のこつちやないさかい、なんほなとわしが受けこみぢや。サア早ういかんせんかいな。」

彌「エ、そんならおれも髪月代すればよかつた。」

宮巡り—内  
宮外宮に参  
拜すること

彌「これは御馳走。サア北八どうだ。」

北「彌次さん、わつちが箸はどこにある。」

彌「エ、此男は、ソレ膳についてあらア。」

北「取つてくんな。どうも俯向くことがならねへ。」

彌「なぜならねへ。オヤ／＼手めへの顔はどうした。目が引きつって狐つきを見るやうだぜ。」

北「あんまり髪結めが、がうぎに根を詰めていやアがつた。アイタ、首をいごかす度に、めり／＼と髪の毛が抜けるやうだ。」

上方「ソレおまいのお汁がこほれるわいの。アレお飯の上にお汁わんを置かんすさかい、アレこほれたわいの。コリヤもうとつとやくたいぢや。」

やくたい—  
埒もないの  
意

北「彌次さん、どうぞ拭いてくんな。」

彌「いめへましい男だ。そしてマア俯向かれぬ程に、なぜそんなに固く結はせた。もうちつと緩くすればいよに、手めへ大方髪結をいちめたらうから。」

上方「そぢやさかい、そないな目に遇はんしたのぢやあろぞいな。」

固くつめて結ぶ事を知らねへ。無器用な。

かみ「さよなら、これではどうでおます」ト此髮結、これ見たかといふ程ぐつと根をつめると、月代に三ッほど鬘ができて、目は上の方へひきつる位に固くひつつめられ、北八髪の毛がぬけるほど痛けれども、負惜しみにて顔をしかめながら、

「これでよし、これでよし。ア、いよ心もちだ。」

かみ「ナント、それでよござりましょがな。」

北「あんまりよすぎて首が廻らぬやうだ」ト此内、彌次郎湯より上りくる。

かみ「サアあなた、髪なされませんかいな。」

彌「イヤ、どうか湯に入つたら、ぞくぞくして風でも引いたやうだ。わつちはマア明日のことにしやせう。」

かみ「さよなら御機嫌よう」ト出て行く。此うち、女膳を持ち出でめいへ直す。上方は先刻より寢轉びるたりしが、起直りて、

上方「ドレ、飯食はうかいな。」

女「今日は不漁でお肴が何もおませんわいな。」

かみ「イヤ、そないに研ぐと剃刀が減るさかい。ハテ人さんの頭の痛いのは、こちや三年も堪へるがな。」

北「道理こそ、痛くてく一本ヅツ抜くやうだ。」

かみ「なんほ痛いとして、命に障る事はないがな。」

北「エ、そりや知れたことよ。もうく月代はいよ加減にしてくんな。」

かみ「おまい逆剃は嫌かな。」

北「エ、その剃刀で逆剃にやられて堪るものか。頭の皮がむけるだらう。もうそこは

いとから、ぐつと髪をつめて結つてくんな。」

かみ「ハイく、コリヤえらい雲脂ぢや。この雲脂の取れる事がおますがな。」

北「どうすると取れる。」

かみ「ほんさまにならんすとえいがな。」

北「エ、いめへましい事をいふ。」

かみ「根は此様でようおますかい。」

北「イヤくもつと引詰めてくんな。とかくこつちの方へ来ると髪は下手くそだ。根を

ほんさま  
坊様

筑摩の鍋かぶり—近江栗太郡筑摩神社四月の祭には、女は己の契りたる男の數だけ鍋を頭にかぶる習ありたり

うせへに大きく結つて、何のことはねへ筑摩の鍋かぶりといふものだ。」  
かみゆひ「そのかはり、女はとつとえらい綺麗でおましようかな。」  
北「綺麗はいよが、立つて小便するにはあやまる。」  
かみ「イヤ、お江戸の女中もおつきな口を開かんして欠伸さんすには、ねから色氣がさめるがな。」

北「それでも女郎は又江戸のことだ。江戸は意氣張があるからおもしろい。こつちのは誰が行つても同じことで、ねつから振るといふ事がねへから信仰が薄いやうだ。」

かみ「イヤ、こちの方ではおまいのやうなお方が行かんしても振らんさかい、それでえいぢやおませんかいな。」

北「きさま、おれを安くいふな。コレほんのこつたか。」

かみ「オツト、あをのかんすと切りますかな。」

北「イヤ切らなくても、がうせいにいてえ剃刀だ。」

かみ「痛い筈ぢやわいな、この剃刀はいつやら研いだまよぢやさかい。」

北「エ、滅相な、なぜ剃る度に研がねへの。」



たこちやないわいの。マアく奥へ。」

彌「これはお世話になりやす」トすぐに奥へ行く。上方者と北八は、江戸組の太々講について御師の方へ行きしが、彌次郎見えざるゆゑ、知らぬ人ばかりにて手もちなく、いろくき合せても分らず、せん方なくその御師の方を出で、尋ねたくもあてどなく、かねて妙見町の藤屋へ泊らんといいひたる事も承知の事なれば、大方尋ねてくるであらと、さてこそこの所に泊りてまちかけしなり。彌次郎は太々講の駕間違ひたる一伍一什を物語り、大笑となりける。北八は髪結をよびにやり、髭を剃りてゐたりける。

「まあくお互に別條なくてめでたい、めでたい。」

彌「いやもう飛んだ目にあつたといふはおれが事よ。時に髪結さん、その後でわつちも一つやらかしてくんなせへ。」

北「おめへマア湯に入つて來なせへ。」

彌「そんならさうよ」ト彌次郎は湯に入り、北八髭を剃りかよりて、

「時に髪結さん、おいらが髪はぐつと根をつめて結つてくんな。何だかこつちの方の髪は、たほが出て、髭がおつに長くて、とんだ氣のきかねへ頭つきだ。そして女の髪もが

手もちなく  
— 手持無沙汰

彌「さやうさ、道連ともに三人の所、わつちはその連にはぐれて、こんな困つたことございやせん。」

てい「イヤそのお二人の、お二人のお連は、お一人はお江戸らしいが、今お一人は京のお人で、目の上へ此位な痰瘤のあるお方ぢやおませんかいな。」

彌「さやう〜。」

てい「それぢやと、こちの内にお泊りなされたさかい、すぐにお前様のお迎ひを出しましたわいな。」

彌「そりやほんとうにか。ヤレ〜嬉しや。そしておめへの所は何屋といひやす。」

てい「アレ御覽なされ、掛札に藤屋と書いておますがな。」

彌「ホンニそれ〜。棚からぶら下つたやうだと思つたが、その藤屋よ。さうして連の奴らはどこにゐやす。」

てい「ソレ、奥へお連様がお出でだというて行かんせ」ト此聲をきくより、奥から出る道づれの上方者、とんでくる。

「コリヤようごんした。定めしそこらうち尋ねさんしたである。こちもえらう尋ねまう

彌「いかさま、棚からぶら下つたやうな内であつた」ト又二三軒先へゆき、ある内の門にて、「モシ棚からおちた内はお前ぢやございやせんか」トとんだことをいふ。此内の女房とみえて、

女「イ、エナ、私が内はもとから爰で、つひしか棚へあけて置いた事はおませんわいな。」  
彌「ハア、外にはござりやせんか。」

女「ソリアおまい、間違ぢやあるぞいな。山からおちた内ぢやおませんかいな。それぢやと、相の山の與次郎の小屋が、此間の風で谷へ吹き落されたといふ事でおますがな。大方それぢやあろいな。」

彌「イヤそれでもねへが、コリヤア困つたもんだ。何だかかだか、さつぱり分らなくなつて、元も子も失つたやうだ。わつちも先から尋ねあぐんで、もうくがつかりと草臥やした。どうぞ一ぶくのまして下さりやせ」ト此店先に腰をかける。亭主氣の毒さうに煙草盆をさけて奥より立出で

「サア一ぶくあがらんせ。一體おまいはどこを尋ねさんすのぢやいな。参宮ぢやあろがお一人か、但しはお連でもおますかいな。」

元も子も失つた—元は元金、子は利息、悉皆失つたの意にいふ

さかい—上方言、から、ゆゑに當る、足利の末頃より行はれ今猶用ひらる

わうらい「イヤ、それいうて行んせにやア知れぬくいわいの。何ぢやろと、ぶら下つた内というては、ハ、ア向の角に人のたつてる内へ行て問うて見やんせ。あこは去年首くくりがあつて、ぶら下つた内ぢやさかい。」

彌「イヤ、そんなもののぶら下つたのぢやアございやせん。」

わうらい「ハテまあ、行て問うて行んせ。あこも宿屋ぢやあろわい。」

彌「ハイさやうなら」ト走り行くうち、かの家の門に立つてゐた人も、どこへかついと行つてしまひ、さつぱり知れなくなり、まご／＼してある内の前にたちて、「モシ／＼、ちとものが尋ねたうございやす。去年首をおくよりなさつたは、あなたでございやすか。」

この内の亭主居合せ、肝を潰し飛んでいで、

「イヤ、わしや首つツた事はないがな。」

彌「そんなら何處でございやす。」

ていしゆ「こよらに首つツた内は知らんがな。此二三軒先に棚から落ちた牡丹餅食うて咽をつめて死んだ内があるが、もしそれぢやないかいな。」

れよ」トいろ／＼に考へても、藤屋といふを忘れて、さつぱり思ひ出さず、「ハテ口へ出るやうな、何でも柵からぶら下つてゐるやうな名であつた。モシ／＼妙見町にぶら下つてゐる宿屋はございやせんか。」

「ナニぶら下つてゐる宿屋はこちや知らんわいな。そないな事いうては、知りやせんかな。」

彌「なるほど、こよらで尋ねては知れめへ、もちと先へ行つて尋ねやせう」トそれよりこよを過ぎて急ぎ辿り行くほどに、こよに萬金丹の看板、妙見町山原七右衛門といへるを見て、さてこそこよが妙見町ならんと思ひ、往來の人をよびとめ、

彌「モシ、こよらに何でもぶら下つてゐるやうな名の内はございやせんかね。」  
わうらいの人ふしぎさうに、

「何ぢやいな、ぶら下つてゐる内とは何やぢやいな。」

彌「宿屋さ。」

わうらい「その家名わいな。」

彌「家名を忘れたからの事さ。」



あこー彼處

手代「イヤおどけたお方ぢや。ハアよめた、おまいの行く所は、慥に内宮の山莊大夫どのぢやわいの。さつきの手代が、あこのぢやほどに、是から妙見町をすぐに古市の先へいて尋ねさんせ。」

彌「ハアさうか。コリヤ有がてへ。ほんにお喧しうございやした。」

かう中「えらいあはうぢや。ハ、ハ、ハ、ハ、」ト手を打ち笑ふ。彌次郎腹立てどもせん方なく、しをくとこの所を立出づるとて、

鉢植のだい／＼かうにあらねども、宙にぶらりとなりしまちがひ。

それより彌次行兵衛はもとの筋違に出で、妙見町をさして行く道すがら、北八はいかがせしや、米屋太郎兵衛と打連れて、御師の方へ行きしか、但しは上方者と妙見町に泊りしかと、思ひわびつゝ辿り行くほどに、廣小路にいたると、

此所のやどや「モシお泊りかいな。宿をとつてかんせ。」

彌「コレ妙見町といふは、まだ餘程ございやすかね。」

やどやのをんな「イエ、いんま少し先ぢやわいな。」

彌「ソノ妙見町に、ア、何屋とかいつた、道づれの上方ものが泊るといつた。ハア、そ

かう中「めんくの行く御師どのを知らんといふ事があるかいな。コリヤわりさまは、わざとこちの仲間へすりこんで、太々講を食倒ししやうでな。」

どやいてこ

まそかい

なぐつてや

らうか

かう中みなく「エ、けたいな奴ぢや。天窓どやいてこまそかい。」

彌「イヤ悪くしやれらア。手前たちの太々講丸つきり喰倒した所が、たかが知れてある。あんまり安くしやアがるな。江戸ツ子だは。おれ一人で太々講うつて見せやう」トどつさり坐れば、おしの手代肝を潰して、

「ナニ、おまいがお一人でかいな。こりやできたく、みんなとおまいが。」

彌「知れたことよ。多少にやアよるめへ。これで頼みます」トうちかへの錢二百文紙に包み出せば、おしの手代二度びつくり。

「ハ、ハ、ハ、ハ、太々講は安うて金十五兩も出さんせんけりや、でけんわいな。」

彌「ナニ、是ではなりやせんか。」

手代「さよぢや、さよぢや。」

彌「太々講がならずば、是で蜜柑かうでもたのみます。」

かう中「ハ、ハ、ハ、ハ、べつかかうにさんせ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

太々講一橙  
にかけたり





そないな人  
—その様な  
人

へげたれ—  
吝嗇者の意  
なれども、  
こゝは單に  
悪口に用ひ  
たり

かう中「ハテこなわろは、何をきよろくさんすぞいな。誰ぢやといふのに。」

彌「イヤ、わろは米屋の太郎兵衛さんにお目にかよれば分りやす。」

かう中「ハテそないな人は、こちの講の内にはないもせぬもの。何ぢややら氣味のわるい人ぢやわいな。」

御師手代「ハテこな人は、あなた方のお連ではござりませんかいな。」

かう中「さよぢやわいな。」

手代「イヤ、それはどしたもんぢや。とつとと出ていかんせ。えらいへけたれぢやな。」

かう中「道中盗であるぞいな。ほり出してやらんせ。あたけたいな。」

彌「エ、そんなにいひなさる事アねへ。ほり出すとは何のこつた。途方もねへ。」

かう中「ハ、ア、お前のものいひはお江戸ぢやな。それでよめたわいの。いんまの先、お

江戸の太々講と一所で落合うたが、其時おまい乗らんした駕が、こちの中へ紛れこんで

ござんしたのぢやな。」

彌「なるほどさやう、そんならわつちの行く御師どのは何處でございやすな。」

手代「ナニ、おまいの行く所を誰が知ろぞいな。」



戸方ごがたの一組くみは内宮ないぐうの御師たしなるゆゑ左ひだりの方かたへ別れ行く。上方組かみがたぐみは外宮けぐうの御師たしにて、此所このところより右みぎの方かたへ別れ、田丸街道たまるかいだうの岡本太夫おかもとたいふの方かたにつく。門前もんぜんの帚目ほうきめ、盛砂もりせなに水みづうち清め、玄關げんくわんに幕打廻まくうちまはして、馳走ちそうの役々やくやく羽織袴はりはかまに出迎でじかへば、講中かうちゆうみななく、駕かこをおりて玄關げんくわんより打通うちとほる。この時とき彌次郎やじろうも駕かこかきのそさうにて、上方組かみがたぐみの中なかへ紛れこみこゝに來れど、十四五じゅうごちやうもある駕かこ、どれがどれやら分わからず。彌次郎やじろう駕かこを出でて同たなじく座敷ざしきに打うち通り、そこらをうろく見みまはせども、皆知みなしらぬ顔かほばかりなれば、

彌「ハテ合點がてんのいかぬ。モシく米屋こめやの太郎兵衛たろべゑ様はどれにお出いでなさいます。」

そばにゐた男なん「何なんぢやいな、太郎兵衛たろべゑさんとはこちや知らんわいな。そしてお前まへはねかから見みん顔かほぢやが、誰たれさんぢやいな。」

彌「ハイわつちはソレ、太郎兵衛たろべゑさんの町内ちやうないの者ものぢやが、ハテどうか違ちがつたやうな。北きた八ははどうした知しらん」ト無上むじやうにうろくきよろくとまごつき歩あるけば、みななく肝かんを潰つぶし、互たがひに袖そでをひきあうて、荷物にもつなど片寄かたよせ囁ささやきあふうち、講中かうちゆうの内うち二三人にんたちが立迎たちむかへ、「コレく、こなさん見みなれぬ人ひとぢやが誰たれぢやいな。」

彌「ハイく。」

いちはまだ  
ちて―一番  
先に立ちて

餘りくだくしければ略す。やがて奥の酒盛も終りて、サアおたちといふと、二組の太々講が一所になり、どさくさして奥より出づると、江戸組の御師の手代、いちはまだちて奥よりいで、

「サア〱お駕の衆、これへ〱。どなたもサアお召しなされませ」トあつちこつちを駆け廻り、駕にのせる。此うち又上方組のおし手代も、同じく駆け廻りて、

「こちらのお駕はこれへ〱」ト横づけにして皆々をのせる。米屋の太郎兵衛生酔となり、彌次郎が手を取り、

太郎「コウ彌次公、貴様おれが駕にのつて行かねへか」

彌「イヤ飛んだ事をおつしやる」

太郎「ハテ、わしはこれから歩くは慰だ。貴様しやれに乗つていかつし」

彌「さやうならへ、。こりや奇妙々々」ト駕にのれば、サアお立ちぢやと兩方の駕が一時にかきあけ、混雜して彌次郎がのりたる駕の人足、とんだ間拔と見えて、上方組の駕の中へ紛れこみたるに氣もつかず、さつさとかいて行きかゝるどさくさ紛れに、人もそれと心づかねば、だん〱と急ぎゆくほどに山田の眞中すぢかひといへる所にて、江

をがまぬか。それも飛入とびいりといやアちつとばかり金かねが出るから、無駄むだながらわしらが供ともになると、一文もんも入らず、大分しつたまち馳走ちそうになつて拜まがまれるといふものだから、どうだらう。」

彌やじ「それは願ねがつてもない有難ありがたい事ことでございやす。しかしそれが出来できやせうかね。」

太郎たろう「ハテわしが講親かうぢやだもの、どうでもなる。マア何なにしろ奥おくへ來きさつし。」

彌やじ「ハイさやうなら、モシ上方かみがたの、ちとこよに待まつてくんないせ。」

つれの上方かみがたもの「よいわいの。いてごんせ。」

太郎たろう「サアく二人ふたりとも來きさつし、來きさつし」ト此この太郎たろう兵衛べゑに誘いざなはれ、彌次やじも北八きたも草鞋わらじをとつて奥おくへ行ゆくと、上方かみがた者は一人ひとり店先みせさきに酒さけなど呑のみて待まつてゐるうち、奥おくは太々たい講かうの事ことなれば、御師おしよりの馳走ちそうにて、さいつおさへつ大騒たはさわぎの最中さいちゆう、又表またおもてに一群ひとむれの駕かぢ十四じゆちやうばかり、これは上方かみがたの太々たい講かうと見みえて、おしの手代てだい先にさきにたちて、

かこ「ホウよいく。えつこらさつさ、えつこらさつさ」トこれも同じおなく此茶屋このちややに入る。

手代てだい「サアく、御案内ごあんない々々。」

ちや屋ちやの女おんな「お早はやうござります。奥おくへお通とおりなさんせな」ト此内このうち、みなく駕かぢよりおりて

奥おくへ通とおると、すぐすぐに酒肴さけがなを持もち出し、太々たい講かう二組ふたぐみの大騒たはさわぎ、座敷ざしきの洒落しやれいろくあれども、

差  
おたち―脇

太々講―醜  
金したる金  
にて年を定  
めて参宮し  
太々神樂を  
奉る講中、  
伊勢講とも  
いひ世話人  
を講親とい  
ふ

師より迎ひの駕に打乗り來るが、御師の手代先にたちて、

「サアく、これぢや、これぢや。先どなた様も是で御休足なされませ」ト駕残らず茶屋の門におろす。此太々講は江戸と見えて、いづれも小袖ぐるみに、短いおたちをきめた手合、めいゝ駕を出て座敷に通る。此内一人の男、彌次郎を見つけて、

「イヤこれはどうだ。彌次どの、彌次どの、きさま伊勢参宮か」ト聲かけられて彌次郎びつくりし、見れば町内の米屋の太郎兵衛なり。江戸を立つ時、此米屋の拂をせず立ちたる事なれば、何となく彌次郎しよけ返りて、

「ハア太郎兵衛様か、よくお出かけなさいました。併し、爰であなたのお目にかよつては面目ない。」

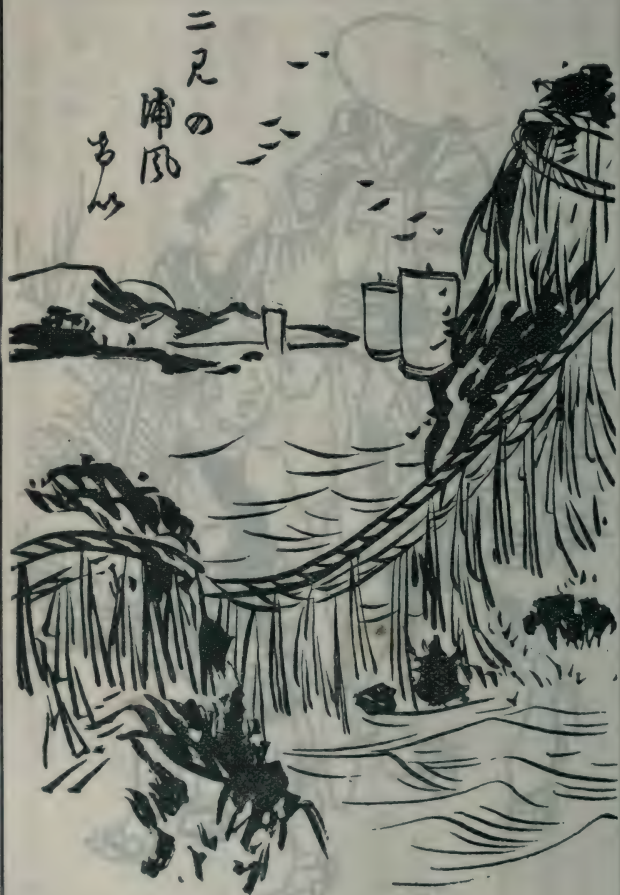
太郎「ナニサく、わしも仲間の太々講で、そのくせ講親といふものだから、據なく出かけましたが、よい所であつた。旅へ出てはとかく同國がなつかしい。奥へ來て一ツばいやらつし。」

彌「有難うございやす。」

太郎「連は誰だ。ハアまんざら知らぬ顔でもない。ナント貴様たち幸のことだ。太々講







手代「ハア義太夫と申すは、どこもとぢやいな。」

彌「その義太夫といふはな、大阪道頓堀。」

北「京は四條、お江戸はふきや町河岸において、永らく御評判に預りましたる。」

手代「かたはものはおまい方へあつたかいな。」

北「戲言ぬかすとひつばたくぞ。」

手代「えらいあこぢやな、ハ、ハ、ハ、ハ。」

上方もの「ちと休んでいこかいな。」

北「こよらは汚ねへ所だ。みな御師の雪隠と見えて、用立所と書いてある。」

彌「おきやアがれハ、ハ、ハ、ハ。」

三人共ある茶屋へ入り暫く休む。此内向より上方道者大勢揃のなり、女交りに聲張上げ、

うた「ござれよみせは順慶町の、通り筋からソレ瓢箪町を、ヤアとこさアよいとさア。チ

、、チン、。素見ぞめきは阿波座のからす。ソリヤサかはいくもヤアレ格子先、ヤ

アとこさ、ヨウいとなア、ありややこりやや、コノなんでもせ、チ、ンチ、ンチンチ

ン、ン、ン、ト此一群通り過ぎたる後から、太々講とみえて二十人ばかり、いづれも御

道者一社寺  
を巡拜し歩  
くもの

膝栗毛六編 卷之上

川崎音頭―  
伊勢音頭と  
同じ、古市  
の妓樓にて  
大勢の遊女  
の演する  
踊、もと古  
市近傍の川  
崎にありし  
踊なりと  
御師―初は  
伊勢の神宮  
を御師と云  
へる由、後  
には何國に  
ても神職に  
て参詣人の  
世話をし宿  
をなすもの  
を云ふ

川崎音頭に、伊勢の山田と唄ひしは、和名抄の陽田といへるより出でたるにや。此町十  
二郷ありて人家九千軒ばかり商賈薈をならべて、各質素の莊嚴濃にして、神都の風俗  
おのづから備り、柔和悉鎮の光景は餘國に異なり。参宮の旅人たえ間なく、繁昌さら  
いふばかりなし。彌次郎兵衛北八は、かの上方者と打連れ、此入口にいたると、兩側  
家ごとに御師の名を板に書きつけ、用立所といへる看板竹葦の如く、こよに袴羽織ひつ  
かけたる侍、何人となき馳違ひて、往來旅人の御師にいたるを迎ふと見えて、一人の侍、  
彌次郎兵衛に近づき、  
おしの手代「モシ、あなた方はいづれへお越しでござりますな。」

彌「知れた事、太神宮様へまゐりやす。」

手代「イヤ太夫はどれへ。」

彌「太夫は竹本義太夫殿さ。」

んせんか、どうぢやいな」トやたらに大風な事ばかりいふ故、彌次郎こいつをおだてあけて、遊ぶつもりに胸算用して、

彌「奇妙々々、どうぞお供致してへの」

上がった「是から世古の松坂屋で支度して、妙見町の藤屋としよぢやないかいな。サアサアもう行こわいな」

彌「ドリヤ出かけやせう」トここの酒代を拂ひ立出づる。此町の出はなれに宮川といふ舟渡しに至りて、

宮川や神に結縁をむすばんと、すくへる水のかけのしらゆふ。

是より中河原を打過ぎ、堤世古を打越えて山田の町にさしかよりける。

しらゆふ  
白木綿

上がた「おもしろい。サアおろして見やんせ。」

北「オ、眞逆様におつことしてやらう」ト馬の尻をぴつしやり。馬驚いてはね上り、上がた「ヤアコリヤたまらん。何するのぢや。」

彌「おれもたまらん。コリヤくどうする、どうする。」

馬士「エ、畜生め、ドウく」ト此内、しんちややあけの原を打過ぎ小幡につく。この所より馬をおりて、三人とも茶屋にやすむ。上方の者、北八に向ひていふやう、

「コレ、おまいは何としてわしが頭をうたんした。」

彌「もういよにしなせへ。おたけへに旅ぢやアいろくな事があるもんだ。了簡しなせへ。わつちが一ぱい買ひやせう。モシ女中、何ぞ肴があらば爰へ一ぱい出してくんた」ト

これより酒盛となり、上方者も、ひとつなる口ゆゑ、だんく酔がまはりて、

「コリヤえらう酔うたわいな。コレ彌次さんとやら、わしやお前がえらう好きぢやが、此わろはいかんぞや。とんといかんけれど、お前の連ぢやしよことがない。斯うしよぢやないかいな。これから山田の妙見に一所に泊つて、古市をおごろかいな。わしやあこではえらう切れるがな。千束屋の鼓の間、柏屋の松の間、わしが案内するさかい、行か

わろ—和郎  
野郎  
古市—伊勢  
の遊廓









彌「イヨく、おもしろへく。ナントわつちに一くさり教へてくんなさらねへか。」

上「た「そりや安い事ぢやわいな。私についてやりなされ」ト此内、北八は細長き竹一本拾ひて、上方者があまりに高慢くさい事をいふゆるゑ、つよき落してやらんと馬の後から狙つて來ることをば知らず、上方者は夢中になり、又國太夫ぶし、「チンチリツンく」チンチン、ほんに女は執念の、深いといふは嘘ぢやない。死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあけてちやうどうつ」トいふ所にて北八手を延し、かの竹にて上方者の頭をびつしやり、

上「た「ヤア、コリヤどやつぢやい。人の頭へ磔うちをるがな。」

彌「ハ、ハ、もう一ぺん今の文句を。」

上「た「ほんに女は執念の、深いといふは嘘ぢやない。死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあけて。」

北八「うしろより又びつしやり、

上「た「アイタ、ハ、どやつぢやい。どめつさうな。えらう磔うちくさるがな」ト振返りみれども、北八ちやつと彌次郎が乗りたる方の馬の蔭に隠れて、一向みえず。

る恐れる。」

上「かた「イヤ、それよりかお江戸の衆が、吉原の櫻はえらいと、いかう自慢せらるよさ  
かいで、わしやわざく吉原へいて見たが、何の櫻はありやせんがな。」

彌「そりやお前いつ頃いきなすつた。」

上「かた「わしがいたは、たしか十月時分。」

彌「何の十月櫻があつて堪るものか。」

上「かた「ハアさうかいな。それでも京の小室や嵐山には、年中櫻がちんとあるがな。」

彌「そりやア木ばかりだらう。花は年中ありやアしめへ。」

上「かた「さよぢやわいな。イヤ又江戸衆は長唄をよう唄うてぢやが、京の宮園や國太夫

は又格別な物ぢやわいな。」

彌「國太夫といふほどのやうに唄ひやす。」

上「かた「國太はかうぢやいな」トまじめに聲をはり上げて國太夫「やがてわたしが年あ  
けて、お前と女夫になるならば、肩を裾へはまだな事、足を耳にかけてなりとも添ひま

せう。チンくくくく。チンチリツンくく。」

ちんとーち  
やんと

國太夫ー國  
太夫節のこ  
とにて常磐  
津の一派、  
吾妻國太夫  
の開きしも  
の



いつきに一  
一氣に、一  
息に  
とつけへこ  
—とりかへ  
つこ

かくやへー

しや百日ほどをる内、頓と手水にいた事がないがな。それから江戸を立て、鈴が森たらいふとこへ来て、ヤレ嬉しや、こよでこそ小用して來まそと、海の中へためくた小用を、いつきに三斗八升ばかりしをつたが、えらうよかつた。あしこは綺麗で、えらいおつきな小用擔であつたわいな。ハ、ハ、ハ、ハ、」

彌「京では小便と菜と、とつけへこにするといふ事だから、小便も大切なもんだに、おめへ海の中へ惜しい事をした。その三斗八升で取りけへたら、菜が馬に五駄や六駄は來るだらうに。それだから京では屁をひるにも、出さうになると、ちやつと裏の畑へ驅けて行つて、生えてある大根や菜の上へ屁をひりかけるといふ事だが、なるほど是も肥料になるだらう。」

上がた「さうぢやわいな。其屁をひりかけた菜をよう刻んで、土にまぜて壁をぬりをるがな。京ではその土をへなつちといふわいな。」

彌「そうてへ京と言ふとこはあたじけねへ所よ。前度わつちが行つた時分は、三月で花見の最中、てんくゝに幕をうつて、結構な高蒔繪の重詰なんどを取り散らした所はいが、その重の中に何があるとと思へば、かくやへの香のものに、きらずの煮たやつは恐れ

旅人はいづれに心うつるやと、おもんおかんが賣れる焼もち。

それより菘川を打渡り、齋宮を過ぎて明星が茶屋に休みたる時、こよに上方者と見え、はでな大縞の引廻しを着て、帳面と風呂敷包を脊負ひたる男、馬の値をつけてるたりけるが、

馬士「モシくお前がたア、其荷をつけてお一人此旦那と二寶荒神で乗らんせんかいな。」  
上がったもの「お前方も大方參宮ぢやある。わしも古市まで掛取に行くさかい、一所に乗りなされ、話もて行こわいな。」

話もて一話をしながら

彌「いかさま、昨夜の夜道で大疲勞だ。北八おらア乗つてゆくぞ。」

北「そんなら此荷をつけて貰はう。」ト此所にて馬の相談ができ、上方者と彌次郎と二寶荒神にて出かける。馬ヒインく。

上がったもの「お前がたア江戸衆ぢやあるな。」

彌「左様さ。」

上がった「江戸はえいとこぢやが、わしや去年行てえらい目にあうたがな。アノ江戸に似合はん、どこへ行ても手水場が、とつともうえらいむさくろしうて、むさくろしうてわ

北「アノ白い物が、アレ〜」

人そく「白い物とは、あれか〜。ありや道中で馬の沓や草鞋が燃えてをるが、その煙が月にうつつて白うなつて見えるのぢやわいな」

彌「ハ、アさうかハ、ハ、ハ。コリヤ有難うござりやす」ト人足に別れて、三人ともほつと溜息をつき、打笑ひつよやがてその所に辿りつき見るに。成程草鞋、沓などを積重ねて火をつけ燃したるにて、その煙白く立上り見えたるなり。此處を過ぎて松坂にいたり、まだ夜深ければ道づれのかの男を頼み、寐るばかりの事なれば、あたりまへの旅籠を出すも費なりと、町の入口に木賃宿を世話して貰ひ、そこに泊りて一夜をこそは明しける。

斯くて月落ち鳥鳴きて、時の鐘明六ツを告げわたる。彌次郎北八早くも起きいで、此所を立出づるとて、

鳶も輪になりて舞ふ日ぞたび人の、をどり出でたる松坂の宿。

右の方小山の薬師を打過ぎ、櫛田といふにいたる。こよにおかん、おもんといへる二軒の茶屋あり。餅の名物なり。

たくくとふるふ。折まから向むかより人ひとの來くると見みえ。

うた「戀こひの重荷おもたをナ、積つんだらおまにへ、いく駄だあるやら知しれぬくいナアシアエ」ト  
唄うたひながら來くるは、助郷すけがうの人足じんそく四五人。

彌や「モシく、お前方めへがたアどつから來きなさつた。」

人ひとそく「ハア、わしらアこの近郷きんせうぢやが、役やくに當あたりをつて、津つまで行いきををるのぢやわいな。」

彌や「ソリヤアいよが、こよへは如何どうして來きなさつた。」

人ひとそく「ハテこな人は、其役そのやくで津つへ行いくのぢやといふのに。」

彌や「たどしお前方めへがたも幽靈いゆうれいぢやアねへか。どうも人間にんげんならこよ迄まで生きて來こやう筈はずがない。」

人ひとそく「何なにいはんすやら、根ねから葉はから分わからんわい。」

北きた「イヤ、向むかに化物はけものがるるのに、どうしてお前方めへがたアその前まへを通とおつて來きなさつたといふこ

とや。」

人足ひとあし「コリヤこなさんたちは、三渡みわたの藤九郎とうきゅうらう狐きつねかいこいたのぢやな。ハ、ハ、ハ。」

北きた「ナニサ、向むかを見みなせへ。」

人ひとそく「むこに何なにがるるぞい。」

根ねから葉はか  
ら—まるで

いこいた—  
よこした

廣がり立つてゐる様子。是は何だらうと先へも進まずたち止り見れば、又きゆるやうにばつたりなくなるかと見れば、又すつくり大きくなつたり、小さくなつたり。その形分らず。

彌「マア何だらう。」

北「裾がねへから亡魂に違はねへ。」

男「ア、アレ、あれぢやもの、どうして先へ行かれましよいな。」

彌「正體が分らにやア猶氣味がわるい。コリヤ行かれぬ、後へ戻らう。」

男「わしもお前方をたよりに又參じたが、どうも怖うて行かれんわいな。あとへ戻つて又つれの人が出来をつたら、又爰迄來うわいな。二三度もそないに行たり戻つたりしをつたら、ちやうど夜が明けやうわいな。」

彌「何でも白装束だから、何ぞの亡魂に違はねへ。」

北「アレ、青い火が見える。」

男「エ、どうかこつちへ來るやうぢや。」

彌「コリヤどうしやう。とても先へは行かれぬ、行かれぬ」ト三人ながら色青ざめてが



男「イヤ、この先にとつとえらいことがあるがな。」

彌「何がえらい。」

男「聞かんせ。わしや今日江戸橋までいて歸りに、きつう遅なつてな、いんまの先この松原に來をつたとこが、何ぢややら向に大きな白い物が立つてゐるをつて、それがあつちやへ行たりこつちやへ來たり、ぶうらり、ぶうらり。もうくく私や怖うてく、コリヤ死ぬかと思つたわいな。そぢや物どうして向へ行かれるもので、コリヤならんわいと後もどりして、どうぞよい連が欲しいと思ひをつたとこへ、お前方に行きあつたのぢやわいな。」

彌「エ、その白い大きな物がゐるといふは、何處らに。」

男「イヤ、おつきにこの先ぢやわいな。」

彌「エ、何が出るものだ。おいらが先へ行かう。おれについて來な」ト打連れてこの松原を一丁ばかり行きたる時、

かの男「アレ、向に、ア、コリヤ堪らぬく」トがたく震ふ。二人も怪しく、はるか向を月明にすかし見れば、何とも分らぬ白き物、凡そ一丈ばかりも高く、街道一ぱいに

あつちや、こつちや、上方方言、彼處此處、尾張より伊勢に入れば殆ど上方言葉なり。

北「待ちなよ。呑口がはづれさうだ」ト小便をすれば、その男もたちどまり待つてゐる故、彌次郎聲をかけ、

「モシ、おめへ今頃どこへお出でなさる」トこはぐいへば、かの男存じの外優しきものいひにて、

「ハイ、私は松坂へ戻りをる者ぢやがな、夜さり獨り怖うて怖うて、モどうしよいなと思ひをつた所へ、お前方が通らんす故、コリヤよい連ぢやと、あとからお二人を心だよりに參じたわいな。」

北「イヤ、お前なりには似合はぬ弱い音を出しなさる。そしてそんな長いやつを差してゐながら。」

かの男「ハ、ア是かいな。コリヤあとでひらうて來た竹片ぢやわいな」ト腰から抜いて杖について行く。

彌「ハ、ハ、ハ、脇差ではねへの。わつちらア又、お前が怖くて怖くて、さつきにから、コリヤひよんな奴に見こまれたと思つたが、マアお前臆病者で、わつちらも落付いた。」  
北「もう、これから三人といふものだから大丈夫だ。」

彌「ヤアくくく、あの家がどうか歩いて行くやうだ。」

北「ほんになア、こいつは可笑しい。」

彌「イヤ、をかしくない氣味がわるい。どこの國にか、家が歩くといふは唯事ぢやアねへ。」

北「ナニサ、これも赤坂の泊り位で、みんな狐めがすることだらう。弱味を見せると猶つきあがりをする。構ふこたアねへ。さつくとあよびなせへ」トわざと力み返つて、足早に件の火におひつき、くらまぎれに透しみれば燈の車なり。小屋のうちに火をたき茶をわかしながら車をおしてゆくのなら。二人は可笑しくこよを過ぎ行くに、折ふし月は出たれども、草木もねぶる眞夜中のうそ淋しさ、後にも先にも只二人、うはべはがまんに強ばつても、心は至つての臆病者。こはぐ辿りゆく後より一人來るものあり。彌

次郎ふり返り見れば小山の如き大男、長脇差を腰に横たへ來るはたゞものならず。我々をめぐりつけ來るならんと、北八に呷きて、

彌「コウ、後からをかしの奴がついて來る。ちと急いでやらかさう」ト足早に走れば後の男も又走る。

彌「イヤ犬に取巻かれた時は、宙へ虎といふ文字を書いて見せると、犬が逃けるといふ事だから、先刻から書いてゐるが、ねつから逃げやアがらぬ。こいつら皆無筆の犬ださうな。シツシく」トどうやらかうやら追ひちらかして、行くともなしに思はずこの町を出はなれて、「コリヤ詰らねへものだ。まよよ北八、夜どほし歩かうぢやアねへか。きつい事アねへ。やらかせ、やらかせ。」

北「おめへ飛んだことをいふ。まだ九つにやアなるめへ。またどこぞで泊りてへものだ。」

彌「それだとして今頃に起きてゐる内はなし。イヤあるぞく、はるか向に火が見える。アノ火を目あてに行つて宿を頼まう。」

北「オ、サ、それがいよ、それがいよ。しかし挑燈の火ぢやアねへか。」

彌「飛んだことをいふ。戸の隙間よりもれる火だものを。」

北「ほんに家のうちで焚く火だ。何でも是非あそこを頼んで泊りやせう」ト足に任せて急ぎ行く。やがてそこに近づきたるに、かの目あての火は、おのれとだんく先へ歩み出して行く體に驚き、

おのれと—  
ひとりで—

北「コレサ彌次さん、力んでもはじまらねへ。全體お前の思付が悪い。サア爰を出てどこぞ木賃にでも泊りやせう。コリヤアどなたも眞平御免なさりやし」ト北八がだんくの詭言に、亭主は腹はたてども可笑しさも半分、みなくこの二人がはうくの體にてそこゝに支度し出て行くなりを見送り、家内のものども手を叩き、どつくと笑ふ。彌次郎は、始終ふくれ面して力み返り出て行くをかしさ。北八後にしたがひ、

いとほまじとほり一ぺん旅の恥、かきすててゆく扇短册。

かく詠みて後は笑を催し出かけたれども、はや亥の刻過ぎたる見え、家並に戸を閉ちてひそまりかへり、いづれを旅籠屋とも見えわかつた。泊るべき方もなくして、うかうかとたどり行くほどに、あはや軒の下の犬どもが起き立ちて吼えかよれば、彌次郎兵衛きよろしくして、

彌「エ、この畜生めらア悪くふざきやアがる」ト石ころを拾ひて打付くれば、なほく犬は怒りたちて取巻く。

北「構ひなさんな。犬までが馬鹿にしやアがる。オヤ彌次さん、乙な手つきをしてお前何をする」

亥の刻—午  
後十時



ございとい  
ひて錢を乞  
ひあるける  
物貰あり、  
その洒落な  
るべし

四ツ—午後  
十時

ほからかし  
—追出す

ちやが丸「時に彌次郎兵衛先生、その質物の一九を、いんま連れて來まいかい。」

彌「イヤ、わしはもう出立いたさう。」

ごま汁「なんぜ、今頃何時ぢやと思つて、もう四ツぢやがな。」

彌「さればの事、わしが疝氣は變つたことで、此やうに畏つてばかりをると、だんく悪くなる。いつも夜分外を歩いて冷えさへすりや、ぢきによくなくなるから。」

ごま汁「ハ、ア、それで今立たうといふのか、さうさんせ、さうさんせ。たとひこなさんが居やうというても、こゝにやもう置きやせんのかや。早う出て行かんせ。ようも人の名を騙つてだまさんしたの。」

彌「ナニ騙つたとは。」

ごま汁「ハテ騙つたわいな。ほんまの十返舎先生は名古屋の川並連中から狀がついて來て、ありや違はないがな。」

たれ安「初からこなさんの不都合たらぐ、こないな事であらうと思つた。こちからほからかし出されぬ中に、ちやつくと出て行かんせ。」

彌「何だほかし出す。コリヤおもしろい。」

うて、

ちやが丸「何と先生、コリヤおもしろい事ができました。御不快ではござりませうが、

ぜひその贗物には、お遇ひなさるがようござりませう。」

彌「ハテさて困つた事をおつしやる。」

たれ安「イヤ、時に先生のお宅は、江戸表では何處もとでござりますな。」

彌「されば何處でかござつた。オ、それく鳥羽か、伏見か、淀竹田。」

かゆき「山崎の渡を越えて、與市兵衛とお尋ねあれか。おきやアがれ。ハ、ハ、ハ。」

ごま汁「イヤ、たしかあなた方のお笠に、江戸神田八丁堀、彌次郎兵衛と書きつけてあ

りをつたが、その彌次郎兵衛様といふは、誰さんの事ぢやいな。」

彌「ハア、聞いたやうな名だが誰でかあつた。オ、聞いた筈だ。わしが實名を彌次郎兵

衛といひやす。」

ごま汁「ハ、ア、つねにやまるらぬ、ちよつくとまるらぬ彌次郎兵衛でござるといふ

は、あなたの事であつたか。」

彌「さやうく。」

オ、それそ  
れ云々―忠  
臣藏の淨瑠  
璃、勘平の  
聲色を眞似  
しなり

つれにや云  
云―當時人  
形を携へ與  
次郎兵衛で

鳥渡申上候。只今東都十返舎一九先生、私宅へ御着有之候。勿論名古屋連中并吉田大嶽よりも書狀参り申候。早速貴公御噂もいたし置候事故、追付貴宅へ同道参上可致候間、右御案内申入置候。已上。

こま汁「コリヤどうぢやいな。とんと合點のいかぬ。ウ先生、たど今朋友どもからかやうに申しこしましたが、定めてこやつ、尊公のお名前をかたつて参つたものと見える。さいはひ追付これへ参るとあれば、ナンとお遇ひなされて、慰んでやるぢやござりませぬか。」

彌「さて〜大變なことだ。いやはや横着な奴もあればあるものだ。しかし私はあひますまい。」

こま汁「なんぜ〜。」

彌「イヤ、どうか先刻から持病の痲氣が起りました。さやうでなくば、その質物いたし方がござるものを、さて〜困つたものだ」ト思ひがけなくこの仕儀に及ぶ、さすがの彌次郎しよけ返りてゐる。亭主こま汁をはじめ、皆々先刻より彌次郎が振舞、合點ゆかずと思ひしところ、さてはと心づき、こいつ化の皮を現してくれんと、互に袖をひきあ

衛門、下谷三枚橋に住し長根と號す、弘化二年歿す  
戀川春町—小説家にして畫家を兼ねたり、小石川春日町に住す、寛政元年歿、年四十六

なさればいよに」ト氣を付けられて、彌次郎面目なけれど、押の強い男なれば、いけしやアしやアとして、あとの短冊へは道中すぢの歌をかく。此内、北八も手もちなければ、はりませの屏風を見て、

北「ハ、ア戀川春町の繪がある。モシあの畫の上にある讚は何でござります。」

ごま汁「イヤ、あれは詩でござります。」

北「こちらの布袋の繪の上にある詩は、誰がいたしたのでござります。」

ごま汁「イヤ、あれは語でござります。澤庵和尚の」トいふ故、北八心の中にこいつ忌

ましい奴だ、さんかといへばしだといふ、しかといへばごだいといふ。何でも今度は一

ツ餘計にいつて、まごつかせてやらうと、そこら見廻し、

北「モシ、お掛物の畫の上に出てあるは、大方六でござりませうな。」

ごま汁「六か何か知りませぬが、あれは質に取つたのでござります。」ト此うち勝手より

女たち出で、

女「ハイ、ひけつら様からお手紙が參じました。」

ごま汁「ドレ、何ちやあるな」ト此手紙をひらきて、たかぐとよみて見れば、

千秋庵大人  
 狂歌師赤松正恒、三  
 陀羅法師の  
 號を以て世  
 に知らる、  
 神田お玉が  
 池に住し文  
 化十一年歿  
 す  
 芍薬亭大人  
 狂歌師  
 菅原治郎右

のお歌を、お認め下さりませ」ト扇短冊をつきつけられ、彌次郎しかつべらしく取上げ  
 て、何の出はうだい、やらかしてくれんといろ／＼考へても、わが詠みし歌には、これ  
 ぞといふ歌もなく、早速に思付もなければ、これまで聞き覚えるたりし、人の歌をかき  
 てさし出せば、ごま汁これを頂き見て、

「これは有難うござります。お歌は、ほとよぎす自由自在に聞く里は、酒屋へ三里豆腐  
 屋へ二里。ハ、アなる程、どうか聞いた様なお歌ぢや。きぬ／＼のなさけをしらば今ひ  
 とつ、うそをもつけや明六ツの鐘。イヤこれは千秋庵大人のお歌ではござりませんか」  
 彌「ナニ私がよみ歌、しかも江戸中大評判の歌、誰知らぬものはござらぬ」

ごま汁「イヤ、さよぢやあるが、先年、私お江戸へ参じた時、三陀羅大人、芍薬亭大人な  
 どにもお目にかよりました、すなはちお短冊もいたどいて歸りましたが、御覽なされ  
 その屏風に貼つてござります」トいふゆる、彌次郎ふり返りて見れば、なるほど屏風に三  
 陀羅と書きて右の歌あり。北八をかしく氣の毒なれば、

「イヤ私の先生はそよつかしいが癖で、ひとの歌だのわが歌だのといふ差別は、一向ご  
 ざりやせぬ。コウ彌次さん、イヤ先生、是まで道中筋でよみなさつた、お前の歌をかき



ん方かたなければ、大きおほに感かんじて、

綱つな「まことに珍めづらしいお料理御仕法れうりごしはふ、感心かんしん致いたしました。そしてかやうに同たなじやうなる石いしが早速さつそくによく揃そろひました」

「こま汁こまじゆ」イヤ、夫それはかねて蓄たくはへおきます。お目めにかけませう」ト勝手かつてにかけいり、吸物椀すひものわんをいるよやうな箱はこをもち出いで、「御覽下ごらんくだされませ。こないに二十人にんまへは所持しよぢいたしてをります」トかの箱はこを見みするに、二人ふたりはをかしく、其箱そのはこの横よこの方に何なにか書かきつ付けてある故ゆゑ、よんでみれば、葺蕪ごんにやくのたよき石いし二十人にんまへとかきつけたり。此内このうち、近所きんじよの狂歌きやうかよみ、おひくゝに來きたりて、

「御免下ごめんくださりませ。」

「こま汁こまじゆ」ヤ、これは小鬚長こびんちやう元成げんなり様さま、サアくゝどなたもこれへくゝ」

「ハイくゝ、是これは十返舍べんしや一九先生せんせい、初はじめてお目めにかよりました。私わたくしは富田茶賀丸とんだちがまると申まうします。次つぎは反齒日屋呂そらばはひやろ、水鼻垂安みづはなだれやど、金玉きんたまの嘉雪かゆゆ、いづれもお見知みしり下くださりませ。」

「こま汁こまじゆ」時に先生せんせい、お喧やかましうはござりませうが「おむづかしからうといふことを、おやかましからうといふ國詞くにことば也なり。一扇面せんめん、短冊たんざふなどお願ねがひ申まうしたいが、何なんなりともおもち合せ

けしからん  
一方なら  
ぬ、大層の  
意

て、お氣の毒でござりやす。」

ごま汁「ナニ、その石をあがりましたか。」

彌「食べました段か。」

ごま「イヤそれは滅相界な。石をあがるといふは、けしからんお齒のお達者な事でござります。しかし火傷はなさりませんかいな。」

彌「それはなぜな。」

ごま汁「イヤ、あの石は焼石でござります。すべて茸蕒といふものは、水氣の取れぬものでござりますから、あの焼石にてお叩きなると、水氣がとれて格別風味がよござります。その爲の焼石でござります。食がるのではございませんわいな。」

彌「ハ、ア、なる程く、聞えました。」

ごま汁「マアさうしてあがつて御覽なされ。コレおなべよ、石が煖とくなつたら持てこんかい、早うく。」ト此内、皿に石の焼けたるを載せて、女もち出で、引きかへてゆく彌次郎北八亭主が言葉の如くして、かの茸蕒をはさみ、件の石にうちつけ見るに、シウ引というて水氣とれたるところを、味噌をつけてくらふに、風味格別かろくして、いは

彌「どうでも石だく。コリヤどうして食ふものだと聞くと業腹だが、どうも根つから合點がいかぬ。」

此内、亭主勝手より出で、

「是は何もござりません。宜しう召上りませ。イヤ石がさめは致しませんか。コリヤく、ぬくとい石をかへてあげ申せ」トいはれて、二人共いよいよよぎよつとせしが、いかにしても此石のくひやう、知らぬといはれんも業腹と、彌次郎兵衛これをくひたる貌にて、「イヤもうお構ひなさるな。石もはや宜しうござる。扱珍しいものを賞翫いたしました。江戸表などで、折ふし小砂利を唐辛醬油で煎りつけるか、又は煮豆などのやうにいたしてたべる事がござります。それに又石塔なども、嫁をいぢる舅婆などに食はせたが、薬だと申して食へますが、私も随分好物でござります。今度府中に逗留いたしました時、馬蹄石を泥龜灸にして振廻はれましたが、ツヒ私四ツ五ツたべました所に、お聞きなさい、腹が重くなつて、立たうとした所一向立たれず。仕方なしに兩方の手を棒しばりのやうにいたして、擔いで貰つて、やうくと手水に行きやした。御當所の石ごろは、かくべつ風味もようござりやすから、又たべすぎたらば御厄介になるだらうと存じ







よくくみれば石なりける故、肝を潰し、

北「コリヤ石だく」

彌「ナニ石なものか、ノウ女中」

女「それは石でござります」

北「いかさま。もう少し」トひらを出して、女の立つてゆくを待ちかね、

彌「コウ、何と馬鹿くしい、どうして石が食はれるものか」

北「イヤ夫でも、くはれる仕法がありやアこそ出したであらう。さつき當所の名物を上

けませうといつたア、何でも此石のことだ」

彌「それだとして、つひぞ話にも聞かねへ」

北「イヤ待ちなよ。江戸で團子のことをいしくといふから、大方コリヤ團子であら

う」

彌「ハ、ア、なる程そこもある。よもやほんとうの石ぢやアあるまい」ト又箸をもつてつ

つき見るに、やはり石也。これは不思議ときせるの雁首にてたよき見れば、かつちり、

かつちり。

いしく、  
おしいの  
略にて婦女  
子の語、歌  
に、花より  
も團子の京  
となりけ  
り今日もい  
しい明日  
もいしく

ごま汁「いかさまあなたは。」

北「私は十返舎の秘蔵弟子、一片舎南錠と申します。ふしぎな御縁で御厄介にあづかります。」

ごま汁「ナニサ、とつとねからお構ひ申さんぢやて。イヤ先生、ちとお寛ぎなされまいか。」

女「御膳がよござります。」

とつとーと  
んと、ちつ  
とも

ごま汁「早うあけんかい。御ゆるりと召しあがりませ。」ト亭主は勝手へ立つてゆく。女膳をもち出で、彌次郎へすゑて行く。

彌「まんざらでもねへ。」

北「いと女だ。しかしこよぢやアお前も先生株だ。おとなしくせざアなるめへ。」トこの内、又十一二ばかりの小ぢよく、膳を持ち北八にすゑる。兩人箸を取り、くひかより見るに、膳の向に、ひらめなる皿の中に、大福餅の大ききの如き、黒き物をのせて出せり。平には菟弱を盛り、味噌は別に小皿にあり。彌次郎小聲にて、

彌「ナント北八、この皿にある丸い物は何だらう。」

北「されば、何であらうか。」ト箸にてつよき見るに、いたつて固く、はさめども動かす。

小ぢよくー  
女兒を云ふ  
これ大かた  
は娼家の詞  
也へ俚言集  
覽

ふくりんか  
けて云々―  
それより一  
倍も吝いと  
の意  
いかう―甚  
だ、大層

彌「そこで人のばかり呑みなさるのだな」

こま「さよぢやわい」

彌「そりや京の人へふくりんかけて、お前があたじけねへといふもんだ」

こま「ハアさうかいなハ、ハ、ハ、。時にいかう遅なつた。ちと急ぎましょか」ト足を早めて行くに、ほどなく月本に至り、此邊より烏の宮へ參る道ありと聞きて、

照りわたる秋の月本ならば今、うかれまるらん烏御前に。

かくて雲津にいたり、南瓜のごま汁、おのが家に案内するに、これも旅籠屋と見ゆれど、折ふし相客もなく、奥の間に請じ入れ、彼是ともてなしければ、彌次郎兵衛はあらぬ名をいつはり、かゝる目にあふも一興なりと、北八もろとも心の内にをかしく、やがて湯にも入りしまひ、悠々と坐しるたるに、亭主ごま汁出でて、

「コレハお草臥でござりましょ。ようこそお入り下されました。しかし折あしく此頃は不漁で何もお肴がござりません。それ故何も御馳走がでけぬくい、當所はいたつて蕨蕨がよござりますから、マア是でも上げましょと存じて、申し付けおきました」

彌「もうお構ひなされな。イヤ御主人、この者は未だお近付にならぬけな」

ごま汁「サア〜おつけなさい」トくはへた煙管をさし出せば、京の人吸ひつけにかゝり、

京「バツ〜〜〜」

ごま汁「まだつかんかいな」

京「バツ〜〜〜」

ごま汁「何ぢや、お前のきせるにや煙草がついでないがな。ハ、ア聞えた。吸ひつける振して人の煙草をのむのぢやな。モよさんせ、よさんせ。ノウお江戸の先生、京の衆はないに吝いのねつこぢやわいハ、ハ、ハ、時に先生、もう一ぶく下さりませ」

彌「京のものを吝いといふが、お前もさつきにから、わしが煙草ばかり呑んでる」

ごま「イヤ、私は煙草入を持ちやせんもの」

彌「忘れて出なさつたのか」

ありやうは、全體がないのぢやわいな、そのわけは私はえらい煙草好き、一日に拾匁では足らぬ位ちやゆる、コリヤ自分で買うて呑んでは堪らんと思つて、それから煙草入はやめて、煙管ばかりもて歩きをります」

吝いのれつこー極々吝いの意

ありやうは、  
をい  
へばの意

## 五編 卷之下

津つの入口いりぐち、左ひだりの方に如意輪觀音堂じよいりんくわんたんだうあり。又またかうの阿彌陀あみだといへるもあり。此所このところは上方筋かみがたすぢより參宮さんぐうの人ひとおちあふ所ところにて、往來わうらいことに賑にぎはしく、中なかにも都方みやこがたの若わかき人々ひとびと、小袖こそでの上うへに揃そろひの單衣ゆかたを引ひぱり、つゞら馬じまを引ひき並ならべ、

うた「チ、、トシ、、エイ、、引。ござれ都みやこの名などころ見みせん。祇園ぎおん清水しみづやれ音羽ねは山やま。ヤア、とこなア、ヨウいやさア、ありややこりやや、コノなんでもせエ、引、チ、、チン、、エイ、、引。ぢしゆの櫻さくらに幕まきうちまはし、霞かすみがくれにものおもはする。ヤアとこなア、ヨウいやさア、ありややこりやや、コノなんでもせエ引。」

彌や「コウ、北八見きたはちみや、がうぎうぎに美うつくししいたほが見みえる。」

ごま汁ごまじゆ「アリヤみな京都きやうとの衆しゆぢや。あないに立派りつぱにしてお出でやつても、ねから錢ぜにはつかやせんがな。」

京きやうの人ひと「御無ごむしん心しんながら、火ひ一つ借かしておくれんか。」

あないに—  
あのやうに—



わざと兪服そくを着きいたして、やはり同者どうしやの旅行りょこう同様に、心安こころやすく何でも氣きまかせに風雅ふうがを第一だいいちと出でかけました。

「ごま汁ごまじゆ」それはお樂たのしみでござります。私宅わたくしたくは雲津くもつでござりますが、どうぞお供ともいたしたい。」

彌はしめし「お思召おしめしありがたい。」

「ごま汁ごまじゆ」まことに御珍客ごちんきやく、近所きんじよの社中しゃちゆうどもへもお引合ひきあせ申まうしたい。いづれ御一宿おんしゆくをお願ねがひ申まうませう。マアく不思議ふしぎな御縁ごゑんでよいとここでお目めにかよつた。時ときにこよが小川こがはと申まうす所ところ、饅頭まんぢゆうの名物めいぶつ、一ぶくあがりませんか？」

彌はしめし「イヤ饅頭まんぢゆうには懲ちがりはてた。すぐまゐに參まゐりませう。」ト打うちつれて此所こゝをゆきすぐるとて、から尻しりのうまい名代なだいをたび人に、くひつかせんと賣うれるまんぢゆう。

これより行くほどなく津つの町まちにいたる。前まへに高田たかたの御堂みだう、右みぎの方に見みゆる石井殿いしゐでんといふこれなり。

おまな板いたなほしに鯉こひのひれふるは、これ佐用さよつめ姫ひめが石井殿いしゐでんかも。

ひれふる—  
松浦佐用姫  
の故事をか  
げたり

尙左堂俊満  
—狂歌師窪  
俊満、江戸  
に住す、戯  
號南陀伽紫  
蘭といひ當  
時の人なり

膝栗毛云々  
—一九は膝  
栗毛著作の  
爲文化二年  
十一月に參  
宮したる事  
あり

彌「ナニサ、皆出はうだいでござりやす。」

男「イヤ驚き入りました。先達てお江戸の尙左堂俊満先生など、當地へお出でよござり  
ました。」

彌「ハアなる程、さやうく。」

男「あなたの御狂名は。」

彌「わつちやア十返舎一九と申しやす。」

男「ハ、ア、御高名うけたまはり及びました十返舎先生でござりますか。わたくし南  
瓜の胡摩汁と申します。さてくよい所でお目にかかりました。此度は御參宮でござり  
ますか。」

彌「さやうさ、かの膝栗毛と申す著述の事について、わざく出かけました。」

こま汁「いかさま、あれは御妙作でござります。是へお越しなされる道すがらも、吉田、

岡崎、名古屋邊、御連中方、御出會でござりましたらう。」

彌「イヤ東海道は宿々残らず立寄る所がござれども、參ると引止められました、饗應に  
あひまするが氣の毒でござるから、みな直通りにいたしやした。それゆる御覽のとほり、

子ども「あはうよ、ワハ、ハ、ハ、」

北「こいつはいよ業ざらした。サア行きやせう」ト吹矢の錢を拂ひ、出かける。向に又きせる一本おちてあるゆゑ、

北「ソレ彌次さん、又拾はねへか」

彌「イヤもう、其手はくはぬ。アレあとからくる親仁が拾ひをるだらう」トゆき過ぎて振り返り見れば、後より来る親仁、かのきせるを拾ひ、懐におしこみ、さつくと行きすぎる。

彌「ハテ、騙でもなかつたさうな」

まんがわるい—間がわるい

北「ハ、ハ、ハ、お前豪氣にまんがわるいぜ」ト打笑ひつゝ行く程に、やがて上野の宿にいたる。こよに此あたりの人と見え、羽織ばつちにて、小野郎を供につれたる男、後より來りて彌次郎兵衛に近づきて、

小野郎—若者

「卒爾ながら、あなた方アお江戸でござりまするか」

彌「アイ、さやうさ」

かの男「私は白子の先から、あなた方のお後について參じたが、みちくの御狂詠を承りまして、及ばずながら感心いたしました。おもしろい事でござります」







やてかんせ  
—やつて行  
かんせ

「サア〜お慰みにやてかんせ。外題は忠臣藏十一段つどき。ソレ吹かんせヤア。吹かんせ。お當てなさると忽ち變る新板の上細工はこれぢや、これぢや。」

北「ハ、ア何だ、勘平おかる魂膽夢の枕、イヤこいつやらかして見やう」ト吹矢筒に矢を入れて、フ、フ、フ、引カチリ、カツタリ。

彌「何だ、ハアえらい松茸が出た。コリヤ可笑しいハ、ハ、ハ。與一兵衛子故の闇の夜は何が出るだらう。フツ〜フ、フ、フ、引カチリガサ〜〜〜ヒヤヤ、みこし入道ハ、ハ、ハ。向のは何だ。北八そつちへ寄りや」ト引きのける拍子に、足もとに寐てるたりし犬の足をふむ。犬「キヤアン〜」

彌「この畜生め」ト吹矢の筒にてくらはしにかよる。犬はワンといつて嚙みつく。

彌「アイタ、ハ、ハ、うぬ打殺すぞ」ト追驅くるはずみに、どつさりと轉けたそばにおちてあるは煙草入。

彌「ころんでも損はいかぬ。爰に煙草入が」ト拾ひにかよると、向側にゐる子供が糸をひくと、煙草入はする〜〜〜。

彌「エ、いま〜しい。一番はぐらかしやアがつた」

借錢しやくせんをおうたる馬ばにのりあはせ、ひんすりやどんとおとされにけり。

ゆくほどなく矢やばせ村むらといふにいたる。彌次郎兵衛やじろべゑは神戸かんべの宿しゆくはづれより先さきへ來きたるが、

かの馬ばのいさくさをば露つゆ知らず、よほど先さきへなりたるを不思議ふしぎに思おもひ、こゝに待まち合せ

るたりけるが、それと見みるより、

彌や「オヤ、北八きたそのなりはどうしたのだ。」

北きた「イヤもう話はなしにもならぬ、飛とんだ目めにあつた」ト最前さいぜんよりの一伍いちぶ一什じつを話はなせば、彌次やじ

郎らうをかしく、幸さいはひこの所ところは、かまぐらの權五郎ごんごが古跡こせきありときよて、彌次郎兵衛やじろべゑとりあへ

ず、

權五郎ごんごならねど馬士ばこのいつさんに、おつかけてゆくかけとりのうみ。

それより玉垣たまがきをうち過ぎ、白子しろこの町まちにいたり、福徳天王ふくとくてんわうをふし拜まがみつゝ、子安觀音こやすくわんぱんの別

れ道みちにて、

かぜをはらむ沖おきの白帆しろほはくわん音ねの、加護かごにやすく海うみわたるらん。

この宿しゆくを過ぎすて磯山いそやまといへるに着つく。此所こゝに吹矢ふきやのいろく飾かざりつけたる小見世こみせの親仁おやぢ

往來わうらいを見かけて、

海渡うみわたらん  
—子安觀音こやすくわんぱん  
ゆみ産うぶみに  
かけた

「ごん」イヤおりすとえいとは何でぬかす」ト眞黒になり、馬に取付きにかよる所を、馬士つきのけて、馬の尻を思ふさま叩き立てると、馬は一散にかけ出せば、北八上にて眞蒼になり、大聲あけて、

「ヤアイ〜助けてくれ。コリヤどうする、どうする。」

「ごん」馬をにがしてはならん。オ、イ〜」トおつかける。北八は後生大事に、馬の鞍に取りつきて、馬は闇雲に走るゆるゑ、北八飛びおりやうとして、鞍の繩に足がひつかり、まつ逆様におちて腰のほねをうち、

「ア、いたい〜。誰ぞきてくれ。アイタ、〜、」ト獨りもがきて苦しむ體に、馬士一散にかけつけ來り。

「モシ旦那、お怪我はないかな。ドリヤ〜」ト手を取りて引き起すうち、権平は馬を捕へんとかけぬける。馬方これを見てさうはさせぬと、北八に構はずかけだして行く。

北「オ、イ待ちあがれ。おれをばひどい目にあはしやアがつた」ト小言をいひながらおきあがり、腹はたてどもせん方なく、おつかけんには足腰が痛み、やう〜のことにて踏みしめ踏みしめ、そろ〜とたどり行きつよ、

よことがない。せめて内へいぬまで待つて下んせ。その代り、こよでこのぬのこを渡すに。」

「ごん」そしたら往んでわけつけるか。」

馬士「もうよいわい。サア旦那めさぬかい。」

北「ナニ又乗れか。もう堪忍してくれ。おらアこれから歩いて行かう。何なら少々は錢を出しても、乗ることア嫌だ。」

馬士「さういはんせすと乗つて下んせ。もうよいがな。サアく」ト馬の口を取りてすすむる故、北八又しかたなく馬に乗れば、

權平「サア約束の布子ぬごまいか。」

馬士「イヤ、そないにはいうたものの、これも内へ往ぬまで待つて下んせ。」

「ごん」イヤ、おのれもう了簡ならんわい。サアく旦那又おりて下んせ。」

北「エ、この唐人めらア、又おりるとぬかしやアがるか。もう嫌だ。サア早くやらねへか。どうしやアがるのだ。」

馬士「旦那さうはかいの、おりすとよいに。」

ちやうさい  
ばう—他人  
の口にのり  
て犬骨を折  
る者

北「ハア、おいらも先刻さつきにからじれつたくてならなんだ。ひよんな馬うまにのり合せたは、こ  
つちの不仕合せふしあはせ。しかもまだ錢ぜにはやらす、是これまで乗のつたを徳とくにして、ドレおりて行きや  
せう」トかの權平ごんべいに口を取とらせて、馬うまからおりると馬士まごかけより、

「モシ旦那だんな、お前まへがおりてはこの馬うまを取とられる。マア乗のつてゐて下くだんせ」

ごん「イヤならんわい」

馬士「ハテ、どないにもするわいの、旦那だんなをおろしては氣きの毒どくな。サア〜召めして下くだ  
せ」

北「又乗またのるのか、しつかり頼たのむぞ」ト北八又馬きたまたじまにのれば、權平ごんべいやつきとなりて、

ごん「コリヤ〜、長太ちやうたどうしさるのぢや。旦那だんなおりて下くだんせ」

北「エ、又またおろすのか。イヤ貴様きさまたちやア己たれをいよちやうさいばうにする。おろしたり  
上げたり、足あしも腰こしもくたびれはてた」

ごん「それぢやてわしが馬うまぢや。どうぞかしおりて下くだんせ」

北「エ、面倒めんどうだ」ト小こじれが來きて、ぐつと飛とびおる。

馬士「はて扱さておりさんせすとよいがな。コレ權平ごんべい様かうして下くだんせ、わしも途ま中ちゆうぢやし



業者やらか  
す一腹をた  
てる

せちがはれ  
る一せがま  
れる、苦し  
められる

「そないに業煮やらかいて下んすな。マアこゝへかけさんせ。イヤそこのねきには犬の糞がある。今日おいでると知りをつたら掃除しておこもの。コリヤく權平様へ茶などあげんか、酒買うて来いといふ所ぢやが、こゝは大道中でそれもでけぬかい。」

北「コリヤどうする。早くやらぬか。」

馬士「ハテせはしない。ちと待たんせ。いんま大事のお客がある。さてマア聞いて下んせ。去年の冬から内の嚙アが病氣を煩ひをつて、がき共にはせちがはれる、雑役にさへ出やせんものを、何ぢやろとかうして下んせ、四五日の内には、ひゆつとこちから持ていこがな。」

こん「イヤ承知ならんわい。其様にいうても、よう戻しやしよまいがな。大事無いく、もう三年越といふもの貸した錢ぢや、利に利がくつて二十貫餘といふもんぢやもの。いこすな、いこすな。その代りあの馬をとていこかい。ハテまさかの時は、主が馬をわたそと證文に書いたぢやないか。そしたら言分ありやしよまいがな。サアノくもし馬のうへな旦那様、いんま聞かんす通りぢや、借金の代りに請取る馬ぢや。どうぞこゝから下りさんせ、氣の毒ながら。」

馬士「まよよかし。やらかしましよ」ト馬の相談できて、二人の荷をつけ、此所よりまづ北八が乗つて出かける。

彌「おらアそろく先へ行くぞ。ソレ北八、右の方へかしくやうだ」馬ヒインく、鈴の音しやんくく。

此内向より来る男、紺縞のせんだくしたる引廻しを着て、錢一貫ばかりさしこの風呂敷に包み、肩に引きかけ、草履がけにて來り、この馬士を見つけて、

「ヒヤア、主ア上野の長太ぢやないか。今、のしが所へ行た戻りぢや。えいとこで行きあうた」

馬かた長太「ハア權平次様かいな。コリヤさて、わしや面目がないがな」

「ごん」あろまいく。あろ筈がないわい。晦日々々にいこす筈を、まんだ鏝一文もいこさんがな。どうしさるのぢや。ソレ聞こわい」

馬士「マアくこちへ來て下んせ」

此馬士借金の斷りと見えて、かの男を日當りのよい處へ伴ひ、己も土手にいうくと腰うちかけて、

いこすよ  
こす、返す

それより高岡川をうち渡り、早くも神戸の宿にいたる。入口に寶珠山火除地藏堂あり。

安穩に火よけ地藏の守るらん、夏のあつさも冬の神戸も。

かくてこの宿はづれなる茶店に休みるたるに、

馬士「モシ、おまいがたア馬に乗つて下んせんか」

彌「いかさま、戻りなら乗るべい」

馬士「上野まで戻る馬ぢやわい。荷をつけて二百五十くだんせ」

北「二寶荒神百五十やるべい」

馬士「今日は杵をもてこんわいの、爰から上野迄三里の所ぢや、白子へ一里半代りやつ

て乗つて行かんせ」

彌「二人のられにやア嫌だ」

馬士「そしたらお二人とも馬の鞍へくよしつけて行くまいか。此繩でしめりや、氣遣は

ないがな」

北「飛んだ事をいふ。それぢやア煙草ものまれぬ」

彌「それならかはりなく乗らうが、百五十でやるか」

二寶荒神一  
馬の兩側に  
荷をつけ、  
二人乗られ  
る様にせる  
を云ふ

彌「北八、どうだ奇妙か。」

北「二本ざしを見ると乗打のできねへこたア、皆知つてゐらア。」

彌「それだからよ。おれを侍だと思ひをつけて。」

北「ばかアいふぜ。あとを見なせへ、侍が二人くるから。」

彌「エ、ほんにか」トふりかへる拍子に、このお侍にばつたり。「ハイ、是は御免なさい

やし。神戸へはもうどれほどござりやすな。」

此侍衆は、此邊の郷士とみえ、

「ソレ向の堤からつつとそらへ上らせると、もう半道もあらずにな。」

彌「ハイ有難うござりやす。」

北「堤から空へあがれたア何のことだ。蜷が天上しやアしめへし。ハ、ハ、ハ、ハ。時にこ

の川は何といふ川だ。」

はしげん「橋錢が貳文ヅツ出ます。此川は宇都部川といひます。」

彌「ソレ貳文ヅツ四文よ。」

拔參りならばぶさをもうつべ川、わたしの錢もかりばしにして。

法 ぶさー無作

彌「また酒の飲みつくらしやうと思つてか。もう嫌だく。サア北八出かけやう」トこれより伊勢參宮の道へはいる。

神風や伊勢と都のわかれ道なる追分の建場より、左の方の町をはなれて、野道をたどり行くほどに、向より來る農行の馬に横乘したる男、甲ばり聲にて、

うた「見てもぬくとさうなヨおかたとねたりやナア、手おりぬのこの一まいねつこにっんぬけた。ア、エ、ハ、ハ、ハ、」

彌「コウ見さつし。アノ向から乗つてくる馬士をおろして見せやうか」ト脇差をぐつとぬき出してさし、合羽の袖を前の方へ折りて、刀のつかに持添へたる體に見せかけてゆくと、馬士やがて馬よりおりて行く。

彌「ナントどうだく」又向よりよこ乗りの馬士

うた「ばんのとまりにヨ、いことてやめたナア。なアせいきやらぬ、裸でおかたにあはりよかへナア、ハ、エ、」

彌「こいつもおろしてやらう。エヘン」

馬士「シツく」ト俄にうろたへおりて行過ぎる。



盗人に追分  
—盗人に追  
錢の俚諺を  
かけたり  
まん直しに  
—運のあし  
きを直す爲  
に

北「いよはな。おいらも神参りだ。堪忍してやりなせへ。皆こつちが間拔だからよ。ハハ、ハハ。」

彌「それだとして餘り業がにえかへる。」

北「ゆうべの泊りでおれをえらい目に合せた、その報だと思ひなせへ。ほんにいよ業ざらした。」

盗人に追分なれやまんぢうの、あんのほかなる初穂とられて。

彌「エ、おもしろくもねへ、しやれやんな。モシく饅頭代はいくらだね。」

女「ハイく、残らずめて貳百三十三文でござります。」

彌「せうことがねへ」トふしようく、錢を拂ふと、

かこかき「旦那、まん直しに安く召してくださいませ。」

彌「いや、く。」

かこかき「酒手で参りませう。」

彌「きさま酒を呑むか。」

かこ「ハイ酒はすきで一升酒を下さります。」

業腹ごふはらな」ト此内このうち、下の方しもかたより駕かこかきぶらく、來りて、

「旦那だんな方はお駕かこはいらしやりませぬか。」

彌や「駕所かこのところちやアねへ。偉い目おほいめにあつた。饅頭まんじゅうの食くひごつこをして、錢ぜに三百たど取とられた。」

かこかき「ハ、ア今の琴平こんびらめぢやな。てきめはあないな風ふうをして歩きあるをるが、アリヤ大

津つの釜かま七といふえらい手品てづまつかひぢやけな。こんぢうも坂さかの下したで餅もちの喰くくらで七十八と

やら食くつたと見みせて、錢ぜには人に拂はらはせ、餅もちをば皆みんな袂たもとへ渡わたへこんでうせをつたといふ事ことぢ

やが、旦那だんなも一杯はいはめられさつせへたの、ハ、ハ、ハ、」

此話このはなしのうち、伊勢いせ参まゐりの子供こころもふたり二人、饅頭まんじゅうを三ツ四ツづつ手てに持もちて食くひながら、この門かど

口ぐちに來りて、

「ハイ旦那だんなさま、ぬけまゐりに御報謝ごほうしや。」

北きた「コレ手前てめへたちやア、その饅頭まんじゅうを誰だれに貰もらつた。」

いせ参まゐり「ハイ、コリヤこの後あとで、琴平こんびら参まゐりの人ひとが袂たもとから出だしてくれました。」

彌や「エ、そんならあいつめが食くらつたと見みせやアがつて、おいらを眩惑だまくらかしやアがつた

か、忌々いまくしい。ほつかけて打うちのめさうか。」

てきめーあ  
いつめ





彌「コリヤ恐れるく〜」

こんびら「お約束の通り、饅頭代はさし引いてお初穂の百文下さりませ。」

彌「今あけやせう。しかしあんまり見ごとだから、もう二十食ひなせへ。今度はお初穂三百文あけやせう。その代り食はねへと、こつちへ二百文取りつこだがどうだく〜」

こんびら「おもしろい、おもしろい。何も欲徳、腹のさけるまでやつて見ませう。」

彌「サア〜今度は現錢だ。おめへも二百そこへ出しておきな」ト彌次郎三百文をつきだし、何でも今取られたお初穂の百文に利をつけて取る氣になり、よもやもう食はれめへと思ひこんで、饅頭を又々二十とりよせ、琴平へすゝめるや否や、この度は何のくもなく忽ち二十食つてしまひ、手早くかの三百文を着服して、

こんびら「これは有難い。饅頭の代もよろしうお頼み申します。ハ、ハ、ハ、思ひがけな  
いおざうさに預りました。ハイゆるりとこれに」トおみき箱をせなに負ひ、後をも見ず  
して出て行きたるに、彌次郎は呆れはててゐる。

北「ハ、ハ、ハ、大方こんな事にならうと思つた。」

彌「いまくしい目にあはしやアがつた。はじめの百が惜しくなつて、うはのりをした。

おざうさー  
御馳走



お倒れ—御  
損の意

てんぼのか  
は—まよよ  
といふ意

こんびら「もしあがらぬと、あなたのお倒れぢやがようござりますか。」

彌「そりや知れたことさ」ト勝かつにつて饅頭まんじゅうを取りよせ、食くひかよりしが、十ヲばかり食くつて後はもう噫あくびに出るほどなれど、おのれ琴平鼻こんびらのなあかせてやらんと、むりに押おし込み皆みな食くつてしまふ。

こんびら「コリヤたまらぬ。えらいく。もうく私わたしは叶かなひませぬ。」

彌「おめへもやらかして見みなせへ。こんな小さなものはいくらでも食くはれる。」

こんびら「イヤさうは参まゐりませぬ。しかし私わたしもあまり殘念ざんねんな、十ヲばかり食たべてみませ

う。」

彌「ナニヲぐらゐる、二十食くひなせへ。その代かり一つも殘のこさず食くひなすつたならば、饅頭まんじゅう

頭の代だいは勿論もちろん、外ほかに百文金毘羅もんこんびら様へお初穂はつほをあけやせう。」

こんびら「そりや有難ありがたい。てんぼのかはやつて見みませう」ト饅頭まんじゅう二十取とりよせ、たども

じもじと見てばかりゐたりけるが、やがて食くひかよると、ほつかく十ヲばかり食くつて

しまひ、後あは嫌いやさうな顔かほつきにて、やうくと殘のこらず食くつてしまふ。彌次郎兵衛やじろべゑはあて

が違ちがひ、

こんびら「それはえらいお好きぢや。私も餅好きで、御らうじませ。此雜糞を息なし五膳食べました。」

彌「わつちやア今ここの饅頭を十四五も食つたらうが、まだその位はいけるだらう。根から食ひ足らぬやうだはへ。」

こんびら「イヤ、しかしわる甘いものは、もうそのやうには上られますまい。十四五も上りやア關の山だ。」

彌「ナニまだ食へやす。」

こんびら「どうして、どうして、あなた口ではさうおつしやるが、そのやうに食へぬものぢやて。」

彌「ナニ食へねへ事があるものだ。しかし費だから食ひやせぬが、誰ぞ食はせるとまだいくらでも入りやす。」

こんびら「コレハおもしろい。モシ無厭ながら、何と私がお振廻ひ申しませう。もうそれだけあがつて御らうじませぬか。」

彌「食ひやせうとも。」

小ぢよく—  
小女

雨風どうら  
ん—いつも  
取留りのな  
き事を云ふ  
鳥飼—和泉  
といふ有名  
なる饅頭屋

北「右側の娘が美しいの。」

彌「かぎやの小ぢよくめらも愛敬らしい」ト茶屋に入り腰をかける。

女「お茶アあがりませ。」

彌「饅頭もやらかして見やう。」

女「今あけませう」トやがて盆にもつて来る。このうち琴平参りと見えて、ぬのこの上

に白き單衣の半纏を引ぱりたる男、同じくこの茶屋に休み、雑煮餅をくひかふる。彌次

郎饅頭をくひしまひ、

彌「もつとやらうか。いくらでも入るやうだ。」

北「イヤ、おめへも雨風胴亂だ。いよかけんにしなせへし。」

こんびら「あなた方アお江戸かな。」

北「さやうさ。」

こんびら「私もお江戸へ行た時、本町の鳥飼の饅頭をかけどくして二十八食つたことが

ござりましたが、又格別なものぢや。」

彌「鳥飼はわつちらが町内だから、毎日茶うけに五六十ツツは食ひやす。」

みなく「なむあみ」  
をしやう「なむあみ」とだんく唱へ、十念のしまひに、どうしたはずみやら、鼻の穴  
がむづむづとして、

をしやう「ハアくつしやみ」といふ。皆々十念の後ゆるゑ、これも口眞似する如く心得  
みなく「ハアくつしやみ」をしやう小ごゑにて  
をしやう「糞をくらへ」

みなく「糞をくらへ」

彌「ハ、ハ、飛んだお十念だ。アノ和尚は、くつしやみから長郎だハ、ハ、ハ」

くつしやみ  
から長郎だ  
—沙彌から  
長老の洒落  
かう中「なアまあだア、なアなアだア」トさどめき立ち行過ぎる。彌次郎北八はをかし  
く後を見送り、

十念を申しながらのくつさめは、あつたら口に風をひかせし。

かく詠みすて打興じ行くほどに、早くも追分にいたる。此所の茶屋、饅頭の名物あり。  
ちや屋の女「お休みなさりませ。名物饅頭のぬくといのをあがりませ。お雑煮もご  
ざりませ。」

ぬくとい—  
あたゝかい

かう中「なアまあだア。」

彌「幟のぼりを持つて行く奴やつのつらア見みさつし。智惠ちゑのねへ顔つらだぜ。」

かう中「お賽錢さいせんはこれへく。是これは海中かいちゆうより芋畑いもはたけへ出現しゆつけんしたまふ所の天蓋寺てんがいじ蛸藥師たこやくし如來にょらい。御信心ごしんじんの方は、お心こころもち次第しだいあけさつしやりませう。サアくお心こころもちこころはようござりまこころすかな。」

北「今朝けさほど中ちゆうかさで三膳さんぜんほど食たべました。」

十念一淨土  
宗にて佛に  
結縁せしむ  
ること

彌「ソリヤ蛸たこどのがござつたくく。」ト此内このうち、御廚子みづしに入いれたる藥師やくし如來にょらい、大勢たほせいにてかつぎ通とほる。後あとより天蓋寺てんがいじの和尚をしやう、乗物のりものにて來きたるト、こよかしこに集あつりる婆おや喚かゝども、十念じゅうねんを願ねがひける。

わかたう「お十念じゅうねんくく。」トいふと乗物のりものをおろす。わかたう駕かこの戸こを引ひきあくれば、和尙わしやうはゆで蛸たこの如ごときあから顔がほにて、大痘痘たほあはた毘びだらけのでつくり和尙わしやう、さもしかつべらしく、

をしやう「なむあみ。」

みなく「なむあみ。」

をしやう「なむあみ。」



膝栗毛五編 卷之上

濱田村を打過ぎ、赤堀にさしかよりたるに、往來殊に賑しく、男女大勢こよかしここに集りたるは何事にやと、彌次郎兵衛北八も片寄り行きつよ、ある親仁に向ひて、

彌「モシく、何でござりやす。」

おやぢ「あれ見さつせへ。」

北「喧嘩でもござりやすか。」

おやぢ「インネ、天蓋寺の蛸薬師様が桑名へ開帳に行かしやるので、今こよを通らつせるから。」

蛸薬師—天蓋は蛸の隠語なればかくいへるなり

彌「ハ、ア、なる程向へ見えるく。」ト此内だんく人足しけくなり、講中とおほしく、

眞先に村の名を染めたる幟をおし立て、いづれも大音にて、

かう中「なアまアだア、なアまアだア。」

北「蛸薬師様アゆでだこぢやアねへ。なまだと見える。」

立ち聞して、腹筋をよりのたりけるが、よい時分と立出で、

「コリヤアどなたもお氣の毒な。ありやアわつちが受合ふ、胡亂な者ぢやアござりやアせぬ。了簡してやつてくんなせへ。又地藏様の鼻とやらが缺けたといひなさるが、どうぞわつちに免じて、後ではどうとも致しやせう」トいろくちやらくらと断りをいひ散らし、亭主も今はせん方なく、さながら悪者とも見えぬ手あひ、一通りはいつたもの今は納得して濟しければ、

はひかけし地藏の顔も三度笠、またかぶりたるしゆびのわるさよ。

地藏の顔も  
三度一俚諺  
如何なる好  
人物にても  
あまり無理  
を云へば三  
度目には怒  
ると云ふ意

かく即吟の彌次郎兵衛が狂歌に、おのくどつと笑を催し、やうくいさくさ收りけるにぞ、未だ夜の明くるには程もあらんと、めいく寝處に入りたるが、斬くありて、はや一番鶏の告げわたる聲々、馬の嘶き表に聞え、彌次郎兵衛北八急ぎおき出でて、支度とよのへ、やがて此宿をたち出づるとて、  
やうくと東海道もこれからは、はなのみやこへ四日市なり。

眞面目な、  
正直正銘の

そないな云  
云―そのや  
うな間にあ  
はせをいつ  
ても、その  
手は食はぬ  
の意

田舎「インネさうぢやあらまい。又それでなけらにやア、なんぜ今時分そこに寐てるさつせへた。」

北「イヤこれはの、手水に行くつて。」

ていしゆ「たはけた事をつくさまい。手水場は座敷の縁先にあるものを。定めし宵にも行たであらうに、そないな間似合くやせんわい。」

北「さういはれちやアわつちも面目ないが、恥をいはにやア理が聞えぬ。有體にいひやせう。」

ていしゆ「オ、サ、いはいで如何せるもんぢや。」

北「イヤどうもお羞しいが、今頃わつちがこよにまごついて居つたといふ理は、ツイ夜這に來て、此棚の落ちたにうろたへたのでござりやす。」

田舎「ナニ夜這に來た。イヤはや、こなさんはたはけたもんぢや、どこの國にか、石地藏様の所へ夜這に來てどうせるつもりぢや。」

ていしゆ「いへばいふほど碌な事はぬかしをらぬ。」

北「コリヤとんだ災難にあふことだ。彌次さんく」トよび立てる。先刻より彌次郎は

は、この石地藏ならんと思ひるるうち、亭主北八を見て、

「ヤアこなさんは、こちへ泊らせへたお客ぢやないか。それに今時分なんせ此様な所に、コリヤ合點がいかんわい。どうぢややらこなさんたちのなりそぶり、胡散くさいと思ひをつた。若しやごまの灰ぢやないか。何ぞまたしよしめるつもりか。ありやうにいはずせへ。」

しよしめる  
—盗む、せ  
しめるの訛

田舎「イヤそればかりぢやござらない。大方こなさんが此棚を落したもんで、なんせ地藏様のお鼻をうち缺いた。コリヤわしどもが村で、今度建立せる地藏様ぢや。きんのふ石屋どのから受取つて、明日は早々長澤寺様へ納めにやならぬが、お鼻がうちかけては持つて行かれぬ、元の通りまどはつせへ。」

まどはつせ  
へ—つぐな  
ひせよの意

これは此近在の人々、村のお寺へ納める地藏也。石屋より持つて歸る所、おそなはりし故、今宵はこゝに泊りしと見えたり。亭主いよくやつきとなり、

「お地藏様のお鼻もお鼻ぢやが、お前がたのお荷物なんぞなくなりはせないか。どうでも合點のいかぬ奴らぢや。有様にいひをるまいか。」

素几帳面—

北「イヤ、わしらはそんな者ぢやアねへ。めつたな事をいひなさんな。素几帳面の旅人だ。」

らりこくた  
いーらりこ  
つばいとも  
云ふ、滅茶  
滅茶の意

北「コレく、おれをこよに置いてどうする。エ、それにとんだ事をいやアがつて、ど  
うやら氣味が悪くなつた。コリヤ堪らぬく」トがたく震へる拍子に、手が緩みて上  
の棚がぐわらくく。こりや叶はぬと北八にけ出せしが、うろたへて戸惑ひをし、一  
向わからずまごつくうち、この物音に、勝手よりは亭主の聲として、行燈さけて出てく  
る様子。奥の間からは田舎者が出てくる體ゆゑ、いよくうろたへ、店の方へはひ出る。  
手もとに菰一枚ありしを幸引きかぶりて息を殺しかどみると、亭主あかりを持ち出で  
肝を潰し、

「ヤアくくく、コリヤなんぜ棚がおちた。膳箱も何もらりこくたいになつた」トそこ  
ら取りかたづけけるうち、何事やらんと、田舎者二人ながらおき出で、

「ヤレ、えらい音がせると思つた。道理こそ。コリヤ地藏様のねきにまで箱が飛び散つ  
てをるが、ヤアくくく、お鼻がぶつ缺けてしまつた。」

今ひとりのあなかも「ドリヤく、ほんに地藏さまの鼻アなくならかいた。そこらにや  
無いか。イヤこよに寐てをるは誰ぢやい」ト菰をまくれば、北八はつとばかり顔を上げ  
て見るに、側には菰に包みし石地藏あり。さては彌次郎が死んだものありしといひし



有明—有明  
行燈

しめこのう  
さぎ—占め  
たといふ事  
の洒落

がだるくなる。コリヤもうどうする、どうする」トうろく／＼してゐる。彌次郎は暗まぎれ、そろ／＼と先の方へゆき、こし壁を傳ひて勝手の方へ出るに、庭の向にみゆる有明の火影ほのかに、すかして見れば、かの行當の櫂の側に一人ねてるものある故、さてこそ北八が約束の代物、しめこのうさぎと、いきなりに手をやつて探りみれば、こはいかに、石の如くひえ氷りし人倒れるたり。さながら生きたる者とも見えす。これは不思議とこはごは撫で廻せば、荒菰にくるみてある故、彌次郎はつと驚き、俄にきみが悪くなつてがたく／＼と震ひ出し、やう／＼北八がゐる所へはひ戻り、齒の根もあはぬふるへ聲にて、

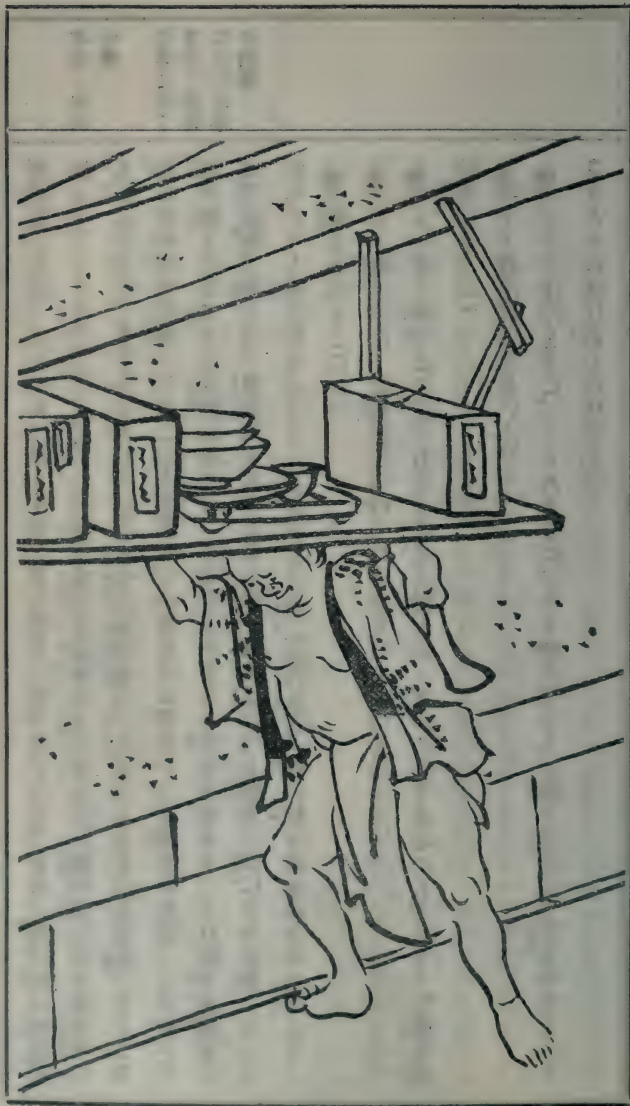
彌「北八まだそこにか。」

北「オ、彌次さん、お前どこへ行つた。コウ、ちよつとこよへ。」

彌「イヤそこ所ではない。あそこに死んだものへ菰がかけてあるから、もう／＼薄氣味の悪いうちだ。」

北「ヤ、飛んだことをいふ。」

彌「ナニサほんとうに、アレあそこに。ア、飛んだうちに泊り合せた、恐しや／＼」トさう／＼にはひ出しにけゆく。



を覺ますだらう。こいつは難儀な目にあつた」ト兩手を柵につつばつて立つてゐても  
 ねから詰らす。手を放せば柵がおちる、襦袢ひとつで寒くはなるし、コリヤ情ない目  
 あつた。どうぞ仕様はないかと立ちはだかつて考へてゐるうち、かくとも知らず北八も  
 目をさましおき出で、これもだんく壁を傳ひてくる様子。彌次郎それとすかし見て小  
 聲にて、

彌「北八々々」

北「誰だ、彌次さんだの」

彌「コリヤ靜にく。早くこゝへ來てくれ」

北「なんだく」

彌「これをちよつと持つてくれ。こゝだく」

北「ドレく」ト手を延して、何かは知らずおちかよつた柵の下をおさへると、彌次郎

はそつと手を放し、北八に持せて側へはづしたるに、北八驚き、

北「コリヤく、彌次さんどうするのだ」ト手を放さうとすると、上の柵がおちかよる故、

北「ヤアくく、コリヤ情ない目にあはせる。コレく、彌次さんどこへゆく。ア、手

聲こゑになりて、

彌やじろ「北八きたやち々々、實じつに手前てめへさつきの女おんなと約束やくそくをしたか。」

北きた「知しれたことよ。しかしこつちへは來こぬつもりだ。此次このつぎの間の壁かべを傳つたつて行ゆくと、行い當あたつた所ところの襖ふすまをあける。そこに寢ねてるるといひをつたから、今いまに行いかねばならぬ。」

彌やじろ「おれが先さきへ行いつてやらう。」

北きた「そねまずと早く寐ねなせへ」ト後うしろをふり向むいて寐ね入いる眞ま似ねする。彌やじろ次じろ郎ろうも北八きたやちが邪じやま魔まをしてやらんと、寐ね入いりしふりして考かんがへる内うち、二人ふたりとも旅たびづかれにや、思おもはずすやすやと一ひと寐ね入いりし、暫しばくすると、彌やじろ次じろ郎ろうふつと目めをさましみれば、行あんごう燈とう消きえてまつくらがり、あたりもひつそり靜しづまりたるに、時じ分ぶんはよしと抜ぬけがけし、北八きたやちに鼻はなあかせんとそつと起たきたち、差さ足あしにて次つぎの間まに出いで、かねて聞ききおきたるとほり、さぐりく壁かべを傳つたひてゆくうち、彌やじろ次じろ郎ろうあまりに手てを上うへへ延のばしたるにや、つりたる棚たな板いたに手てがつかへると、どうしたはずみやら、がたりといつて棚たながはづれたると見みえ、彌やじろ次じろ郎ろう兵衛べゑ大だいきに肝きんを潰つぶし、「こいつは變へんちきだ。あんまり己たれが手てを延のばしたから、棚たな板いたがはづれたさうな。手てを放はなしたら、落たちるであらうし、何なにかがらくたがしこたま上あげてある様子やうすだ。落たちたら皆みんなが目め

しこたま  
澤山

北「イヤもう生酔だから、堪忍してくんなせへ。」

田舎「イヤ、まだこなさんは私どもを馬鹿にさつせる。最前から見てをるに酒も呑まないで、生酔とは猶承知ならまいわい。」

北「はて、わつちは酒を呑みやせぬが、此足が生酔だから。」

田舎「ナニ足が酒を呑むもんか。馬鹿アつくさつせるな。」

あつくなる  
—夢中にな  
る

北「おめへ大分あつくなるの。あしが酔つたといふは、先刻焼酎をふきかけたから、それに此足めが酔ひくさつて、ソレ御らうじろ、ひよろりひよろり、ソレまだお前の頭にからはうとする。コリヤくくく。」

田舎「ほんにこなさんの足はわる酒ぢや。」

北「さやうさ。足は下戸の足がようござりやす。わつちは誠に困りはてる。」

田舎「そんならようござる。モウ寐まらまいか、女中々々寢處を頼みます」ト此中、女來り、それぐ床をどり寐かすと、田舎者二人はそこへ轉けるや否や、前後も知らずうすうと高敷 彌次郎、北八、この女どもにこあたり文句もさまぐあれど、此ところと飯時の洒落はぐつとはしよる。女どもは床をとつてしまひ、勝手へ行くと、彌次郎小



に思つてゐるやアがるさうな。忌々しい。」

北「ハ、ハ、こいつはでかした、でかした」ト夢中になりて、又田舎者の頭を足にて探し廻し、耳をいぢりかけると、堪へかねて北八が足をとらへ、

田舎「コレく最前から黙つてをれば、なぜ此足でわしが耳を廻りものにさつせへた」トいはれて、北八心づき、

北「ハイこれは御免なせへ。」

田舎「インニヤ扱、御免では承知ならまいわい。それもこなさんが夢中にならつせへて、

話しさつせる手そぶりにやアあらまい事でもないが、こつちで頭をよけやうとすると、

又足で探りまはいては廻りものにさつせる。なぜ人の頭を土足につつかけさつせへた。

すないく。」

彌「ソリヤお氣の毒なことだ。御免なせへ。此やうにお合宿するも他生の縁とやら、ど

うぞ了簡してやつて下さりませ。」

田舎「こんたがさういはつせりやア聞かまいものでもないが、餘り人を馬鹿にさつせる

から。」

手そぶり—  
手素振

すないく—  
—承知出来  
ない

つかけ、座敷につれて歸ると、彌次郎そのまま倒れて、左も力なささうに、

彌「ア、く、今少しはつきりした。」

北「お前も飛んだものだ。いよかけんに上ればいよに。」

彌「イヤおれも手前のいつた通り、大方女が来るだらうと、待つた程に、待つた程に、向の流しにかの年増らしい奴が、何やら洗つてゐるから、コレ脊中を流して下せへといつたら、ハイとこいて六十ばかりの婆めが、たはしを持つて來やアがつて、お脊中を洗ひませうかとぬかしやアがる。」

北「こいつはいよ」ト夢中になり、寐腹這つてゐながら、足の指にて足あとの方に寐ころんでゐる田舎者の耳を引つぱつたり何かして持遊びにする。此田舎者とんだ氣のよい男にて、そつとわきの方へ頭をよけると、

北「それからどうした。」

彌「きいてくれ。おれも餘り業腹だから、いまくしい婆めだ。たはしを以てどうしやアがるといつたら、ハイくとぬかして引込んだが、やがて又庖丁の折れたのを持つてうしやアがつて、これでお脊中の垢をこそけ落して上げませうかと、おれを鍋か釜のやう

こそげ落して  
削り落して

うけと成り、あまり長湯をして湯氣にあがり、ふろばの破目にもたれて、ぐにやりとなりる。北八はあまりに彌次郎が長湯なるゆゑ、そつと風呂場へのぞきに來り、この體を見て、

北「ヤアくくく。彌次さんどうした、どうした。コリヤ大變だ」ト彌次郎が顔に水をふきかけ、「彌次さんくく」

彌「オ、く、ウ、ウ、ウ、ウ、引」

北「いよかくく、どうしたのだ、どうしたのだ」

彌「どうした所か、手前おれをえらい目にあはした」

北「なぜく」

彌「湯に入りながら、もうをんなが來るかと思つて、あんまりなが湯をしたから」

北「それで湯氣にあがつたか。ハ、ちゑのねへ咄だ」

彌「手前のお陰でまだ足がよろくする」

北「ハ、ハ、こいつは可笑しい。サアたちな」トやうくに着物をきせ、北八が肩にひ

あだなやつ  
— 意氣な女

女「あなたお召しなさりませ。」

彌「イヤ大分あだな奴らがちらつくぜ。」

北こころ八小聲にて、

北「今のやつを風呂場でちよびと契つて置きは早からう。」

彌「ソリヤほんとうにか、どうして、どうして。」

北「己が湯にいつてゐる所へ、おぬるくはござりませぬかとつてうせをつたから、すぐ

にそこで約束した。まだ一人いゝ年増が見えるから、おめへ湯に入つて待つてゐなせへ、

大方そこへ来るには違はねへから、そこで口をかけるがいよ。」

彌「承知々々。ドレ入つて来やせう。」ト彌次郎は湯にいる。又ひとり商人、

商「ハイ焼酎は入りませぬか、白酒あがりませぬか。」

北「オットその焼酎を少しくんな。オト、よしく、よしく。」ト茶碗に注がせて錢を拂ひ、か

の焼酎を足にふきかけ、「よし、これで草臥がやすまるだらう。どなたも御免なさい。

ヤアえいとこな」ト横に寝かける。このうち、彌次郎は湯に入つて、女の来るのを待つて

ども待つても、一向に來らず。手足の指を一本々々にあらひて、しばらくのうち待ちほ







四文粉—安  
煙草

「おたばこは入りませぬか、楊枝はみがき、鼻紙は宜しうござりますか。」

田舎「久しかぶりで、吉田の大竹へのたりこんで、おやまに淺柳のたばこ貰ひをつたが、みな吸つてしまつた。」

今ひとりのあなかも「四文粉はあらまいか。」

商人「イヤ、それはござりませぬ。是をあがつて御らうじませ。」

田舎「ドレ、く、バツくくく。こりや根からたわいが無い。こつちらのは如何ぢやい」  
ト煙管についですばく。

商人「それがようござりませう。」

田舎「イヤこれも根から火がつかぬ。見やんせ。吸うてをるうち消やらかいた。」

商人「ソレ、あなたの膝に燃えてをります。」

田舎「ヤアコリヤく、大事の着物を燃えらかいた。フツく、イヤこないに膝の焦ける煙草はいらない。持つて行かんせ。」

商人「ハイさやうなら」ト小言いひながら出て行く。北八湯よりあがりて、  
北「サア彌次さん、湯に入らねへか。」

「サア是でござります。コレお泊様ぢや。」

やどの女房「お早うお着きなさいました」ト挨拶の内、二人は草鞋を解きながら見廻せば、至つてむさくろしき宿にて、入口にすよけかへつて、横にいがみたる膳棚と壊れかよりし竈のある内なり。

てい主「今晚は私方もこみやひました。お氣の毒ながら奥のお客と御一所になされて下さりませ。」

彌「随分よしさ。」

女房「さやうならこれへ」ト案内して奥の間へつれ行く。合宿田舎もの二人あり。

彌「御免なさい。」

ぬなかも「お早うござらつせへた。」

北「ア、くたびれた。えいとこな。」

女「すぐにお風呂にめしませ。御案内いたしませう。」

北「ドリヤお先へ参らう」ト手拭をさけて湯に行く。此内十四五の前髪、ふろしき包の箱をさけて、

ばなり

「是はお早うござります。私お宿をお頼み申し上げます。」

彌「わつちらア帯屋へ行きやす。」

宿引「イヤ、今夕はお大名様おふたかしらお泊りで、帯屋は兩家ともおさし合でござりますから、私かたにお泊り下さりませ」トいふは嘘なり。御小身様のお泊りで、下宿はわづかなれども、夫をいひ立てに宿引わが方へ泊めんとする計略なり。二人ともほんくらなれば誠と思ひ、

彌「そんなら貴様の所はいくらで泊める。」

宿引「ハイ、それはいかやうとも。」

彌「ゆうべは宮の斧屋で泊つたが、とんだ叮嚀にした。百五十で燭臺をつけて飯を食はせるか。そして酒も菓子も出したから、コリヤア黙つてもゐられめへと、別に茶代を二百やるつもり所、やつぱり遣らなだから、大きに安かつた。貴様の所もそのつもりで馳走するがいよ。」

やど引「かしこまりました」トだんく話しながら、打ちつれてゆくともなしに、四日市の棒鼻に至れば、宿引かけだして、

ほんくら  
凡藏にて、  
やくざなる  
藏の意より  
ほんやりも  
のの義にい  
ふ

ひつくり返す拍子に、焼蛤が彌次郎兵衛の懐へひよいと入ると、

彌「アツ、、、、蛤のつゆがこぼれて、アツ、、、、」

北「ドレ〜」ト懐に手をいれて蛤をつかまへ、「アツ、、、、」ト取り落せば、蛤はその下へおちる。北八うろたへて、彌次郎が股引の上から金玉と蛤を一所につかむ。

彌「ア、アツ、、、、コリヤどうする。金玉がこけらア」トいふ中、やう〜股引の前のあはせめを廣げると、蛤はほつたり落ちる。

北「ハ、、、、まづは御安産でおめでたい」

彌「しやれ所ちやアねへ。飛んだ目にあつた」

女「お怪我はござりませぬか」

彌「怪我はせぬが、まだ腹の中がひり〜する」

北「ハ、、、、」

膏藥はまだ入れねども蛤の、やけどにつけて詠むたはれ歌。

膏藥は云々  
膏藥は多く蛤の貝に入れて賣れ

それより此所を立出で、はつ村八幡を打過ぎ、セツ家あら川にいたりし頃、四日市の宿引出迎へて、







ほたへて—  
ふざけるの  
意

女「オホ、、、旦那様はようほたへてぢや。」

北「おれもほたへやう」ト同じく尻をつめりにかよれば、

女「コレよさんせ。すかぬ人さんぢや。」

北「どうでもおいらをば安くしやアがる」トぶつく小言をいふうち、あたりの寺の鐘がゴオン。

北「女中、あれは何時だへ。」

女「もう七ツでござります。」

北「しめたく、約束の通り、是からおれが旦那さまだ。コリヤく彌次郎兵衛、おれはもう馬にも駕にも乗りあきた。是からそろくひろひませう。いと草履を買つて來やれ。はきつけぬ草鞋で、コレ見や、豆中が足たらけだ。」

彌「ばかをいふ。なるほど手めへは足だらけだ、一つの足がいくつにも割れてゐるから。」  
北「イヤ旦那に向つて手めへとは何のことだ。この荷物もそつちやへやらう。」

彌「ハテ現金な男だ。マアそつちにおきやれ。」

北「イヤさうはならぬ」トつきつけるを、彌次郎兵衛つき戻すはずみに、蛤を盛つた皿を

女「ハイ只今あけます」ト大層に焼蛤をつみ重ねて出し、飯を二膳持つてきて居る。

北「コウ彌次さん、見なせへ、色男は違つたもんだらう。コレくこよの娘がおめへの飯

はちつと盛つて、おいらがのはこの通り山もり、餓鬼道の一里塚といふもんだ。ア、う

めへうめへ。」

彌「へ、べらほうめ。アノ娘が杓子あたりのいよのを、惚れたのだと嬉しがるも可笑し

い。ソリヤア手前を安くするのは。」

北「なぜく。」

彌「すべて此街道では、上下の者や供の者へは、飯を山盛にして出すといふことだ。そ

れだから誰が目にも、おれは旦那、手めへは御供と見えるから。」

北「ハアさうか。いめへましい。」

彌「ハ、ハ、ハ、蛤をもつとくんなせへ。」

女「ハイく。」

又焼たての蛤、大層にもつて出す。

彌「お前の蛤ならなほ甘からう」ト女の尻をちよいとあたる。

安くする一  
輕蔑するの  
意

北「宜しうござりませう。コレ女中お飯を二膳出してくんない。」

女「ハイ、蛤でおあがりなされますか。」

彌「イヤ箸で食ひやせう。」

女「オホ、ト、箱にした爐のやうな物の中へ蛤を並べ、松かさを掴みこみ煽きたてて焼くうち、

彌「コウ、酒はいよのがあるかの。しかし諸白ではなくて片白には困る。そして江戸ぢやアうめへ物の食ひあきしてゐる體だから、道中のものは根から食へぬ。馬に乗れば危し駕は頭がつかへる。店のものどもが、お宿の駕をおつらせなさるが、ようござりますといひをつたが、なるほどさうすればよかつた。不肖して乗れば乗るものよ、もうく道中駕には厭きはてた。北八これからは歩いてゆかう。いよ草履があらば買つてくりや。はきつけぬ草鞋で、コレ見や、足中が豆だらけになつた。」

北「ほんになア、今日はじめに草鞋をおはきなさつたから、古い垢切が再發いたした。彌「飛んだことをいふ。これはあんまり足がやはらかだから、草鞋の紐が食ひこんだのだ。ヤ時に蛤は。」

不肖して—  
我慢しての  
意





そないにや  
つとは―そ  
んなに澤山  
は

彌「安くては嫌だ。高くやるなら乗りやせう。」

か「そしたら高うして三百頂きましよかいな。」

彌「嫌だく。もちつと高くやらねへか。」

か「ハア、まあだ安いなら三百五十で。」

彌「壹〇五百ばかりなら乗つてやらうが。」

か「エ、めつさうな。わしどもも商賣冥利。そないにやつとは頂かれませぬ。せめて

五百で召してくだんせんかい。」

彌「それでも安いから嫌だ。」

か「ナアニ安いこんではあらまい。そしたら別れに七百くだんせ。」

彌「イヤく面倒だ。何かなし一貫五百よりまからぬ、まからぬ。」

か「はて扱困つたもんぢや。それよりちつ共まからまいか。」

彌「まからぬ、まからぬ。」

か「エ、何の事ぢや。かごかきの方から値ぎるといふは珍しい。まよよ棒組、一貫五  
百でやらまいかい。サア旦那召しませく。」

北「いよ天氣でござります。」

彌「オ、サ、風が凧であつたかだ。」

北「さやうでござります。」トかりに主従のごとく打語りつゝ行くほどに、はやくも太ふく村安中村をうち過ぎて町や川にさしかよれば、彌次郎兵衛とりあへず、

旅人を茶屋の暖簾に招がせて、のほりくだりをまちや川かな。

かく打興じて、なを村おふけ村にたどりつく。此あたりも蛤の名物、旅人を見かけ、火鉢の灰を煽ぎたてて、

女「お入りなさりませ。諸白もお飯もござります。お支度なさりませ、お支度をなさりませ。」

かこかき「駕いかまいかいな。これから二里半の長丁場ぢや。安うして召さぬかい。」

彌「イヤ、駕は入らぬ。」

かこ「あとの親方、旦那を乗せ申してくだんせ。戻りぢや、やすめに。」

北「旦那はおひろひがお好きだ。」

かこ「さういはずと、モシ旦那安うしてやらまいかいな。」

おふけ村一  
名所圖會に  
東富田おふ  
け兩所の茶  
店に火鉢を  
軒端に出し  
松毬にて蛤  
を焙り旅客  
を饗す  
おひろひ一  
徒歩

馬士「そんならよヲせよせ。」馬「ヒインく。」

長もちにんそく「船はナア、追手に帆かけて走るナアンエ。はやくサア、熱田に泊りたや  
ナアンアエ。八兵衛どうした。馬でものだか何だかはねらア。どつこい、どつこい。」

北「何と彌次さん、何もなぐさみだに、かうしやうもアねへか。お前の荷物と私がのを  
一所にして、一人がひつかついで、半日がはりに旦那と家來の仕打はどうだらう。」

彌「コリヤおもしろへ。それよからう。まづおいらから旦那をはじめろぞ。」

北「そりやアいよが、今日はもう八ツだから七ツがはりにしやせう。勿論旦那と供のあ  
しらひは、互に番狂はせなしにやらかしやせうぜ。」

彌「知れた事よ。」トいひつよ、あたりに竹一本を才覺して、彌次郎が荷物と北八が包を  
兩方にくよりつけ、

北「先年役におめへ旦那よ。おいらは上下といふもので出かけやう。ナントよつほど氣  
がきいてゐるだらう。」ト後から荷をひつかたけて、

北「モシ旦那へ。」

彌「なんだ。」

せりふのちいり

きりぎりす

やぶくろも

かくせり





将河

素名

の

凡京

凡凡凡凡

凡凡



### 四編 卷之下

宮重大根  
尾張の國中  
島郡宮重よ  
り出す大  
根、末太し

ふるふき  
大根を湯煮  
にし熱き内  
に味噌を附  
けて食ふも  
の

しやうろく  
―正值の意

宮重大根みやまじだいこんのふとしくたてし宮柱みやはしらは、ふるふきの熱田あつたの神かみの慈眼みそたはす、七里りりのわたし浪ゆたかにして、來往らいわうの渡船難わたせんなんなく桑名くはなにつきたる悦よろこびのあまり、名物めいぶつの焼蛤やきはまわりに酒吸さけひくみかほしてかの彌次郎兵衛やじろべゑ北八きたやちなるもの、やがて爰こゝを立出たちいでたどり行くほどに、此頃このころ旅人りよじんの唄うたふを聞きけば、

はやりうた「しぐれはまぐりみやけにさんせ、宮みやのお總かみが情所なさけごころ。ヤレコリヤよヲしくよし。」

馬士うまぢ「コレ旦那衆だんなしゆ、戻り馬むかしの乗らんか。」

彌や「よヲしよし。」

馬士うまぢ「安やすいに、たんだ百五十ひゃくごでやらまいか。」

彌や「よヲしよし。」

北きた「しやうろく四文もんで乗るべいか。」

船玉様―船  
の守護神

ほかして―  
捨てて

せんどう「誰ぢやぞい、小便をしたのは。船玉様がけがれる。早くコレ拭かつせいな。」

北「エ、氣のきかねへ人だ。」

せんどう「エ、ソレまだ竹の筒からおちる。それもほかしてしまはつせへな。」

彌「イヤ、これはそつちへやらう、火吹竹にならうから。」

北「エ、おめへが小便したものを、ナニ火吹竹になるものだ。早く拭きなせへ。埒の

あかぬ」トいぢめられて、彌次郎禪はつし、そこらを拭くうち、北八はうすべりを引  
くり返して、敷きなほし、

北「サア、これでいよ。どなたもお坐りなせへ。」

彌「コリア皆様御免なせへ。飛んだ番狂はせをいたしやした」ト遂にない悄氣かへりて  
そこら取りかたづける。乗合みなく、苦笑して、だんまりである。この内早くも船は桑  
名の岸につく。

のり合「きたぞく。小便にこそぬれたれ、船はつよがなく桑名へ來た。めでたいめで  
たい」ト皆々これより上りて、此宿によるこびの酒汲みかはしぬ。

便をするつもりの所に、彌次郎の心には、穴のあいてあるには心つかず、尿瓶のやうに思ひ、竹の筒へ小便をしこみて、後でうちあける事と心得、舟の中にて、すぐに竹の筒へしこみければ、先の穴より小便が流れ出て、船中小便だらけとなり、乗合みなく、肝をつぶし、

「コリヤく、何ちやいな、水がえらう流れる。」

のり合「誰か土瓶をうちこかいたさうな、ソレく、煙草入も紙入もびつしよりぢや。コリヤ堪らんは、ハアお前小便ぢやな」トとがめられて、彌次郎竹の筒を隠し所にうろたへて、まごごくする。

北「エ、彌次さんどうしたものだ。おめへ小便をするなら、そけへ上つて、竹の筒の先のはうを海へ出して、しこむのだはな。めつさうな。船の中が小便だらけになつた。エ汚ねへく。」

彌「おれは又こよでしこんで、後でぶちまけるのかと思つた。」

のり合「イヤはや途方もない。コリヤア臭くてならんわい。船頭衆々々、もう數物は外にはないか。」

めつさうな  
飛んでも  
ないの意

乗物のりもの、皆みなそれごとくに賃錢ちんせんを拂はらひ、舟ふねに乗のる。此時このとき、亭主ていしゅ竹の筒つくだを取とつて來きたり、

「サア、お客様きやくさまそこへなけますぞ。」

北なん「何ひだ火吹竹ふきだけか。」

彌や「これあてがつてナ、とやらかすのだ。よし。イヤ御亭主ごていしゅさん、大きおほにお世話せわ。サア是これで大丈夫だいぢやうぶだ。ハ、ハ、ハ、」

宮のわたしは浪風なみかぜもなし。

—今の熱田ねつだより桑名そうなまで伊勢海いせうみ七里ななりの渡海わたりうみなり

かく祝しゆくしければ、乗合のりあひみなく、勇いさみたち、やがて船ふねを乗出のりだして、順風じゆんふうに帆ほをあけ、海上かいじやうを走はしること矢やの如ごとく、されど浪平なみたひらかなれば、船中せんちゆうおもひくの雑談ざふだんに、勝かちのかけがねもはづるよばかり、高聲かうじやうに笑わらひ罵ののしり行くほどに、あきなひ船ふね、幾艘いくさうとなく漕こぎちがひて、「酒香さけのまつせんかいな、名物蒲燒めいぶつかまやきのやきたて、團子だんごよいかな。奈良漬ならづけで飯食めしはつせんかいな、奈良漬ならづけで飲食めしはつせんかいな。」

彌や「ア、よく寐ねたは。いつの間まにやら、がうぎに來きたぞ。時ときに小便せうべんがもるやうだ」ト宿屋しゆくやの亭主ていしゅがくれたる竹たけの筒つくだを出いだし、こよでこそと、前まへにあてがひ、小便せうべんをする。こ竹たけの筒つくだは火吹竹ひふきだけの如ごとく、先さきの方に穴あなをあけたるなれば、舟ふねのふちにもたせかけて、小



出ふれをよぶこゝろ「ふねが出る。ヤアイ〜」  
此時宿屋の女起しに來り、

女「モシ、いんま一番舟でおます。御膳を上げましょ。」

彌「オイ〜、北八サアおきや」ト二人はおきて手水つかふ内、膳も出で食ひしまひ、  
かれこれする内、

宿の亭主「お支度はようおざりますか。舟場へ御案内いたしましょ。」

彌「それは御苦勞。サア彌次さん、出掛けやせう」トそこ〜に支度して、表の方へ出  
かける。

宿の女房、なんな「御きけんよう。又おくだりに。」

彌「アイ、お世話になりやした」ト暇乞して、舟場へゆく。亭主こよまで送り來り、

「船頭衆、お二人様ぢや。頼みますぞ。」

彌「時に忘れた。御亭主さん、昨夕お約束の、かの小使の竹の筒は。」

ていしゆ「ホンニ、ちんと切らして置きましたに、ドリヤ取つてまゐりましょかい」ト  
亭主かの竹の筒をとり歸る。此渡舟、七里の海上、一人前四十五文ヅツ、其外駄荷、

ちんと〜ち  
やんと

北「何だへ、さうぐうしい。禪がおちてあるとは、ドレくそれか。コリヤア彌次さん  
お前の禪ぢやアねへか。」

彌「エ、情ない事をぬかしやアがる」ト北八が夜着の袖をひく。亭主もさてはと承知  
して、心の内にをかしく思ひながら、

ていしゆ「イヤもう旅の事でおざりますから、お互にお氣をつけて、御用心なさるがよ  
い。ござさま、もうお寐みなされ。」

こぜ「氣味が悪くてねつかれませぬ。よう閉めて行つて下さりませ。」  
ていしゆ「さやうなら」トそこらを立て廻して出て行く。彌次郎そつと手を延して禪を

たぐり寄せる。北八をかしくふき出しながら、

替女どのにおもひこみしは是も又、こひに目のなき人にこそあれ。

すでに夜もいたく更けわたれば、みなく漸く一睡の夢をむすぶ。あかつきの風樹木を  
鳴らし、浪の音枕に響きて、つき出す鐘に驚き、目さめて見れば、はや明方の鳥、カア

カア。馬のいなよきヒインく。

長持人足の唄「坂はナア、てるくナアエ、鈴鹿はくもるナアンアエ、どつこいく。」

くつくと笑つてゐると、此うち勝手より、亭主かけつけ、

「ござさま、どうさつせへました。」

「ござ」わしが此抱へてゐる包を、いんま誰やらが取らうとしをりました。雨戸でもあい  
てあるか見てくれされ。」

ていしゆ「イヤ、どこも開いてはるをりませぬ。」

「ござ」それでもいんまの盗人は、どこから來をりましたらうな。」

ていしゆ「ハ、ア、襖があいてある。モシく、お隣のお客様方、およつてござらつせ  
るか。」

彌「ア、ウ、ムムヤ〜。」

ていしゆ「ハ、ア、こゝに落ちてあるは何ぢや。イヤ、禪ちやさうな。モシお客様方、こ  
れはあなた方のおざりませんか」ト大きな聲するに、彌次郎はつと思ひ、そつと頭  
をあけて見れば、わが禪が、ござの枕元から、敷居越しに、わが枕もとまで長くなつて  
落ちてゐる故、をかしさもかしく、さすがおれがのだともいはれず、もじく〜してゐ  
ると、北八わざと意地わるく起きあがり、

くれされ〜  
くだされ

後夜―午夜  
なるべし、  
午後十二時  
をいふ、後  
夜は夜半よ  
り夜明まで  
なり

彌「ドレ〜」トはひおきて乗り出し、襖の間からさし覗き、「ハ、ア、後姿はなか〜  
意氣な風俗だ。コリヤア、この儘ではおかれぬはへ。」

北「イヤ、さうはならぬ」トいひつゝ夜着を引きかぶり、心の内にはおのれ今に這ひかけ  
てやらうと、わざと寐るふりにて横になると、ぢきに空鼻をかく。此内隣座敷もひそまり、  
二人の瞽女もねた様子。夜もしん〜とふけわたり、後夜の鐘ゴオン〜。  
彌次郎そつと起上り、見れば北八はほんとうにねいりし様子。してやつたりとそろそ  
ろはひかけ、襖をそつとあけて、隣座敷へ入りみれば、ござ二人は前後もしらすねいり  
ばな。彌次郎ござの懐へはいらんとせしに、さすがは目のみえぬものとして用心きびしく、  
風呂敷包を兩手にしつかり抱へてねてゐる故、これが邪魔になりて入りにくく、彌次郎  
そろ〜此風呂敷包をとりのけやうとすると、ござ目をさまし片手に包をかよへ、片手  
にて彌次郎が手をぐつと捕へて、

ござ「盗人よく。お宿の衆〜」トわめき散らされ、彌次郎は當が違ひ、繻絆一ツの  
此なりを、見つけられては業ざらしと、ござが手をたよき放して、さう〜にこなた  
の座敷へかへり、夜着をかぶり、そしらぬふりして寐てゐる。北八とくより目を覺まし

北「おもしろへ、おもしろへ」

あんま「も一つやろかいな」

北「イヤ、もう御免だ。頭がたまらぬ」

あんま「ハ、ハ、えらうおもしろかつた」

此内、彌次郎ふろより上り、この様子をちらと見て、

彌「をしやう、もつとやらかしねへ」

北「イヤ、おいらはもう湯にはいつて来やう。按摩さんもういよによ」トいひすてて風

呂場へゆく。按摩は暇乞して歸ると、内の女床をとりに来り、蒲團を敷きて勝手へ行く、

彌次郎ははやそのまゝ寐かける。此内、北八もふろばより歸りて、

北「オヤ、彌次さんもう寐かけたの。時に、おめへ隣座敷の代物を見たか。飛んだ美しい替女だ」

彌「替女なら目があるめへ」

北「目はねへが、満更ぢやアねへ。今湯からあがつて来る時、一人の替女めが、手水場にまごついてゐるたから、小當りに當つておいた。なか／＼やほでねへ代物よ」

北「目はねへが、満更ぢやアねへ。今湯からあがつて来る時、一人の替女めが、手水場にまごついてゐるたから、小當りに當つておいた。なか／＼やほでねへ代物よ」

北「目はねへが、満更ぢやアねへ。今湯からあがつて来る時、一人の替女めが、手水場にまごついてゐるたから、小當りに當つておいた。なか／＼やほでねへ代物よ」

をしやう  
按摩を指す



やりからか  
さう—方言  
やらかさう  
の意

あんま「その代り、わしも賞手がなければにやはり合がない。唄ひしまつたら、旦那賞めて下さるかな。」

北「オット承知々々。」

あんま「ドレ、やりからかさう」ト北八が頭をもみながら、拍子をとりに頭をぴしやく。  
あんま「ジャく〜ジャンく〜、エ、酔うた酔たく〜五勺の酒に、壹合のんだらさままたよかろ」ト唄ひさして、北八が耳の中へぐつと指をつつこみ、「こいつがさいせん、われらが頭を、足蹴にひろいだ、はつつけやらうめ。かつたいやらうめ。うぬがよなやらうはろくではゆくまい。あけくのはてには首でもつるぢやろ」トいひさして、耳の穴より指をぬけば、耳はボンとなる。

あんま「やとさのせ、やとさのせ。」

北八耳の穴を塞がれて、うぬがことを悪くいはれたをも知らず、

北「ヤンヤく〜。」

あんま「ジャく〜ジャンく〜」ト拍子にかよつて北八が頭を、ぴしやくと叩く。北八顔をしかめて、

又となりのうた「さす手ひく手にわしやどこまでも、浪のうきねの梶まくら。」

北「よいくくくよいやなア」ト又足にて座頭の頭をなでる。

あんま「ヤンヤくく。」

北「ハ、ハ、おもしろへ、おもしろへ」ト此内宿の女、

女「お湯にお召しなされませ。」

北「彌次さんもうしめへか。しめへなら湯にいりなせへ。按摩さんが踊を賞めてくれた代りに、これからわつちも揉んでもらほう。」

彌「ドレ、そんなら入つて来やう」ト彌次郎は湯に入りに行く。後にて按摩は北八をもみにかより、

あんま「時に旦那方は、ちと當宿のおつるでもおよびなされ。」

北「イヤ、それよりかア、隣の三味線は、こよの娘か何人だの。」

あんま「あれは二三日前から、こよの内に泊つてゐる替女でおますが、よい聲だなもし、しかし、まんだわしが甚句を旦那方へ聞かせたい。」

北「コリヤよからう。やらかしねへ。」

り合せし替女二人が、なぐさみに三味線を出して、伊勢音頭を唄ふ聲する。

うた「はなもうつろふあだ人の、うはきも戀といはしろの、むすびふくさのときほどき。ハリサ、コリヤサ、よいくくくよいとなア、ツテチレく。」

北「イヤ、こいついよ聲だ。ナント按摩さん、わしは踊が上手だ。おめへ目が見えろとあの唄で一つ踊つて見せてへもんだがな。」

あんま「わしも好きだがなア、踊らつせる音を聞かアず。一つやらつしやらまいか。」

北「やるはやらうが、賞めてもらはにやア張合がねへから、かうしやう、わしがをどりしまつた所で、おめへの頭をちよいと撫でやうから、それをきつかけに、やんやアと賞めてくんな。よしかく。ソレ踊るぞ。」

となりのうた「とけぬおもひはふたつ箱、みつよついつも泊りぶね、それがくがいのゆきちがひ。ハリサ、コリヤサ」ト三味線に合せて、北八手を叩き踊るまねをして、

北「よいくく、よいやさア」ト踊りしまひ、座頭の頭を、ちよつと足にてなでると、

あんま「ヤンヤア、えらいく、ハ、ハ、ハ。」

北「何とおもしろからう。も一つやらうか。」

同じく八文投り出してやる。入りかはりて此うちの亭主、ひよつくり顔を出せば、

彌「エ、又八文か。貴様は何の建立だ。」

ていしゆ「イヤ、明日はお舟でおざりますか。又佐屋廻りをなされますか。」

北「すぐに爰から舟にしやせう。」

彌「舟はいよが、おいらアどうも舟では、なぜか小便をするが怖くて、そしてねつから

出ねへには困る。七里乗るといふもんだから、堪へてはゐられず、どうしたものだらう。

佐屋へ廻らうか、ノウ北八。」

ていしゆ「イヤ、それには能いものをあけうす。さやうのお方には、私がいつも竹の筒

を剪つてあけますから、それでお小用なされるがようおざります。」

彌「そんなら、それをお頼み申しやす。」

ていしゆ「ハイ、先御膳をあけう。」ト立つて行く。此内、女膳をもつてくる。こゝに

てもいろくあれども略す。やがて膳もすみたる頃、先ほどの按摩來り、

「旦那がた、いたしましよかいな。」

彌「サアやらかしてくんなせへ。」トこれより彌次郎按摩にもませる。この内隣座敷に泊

佐屋廻り—  
宮より岩塚  
萬場を経て  
佐屋に出で  
陸路を桑名  
に至るを云  
ふ、行程十  
四里なり

「お茶あがりませ。」

座頭のあんま「お療治をなされませぬか。」

北「療治もしてへが、マア腹がへつた。」

彌「うどんでも食つて來や。ここの名物だ。」

あんま「さやうなら、後に來ませず」ト立つて行く。あとより二三人づれにて弓張提燈をともし、

「ハイ、お泊りでおざりますか、是は當驛のおんばこさま、手水鉢の建立、お心ざしをお頼み申します。」

彌「ハイ、北八そけへ上げてくりや。」

北「是は少しながら」ト錢八文出してやると、帳にしるし出て行く。入りかはりて、坊様が一人、

「ハイ、私は六十六部の石碑を建てます。お心もち次第、御施主につかつせへて下されませ。」

彌「なんだ。石塔の施主につけ。忌々しい事をいつてくる。ソレ持つて行きなせへ」ト



宮の宿—今  
日の熱田、  
大神宮のあ  
るよりいふ

執着しふちやくのなみだの雨あめに濡ぬじとや、笠かさをめしたる觀音くわんおんの像ざう。

それよりとへ村むら、山やまさき橋はし、仙人せんじん塚づかをうち過ぎ、漸やうやく宮みやの宿しゆくにいたりし頃は、**宮より桑**  
名へ海上七里なへ「はや日暮ひぐれ前まへにて、棒鼻ぼうばなより家毎いえごとに、客きやくを止とむる女をんなの聲こゑ姦かしく、

女をんな「あなた方がたア、お泊とまりぢやおませんか。お湯ゆもちんく沸わいておます。お相客あひきゃくはおま  
せん。お泊とまりなされませ。お泊とまりなされませ。」

彌やま「泊とまりはどこにしやう。錢屋ぜにやか瓢箪屋へうたんやか。」

北きた「向むかうのうちは何なんだ、鍵屋かぎやか。」

女をんな「モシお泊とまりかな。」

北きた「オイ泊とまりやせう。旅籠はたごはいくらだ。」

女をんな「オホ、、ようおます。お泊とまりなさんせ。」

北きた「何なんだいよとか。たゞで泊とまめるか。」

彌やま「むしのいよ」ト笠かさを取とつて入はいる。

宿しゆくの亭主ていしゆ「お湯ゆをあけうす。お足あしがよごれてなけらにや、すぐにお風呂ふろ呂ろへ御召おめしなされ  
ませ」ト荷物にものを座敷ざしきへ運はこぶ。此内このうち、彌次郎やじらう北八きたはちも草鞋わらぢをぬぎ、奥おくへ通とほる。女茶をんなちやをもち來きたり、

笠寺観音堂  
—中古兵火  
の爲に堂宇  
亡び靈像兩  
に打たれぬ  
たるを鳴海  
長者の侍女  
これを悲し  
み自ら被ぐ  
菅の笠を着  
せ参らせけ  
り、この女  
後には公卿  
の籠中に出  
世しこの伽  
藍を營みた  
りといふ

ていしゆ「ありますとも。へい、これがなア廿一匁ヅツ、こちらが廿二匁、下のがな十  
九匁ヅツでおざります。」

彌「もつとこれよりいよのが欲しい。」

ていしゆ「イヤ、もう皆かやうな物でおざります。」

彌「ム、そんなら大事にしまつておきな。誰ぞが買ひやせう。わつちやアいつち初手  
に見ておいた此三分ぎれを、手拭だけ切つてくんなせへ。」

ていしゆ「へいさやうかな」ト肝を潰し、二尺五寸切つて出す。彌次郎、此代を拂ひて  
こよを立出で、

「とんだ奴らだ。すでにいよ三太郎にしやうとしやアがつた。肝つぶしな、ハ、ハ、ハ。時  
に大分道くさをした。ちと急いでやりかけやう」トこれより少し道を早め行くほどに、  
早くも鳴海の宿につきければ、鳴海より宮へ一里半十二町

旅人のいそげば汗に鳴海がた、こよもしほりの名物なれば。

かく詠み興じて、田ばた橋をうち渡り、笠寺観音堂にいたる。笠を頂きたまふ木像なる  
故この名あり。

敵等―上方  
方言にて奴  
等の意

てうしやア  
がる―嘲弄  
する

ていしゆ「よいとても、敵等はよう買やしよまい。ハテ買ひたうても金銀はあらまい。ない筈ぢや。わしが手におはしますぢやて。」

彌「何だべらほうめ。金銀があるまい。人を見くびつた事をいやアがる。あるから買はう。是は禪だけでいくらだへ。」

ていしゆ「なんぢや禪買はう。イヤぶしつけ千萬な。」

彌「こいつ、おいらをてうしやアがる。賣物買物に無駄も何もいるものか。はなつたらしめが」ト大きな聲する。亭主、はつと心づき、さうく將棊をやめて、

「へい、是は籠相申しました。何なと負けて上げませすに、おめし下されませ。」

北「さういひなさりやア、しこたま買つて上げやすは、彌次さん、お前おふくろや内儀様への土産には、あれがよからう。いくらだの。」

ていしゆ「へい、十四匁八分でおます。」

彌「ソレ、そつちらのは。」

ていしゆ「これは十五匁。」

彌「もつといよのはねへか。」

有頂天—九  
天中の最高  
の天、のぼ  
せあがる事

餘念なく、有頂天と成つて、

ていしゆ「サアしまつた。時にお手は何ぢやいな。」

彌「コレサ、こりやア幾何だといふに。」ト少し聲高にいふと、亭主肝を潰して、

ていしゆ「ハイく、それかな。」

彌「いくらく。」

ていしゆ「カウト、あなた幾何だとおつしやる。そこでかやうに致そかい。」

彌「エ、小じれつてへ。コレ賣らねへのか。値段はいくらだといふに。」

ていしゆ「ハテさて喧しい人ぢや。そちらの方へ引つ返して、符帳を見せなされ。たゞ

知れるものぢやないわいの。」

彌「こいつは飛んだ商人だ。符帳にウの字とエの字が書いてある。」

ていしゆ「オ、さうぢやある。カウト、三分五厘布ぢや。」

彌「高いく、まけなせへ。」

ていしゆ「ナニまけい。イヤならまい、此下手將基に。」

將基のあひて「次兵さん、マア商をしままいか。あなた方が待つてござらつせる。」

拜み、今岡村の立場にいたる。此處はいもかはといふ麵類の名物、いたつて風味よしと聞きて、

名物のしるしなりけりわうらいの、客をもつなくいもかはの蕎麥。

客をもつなぐ一芋はそばのつなぎに使用故にかく云ふ

それよりあなふ村、落合村を過ぎ行きて、有松にいたり見れば、名にし負ふ絞の名物、いろいろの染地、家ごとにつるし飾りたてて、商ふ兩側の見せより、旅人を見かけ、

「お入りく。あなたお入り。名物有松しほり、おめしなされ。サアく、これへく、お入りく。」

彌「エ、喧しい奴らだ。」

ほしいものありまつ染に人の身の、あぶらしほりし金にかへても。

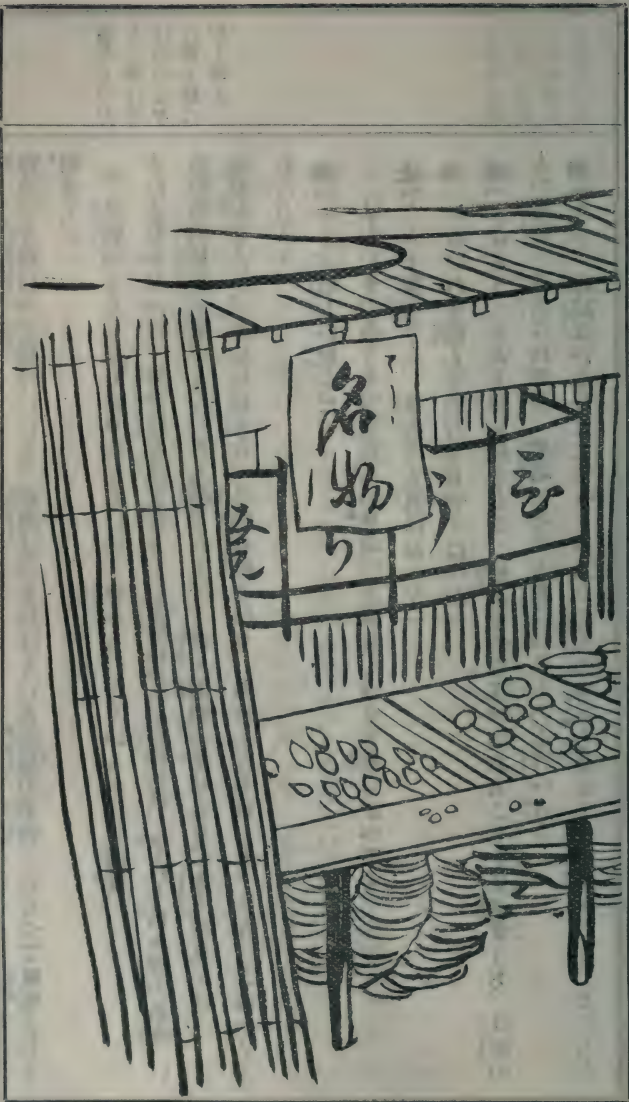
北「ナント彌次さん、單衣でも買はねへか。」

彌「おもいれ見倒してやらうちやアねへか。」

北「よからう。たんと買ふ顔をして、慰んでやらう。」トあちこちを見廻すうち、此町のとつ端に、小店なれども、染地いろく表につるしある内へ入り、

彌「コレ、此絞はいくらします。」トいふに此内の亭主と見えて、將茶をさしてゐるたるが







―ほか、ばかりしか

アノこつちらのかたくの方ばかり買ひやせう。

北「ハ、ハ、ハ、こいつは大笑だ。おいらが眞似をしやうと思つても、餅ならいよが、草履かたくが何になるものだ。」

ていしゆ「お左様でおます。一足お召しなさりませ。どうもかたく離しては、上げられませんわいな。」

彌「ナニ片方は賣らねへか。さすがは田舎だけ物が不自由だ。」

北「エ、江戸だつて、ナニ草履をかたく賣るものがあるもんだ。」

ていしゆ「何ならこれになさりませ。これちやと一そくで七文にして上げませうわいな。」

彌「エ、馬の杓がはかれるものか。人じらしな。」

北「一そく買ひな。お前かたつほ買つて、どうするつもりだ。」

彌「また先へ行つて片方買はう。」

ていしゆ「ハ、ハ、ハ、十四文にいたしませう。一足おめしなされ。」

彌「きさま、とつくにさういへばいよ」トやうくの事にて草履をとよのへ、草鞋をぬぎすて、はきかへ行く。かくて此宿を打過ぎ、早くも八町なはて、さなけ明神をふし

にしつまし  
あればはる  
ばるきぬる  
たびをしぞ  
おもふ

こよの亭主、伊勢者にて、あきなひ巧者なり。

ていしゆ「アイ、お安うおますわいな。わたしとこの草履は、ひゆつと丈夫で、ねから切りや致しませぬ。」

北「ねからア切れめへが、先の方から切れるだらう。」

ていしゆ「イヤ、おはきなされては堪らまいが、しまつておきなさると何時までもおますわいな。」

彌「さうだらう。そしてお前のとこの草履は、鼻緒があつて調法だ。」

北「鼻緒のねへ草履かどこにあるものだ。」

彌「何にしろ安いものだ」トつるしある草履を引ききり 取つて見て、「イヤ、この草履はちんばだはへ。かたくは大きくて、こつちらは小さいやうだ。コリヤア八文ヅツにしちやア、大きな方は安いが、小さい方は高いものだ。ナント御亭主、片方の大きな方を、九文に買ひやせうから、こちらを七文にまけてくんない。」

ていしゆ「アイようおます。おめしなされ。」

彌「なむさん、銭が足りない。一足買はうと思つたが、たつた七文ほつきやアねへから

ほつきやア





それよりうたふ坂町、尾崎の郷、今村の建場につく。

ちや屋のばよ「名物砂糖餅、おめしなさりまアし。お休みなさりまアし、お休みなさり

まアし」。

北「オイ、この餅はいくらジツだ」。

餅屋のていしゆ「三文でおざります」。

北「こいつは安い。こちらの鶉焼はいくらだ」。

ていしゆ「それも三文でおざります」。

北「イヤ、これは三文では高いやうだ。ナント御亭主、かうしなせへ。これを二文にま

けてくんなせへ。其代りそちらの丸い餅は、四文に買ひやせう」。

亭主、こいつは變ちきな事をいふと思へど、どちらにしても損のいかぬこと故

亭主「ハイ、ようおざります。お取りなさりませ」。

北八、煙草入から、錢二文取出して、

「四文あらば、丸いのを買はうと思つたが、二文あるから、この鶉焼にしやせう」ト鶉

焼をとつて、打食ひながらゆく。

鶉焼—小豆餅を薄皮にて包めるもの

女郎「ムウ、さうかいし」

仁「さうとも、さうとも。チツテレ、トツテレ。かねて手管とわしや知りながら、だまされて咲くむろの梅。ハ、ハ、ハ、」ト此内からしり馬二三疋おつたて来り、この茶屋の軒に繋ぎて、馬士ども中庭より奥へ通り、

馬士「旦那方、お迎ひに参りました」

三人「御大儀々々。お名残をしいが、これで別れざならまい」

女郎「久しぶりではからまた、鳴海のおつるさんぢやおませんかいな」

太仁「ハ、ハ、ハ、サア行かうまいか」

ちや屋の女「御機嫌よう」トそれぐに挨拶するうち、三人の客はめいぐからしり馬

に打乗り、暇乞して乗出す。女郎送り出て、さまぐの洒落もあれども略す。彌次郎北

八始終この體を見て、女郎買の、からしり馬で歸るもをかしいと、打笑ひながら、

三味線の駒にうち乗り歸るなり、をかざき女郎しゆ買ひに来ぬれば。

かくてふたりも此所を立出で、宿はづれの松葉川を打こえ、矢矧の橋にいたる。

らんかんは弓のごとくに反橋や、これも矢はぎの川にわたせば。

歸りがけと見え、相方の女郎、この所まで送り來りしと見えて、別れの酒盛大騒ぎにて、此宿のこうき節うたふ聲、賑かに聞ゆる。

うた「菊にませがき結びこめられて、今はしのぶにしのばれず。チツテレ、トツテレ」ト  
大さわぎをやるゆゑ、北八彌次郎奥の方を覗きみれば、一人の客の聲として、

「客「コレく、太兵、盃はどうせるのぢや」

太「イヤ、仁兵の側にあらアず」

仁「ドレ、おれ拾はう」

太「あらためていこしやれ」

仁「オト、こないに受けてはとかうはあらまい。ソレ差そかい」

太「オットうけた、ひゆつとやりからかいて、これから門もつこうへ戻らうまいか。但

しは櫛屋か丁字屋へ行かうまいか」

女郎いくの「何ぢやいし、アノ太兵さんはナア、酔ひなさるとナア、あのやうな事いう

てぢやがナア、外へやりますことはナア、ならまいわいなア」

太「イヤく、かよる折から、橘屋で手形受取つた代物があるから、行かさならまい」

いこしやれ  
—よこせの  
意

行かうまい  
か—此邊の  
方言、行か  
ないかの意

は東海道に名だたる一勝地にて、殊に賑はしく、兩側の茶屋、いづれも綺麗に見えたり。おやち「お休みなさりまアし。お飯をあがりまアし。よい諸白もおざりまアす。お入りなさりまアし、お入りなさりまアし。」

彌「ナント、腹が少しござつたぢやアねか。いかさまこよでお小休とやらかさう」トある茶屋へはいる。

うちの女「ようお出でなさりました。」

彌「姉さん、お飯にしやう。なんぞ味へ物はなしかの。」

女「ハイ、よい鮎の肴がおます。」

北「ナニ、鮎のなますだ。」

女「オホ、々、」ト笑ひながら、やがて鮎の煮びたしをつけて、膳を持ち來る。

彌「ドレ、こいつはうめへ。そしてがうてきに白い飯だ。」

北「エ、外聞の悪いことをいふ。アレ女が笑つていかア。あいつめは顔中が靨だはへ。」

彌「靨ならいよが、頬べたが凹んで、踏返しの馬蹄石といふもんだ。ハ、ハ、」ト例の悪口たらしくしやれてゐると、此内奥座敷には近在の客三人ばかり、此宿にゐつづけし、

北「へ、面目次第もねへ。しかしわつちまでを氣違とは、彌次さん、ありや一生の來だぜ。」

彌「酒でも買やれ。時にそれについて話がある。丁度手前のやうな氣まぐれものが、氣違の女を捕へて、じやらつきかよると、其女の親父が見つけて腹をたて、ヤイこの野郎めは、人の内へ斷なしに牛込やアがつて、娘をちよるまかさうとか。ソリヤア赤坂ベイだはへといふと、手前も負けぬ氣になり、イヤうぬ何だ、嘴を尖らかして、四ツ谷鳶のやうだとちやかすと、先の親父が、オ、おれが四ツ谷鳶なりやア、うぬは八幡様の鳩だといふ。コリアをかしい。此北八がなぜ八幡様の鳩だといふと、親父が、ハテ貴様は氣違の豆を食はうとしたぢやアねへかと、ハ、、、」

北「なんだ、市谷の地口はおされる。ハ、、、」  
打笑ひつゝ行くほどに、あづき坂を過ぎ、岡の江、ゆふせん寺を打越えて、大平川にいたる。

市谷の地口  
市ケ谷に  
も八幡社あ  
ればなり、  
市谷と氣違  
と普通の洒  
落

岸に生ふ芹のあをみに小鴨まで、みづにひたれる大平の川。  
それより大平村を過行くほどに、岡崎の驛にいたる。

岡崎より池鯉鮒へ三里卅丁

こと



彌「アレ御らうじろ、あの通り。その癖あの顔でいる氣違さ。それだから女と見るとひろひろして、ほんに恥をいはにやア理がきこえやせぬが、こいつめは私が弟で、イヤモ、こんな因果なこたアござりやせん。」

おやぢ「ハア、こなさんがさういはつせると私も悲しい。見さつせる通り、たんだ一人の娘がこの病で、わしは大きな苦患でござる。」

彌「察してをります。エ、この馬鹿やらうめ。何をけらく笑ふのだ。時に親父さん、お喧しうござりやした。」

おやぢ「マア、茶でも飲んでござらつせへ。」

彌「もう參りやせう。サア氣違めうせをれ」ト彌次郎がちやらくらに、やうくとまひをさまり、彌次郎、北八をつれて、こよを遁れいで、はては大笑となりて、

くどきたる娘はほんの氣ちがひに、こちや間違となりし目ちがひ。

かく打興じて、こよを立出で、行く道すがら、

彌「コウ北八、手前も飛んだものだ。氣の違つた娘をとらめへて、どうしやうと思つて、業ざらしな男だ。」

ちやらくら  
出鱈目

に違ちがやしよまい。とかういはつせるな。此この分ぶんでは濟すまんぞく、「トわめき散ちらかし、大騒たはさわぎをやらかす。此内このうち彌次郎やじらう、表たはの茶店ちやみせに待まちるたりしが、北八手水きたてうづに行いつて歸かへらぬ故ゆゑ後あとから見みに來きたり、さきほどより此この様子やうすを、片陰かたかげに見みてゐて、をかしさ堪こらへられず、しかしもう出でかけてやらうと、うそく出いで來きたり、

ありやうは  
—有様うさまはに  
て、有體うたいを  
いへばの意い

彌次郎やじらう「御免ごめんなせへ、わつちやアこの男をとこの連つれのものだが、委細ひさい聞きやした。こいつめもあのやうに見みえても、ありやうはちつと氣きがふれてゐやす。了簡りょうけんしてやつてくんなせへ。エ、此野郎このやらうめ、よく世話せわを燒やかせる。アノ頬つらはよ。アレ見みなせへ。きよろくする顔かほが證據しやうこ。娘御むすめごは女おんなだけまだしも、イヤモこの氣違きちがには困こまり果はてやす。」

おやち「イヤく、さうではあらまい。ナニあの人ひとが氣違きちがなものか。」

彌や「ハテサあの頬付つらつきを見みなせへ。アリヤく、あの通とほりだ。」

北きた「何なんだ、おれを氣違きちがた、コリアおもしろい。ハ、ア降ふるはく、アレく花はなの吹雪ふきが、ちりやたらり、うんきんたらり、かんきんちりよ、散ちりかよるやうで、おいとしようて寢ねられぬ。ト、く。ヤア、そこにゐるは女房にようぼうどもか。イヤ能よい女房にようぼうぢやに、イヤ能よい女房にようぼうぢやに。コリア、のほい、ほよい、さんなあるかいな。ヤンヤア。」





我徒―お前  
といふに同  
じ、参河方  
言

さすが振り切りもせず、やつぱり笑つてゐる。北八、こいつは有難い。もう占めたものだと、ぐつと引きよせる。いつの間にやら子供が見つけて、

子供「ワアイく。あの人は氣違と色事をせるやア。ハ、ハ、ハ、ト大聲をあけて笑ひかけ出す。北八びつくりして、にけのかんとするに、娘は掴みついて放さず、

娘「エ、この男め。放さんく。」

北「これは情ない」トむりに引き放さんとする所へ、この娘の親父たち歸りて、

親仁「コリヤ我徒は、若い女を捕へて、何せるのぢや。」

北「イヤ何にもしませぬ。」

おやぢ「せんものが、なんぜ女一人をる内へ這入らつせへた。コリヤ承知ならんわい。」

北「ナニサ、今用たしに行つて、ツヒ水を貰つたばかりさ。」

おやぢ「インニヤ、あれは氣違でござる。こなさん、氣の違うたものを捕へて、慰みか

けさつせへたに違ひはあらまい。」

北「ナアニ、飛たことを。」

おやぢ「インニヤ、すまんく。氣違と侮つて、ひゆつと、こなさんがやりからかいた



むしがかぶ  
る―腹が痛  
む

それより此宿をうち過ぎ、出はなれのあやしけなる茶店に休みて、

北「何だかがうてきにむしがかぶる。婆さん素湯はあるめへか。」

ちや屋のぼく「ハア素湯はござらぬ。水を進ませせうか。」

北「エ、くすりを呑むのだけは、コリヤ堪らなくなつた。時に雪隠はどこにある。」

彌「どこにとつて、そんなにお屋上を見廻しても、雪隠が疊の上にあるものか。裏へ行

かつし。」

北「ヒヤア、つきあたりに見えるく」ト裏へ出で、雪隠へゆき、暫く用たして出で、あ

たりを見れば、この裏に物置を住居とせし、一つ家あり。内に十八九の娘、髪は取亂し

るれども、なかくの上代物、只獨りゐる様子。北八例の悪洒落にて、ずつと此内へ入

りて笑ひかけ、

北「モシ御無心ながら、水を一つ」ト手を洗ふ内、娘はけらくくと笑つてゐる。

北「コウ姉さん、お前何を笑ひなさる。そして獨りでこよにゐなさるのか。無用心な」

トあたりを見れども、外に人はなし。北八腰をかけて、煙草をすひつけ、「へ、氣味の

悪い、何を見て笑ひなさる。コレサ、何を笑ふのだよ」ト娘の手をとつてひつぱるに、

黒になつて力む。されど相手は、血氣さかの勇みでやい、馬の糞を杖の先につつかけ  
さし出し、

「サア持つて来たから食へく」

彌「イヤ馬の糞は嫌ひだ」

旅人「嫌ひといふ事があるものか、是非食せにやアおかぬ」ト三人かよつて、彌次郎を  
手ごめにする。北八をかしく中へはいり、

北「イヤもう御免なせへ、食べたも同前でござりやす」

三人「ハ、ハ、ハ、堪忍してやらう」ト行過ぎる。彌次郎とても叶はぬと見て、たゞ口の

中にぶつくさぶつくさ。此内、桐の木、中柴を打ちすぎ、山中にいたる。こよは麻の編

袋、早繩などを商ふなれば、北八、

御佛の誓ひと見えて寶藏寺、なむあみぶくろはこよのめいぶつ。

かくて藤川にいたる。藤川より岡崎へ一里半七丁。棒鼻の茶屋、軒ごとに生着をつるし、

大平皿鉢、店先に並べたてて、旅人の足をとどむ。彌次郎、

ゆで蛸のむらさきいろは軒ごとに、ふらりとさがる藤川の宿。

寶藏寺—山  
中村にあ  
り、二村山  
法藏寺、法  
相宗

うちは卵塔場ぢやアねへかといやアがつたが、あのべらほうめは、どうでも氣がふれてゐると見える」ト此てやい、ゆうべ彌次郎北八が泊りし内へ、一所に泊つたと見えて、此はなしをする。彌次郎聞きて大きにあつくなり、足早に驅けより詞をかけ、

彌「コレ貴様たちやア、さつきから黙つて聞いてるりやあ、おいらが事をべらほうたア、何のこつた。」

さきのをとこ「ナニこんた衆の事ぢやアねへ。こつちの事だは。」

彌「こつちの事といふことがあるものか。昨夜の宿での事をぬかすのだらう。その襖をぶつこかしたべらほうといつたア、おれが事だは。」

旅人「ハア、こんたそのべらほうか。」

彌「オ、其べらほうだ。」

旅人「ハ、ハ、べらほうだからべらほうといつたが、いよぢやアねへか。」

彌「イヤこいつ、悪くしやれやアがる。」

旅人「糞を食へ。」

彌「何だ糞を食へ。コリヤおもしろへ。食ふべいから持つてうしやアがれ」ト彌次郎眞

# 膝栗毛四編 卷之上

赤坂より藤川へ二里九丁

鶏の聲萬戸に響きて、

ひきつるよ課役の馬の嘶き勇しく、す

でに夜明けければ、彌次郎北八も起き出でて、あらましに支度とよのへ、早くも赤坂の宿を立ち出でけるに、此宿の出端より、跡になり前になり行く三人づれの旅人、是も江戸ものを見て、少しいさみ肌の卷舌にて、話し行くを聞けば、

ひとりの男「コウ、昨夜の泊りは可笑しかつたなア」

今一人「ソレヨ、何だか奥の間にとまつてゐた奴らア氣のきかねへ野郎どもだ。宿に婚禮があるを羨しがりやアがつて、襖の間から覗きをつて夢中になり、とうく襖をぶつこかしやアがつた。大笑ひなべらほうどもだ」

今一人「それからその聲にあやまるさまア、あの騒ぎでおいらも碌に寝られなんだ。いめへましい」

一人の男「そしてアノ一人の野郎めは、何だか宵に宿の亭主を呼びやアがつて、こよの

ちやつと—  
いち早く

きた所が、行燈をひつくり返して眞暗闇。彌次郎はちやつと逃げて、おのが寢所へはひこむ。北八まご／＼してかの聲に擱へられ、せん方なく、

北「御免なせへ。手水に行くつて、ツヒ戸迷ひをしやした。全體こよの女中がわりい。夜座敷の眞中に行燈をおくから、それにけつまづいてお氣の毒だ。あゝ小便がもるやうだ。ちよつと行つて來やせう、こよを放してくんなせへ。」

も、「いやはや呆れたお人たちぢや。夜着も蒲團も油だらけになつた。コリヤ、おさんおさん、誰ぞ早く起してくれぬか」ト呼びたつる聲に、勝手より下女が火をともして來り、そこら片付けるに、北八も手もちなく、はづれし唐紙をはめて引きたて、やう／＼に斷りいうてもとの寢所へかへり、す／＼と寢かける。彌次郎をかしくふき出し、

ねて聞けばやたらをかしや唐紙と、ともにはづれしあごのかけがね。  
北八も、夜着うち被りながら、

聲嫁のねやをむしやうにかきさがし、われは面目うしなひしとて、

斯くうち興じて、夜も更け行くまゝに、双方しづまり、只鼻の聲のみ高くなりぬ。



つく様子手に取るやうに聞え、彌次郎北八は寢もやらず、

彌「エ、飛んだ目にあはしやアがる。」

北「ホンニわりい宿を取つた。人の心も知らずに、何だか恐しく陸じいな。畜生め。」

彌「サア話聲が止んだからむづかしい」トだんく蒲團から乗り出て、隣のやうすを聞  
耳たて、ねられぬまよに、彌次郎そつと起きたち、襖の隙間からさし覗く。北八も裸の  
まよはひ起きて、

北「コウ彌次さん、嫁は美しいか。おいらにもちつと見せてくんな。」

彌「コリヤ静にしや。肝心の所だ。」

北「ドレく見せねへ。」

彌「アレサ引つばるな。」

北「それでもちつと退きなせへ」ト彌次郎が夢中になりて覗きゐるを、引きのけんといひ  
つばれども、退かじと意地ばるはずみに、ばつたり襖があちらの間へ倒れるト、二人も  
共に襖の上へころける。聲も嫁もおしにうたれて肝を潰し、  
む、「あいたくくく。コリヤどやつぢやい。なんせ、唐紙を打ちこかいた」トはねお  
打ちこかい  
たー打ち倒  
した

ト此内、勝手より膳も出てかれこれするうち、座敷にて又諺うたふ。

「千代もかはらじ幾千代も、さかえさかゆる松梅の、ふたばの竹のよをこめて、老とな  
るまでも結ぶぞたのしかりける。めでたい、めでたい。三國一の嫁とりすまいた。しや  
んしやんく」ト手を打叩き、さどめきわたる。此内勝手より女來り、

「女「あなた方、もうお床をとりましょか」

彌「そんな事にしやせう」

北「コレ女中、祝言はもう濟みやしたか。さだめて嫁御は美しからう」

女「アイサ、聲様もよい男、嫁御様もえらい器量よしでおざります。お氣の毒なことは、

あちらの座敷に寢やしやりますから、睦言が『えましょ』」

彌「何だ、そんな手合と割床はあやまる」

北「こいつは大變々々」

女「モウお静まりなさいませ」ト出て行く。二人もそのまゝ寢かけると、はや襖ひとへ

隣の座敷に、聲と嫁が寢るやうす。ひそくと話するをきけば、した地からいろごと  
にて貰ひし嫁と見えて、なか／＼初對面とは見えす。ぶつたりつめつたりして、いちや

あやまる—  
閉口だ

わんかぐ—  
椀、家具の  
意か

やみくも—  
無暗と

うのやうだ。どうも堪へられぬ。エ、まよよ、やらかせ」ト一ぱい注いで呑み、舌打しながら、「酒だく。ドレく着。オット此玉子はどうも色合が氣にくはねへ。海老にしやう。ガリくくく。こいつはほんとうの海老だく」トひつかけく、差いつおさへつさつくくと呑みかける。此内勝手の方は、わんかぐの音がたびしと騒がしく、取込最中。はなれ座敷でははや婚禮の盃ごと始まりしと見え、謠の聲する。

「四海波しづかにて、國もをさまる時津風、枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめでたかりけれ」

北「ヤンヤア」

彌「コウ喧しいはへ」

北「喧しいはいよが、お前さつきから盃を放さねへ。ちつとこつちへ廻しな。ホンニ馬の糞だの小便だのといふかと思やア、やみくも獨りで喰ふやつさ。ハ、ハ、ハ、ハ」

彌「おらア正直化された氣になつて居たが、今おもやア、さうでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた」

北「エ、お前の苦勞したよりかア、おらア縛られて、へんちきな目にあつた。ハ、ハ、ハ、」

ていしゆ「ハイおさやうでおざります。私の甥めに嫁を貰ひました。今晚婚禮をいたさせますから、お喧しうおざりませよ」トいひすてて立つて行く。北八ふろより上り、

北「何だおざりかけるの」

彌「ここの内に婚禮があるといふ事だ。コリヤいよくきやつめがはぐらかすに極つた。もう水風呂へも入るめへ」

きやつめが  
云々―狐め  
がだますの  
に相違ない  
の意

北「エ、お前もいよかけんにしな。さりとは執念ぶけへこつた」

彌「イヤく、めつたに油断はならぬ。この硯ふたも、こんなに甘さうに見えても、性は馬のくそや犬のくそだらう」

北「ホンニさうだらうから、お前は見てるなせへ。こいつは有がてへ。お辭氣なしにやらかしやせう」ト北八手酌にて、さつくと呑みかける。彌次郎例の意地がきたなく、流石に見てもゐられず、まじくして、

彌「いめへましい。氣を悪くさしやアがる」

北「氣遣はねへ、一ぱい呑みなせへ」

彌「イヤく馬の小便だらう。ドレにほひを嗅して見せや。ムウくこりやアほんと

ていしゆ「エ、何ヲおつしやる。」

北「ハ、ハ、ハ、おもしろへ、おもしろへ」ト此内、勝手より宿の女

女「お湯にお召しなさりませ。」

北「サア彌次さん、先、湯にでも入つて氣を落ちつけるがいよよ。」

彌「畜生めが糞壺へいれやうと思つて、その手を食ふものか。」

ていしゆ「ナニ、湯は清水でおざりますから綺麗でおざります。マアお出でなさりませ。」

ト勝手へゆく。女茶をくんで來り、

女「モシ御さみしかア、女郎さんがたでもお呼びなさりませ。」

彌「ばかアいふな。石地藏を抱いて寝るこたア嫌だ。」

女「ホ、ハ、ハ、異なことをおつしやります。」

北「そんなら、先へ入りませう」ト北八湯殿へ行く。この内亭主また座敷へ出で、

ていしゆ「時にお客様へ申し上げます。今晚は私方に少し祝ひ事がおざりますから、御

酒を一ツあげませう」トいふうち、勝手より酒肴もち出る。

彌「お構ひなさるな。何ぞおめでたい事かの。」



屋の亭主、

「サアお入りなさりませ。ソレお湯をとつて来い。お座敷はえいかな」

北「ア、飛んだ目にあつた」ト足を洗ふ。此うち、宿の女荷物を座敷へはこぶ。二人も座敷へうち通りて、

彌「ホンニ北八了簡しや。おらア實にほんとうの狐だと思ひつめた」

北「ばかくしい目にあつた。いまだに此手首がひりくする」

彌「ハ、、、しかし待てよ。斯うはいふものの、やつぱりこれが、化かされてる

のぢやアねへか。どうやらをかきな心もちだ」ト無上に手を叩き、「御亭主々々」

ていしゆ「ハイお呼びなさりましたか」

彌「コレ、どうも合點が行かぬ。爰はどこだ」

ていしゆ「ハイ、赤坂宿でおざります」

北「ハ、、、彌次さんどうしたののだ」

彌「エ、未だはづらかしてゐやアがる」トいひつゝ眉毛をぬらして、「御亭主さん、何と

はづらかして  
てーごまか  
すの意





彌「それ見たか。此化けぞこなひめ」ト北八を杖にて一つくらはせる。

北「アイタ、、、、、どうしやアがる」宿屋の男きもをつぶし

やどや「あなた方、外のお連様はまだお跡でおざりますか」

彌「ナニもうわつち一人さ」

やどや「ハア夫では間違ひました。私かたのお泊りは、十人様ちやと承りました」ト此男

は、さうく行過ぎる。又ある旅籠屋の店先にて、

ていしゆ「お泊りかなもし」トかけよつて掴へる。

彌「イヤ連のものが先へ来た筈だが」

北「その連はおいらだはな」

彌「エ、いけしぶとい奴だ。もういよかけんに尻尾を出しをれ。イヤまでく。あそこ

に犬がる。コ、、、シロココ、、、オ、シキオ、シキ。ハ、ア犬が来て、いけしや

アしやアとして居るから、さては狐ではねへ。ほんとうの北八か」

北「知れた事。わりい洒落だ」

彌「ハ、、、、サアお前のところへ泊りやせう」ト心解けて北八が縛をもとくと、宿

北「アレサ尻へ手をやつてどうする。」

彌「どうするもんか、尻尾を出せ。出さずばかうする」ト三尺手拭をとぎ、北八が手を後へ廻してしる。北八をかしく、わざとしばられてゐると、

彌「サア、先へ立つてあるけく」ト北八をくより、後から捕へて、おつたておつたて、あか坂の宿にいたる。早いづれの旅籠屋にも客を泊めて、門に立ちゐる女も見えず。彌次郎は宿から迎ひの人が、もはや出さうなものと、うろつくうち、

北「コウ彌次さん、いよかけんに解いてくん、外聞のわるい。人がきよろしく見て悪いはな」

彌「エ、くそを食へ。ハテ宿はどこだ知らん」

北「ナニ己はこゝにゐるものを、誰が先へ宿を取つておくものだ」

彌「まだぬかしやアがる。畜生め」この内、向より来る宿屋の男

やどや「あなた方は當宿お泊りではおざりませぬか」

彌「きさま迎ひの人か」

やどや「ハイおさやうでおざります」



彌「オヤ手前なせこよにゐる。」

北「宿とり先に先へ行かうと思つたが、爰へはわりい狐が出るといふ事だから、一所に行かうと思つてまち合せた」トいふに、彌次郎心づき、こいつ、きやつめが北八に化けたなと思ひければ、わざとこはみを見せず、

彌「糞を食へ。そんなで行くのぢやアねへは。」

北「オヤお前何をいふ。そして腹がへつたらう。餅を買つて來たから食ひなせへ。」

彌「ばかアぬかせ。馬糞が食はれるものか。」

北「ハ、ハ、ハ、おれだはな。」

彌「おれだも凄じい。北八にそのまよだ。よく化けやアがつた、畜生め。」

北「アイタ、ハ、ハ、ハ、彌次さんコリヤどうする。」

彌「どうするもんか。ぶち殺すのだ」トうつかりした所をぐつと突き倒して、彌次郎その上へのり懸りおさへる。

北「あいたく。」

彌「痛かア性體を現はせく。」

婆、

「アイ茶アまるりませ。」

彌「モシ赤坂まではもう少しだの。」

ば「アイたんだ十六丁おざるが、お前ひとりなら此宿に泊らしやりませ。此さきの松原へは、わるい狐が出をつて、旅人衆がよく化され申すは。」

彌「そりやア氣のねへ話だ。しかし爰へ泊りたくても、つれが先へ行つたから仕方がねへ。エ、きついこたアねへ。やらかしてくれう。アイおせわ」ト茶代を置き、此所を立ち出で行くに、暗さは暗し、うそ氣味わるく、眉毛に唾をつけながら行く。はるか向に狐のなく聲、「ケン引く。」

彌「ソリヤ鳴きやアがるは。おのれ出て見ろ。ぶち殺してくれう」ト力み返つてたどり行くに、北八も先へかけぬけ、此所迄來りしが、これもこよへ狐が出るといふ話を聞き、もしも化されてはつまらぬと、彌次郎をまち合せつれ立ち行かんとおもひ、土手に腰かけ、煙草のみるたりけるが、それと見るより、

北「オイく彌次さんか。」

きついこた  
アねへーた  
いした事は  
ない

斯くて此あたりより、はや日も傾き暮に近ければ、いざや急がんとて、草臥し足を早めてたどり行く道すがら、

北「どうだ彌次さん、埒があかねへの。」

彌「大きにくたびれた。」

北「何と昨晩の泊りは中くらゐな宿で有つた。今夜はかうしやせう、赤坂までわつちが先へ行つて、いと宿を取りやせう。お前くたびれたなら、跡から靜に來なせへ。宿から迎ひの人を出させておきやせう。」

彌「それよからう。しかし宿はどうでもいよから、女のありさうな内にしやれ。」

北「のみこみ山、のみこみ山」ト此處より驅けぬけて先へゆく。彌次郎あとより辿りゆくに、ほどなく御油の宿に入りたる頃は、御油より赤坂へ十六丁「はや夜に入りて、兩側より出でくるとめ女、いづれも面をかぶりたる如くぬり立てたるが、袖を引いてうるさければ、彌次郎兵衛やうくと振りきり、行きすぐるとて、

そのかほでとめだてなさば宿の名の、御油るされいと逃けて行かばや。

彌次郎兵衛、あまりに草臥ければ、先此所はづれの茶店に腰をかけたるに、あるじの婆

冬明  
吉田  
乃  
風系







あぜーなぜ

らんごくー  
亂暴

ふ無上人が、舞臺さアへ驅けだいていやるにやア、この芝居アならないぞ、ならないぞ、あぜ天神様ア島流しにせるのだ。最新お出やつた、長樂寺様の閻魔様ア見るやうなお公家どのが悪人だア。あにも天神様に科アない。いかに芝居だアとつて、人を馬鹿にしたこんだア。天神様の尻ア、此博勞の與五左衛門が持つは、時平どのはうらが相手だと、あにハア御年貢米の二俵べしも、差しやアける力のある兄アだんで、誰もうつたまけて、挨拶のウせる人アなし、見物も口々に、與五左どのさうだ、その時平とやらアしよびき出してぶつ叩けと、あにハア村中の若い人達が樂屋さアへ匆ねこんで、らんごくをやると思ひなさる。さうせると江戸役者の時平どのは、コリヤ堪らないと、尻のウおつ端折つて、つん逃げ申した。それからハア名主どんへ寄合つけて、もう此村へ江戸役者ア入れさるなと談合のウして、わしどもが其跡の芝居さアで、狂言のウおつ始め申したが、江戸芝居よりかア、ぶち割れるほどはやり申した」ト息せいはずの不問語、自慢らしく話してもて行くまよに、いつの間にかは大雲寺にいたる。この處は、甘酒の名物なれば、彼人々は打ちつれて、此茶屋に休む。彌次郎北八は、急ぎこまをうち過るとて、こい、いやたかき御寺の前の名物は、是もほとけになれしあまざけ。

よしつれ「お伊勢さまへ参り申すは。」

彌「さつきから聞けば、お前がたア義經だの、辨慶だのといよなさるが、どういふこつ

たね。」

よしつれ「ハア其方衆の聞きやつたら可笑しかんべい。コリヤハアわし共が、國さアつ

ん出て来る前に祭禮があり申して、千本櫻といふ芝居のウし申したから、それでハア義

經だアの辨慶だアのと、狂言さアおつばじめた時忘れないやうにと、その名をやつべし

いよつけた癖さア、今でも戯にいふのでおさるは。」

彌「聞えやした。そんならお前は義經になつたお方と見える。」

よしつれ「さうでおさる。其前にわしどもが國さアへ江戸芝居が来て、天神様の狂言の

ウし申したが、聞きなさる、たまけた理窟よ。あにかハア時平とやら五兵衛とやらいふ

悪人どのが、讒言のウせられたけで、天神様の島流しにならしやます時、輿に乗つてお

出やると、あにかハア見物のウしてをる婆様たちも、噺さまたちも、ヤレ／＼いとしば

いこんだと涙アこぼして、御門跡さまの通らしやますやうに、米だアの錢だアのと、舞

臺さアへまき散らかいて、悲しがりやる。そこでハア見物の中から、博勞の與五左とい

いとしばい  
—お氣の毒  
な

殿にて往來の美男子を招きたりとの話、唄にも、吉田通れば二階から招ぐ、しかも鹿の子の振袖で

つるんで一連れて

「オ、イ、源九郎義經ヤアイく。早く來さいのく。」トよぶ聲に彌次郎北八をかしく、この義經と呼ぶ男をみれば、紺の紋付の廣袖袷に、これも包といとだてを背負ひ、顔は大あばたにて、少し片小鬚はけたる男。

「かめ井兄や、片岡兄は、やよと足が達者だアのし。うらア踵の垢切さアへ石ころがつつ入つて歩かれ申さぬ。」

かめ井「靜御前はとうしさつたアのし。」

よしつね「ヤレさて聞きなさる。後の建場で、靜御前が持病の疝氣さア起つたと、金玉ノウつり上げて、うつ死ぬべいと、西風東風に騒ぎやることよ。それにハア六代御前が、牡丹餅さア三十計もうち食つたけて、食傷のウして、ぢたんばたん切ながりやる。まんだそれに、辨慶は團子の串さアで咽笛のウつよいたと、涙アこぼして泣きやつたけで、うらア新家の知盛どのが、三人のウ介抱して、やらやつと後からつるんで來申すは。主たやちア何も知らずに、うつ走つて仕合だアのし。」

彌次郎、この話ををかしく、後になり先になりて、

彌「お前方アどけへ行きなさる。」

つけがわり、  
い—間がわ  
るい

吉田—今の  
豊橋市

旅人をまね  
ぐ云々—吉  
田御殿の傳  
説を引ける  
なり、千壽  
院、吉田御

びくに「ハイ是からおわかれ申します。わしどもは、この在郷へまはつて参りますから」ト野道をさつくと行過ぎる。北八呆れて見送ると、彌次郎をかしく噴き出し、彌「ハ、ハ、ハ、北八、手めへ今日は大分つけが悪いぜ。」  
北「エ、飛んだ目にあつた。業腹な」トうつかりしてゐる後から、ばつたり行き當たる往來の人。

北「アイタ、ハ、ハ、ハ、目を明いて通れ。誰だ」トふり返り見れば旅僧。

「オット荷物渡したく」

北「コリヤはじめらねへ」トふしようぐくに、荷物をひつかたけ行くまよに、やがて吉田の宿にいたる。

吉田より御油へ二里半四丁

旅人をまねぐ薄のほくちかと、爰もよし田の宿のよねたち。

此宿はづれより、遠國同者とは見ゆれども、少しきいた風しやへる手合五六人、高聲に話して行くを聞けば、中にもめひきの縦縞に、肩の所縞がらはりたる布を當てたる枡をひつぱり、風呂敷包といとだてを背負ひし男、後の方をふり返りて、

北「今夜いつしよに泊りてへの。何と赤坂迄行きなせへ。一所にしやせう。」  
 びくに「それは有難うおざります。モシどうぞお煙草を一ふく下さりませ。とんと買ふのを忘れしました。」

北「サア、煙草入を出しな。皆あけやう。」

びくに「それではあなたお困りでおざりましょ。」

北「ナニわつちやアよしさ。時にお前がたのやうな美しい貌で、なぜ髪を削りなかつた。ほんにさうして置くは惜しいものだ。」

びくに「ナニ、私らがたとひ髪が有つたとて、誰も構手はおざりませぬ。」

北「あるだんか、わつちらア一番に構ふ氣だ。何と構はしてくんなさらんか。」

びくに「オホ、ハ、ハ。」

北「早く一所に泊りてへ。彌次さん此先の宿へもう泊らうちやアねへか。」

彌「ばかアぬかせ。あやにく坊主の來るがとぎれた」ト小言いひながら行くほどに、火うち坂をうち過ぎ、二軒茶屋にいたると、此所より比丘尼はわき道へはいる。

北「コレ、お前たちやアどこへ行く。そつちぢやアあるめへ。」



安





うた「身やつす賤がおもひを、夢ほどさまに知らせたや。えいそりや夢ほどさまに知らせたや。サアサさんがらへ〜」

北「あざやかな聲がする」トふり返り、「ヒヤア比丘尼だ〜。サア彌次さん渡しやす。」  
彌「エ、いめへましい。」

北「人に荷を持たせるは中々いよものだ。これでお供を連れ来た心もちだ。ヤア〜こいつらアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへ。こちらの比丘尼がおれを見て、アレいつそに〜と愛敬が溢れるやうだ。畜類め。」

彌「愛敬のいよのぢやアねへ。アリヤア顔にしまりのねへのだは。」

北「わるくいふぜ」トこの内、後になり前になり行く比丘尼は、まだ年も廿二三、今一人は年増、十一二の小比丘尼ともに三人づれ、中にも若い比丘尼が、北八の側へよりて、びくに「モシあなた、火はおざりませぬか。」

北「アイ〜今打つてあけやせう」トすり火打を出して、かちく。

北「サアおあがり。時にお前がたアどけへ行きなさる。」  
びくに「名古屋の方へまゐります。」

彌「そんなら狐拳きつねけんでやらう。サアこい。ヒイフウミイ、おつとしめた。」

北「エ、いめへましい」トひつかたけ行く、向むかうから来る旅僧たびそうは法華宗ほっけしうと見みえて、

僧「だぶくくく。だよだぶだぶく。フニヤくくく。だぶくくく。」

北「ソリヤ彌次やじさん渡わたしたぞ。」

彌「オット受取うけとつたりや。其次そのつぎの坊様ぼうさまはどうだ。早く來きればいよに」トまた向むかより來きる

の乗のりかけ馬うまの鈴すずの音ね、シヤンくくく。

馬士うまうた「たかい山やまから谷底たにそこみ見ればエ、おまんかはいや布ぬのさらすナアエ。どうく。」

彌「來きたぞく。お繪符えふは勅願所ちよくわんしよ、ソレ馬うまの上うへに御出家ごしゆつげ。よしか。」

北「あんまりはやいな」ト受取うけとつて、ひつかつぎ行く道みちの傍かたはらにゐざり、

「御覽ごらんの通り、足あしのかなはぬ壁かべに御報謝ごほうしや。」

北「イヤアこいつ坊主ぼうずだ。壹文いちもんやれ。」

彌「前まへから見ると坊主ぼうずのやうだが、後うしろを見や、ほんのくほに毛けがあるは。」

ふ

此内このうち、後あきより比丘尼びくにが三人さんづれにて、指さしにつけし管くだを鳴ならしてうたひ來きる。

お繪符一勅

願所の僧侶

は往來する

に御用札を

馬上荷物へ

建てたり之

を繪符と云

もこれ幸に北八もろともこよを遁れ、足早に行過ぎ、

彌「ハハハ、大笑の喧嘩だ」

わきざしの拔身は竹と見ゆれども、喧嘩にふしのなくてめでたし。

それより、此宿を出てたどり行くに、早くも大岩小岩を打過ぎ、岩穴の観音をふし拜みて、

行きがけの駄賃にをがむ観世音、尻くらひとは岩穴のうち。

けにも旅のきさんじは、差合くらす高聲に話しものしてゆく内にも、さすがに退屈の欠伸しながら、

北「ア、くたびれた。ちつとばかりの風呂敷包や紙合羽も、なか／＼邪魔になるものだ。

コウ彌次さん、お前の荷とわつちの荷を一所にして、坊主持にしやうぢやアねへか」

彌「コリヤアおもしろへ。さいはひこよにいふ竹が捨ててある」ト拾ひ取つて二人の荷物を竹の先にくよりつけて、

彌「サア／＼北八、手前から持つてこい」

北「年役にお前はじめさつせへ」

尻くらひ一  
尻食観音に  
就ては種々  
の説あり、  
六観音の縁  
日の終の日  
は晦日故尻  
暗いなりと  
云ふ説もあ  
り、後ばか  
まばぬとの  
意に用ふ



朋輩の角助が腰の物を取りにかよる。

かく介「コリヤ〜、切るならばお身の刃物でなぜ切らぬ。」

中間「ハテやかましい。どれで切つてもいよぢやアねへか。」

かく介「イヤようない、ようない。」

中間「ハテしい男だ、ちよつと借しやれな。」

かく「イヤさて、おぬしも氣のきかぬ男だ。おれが本當の脇差は、鎗持の槌右衛門に二

百のかたに取られたを、お身様も知つてゐるぢやアねへか。」

中間「ホンニさうだ。エ、コリヤおのれ、打はたす奴なれど許してくれう。早く行け。」

彌「イヤ行くめへ。サアきれ〜」ト突懸る。みな〜此喧嘩をかしがりて、引きわけ

もせず、見物してゐると、かのお中間、

「エ、さうぬかしやア了簡がならぬ。突殺してなとくれう」ト引きぬいて突きにかよ

る竹みつを、彌次郎ひつつかんでねぢ倒すと、件の男

中間「ヤアレ人殺しく〜」ト此内はや、殿様のお立と見えて、おさへの拍子木カツチ

カツチ〜、そりやお供揃とさわぎたつ御同勢につれて、喧嘩も夫ぎりとなる。彌次郎

叶福助―叶  
屋福助、寄  
席藝人にて  
矮身巨頭、  
踊を得意と  
せり

赤鯛―さび  
刀

北八「ハ、ア、お屋敷だけ、大屋様も二本さしてゐるな。」

彌「ばかアいふな。踏込さへはいてゐると、大屋だと思つてけつかるさうだ。」

北「アノ乗かけを見な、がうぎに蒲團が重ねてあらア。」

彌「その筈だ。のつてゐる人の天窓を見や、叶福助といふもんだ。ハ、ハ、ハ、ソレ馬がきたア。」

馬「ヒ、ハ、ハ、」

彌「アイタタ、ハ、ハ、ハ、わりい所に合羽かごを置きやアがる」トけつまづいて小言をいふを、おやとひの中間體に見ゆる男、

「コノ野郎め、合羽かごへ土足を踏みかけやアがつて、太へ事をぬかしやアがる。横顔アかぶりかくぞ。」

彌「ハ、ハ、ハ、大江山の飯時ぢやアあるめへし、顔アかぶりかくも氣がつえよ。」

中間「何だ、こいつぶちはなすぞ。」

彌「貴様たちの赤鯛でナニ切れるものか。」

中間「さうぬかしやア切らにやアならぬ。コリヤ角助、お身の腰の物を一寸借しやれ」ト

酒を木のう  
つろに作る  
を獵師がよ  
く横取する  
をかけたたり

かへてうせ  
たな一駕を  
かいて来た  
なの意、か  
へてはかい  
ての訛

程なく二川の驛に着く。二川より吉田へ一里半二丁此ところ、家毎に強飯を商ふ見ゆれば、

名物はいはねどしるきこはめしや、これ重營のふた川のしゆく。

兩側の茶屋ごとに、旅人を見かけて呼びたつる。

女「お休みなさりまアし。暖かなお吸物もおざりまアす。無鹽の肴で、酒でもお飯でも

あがりまアし。」

此茶やの門口にゐたる雲助、北八彌次郎をのせたる駕かきを呼びかけて、

「ヒヤア八兵衛、かへてうせたな。畜生め、早ういて喚が番をしされ。密夫めがしけこん

でけつかるは。」

彌次郎をのせたるかこかき「あはうめ、己が所の親父めが首釣つてをることア知らずに、く

そたれめハ、ハ、トこよを行過ぎ問屋のすこし手前に駕をおろす。彌次郎北八こよよ

りおり行くと、此宿はいづれの殿様にや、お小休と見えて、御本陣の前に乗物たてつど

き、あまたの御同勢はせちがひ、とひや、袴腰をねぢりて驅けまはり、野袴ふんごみの

お侍衆、御本陣へ相つめるを見て、

かこかき「ナニ無いことはあらまい。慥たしかにいれて置おきました。」

彌や「さつき見みりやア、北八きた、手前てめへが蒲團ふとんの下したから出だして、ひねくり廻ましてゐた錢ぜにぢやア

ねへか。」

かこかき「それでおざります」ト北八きた心こころの中に、いまくしい事をいふと彌次郎やじらうをにら

む。彌次郎やじらうをかくしく側わきの方ほうをぐつとふり向むいてゐる。北八きたしかたなく懐ふところより一本ほんだして

蒲團ふとんの下したへそつと入いれて、

北「オ、く、爰こゝにあつたく。」

かこかき「サア棒組ぼうぐみ、この元氣げんきでやりからかさう。」

ちや屋や「ようおざりました」ト駕かごをかき出いだす。彌次郎やじらうをかくしく、こゝは猿さるが番場ばんばにて、柏かしは

餅もちの名物めいぶつなれば、彌次郎やじらう、

ひろうたとおもひし錢ぜには猿さるが餅もち、右みぎからひだりのさけにとられた。

かく打笑うちわらひて行くほどに、境川さかひがはといふにいたる。こゝは遠江三河とほたふみかほの境さかひにて橋はしあり。彌次やじ

郎地口らうちぐちにて詠よめる、

遠州えんしゅうへつぎ合せたる橋はしなれば、にかはの國くにといふべかりける。

ひろうた云  
云一猿が木の  
の實を貯へ

來され—卑  
語、此邊の  
方言なり、  
來いと意

彌「おもしろへ、おいらも御馳走にならう」ト彌次郎かごを出て、店先にすわると、やがて女が酒肴をもち出る。北八を乗せたる駕の先棒、

「これは有難うござります。旦那いたゞきます。コリヤく棒組、どこへいつた。ヤイみんな來されの。さつきの猿丸大夫さまが、御酒を下されるは」トかごかき四人よりござりて飲みかける。彌次郎もをかしく、おもいれ呑みかける。北八は一番へこまされてだんまりなり。

彌「サアく御亭主、いくらだの御酒代は、駕の旦那がおはらひだ。」  
ていしゆ「ハイく、酒と肴で三百八十文でござります。」

北「コリヤがうてきに食やアがつた」トふしようくにかの錢を拂つてしまふ。駕かき心づき、

「ヤほんに棒組、先刻の一本の錢はどうした。」

ぼうぐみ「オ、それく。モシ旦那、あなたの乗つてござらつしやる蒲團の間に、四文錢一本いれて置きましたか、あるか見て下さりませ」トいはれて北八びつくりし、

北「ナニ爰にか。イヤ見えないはへ。」



首の猿丸大  
夫の歌

行かアず—  
參尾方言に  
ては、行か  
んずを長く  
行かアずと  
云ふ

あとほう「旦那はえらいものぢや。わしどもは皆目しらぬが何にしされ、歌が直にひゆつと出るといふものぢやから、えらい〜」

北「一寸した所が、此くらゐなものよ。イヤ貴様たち、あんまり讚めてくれたから酒が呑ましたくなつた。爰は建場か」

さきほう「猿が番場でおざります。サア棒組、一ぶく吸つて行かアず」ト茶屋の門に駕をおろし休む。

北「みんな一盃ツツ呑まつし。コレ女中、そこへ酒を一舂でも二舂でも、うめへ肴をつけて出してやつてくんない」

彌次郎兵衛駕の内にて、

彌「オヤ北八どうした。でへぶ大風なことをいふな」

北「ナニサ、ちよつと呑ませるが、どこでもこの位なものだ」トさきほど拾ひし四文ぜに一本を出し見せかける。

彌「手めへ、それを皆おごるか」

北「しれた事よ」

くぶくして、そしらぬ顔をしてゐる。この内早くも白須賀の驛に至る。百須賀より二川

へ一里十六丁 入口の茶屋女、表に出で呼びたつるを見て彌次郎、

出女の顔のくろきも名にめでて、七難かくす白すかのやど。

此宿をうちすぎ、程なく汐見坂にさしかゝるに、これなん北は山つゞきにして、南に蒼

海漫々と見え、絶景まことにいふばかりなし。

風景に愛敬ありてしをらしや、女が目もとの汐見坂には。

北八かく口ずさみたるを駕の先棒聞きつけて、

「ハア旦那はえらい歌人ぢやな。アレ向の山を見さしやりまし、鹿がるをりますは。」

北「ドレく、是はおもしろい。」

さきほう「めいよう、お江戸の旦那がたは、あんなおもしろうもない畜生めを 珍しが

らしやつて、昨日も發句とやらをいはつしやれたお人があつた。」

北「おれも今の鹿で一首よんだ。貴様たちについて聞かせたとつて、馬の耳に風だらう

が、かういふ歌だ、おく山に紅葉ふみわけなく鹿の、聲きく時ぞ秋は悲しき。なんと奇

妙か奇妙か」

めいよう一  
めんようと  
同じ、不思議に  
おく山に云  
云一百人一



鷹かうむ高師の山—鷹が鷹を生むといふ俚諺をかけた

鷹かうむ高師の山の冬はさぞ、ゆきに眞白く見違やせん。

此あたりにて、向よりくる二つの駕に行合ふ。

ふた川のかごかき「どうぢや親方、かへて行かずに。」

こちらのかごかき「なんほおこす。」

ふた川「けんこやらすに、それでいぢやござい。」

こちらのかご「まよよ、棒組まけてやらアす」ト駕の相談ができて、

両方のかごかき「旦那様がた、駕をかへますから、乗りかへて下さりませ。」

北「二川まで打こしだがいよか」ト此内、二川の駕に乗り来る男、こちらの駕に乗りか

はれば、北八も彌次郎も、先の駕に乗りうつる。北八を乗せたる駕かき、

「旦那は仕合ぢや。コリヤア宿屋駕でおさりますから、蒲團がしいてあるだけ、お前が

たは替へさしやつたが、お徳といふものぢや。」

北「ほんにさうだ」トいひつゝ、駕に下敷の蒲團高くなりたるに心づき、何心なく蒲

團の間をさぐり見れば、四文銭一本あり。さては今まで乗つて来た男が、爰において忘

れたと見えた、何でもこいつせしめうるしと、北八そつとかの一本を、おのが懐へちや

彌「ほんにわらぢの切れるはあるき下手でござりますが、あなたは道が巧者なことだ。しかし私も此草鞋は、一昨年松前へはいて参つたが、歸るまで何ともござりませなんだから、しまつて置いて、去年長崎へもはいて参るし、そして又今度は出て出ましたが、御らうじませ、まア何ともござりませぬ。」

侍「はて扱、お手前は身共より道が巧者ぢや。いかゞ致せば、そのやうに久しく草鞋がはかれますな。」

彌「ナニサ、草鞋ははきづめにしても切れませぬが、そのかはり私は、どうも脚半が切れてなりませぬ。」

侍「それはどうして。」

彌「私は旅へ出ますと、馬に乗りづめに致しますから。」

北「おきやアがれ、ハ、ハ、ハ、」

彌「サア行かう。あなた御ゆるりと。アイおせわ」トここの勘定をして立出で、此宿はづれより、二人とも二川までの駕をかりて、打ちのり行くほどに、はや高師山、橋本の北に見ゆれば、彌次郎兵衛例の狂歌を口ずさむ。



馬士「いつたい空尻のお荷物には、重過ぎてをるから、どうぞ御了簡なされまして」

侍「しからばソレ八錢も遣はさう」トくわんざしより八文ぬいてやる。

馬士「ハイ、せめて十六文下さりませ」

侍「しからば身共了簡のもつて、今四文遣はさう」トせに四文投り出してやる。馬士

ふしようぐに取つて、馬を引きゆく。

侍「コリヤまでく。なむ三寶あやつ、もうどこへか行きをつたさうな。身共大切の草

鞋を、馬につけておいたが、持つて行きをつたさうぢや。残念な、江戸まではかれる草鞋

ぢやものを」トぶつく小言をいふを、北八をかしく、

北「モシ、あなたは江戸へお下りでござりまするか」

侍「さやうく」

北「今承りますすれば、草鞋一そくを、江戸までおはきなさると見えましたが、けしか

らす道がお上手でござりますの」

侍「イヤ、身共手作にいたいたわらうぢや程に、一そくあると、いつも江戸迄行戻り

はきをります」

なむ三寶―  
佛法僧の三  
寶を祈願す  
るが原意な  
れど多くは  
失敗せる時  
しまつたと  
云ふ程の意  
に用ふ

すが、小つけが丁度五ツ。」

侍「その貫ざしはこれへたもれ。」

馬士「ハイ、モシ旦那様ちとお願がおざります。へ、へ、どうぞ御酒を一ばい食べたうおざります。」

侍「ホウ、お身酒がすきか。」

馬士「ハイ、飯よりは好きでおざります。」

侍「遠慮のない事ぢや。勝手に飲みやれ。身ども食べうすならば、ふれまはうものを、かいもく下戸ぢやからせひがない。」

馬士「ハア旦那は上らずとも、ハイどうぞ頂きたうおざります。」

侍「ハ、ア解せた。お身、酒手をくせといふのぢやな。イヤまかりならんぞ。道中御定

法の賃錢とも、相拂つてまかり通る。別に酒手なぞといふことは、決してならん事ぢや。」

馬士「左様ではおざりますが、どうぞそこを。」

侍「イヤたつてといはば遣はさうが、請取書をしやれ。身共歸國の節、問屋どもへ相とどける。」

陽成帝元慶八年架す

長さ五十六丈、更科日記に、濱名の橋下りし時は黒木をわたしたりし、此度上りしに黒木だになし舟にてぞわたる云々、其早く断えたるを知るべし

ちや屋をんな「お休みなさりまアし。お休みなさりまアし。コレ馬士どん、お下し申さつせへよ」

馬士「オット旦那様、ソリヤお頭があぶんない」ト茶屋の軒下へ馬を引入る。この空尻に乗りたるは、木綿の鼠小紋に、ひうちの所へ黒縹子をあてたるぶつさき羽織を着たるお侍。馬より下りて、北八と彌次郎が休んでゐる向の床几に腰をかける。

女「お茶あがりました」ト茶をくんで来る。お侍、女の顔をじろりと見た後にて、茶碗を取り、

侍「モウ何時ちやらう」

女「九ツ半でもおざりませよ」

馬士「昨日の今時分ちやろかい」

侍「したくいたさう。何ぞあるか」

女「おなぎの蒲焼がおざりませ」

侍「何ぢや、お内儀の蒲焼か」

馬士「御亭主のすつほん煮はなないかな、ハ、ハ、ハ、。時に旦那、此お荷物は是におきま

三編 卷之下

螺貝の出でし云々―後  
柏原院永正七年八月二十七日螺貝出で山崩れ川埋れたりと云ふ、明應八年に大地震あり湖岸崩れ海と一となる、此處を今切と云ふ  
濱名の橋―

荒井より白須賀へ一里十六丁〕由縁齋貞柳の狂歌に、螺貝の出でしむかしは知らねども今吹くはよき追手なりけりと詠みしは、東海道に名だたる今切の渡になん。そのかみ明應の頃、山の奥より螺貝あまた抜け出で、それより海上あしくなりたりしを、元祿年中、公の命によりて、海上に數萬の杓をうち、蛇籠をふせ、往來渡船の難溢をすくひ給はりし御惠のありがたさに、風和らぎ浪低くなりて、わたるに難なく、かの彌次郎兵衛北八爰をうち渡りて、荒井の驛に支度とよのへ、名物の蒲焼に腹をふくらし、休みるたるに、けにも往來の貴賤たえまなく、舟場へ急ぐ旅人は、足も空に、出船をよばふ聲につれて走り、問屋へかよる宰領は、口やかましく、課役をふるよ、馬さしについて罵る。旅籠屋の袴腰よこちよに曲けて走り、茶屋女の前垂すちかひに引きすつて飛ぶ。長持人足横に立つてうたひ、馬士後を向きて、ひよぐりながら行く道すがら、  
うた「うらが性根は、濱名の橋よエ、今はとだえて、エ音もせぬヨエ。ドウく。」

舞坂まじさかを乗のり出いだしたる今切いまぎりと、またたくひまもあら井ゐにぞつく。

さるにても、腰こしのものの流ながれたるは、前代未聞ぜんだいみもんの話はなしの種たねと、みづからうち笑わらひつゝ、北きた

八、

竹篋たけべらをすててしまひし男をとこぶり、ごくつぶしとはもういはれまい。

それより二人ふたりは、此荒井このあらいの宿しゆくに酒さけくみかはして、足あしを休やすめぬ。

ごくつぶし  
糊かを作る  
時竹篋ときたけべらにて  
米粒こめつぶをつぶ  
すにかけた  
り



北「エ、尻の穴のせめへことをいふ親父めだ。奥州衣川で、辨慶が立往生したときやア、太刀も鎧も流れたといふことだ」

おやち「ハ、ハ、ハ、こりやアハア横腹が痛くなり申すは。柳樽といふ本に、ころも川さ  
いづちばかり流れけりといふ句がありまうす。辨慶のさしてお出やつた腰の物は、金で  
こしらへたもんだから、流れべいたアござんないは」

北「エ、いはせておきやア、よくしやべる死にぞこなひめだ。はり飛ばしてやらう」ト  
又立ちあがり、摺みかゝるを、彌次郎おし留め、

彌「もう北八いよにしや。乗合の衆の手前もある。静まれく」ト是をなだめる内、船  
ははや荒井近くなる。

せんど「サア、お關所前でござる。笠を取つて膝をなほさつしやりませ。ソレソ  
レ舟があたりますぞ」

のり合「ヤレ、滞りなくついてめでたい、めでたい」

ほどなく船は荒井の濱につきければ、乗合みなく、舟をあがり、お關所を打過ぎける。  
彌次郎北八も船をあがり、

おやぢ「インニヤ、やアだ。なり申さぬ。」

北「ならざア貴様ぐるめに、海へぶちこんでしまふがどうだ。」

おやぢ「オ、サ、はめるならはめて見さつしやい。私にも手ぶしがござるは。」

北「エ、このおやぢめが太へ奴だ。」ト北八立ちかよつて、かの親父の胸倉をとると、懐から蛇の頭がによつこり出る。北八きやつといつて飛びのく、彌次郎つどいて立ちあがり煙管にて親父を一つくらはせる。親父腹をたて、掴みつくると、船中みなくとりさへるうち、又かの蛇がおやぢの袂から落ちてのたくり廻ると、

みなく「ソリヤ又出をつた。ぶち殺せ、ぶち殺せ。」

北八自分の脇差のこじりて、ちやつと蛇の頭をおさへる。蛇そのまゝ鞘にまきつきたるを、ちよいと海へ投げなけるはずみに手が滑り、脇差も一所に海へうちこみけるに、蛇は波にまかれて見えす。脇差は竹光ゆる浮きて流れる。北八面目なくしよけてゐる故、親父これにて腹をいる。

乗合の皆々「ア、これで落ちついた。しかしお氣の毒な事は、あなたのお腰の物だ。」

おやぢ「わしは此年になるが、脇差の流れるのを初めて見申した。」

竹光一竹を削り刀身に代へたる刀を例のしやれていへるなり





すべいやう  
が云々―仕  
様がなか  
ら

「ヤアこの板子いたごの下したに、とぐろを巻まいてゐるは。ソリヤそつちの方ほうへ行いつた。エ、こりや氣味きみのわるい。ソレくあけ荷にの下したへ這はひこんだは。コリヤまあ、とんだ人ひとと乗合のりあはした」ト船中上せんちゆうへを下したへ引ひつくりかへし、たち騒さわぐ。かの親父おやぢあけ荷にを取りとりつけ、蛇へびを何なんの苦くもなく攔つかみ、また懷ふところへ入いれる。

北「コレく、お前めへ飛とんだことをする。それを懷ふところへ入いれておくと、又またはひ出でますは。海うみへうつちやつてしまひなせへ」

おやぢ「インニヤ、さてさうはなり申まうさぬ。わしはハア、讃岐さぬきの琴平こんびらさまへ行いくもんだが、道だうちゆう路ろ錢せんにつきて、すべいやうがござらないから、道みちでこの蛇へびをとつたを幸さいはい蛇へびつかひになつて、壹もん文もんツツ貰もらつて行いくもんだから、コリヤアわしが商賣しやうばいの種たねでござるは。」彌や「イヤ、なんほ貴様きさまが商賣しやうばいの種たねだつて、蛇へびを持もつてゐる人ひとと、どうして一所いっしょにゐられるものだ。コレ船頭せんぎゆうどん、なぜこんなものを船ふねに乗のせた。」

せんど「ハアわしらだとつて、よもやあの人ひとが蛇へびを持もつてゐるやうとは知しりませぬ。」のり合のりあ「コレおやぢどん、何なんのかのといはずとも、多勢たせいに無勢むぜいだ。早はやくうつちやつてしまひなせへ。」



彌「尋ねずとよい物なら、人の居眠をしてるうち、そこらア探り廻すこたアねへ」  
のり合みなく、「サア何が見えぬ。いひなさい。此中で物が見えないでは濟まぬ。」

おやち「インニヤ、もうよくござる。」

彌「ハテいよでは濟まねへ。何が見えやせん。」

おやち「ハアそんならいひますべい、皆びつくりさつしやりますな。」

北「ハ、ハ、お前が物をなくしたとつて、誰がびつくりするものだ。」

彌「何が見えやせん。」

おやち「アイ蛇が一疋なくなり申した。」

北「ヤア、飛んだことをいふ人だ。蛇たア何の蛇だ。」

おやち「何だべいとつて生きた蛇でござるは。」

のり合「ヤア、く、く。」

彌「イヤ貴様も飛んだものを持つて來た。蛇をマア何にしやうと思つて。」

北「こいつは氣味のわるい。こよらにはるぬか」トたち騒げば、船中皆々總立に立騒

ちとべこー  
少しばかり

井まで壹里の海上、乗合船にうち乗りわたる。けにも旅中のきさんじは、船中おもしおもひの雑談高聲にかたり合ひ、笑ひのよしり打興じゆくほどに、頓て、なかば渡りて、乗合の人々も咄しくたびれ、めい／＼柳行李に肘をもたけて、居眠をするもあり、又この風景に見とれて、只黙然としてゐるもあり。この乗合の中に、年のころ五十ばかりの髭むしやく／＼としたる親父、いかにも垢づきたる布子を着たるが、何をか失ひけんるねぶれる人々の膝の下をさぐり、又はうすべりを持ちあげ、頻に物を探し求むるやうすにて彌次郎が袖の下を探りまはす。彌次郎その手をとらへ、

彌「コウ、きさまは何だ。斷なしに人の袂を探つて何とする。」

おやぢ「ハイ御ゆるされまし。わしはハアちとべこ、なくならした物がござるから。」

北「お前なくなつた物があるなら斷つてたづねるがいよ。此船の中でぎつこへも行くことではない。何だ、煙草入か、煙管か。」

おやぢ「インヤ、そんな物ぢやアござらない。」

北「イヤそんなら錢か、金か。」

おやぢ「インニヤ尋ねずともよくござる。」

ばく「ソリヤア牡丹餅の看板でおざるは。」

北「イヤほんに、木でこしらへたのであつた。道理でかたい。」

ばく「いくつ進ぜます。」

北「ナニ、三ツばかりくんな」ト錢を拂ひ、牡丹餅を食ひながら呼びかけ、

北「オ、イ、彌次さん、彌次さん。」

彌「何だ、うめへ物ならちつとくれろ。」

北「がうぎにうめへ。」

彌「ドレひとつ。」

北「イヤそれから御らうじろ」ト手の平へ乗せてさし上ぐると、藁が來りちよいと抜つてゆく。

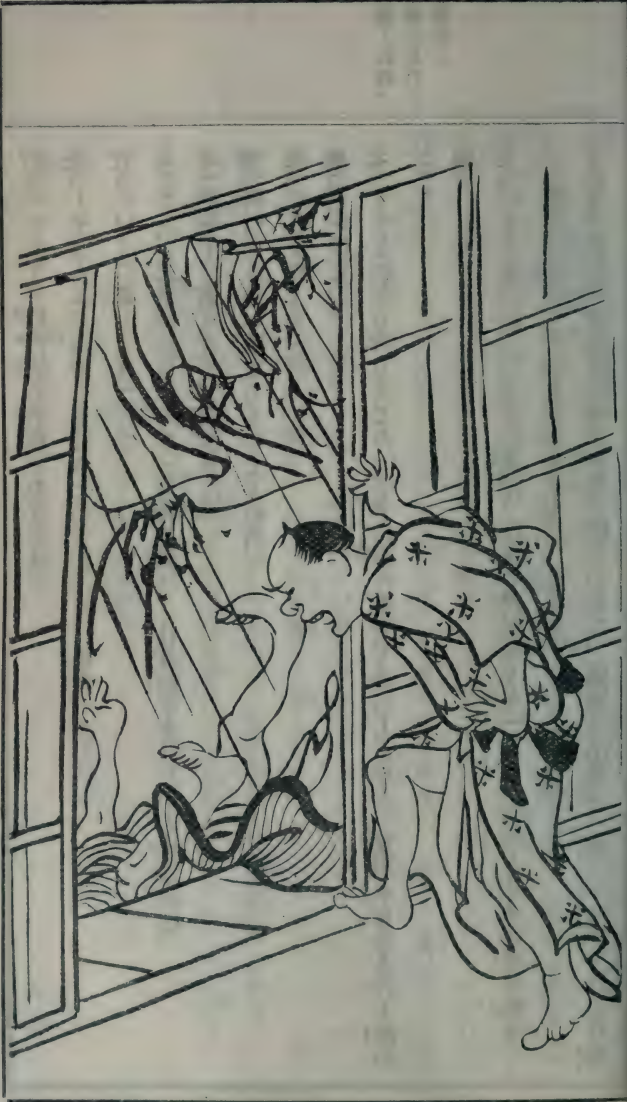
彌「ハ、ハ、ハ。」

北「いまくしい。こよらの藁は、みな下戸ださうな」トうらめしさうに空を眺めて、

あいた口ふさがれもせぬその上に、鼻をあかせしとびの憎さよ。

ほどなく蓮沼坪井村を打過ぎ舞坂の驛にいたる。  
舞坂より荒井へ海上一里  
これより荒

藁一若林、  
篠原あたり  
藁多し



ば、なる程女が襦袢を取りこんでゐる。二人とも小用をして座敷へかへり、夜着ひきかぶりて、

いうれいとおもひの外にせんたくの、じゆばんの糊のこはくおほえた。

やこゑ―夜  
あけを告ぐ  
る鶏の聲な  
り

はじめて笑を催し、心落ちつきで、とろくと一睡の夢をむすぶに、程なくやこゑの鶏の聲家毎にうたひつるよ勇しさ。早出の馬の鈴の音シヤンく。

くろく月―  
樞月、棧の  
おりる月

馬子の唄「ばんにござらばナア、裏からござれよヲ。表くろく戸で音がするよヲエ引」馬ヒインく、鳥が板屋根をつよく音、コトくく。

彌「もう夜が明けたさうな」ト北八も共に起き出づれば、やがて勝手より膳も出で、いそぎ支度して立出で、此宿にすは明神を拜みて、

梅干のすはのやしろときくからに、まもらせたまへ皺のよるまで。

斯くて若林の郷をうち過ぎ、篠原の取付にて、

北「オヤ味さうな牡丹餅がある。オットばあさん一つくんな」ト立ちながら、店先の牡丹餅をつまんでかつちり、

北「ヤアこいつは食へぬ」



彌「ドレ〜」トふるへながら、恐いものは見たくなり、雨戸の外をそつと窺き、これもきやつといつて、座敷へはひ込み倒れる。

北「彌次さんどうした。オ、イ彌次さんヤアイ」ト此さわぎに、勝手より亭主かけいで、この體を見てさま〜介抱し、やう〜彌次郎正氣づきければ、

ていしゆ「ヤレどうなさいました」。

北「イヤ小便に行つた所が、あそこに何か白いものがるたと、それでこの通り臆病な」亭主縁先へ出で、これを見て、

「イヤあれは繻絆でおざります。コリヤ〜、おさんやい、おさんやい、日が暮れたにやつぱり干物をなぜ取りこまぬ。そしてさつきから雨がほろついて來たに、らつしくちもない女どもだ。しかしコリヤアお氣の毒さまでおざります」。

彌「ナニサ、わつちらア恐いといふこたア知らねへ者だが、なぜか今夜は、虫の居どころが悪かつたさうな」。

ていしゆ「ハイおやすみなさいまし」ト勝手へゆく。

彌「エ、いま〜しい。大きに肝をひやした」トやう〜心落ちつき、縁先へ出て見れ

らつしくち  
もない〜だ  
らしのない

北「どうだ彌次さん、まだ生きてゐるか。」

彌「なんまいだ、なんまいだ。ア、時に困つた事がある。もう小使がもるやうだ。」

北「お互に難儀な目にあつた。」

彌「何と、思ひきつて一所に行かうか。」

北「雨戸を開けてやらかすべし。」ト二人一所に、こはく起きて、そろくと障子をあ

け、

北「サア彌次さん。」

彌「イヤ手めへ先へ。」

北「何が出るもんだ。」ト雨戸をさらりと開けたところが、何か庭の隅に白い物が宙にふ

はく。北八きやつといつて倒れる。

彌「ヤアどうした、どうした。」

北「どうした所か、あれを見ねへ。」

彌「あれとは。」

北「白いものが立つてゐらア。そして腰から下が見えぬ。」

彌「エ、いつその事、北八今から立たうぢやアねへか。」

北「ナニ飛んだことをいふ。今の話で、どう夜道か歩かれるもんだ。」

彌「夫にこよの内は、何だかだゝ廣いばかりで、人が少いから、うそ氣味の悪いうちだ。」ト目ばかりぱちくしてゐると、鼠が天井をかける音、からくく。チウくくチウ。

北「エ、鼠までが馬鹿にしやアがつて、小便をしかけた。」

彌「その鼠めが羨しい。おらアさつきから小便をしたくても堪へてゐるに。ヤア何だかやはらかなものが足に觸つた。」

北「何だく。」

れ、「ニヤアン。」

彌「コノ畜生め。シツく。」

百萬べんの鉦の音、チャアン。軒におちる雨垂、ほたりく。

折も折と、迷子をたづぬる聲、「まよひ子の長太やアい。」チャ、チャ、二人とも、夜着の内へもぐりこみ、北八夜着の袖からさしのぞき、

北「ソリヤアどこで」

あんま「しかもソレ、おまへの後の縁先で」

北「ヤアコリヤ堪らぬ。どうか首筋がぞくぞくするやうだ」

彌「生憎しよほく、雨が降り出したは情ない」

あんま「今夜などはきつと出さうなこんだ」

北「ヤイコレ按摩どの、もうけへつて下さい」

彌「アノ又たよき鉦の音で一ばい氣が引き入れるやうだ」

北「何にしても忌々しい宿をとつた」

あんま「エ、臆病なお衆だ。ハ、ハ、ハ」

彌「もうしめへか。北八はどうだ」

北「おらアもう寝やう」

あんま「さやうなら御機嫌よく」ト按摩は暇乞して立つて行く。此内、女夜具をもち出

で床をとりて行く。二人ともにいつにない洒落も無駄もいではこそ、只まじくと寝入

もやらず。

なほぜかし  
—猶の事

どうさらけ出しをりましたが、とかく御亭主は不便がつて、それからわきに圍つて置きをりましたを、なほぜかし内儀様が喧しくいつて、とう／＼気が違ひ、首をくよつて死にやりました。さうすると御亭主は又よいことにし、あの女を内へ入れると、其晩から、内儀様の幽霊がとつついて、あの女が又内儀様のやうに、氣違になつたもんだんで、それであんなに毎晩百萬べんをくりをります」トひそ／＼話すに、彌次郎北八も口は達者なれども、性は臆病もの。

北「何だ、幽霊がとつついたとは、爰のうちへ其幽霊が出るかの。」

あんま「出るだんか。」

彌「嘘をつくぜ。」

あんま「ナニ、嘘ちやアおざらぬ。毎晩この屋根の上に、白いものが立つてるのを見

たものがおざります。」

北「ヤアコリヤ、とんだ所に泊り合せた。」

あんま「それにその内儀様が首をくよつた時の顔色といふものは、目まなこをくるりと開いて、青涕をたらし、齒を食ひしばつて、それは／＼生きてゐるやうな貌であつた。」



彌「見えない方も、随分療治をしなさい。直りさへすりやア見えるもんだ。時に北八、湯はどうだ。」

北八「ふろよりあがり、」

北「ア、いゝ湯だ。あんまりあつくて、骸が半分、水引のやうになつた。」

女「ハイ、御膳をあけませう」トこよにて膳も出で、いろくあれども略す。やがて膳もすみ、彌次郎湯にも入つてしまひ、

彌「サアあんまさん、やらかしてくんな。イヤ時に今湯殿から見ればこよの内の内儀様か知らぬが、病人と見えて、取り亂してゐるが、なか／＼美しいしろものだ。」

あんま「ソリヤア氣違でおざるはのし。」

北「きちけへでも大事ねへの。」

あんま「イヤ、聞きなさい。今に念佛がはなりますは」ト此内、勝手の方にて、チャン

とかねの音して、百萬遍はじまる。

あんま「ソレお見さい。あの氣違どのは、こよの下女でおざるが、御亭主がふつと手をつけられたを、内儀様がひどいやきもちやきで、あの女を打つたり叩いたりして、とう

はなります  
一方言、は  
じまります





彌「イヤ、そんなに足はよごれもせぬ。」

ていしゆ「そんならすぐにお風呂におめしなさいまし。」

北「湯灌場はどこだ。彌次さんマア先へやらかしねへ。」

彌「いまくしい事をいふ男だ。手めへ先へはいれ。」

やどの女「こつちイお出でなさりました。」トすぐに湯殿へ案内する。此内、荷物も座敷へ

はこばせ、彌次郎兵衛奥へ通ると、

「ハイ、兩替はようおざりますか。」

あんま「お療治をなさいませぬか。」

彌「オット揉んで下さい。イヤ、きさま目があるの。」

あんま「ハイ、仕合と片方はよく見えます。十年ばかりも後に、風眼とやらを煩ひをり

まして、兩眼ともに皆目おツ潰してしまひをりましたが、それからこつちいろいろくと

療治をして、やうやつと此あひだ、左の方がよくなりました。」

彌「ひさしぶりで目が開いたら、皆知らぬ人ばかりだらう。」

あんま「おさやうでおざります。」

風眼—膿汁  
眼に入りて  
起る病

やど引「ずるぶんおざります。」

彌「泊るから飯も食はせるか。」

やど引「あけませいで。」

彌「コレ、菜は何を食はせる。」

やど引「ハイ當所の名物、薯蕷でもあけませう。」

北「それが平か、そればかりぢやアあるめへ。」

やど引「ハイ、それに椎たけ、慈姑のやうな物をあしらひまして。」

北「汁が豆腐に菹蕪のしらあへか。」

彌「マアかるくしておくがいよ。そのかはり百ヶ日は、ちと張りこまつせへ。」

やど引「コレハ異な事をおつしやるハ、ハ、ハ、ハ。時にもう参りました。」

彌「イヤモウ濱松か。思の外、早く来たはへ。」  
濱松より舞返へ一里半十二丁

さつくとあゆむにつれて旅衣、ふきつけられし濱松の風。

宿引先へかけぬけて「サア〜お着だアよ。」

宿の亭主「お早くおさいました。ソレおさん、お茶とお湯だアよ。」

さつ〜  
松風の音  
颯にかけた  
り



れて、四五の廿で帯とかぬと見れば、むげんのかねの三斗八升七合五勺ばかりもしやうか。

馬士「ハア、何だかお江戸の米屋はむづかしい。わしらにやア分らない。」

北「分らぬはずだ。おれにも分らねへハ、ハ、ハ。」

此話のうち、程なく天龍にいたる。此川は信州諏訪の湖水より出で、東の瀬を大天龍、西を小天龍といふ舟わたしの大河なり。彌次郎、此所に待ちうけて、俱に此涉を打越ゆるとて、

水上は雲よりいでてうろこほど、なみのさかまく天龍の川。

舟よりあがりて、建場の町にいたる。此所は江戸へも六十里、京都へも六十里にて、ふりわけの所なれば、中の町といへるよし。

けいせい道の道中ならで草鞋がけ、茶屋にとだえぬ中の町客。

それより、かやんば、薬師、新田をうち過ぎ、鳥居松近くなりたる頃、濱松の宿引出迎へてやど引「モシ、あなた方アお泊りなら、お宿をお願ひ申します。」

北「女のいよのがあるなら泊りやせう。」

中の町—江  
戸吉原の仲  
の町とかけ  
たるなり

馬士「だんなア、お江戸はどこだなのし。」

北「江戸は本町。」

馬士「ハアえいとこだア。わしらも若い時分、お殿様について行きをつたが、その本町といふところは、何でも無土あきん人ばかりの所だアのし。」

北「オ、それよ。おいらが内も家内七八十人ばかりの暮だ。」

馬士「ソリヤア御大層な。おかつ様が飯を炊くも大抵のこんではない。アノ、お江戸は米がいくらしをります。」

北「マア壹升貳合、よいところで壹合ぐらるよ。」

馬士「ソリヤいくらに。」

北「しれた事、百にさ。」

馬士「ハア本町の旦那が、米を百ツツ買はしやるさうだ。」

北「ナニとんだことを。車で買ひ込むは。」

馬士「そんだら、兩にはいくらします。」

北「ナニ壹兩にか、アアかうと、二二天作の八だから、二五十、二八十六で踏みつけら

おかつ様  
御内儀

馬士「アイ、そつから空へあがらしやると、壹里ばかりも近くおざるは。」  
北「馬は通らぬかの。」

馬かた「イン子、かち道でおざるよ」ト爰より彌次郎は獨り近道の方へまがる。北八馬にて本道をゆくに、早くもかも川橋をうち渡り、西坂さかひ松の建場につく。

ちや屋女「お休みなさりやアし、お休みなさりやアし。」

ばく「名物の饅頭買はしやりまし。」

馬士「婆さん、異な日和でおざる。」

ばく「お早うおざいやした。今新田の兄が、同志にかすと待つてゐたアに。コレく、

横須賀の伯母どんにいひついでくんさい。道樂寺様に御説法があるから、遊びながらお

ざいといつてよチ。」

馬士「アイく、又このごろに來ずい。ドウく。」

北「この馬はしづかな馬だ。」

馬士「女馬でおざるは。」

北「道理でのり心がよい。」

同志にいか  
ず―連立つ  
て行かう

彌「エ、やくたいでもあくたいでも、うつちやつて置きアがれ。よくつべこべとしゃべる野郎だ。」

上がった「ハアこりや御免なさい。ドレ、お先へ参らう」ト肝をつぶし、そこくに挨拶して、足早に行きすぎる。

彌「いまくしい。うぬらに一ばんへこまされた。ハ、ハ、ハ。」

此話のうち、三香野橋をうちわたり、大くほの坂をこえて、早くも見附の宿に到る。見附より濱松へ四里七丁

北「ア、くたびれた。馬にでも乗らうか。」

馬かた「おまいち馬アいらしやいませぬか。わしどもは役に出了馬だんで、早く歸りた。安く行かすい。サア乗らしやりまし。」

彌「北八乗らねへか。」

北「安くば乗るべい」ト馬の相談ができて、北八こよより馬にのる。此馬方はすげがうに出たる百姓ゆゑ、諸事いんぎんなり。

彌「コレ馬士どん、こよに天龍への近道があるぢやアねへか。」

役に出た—  
課役に出で  
し事なり

神につれて  
「取巻につ  
れて行く、  
末社と云ふ  
に同じ  
つとめ―揚  
代金  
おぶさる―  
おごらせる

たこともなくて、人の話を聞きかじつて、出はうだいばつかり、外聞のわるい、國もの  
の面よごしだ。」

彌「べらほうめ、おれだとして行かねへものか。しかもソレ手めへを神につれて行つた  
ぢやアねへか。」

北「エ、あの小屋さんのとぶらひの時か。へ、神につれたも凄じい。なるほど貳朱の  
つとめをおぶさつたばかり、馬道の酒屋で、剃身のぬたと空汁で呑んだ時の錢は、皆お

いらが拂つておいた。」

彌「嘘をつくぜ。」

北「嘘なもんか。しかもその時、おめへ、さんまの骨を咽へたてて、飯を五六ばい丸呑  
にしたぢやアねへか。」

彌「ばかアいへ、うぬが田町で甘酒を食つて、口を焼傷したこたアいはずに。」

北「エ、それよりかおめへ、土手でい紙いれが落ちてあると犬の糞を糺んだぢやア  
ねへか。業さらしな。」

上がった「ハ、ハ、イヤはや、おまい方はとんとやくたいな衆ぢやわいな。」



やす。」

上がった「ハ、ハ、ハ、コリヤおまいは大店のお客ぢやないわいの。そのつき馬とやらいふことは、わしらが店の職人衆の話で聞いてるますが、晝三かひにそんな事はありませんわいな。」

彌「なくてさ。ほんにわつちらア、尻に四ツ手かごの蝟のできたほど通つたものだ。ナニねへことをいひやせう。」

上がった「ハア、そんなら、おまいのおなじみは何屋ぢやいな。」

彌「アイ大木屋さ。」

上がった「大木屋の誰ぢやいな。」

彌「とめのすけよ。」

上がった「ハ、ハ、ハ、そりや松輪屋ぢやわいな。大木屋にそんなおやまはないもせぬもの、コリヤおまい、とんとやくたいぢや、やくたいぢや。」

彌「ハテあそこにもありやす。ナア北八。」

北「エ、さつきから黙つて聞いてるりやア、彌次さんお前きた風だぜ。女郎買に行つ

四ツ手かご  
云々吉原  
通には四ツ  
手を用ひた  
り、早きを  
尊びしなり



て行くさかい、何程かよつたやらこちや知らんが、おまい方も定めて買ひなさるぢやあらうが、アリヤなんほ程かよるぞいな。」

彌「わつちも女郎買では、地面の五ヶ所と拾ヶ所はなくしたものが、ナニ晝三位では僅かなことさ。マアひらの晝三なら片しまひで壹分貳朱、茶屋が壹分が、藝者が一組で又壹分。そして一斤々々でも取れば、その代が四百ヅツかよる分のことさ。」

上「た「ハテノ、わしも大店はしよくへいたが、其一斤々々といふは、何のこつちやいな。」

彌「ソリヤア、酒一斤、肴一斤などと、内の酒が呑めぬから、別に外から取り寄せることさ。」

上「た「ハア、わしが行た内では、そないな事はなかつたわいな。そして何も、呑めぬ酒は出しやせんわいの。えらうよい酒であつたわいな。」

彌「ナニ、そりやア呑める酒でも呑めぬへといつて、別に取るが江戸つ子の氣性さ。」  
上「た「そしてでは、みな借つてもどるが、お江戸の女郎は現金ばらひぢやさうな。」

彌「ナニサあそこでも、つき馬をつれて歸りさへすりやア、いくらでも貸してよこし

ひらの晝三  
なら片しま  
ひで一分二  
朱—晝夜に  
て揚代三分  
の遊女を晝  
三と云ふ、  
それを二分  
して晝夜何  
れか丈に極  
むるを片  
しまひと云  
ふ、揚代半  
分故一分二  
朱なり

かの男「イヤ酒手を壹文下さいませ。ハ、ハ、ハ、」

北「何のこつた。それで落着いた。ソレ壹文」

彌「あつたら肝を潰さしやアがつて、いまくしい乞食めだ」ト呟きながら、原川をうち過ぎ、早くもなぐりの建場につく。こよは花ごさを織りてあきなふ。

道ばたに開くさくらの枝ならで、みなめい〜におれるはなごさ。

程なく袋井の宿に入るに、袋井より見附へ一里半兩側の茶屋にぎはしく、往來の旅人、おのおの酒のみ、食事などしてゐたりけるを、彌次郎兵衛見て、

こよに來てゆききの腹やふくれけん、されば布袋のふくろ井の茶や。

此宿はづれより、上方者と見えて、棧留の布子に、銀ごしらへの脇差を差し、花色羅紗の装束かけし合羽を着たる男、供一人つれて、後になり先になり、

上方もの「モシ、おまいがたはお江戸ぢやな」

彌「さやうや」

きよといー  
上方方言、  
甚しきの意

上がた「わしも毎年下るものぢやが、お江戸はきよとい繁昌なことぢやわいの。アノ吉原へもちよこ〜誘はれて、晝三とやらいふおやまを買うたが、いつも人に振れまはれ

北「エ、いまくしい。今日は飛んだ間がわるい。せにを出して酒を呑みながら、へこまされたがうまらねへ。」

彌「ハ、ハ、ハ、己よりは餘程智恵のねへ男だ。」

する事もなす事も皆あしくほや、茶にしられたる人のしがなさ。

斯く興じ、打ちわらひツ、やがて秋葉三尺坊へのわかれ道にいたり、彌次郎兵衛遙拜して、

脇差の貳尺五寸もなにかせむ、三じやくぼうのちかひたのめば。

それより澤田、細田を打ちすぎ、砂川の坂道にかよりけるに、兩方より木立生茂りて、日の蔭くらく、折ふし往來もとだえたるに、誰とも知れず、

「コオレく、旅の入ヲく」ト呼びかけられ、兩人後をふりかへり見れば、傍の木か

けより、のさくと懐手にて出で来るは、どてら布子へ一腰ほつこみ、山岡頭巾をかぶりたる髭だらけのむさくろしき男、彌次郎北八の向へまはり、立ちはだかる。二人はび

山岡頭巾  
後を縫合せ  
前をあけ、  
顔のみ出す  
やうに作り  
たるもの

彌「コリヤ晝日中、何の用だ。」



ぬと思ひ、

北「イヤちやけは呑まぬから、ちやか代は拂はぬ。茶代なら、なんほでも拂はう。いく

らだ。」

ていしゆ「そんな茶代をおかしやいまし。茶が二合で六十四文。」

北「ヤ何だ、茶を二合飲んだ。途方もねへ。」

彌「エ、めんだうな、拂つてしまつたがいよ。手前のするこたア、何でもをさまらぬ

へ。足もとの明いうち、拂つてしまや」ト目顔で知らせる。北八もせうことなし六十四

文拂つてやると、

さる「イヤはや、飛んだ人たちだ。大方さつきおぶさつたも、こんた衆であらう。人の

買つた酒を横取りして呑むといふは、マア泥衆といふものだ。」

北「ナニ泥棒だ。このどうめくらが」ト力みかよる。彌次郎おしとめ、

彌「ハテ、こつちが悪い。モシ、了簡してくんなせへ。こいつは茶に酔ふと、氣が強くて

なりやせぬ。サアちやつくと行かう。アイおちやらば、おちやらば」トいひ捨て

北八をむりに引立てこよを立出で、足早に此宿をうち過ぎ、

をさまらぬ  
—うまくゆ  
かね

ちやばかり  
いふ—駄洒  
落をいふ

ちやらくら  
—でたらめ

茶ちやに酔よつた證據しやうこには、ちやばかりいふが辯くせでならぬ。そこでちやばかりながら、どなたもちややうチャ、ハ、ハ、ハ、ハ、

さる市「イヤ、その手てはくはぬ。子供こごもは正直しやうぢきだ。コリヤアこんた衆しゆが横取よこどりして呑のんだに違ちがひはない。酒代さかだいを拂はらはしやれ。」

北「ちやれやれ。ちやりとは、ちやわいも無い事ことをちやべらしやる。ちやつきから飲のんだはちやばかり、ちやとう衆しゆのちやけを、ちやくぶくした覺たはえはござらぬ。悪わるいちやれだ、チャハ、ハ、ハ、ハ、

犬「イヤこれ、目めの見みえぬ者ものだと思おもつて、そのちやらくらおかつしやれ。ハテ、見みてるた子供こごもが證據しやうこにん人にんだ。」

さる「まだ確たしかなことは御亭主ごていしゆ、あの衆しゆの飲のんだ茶碗ちやわんが酒臭さけくさいか、かいで見みさしやれ」トうごかぬ所ところへ氣きをつけられ、北八きたはちちやつと茶碗ちやわんを隠かくさうとするを、亭主ていしゆひとつとりかいで見みて、

ていしゆ「ヒヤア、臭くさいく、そして酒さけでにちやくする。コリヤハイおまいちが呑のましやつたに違ちがひはない。酒代さかだいをおかつしやいまし」トいはれて北八きたはち、こいつはをさまら

―すつかり  
空になりし  
意

まる「なんだ銚子がない。イヤこよの御亭主く、わしらを盲と侮つて、こんな横着をさしやるか。二合の酒がたつた二口呑むと、もう無いはどうしたもんだ。」  
ていしゆ「ハイそれは二合、しかもたつぶり注いで上げましたに、大方こほしなさつたもんだんで。」

さる「ナニこほすもんだ。商人に似合はぬ事をさしやるから、此酒代は拂ひませぬぞ。」  
ト大きに腹を立てる。此時門口に遊んでゐる子守が、さいぜんより見てゐたりしが、北八の方へ指さしをして、

子もり「ワアイ、座頭どんのさけウ、皆あの人がちやわんへ注いでしまはつせいた。」

北「オヤ、この子は飛んだことをいふ。コリヤア茶だく。」トいひながら、呑みさした茶碗の酒を呑んでしまふ。

ていしゆ「イヤ、おまい酒くさいは。そして顔が赤くならしやつたは。大方あの衆の酒を呑ましやつたな。」

北「エ、この人も同じやうに、途方もねへ。わしが顔の赤くなつたのは、茶に酔つたのだ。わしは變つたことで茶をたんと飲むと酔ひます。酒に酔つた人は管をまくが、

思議な

引きよせ、呑んでしまふ。

犬市「かうしてゐる所へ、さつきの奴らが來たら可笑しからう。」

さる市「ナニあいつらは、大かた着物をしほつたり、干したりして、未だあつちにまごつてゐるだらう。智慧のないべらほう共だ」トいひながら、盃を取りあけた所が、又酒が一するもなし。

さる「これはどうだ。」

犬「又こほしたか、意氣地のない。」

さる「イヤこほしはせぬが、ハテ奇妙ちやうらいな。」

犬「イヤ手前そんな事はかりいつて、獨りで呑むな」ト此内北八銚子を取り、自分のんだ茶のみ茶わん二つにあけて、そつと銚子をもとの處へおく。

犬「コリヤ猿よ、盃をまはさぬか」トひつたくり、銚子を取つて、ついで見て、

犬「ヤア此猿市め、獨りで食つてしまやアがつた。」

さる「ナアニ、飛んだことを。」

犬「それでも銚子がさつぱりだ。」

さつぱりだ

さる市「いかさまなあ、御亭主く、もうちつと頼みます。」

女「ハイく。」

犬市「時に、今の川へはまつたべらほう共はどうしたらう。」

さる市「それよ、ハ、ハ、ハ、まづ替目をやらかさう」ト猪口に一ぱいツイで、一口の

み下におくと、北八そつと手を出し、猪口の酒を呑んでしまひ、ちやつと本の所へ置く。

さる市「イヤ、太いやつらであつた。ちやんと己におぶさりやアがつて。その代り水を

食らやアがつた時は、助けてくれろと、悲しいおとほねを出しをつた。何でもかすりを

取る事ばかり心がけてゐる奴だから、大方あいつはごまのはひだらうよ。」

犬市「さうさ、どうで碌なもんぢやアない。あといふ奴は、こんな所へ來ても、えては

食逃をして打ちのめされるもんだ。イヤ時に盃はどうした。」

猿「ホンニ忘れた」ト猪口を取りあけて、呑まうとしたところが、酒は一するもない。

猿市不思議さうな貌つきにて、

猿「オヤ、こぼしたさうな」トそこらあたりを探り廻し、

「ハテ面妖な。改めてささう」ト又一ぱいつぎ、一口呑んで下におくと、北八又そつと

面妖な一不

かすりをと  
る一上前を  
はれる、す  
るい事をす  
る

おとぼれ一  
音聲



女「お飯ヲあがりまアし。鱈と莧蕪と干大根のお吸物もおざりまアす。鮎のせんば煮も

おざりまアす。お休みなさいまアし、お休みなさいまアし。」

ながもち人足の唄「吹けばナア、吹くほどナアアンエ、もつもなかるいナア、ンエ、綿をサ  
ア入れたやナア、長持に綿をナア、ンエヨウ、しつたかどうだか、しつたかどうだか」  
馬のいなよき、ヒインく。

彌「オヤ北八、見さつし。さつきの座頭めらが、あそこに呑んでけつかるは。」

北「こいつはいゝ事がある。おいらを川へはめた意趣けへしをしてやらう」トつくり聲  
にて、かの座頭の酒を呑んでゐる茶屋へはいる。

北「オイ御免なせへ。」

茶屋の女「おいでなさいまし」ト茶を汲んで来る。北八かの座頭のわきへ腰をかける。

女「おしたくでもなさいますか。」

彌「まだく腹はほんほこなだ。」

先刻の座頭二人、此所に休み、酒を呑みるたるが、かの二人とも氣もつかず、

犬市「ハアねつから酒がたらぬやうだ。もう二合やらかさう。」

ほんほこな  
—満腹だと  
の意





腐るほど  
びしょ濡れ  
になりしを  
いふ

くさつた  
濡れた

ぐれば、頭あたまから骨ほねまで腐くさるほど濡ぬれ、

北「エ、座頭ざとうめが、とんだ目めに遇あはしやアがつた。」

彌「ハ、ハ、ハ、まづ着物きものをぬぎやれ。しほつてやらう。」

北「全體ぜんてい彌次やじさんが悪い。何なんのおぶさらずともいふことに、お前めへが手本てほんを出だしたから、ツヒおれも。」

彌「川かはへはまつたか、氣きの毒どくな。ハ、ハ、ハ、ハ、夫それで一しゅ首ゆやらかした。」

はまりけり目のなき人とあなどりて、むくいにははやく川かはのながれに。

北「エ、聞ききたくもねへ、よしてくんな。ア、寒さむい〜」ト裸はだかになり、がたく震ふるへな

がら着物きものをしほる。此内座頭このうちざとうは川かはをわたり行過ゆきすぎる。〇。

彌「こよで干ほしてもゐられめへから、着替きがへを出だして着きやれ。どこぞで火ひを焚たいてもら

つて、あぶるがいよ。」

北「エ、いま〜しい。風かぜをひいた。ハアクツシヤミ」トぶつく〜小言こごえを云いひながら、

着替きがへを出だして着きかへ、くさつた着物きものはしほつて引ひきさけ、出でかけるとほどなく掛川かけがはの宿しゆく

にいたる。棒ぼうばなの茶屋女ちややをんな、

犬「ヤイ、猿よどうする。早く川を涉さぬか。」

さる市向の岸にて聞きつけ、腹をたて、

さる「コリヤ冗談なやつだ。たつた今おぶつて涉したに、またそつちへ行つておれを嫩るな。」

犬市「ばかアいへ。己ばかり涉つて、太い奴だ。」

さる市「イヤ、太いとはそつちのことだ。」

犬市「コリヤおのれ、兄弟子に向つて言語道斷な。早く来て涉さぬか」ト白い目をむき出し腹立つるゆゑ、猿市しかたなく、又こちらへ渡り歸り、

さる「サアそんならおぶさりなさる」ト背中を出す。北八しめたと、手をかけておぶされば、猿市又さつくと川へ入る。犬市は大きに急きこみて、

犬「コレ、猿市どこにゐる。」

さる市、川の中にて、

さる「イヤ、こいつは誰だ」ト北八を川の中へ、どんぶり落す。

北「ヤアイ、助けてくれ助けてくれ」ト手足をもがき、流れるゆゑ、彌次郎飛び込み引上



犬市「ハア、なる程、水の音がよつほど早い」トいひつゝ石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、

犬市「イヤ、こよらが如何か浅いやうだ。コリヤ猿市、二人ながら脚半を取るも面倒だ。おぬし若役に、己をおぶつて涉れ」

さる市「ハ、ハ、ハ、するい事をぬかす。拳で參らう、なんでも負けたものがおぶつて涉るのだ。よしか」

犬市「コリヤおもしろい、サア来い、さんなむめで」

さる市「りやんごうさい、りやんごうさい」ト片手で拳をうちながら、兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手を握りあひ、

犬市「サア勝つたぞ勝つたぞ」

さる市「エ、いまくしい。そんなら此風呂敷包を、貴様一所に背負つせへ。ソレよし。サア来い」ト支度して背中を向ける。彌次郎是はありがたいと、さる市におぶされば、さる市は連の犬市と心えて、さつくと川へ入り、難なく向へ涉ると、こなたの岸にのこりたる犬市、

さんなむめで、りやんごうさい—  
拳を打つ呼聲は唐音の訛にて、さんなむめは？  
りやんは二、ごうは五、な、さいは添語

三編 卷之中

掛川より袋井へ二里十六丁しのよめまだき驛路の、急がしけにひきつるよ、朝出の馬の嘶に旅勞れの目をこすりながら、彌次郎北八起き出でて、支度するうち、相宿のいち子が、顔ふくらかしるもをかしく、爰を立出で、ふるみや、譽田の八幡を打過ぎ、右にしうとの畑嫁が田といへる見ゆれば、彌次郎兵衛、

干からびししうとの畑に引きかへて、水澤山のよめが田ぞよき。

それより鹽井川といふ所にいたりけるに、昨日の雨強くして、橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾をまくり上げて、爰を渉るに、彌次郎北八も、いざや引きつれて渉りなんとする折から、京上りの座頭二人づれ、此川の歩わたりなることを聞きけるにや、一人の座頭、

犬市「モシ、川は膝ぎりもござりますか。」

北「さやうく。しかし水が早いから、お前がたア危い、用心して渉りなせへ。」

ばらあ「おまへ此年寄をなくさんで、今逃ける事はござらぬ。」

彌「イヤ人違だ、おれではない。」

ばらあ「イン子さういはしやますな。わし共はこんな事を商賣にやアしませぬが、旅人衆の伽でもして、ちと計の心づけを貰ふが渡世、はら散々なくさんで、只逃けるとは厚かましい。夜の明けるまで私が懷で寝やしやませ。」

彌「これは迷惑な。ヤイ北八々々。」

ばらあ「アレハイ、おつきな聲さしやますな。」

彌「それでも己は知らぬ。エ、北八めが飛んだ目にあはしやアがる」トやうく無理に引き放して逃げんとすれば、又取りつくを突倒して、がたびしと蹴ちらかし、さうく次の間へ這ひこみながら、

いち子ぞとおもうてしのび北八に、口をよせたることぞくやしき、

つて引きずり寄せる。北八こいつはありがてへと、そのまゝ夜着をすつほり手枕のころびねに、假の契をこめし後は二人とも前後も知らず、鼻つき合せてぐつと寝入る。彌次郎兵衛一寝入して目を覺し起き上り、

彌「もう何時だ知らぬ。手水に行かう。コリヤ眞暗で方角が知れぬ」ト小便に行くふりにて、是も奥の間へ這ひこみ、北八が先を越したとは露知らず、さぐり寄つて夜着の上からもたれかゝり、暗がりまぎれにかの巫女と思ひ、北八がムニヤクいふ唇をねすり廻し、わんぐりと噛みつく。北八肝をつぶし目を覺し、

北「アイタ、ゝゝ」

彌「オヤ北八か」

北「彌次さんか。エ、汚ねへ、ベツく」

此聲に北八と寝てるた巫女も目をさまして、

いちこ「コリヤハイ、お前ちは何だ。さうぐしい。靜にしなさる。娘が目を覺さずに」トいふ聲は婆の巫女、北八は二度びつくり、こいつ取りちがへたか忌々しいと、這出てこそこそと次の間へ逃げかへる。彌次郎も逃げんとするを巫女手を取つて引きずりながら、

いちこ、「およしなさりませ。」

いちこのぼく「娘が嫌なら私では。」

北「もうかうなつちやア誰かれの見境はない」ト夢中になつてしやれる。此内かつてよ  
り膳も出で、色々こよにもあれども略す。はや酒もをさまり、彌次郎北八も次の間に歸  
り、日が暮れるや否や、床をとらせ寝かける。奥の間にも旅くたびれにや、もう寝かけ  
る様子。北八小聲にて、

北「何でも巫子の新造めが、いつちこちらの端に寝た様子だ。後に這ひかけてやらう。  
彌次さん、お前ねたふりなぞは通りものだけ。」

彌「おきやアがれ、己がしめるは。」

北「氣のつえよ、大笑だ」トいひつゝ兩人ながらぐつと夜着をかぶりて寝る。すでに夜  
も五ツ過ぎ、四ツまはりの拍子木の音枕にひどき、臺所にあすの支度の味噌する音も  
やみければ、たゞ犬の遠吠のみ聞えて、物淋しく更け渡るに、北八時分はよしとそつと  
起き出で、奥の間を窺へば、行燈消えて眞暗闇。そろくそと忍びこみ、探りまはしてか  
の巫女の懐へにちりこむと、思ひの外此いちこの方から、ものをもいはず北八が手を取

五ツ過ぎ四  
ツまはり  
午後九時前  
後

い  
つ  
ち  
—  
一  
番



彌「あちらのお方はどうだ。」

いちこ「かよさんお出で。サアおかまさんもお來なさいまし。」

北「ハ、アお前のおふくろか。エ、こいつはめつたな事アいはれぬはへ。まづ上げやせう」トこれより酒盛となり、さいつおさへつ。此巫女ども思ひの外の食ひぬけにて、いくら飲んでもしやあくとしてゐる。彌次郎兵衛北八は大きに酔がまはり、いろく可笑しき洒落あれども、くだくしければ略す。北八卷舌にて、

北「ナントおふくろさん、今夜お前のおむすをわつちに借してくんなせへ。」

彌「イヤ己が借りるつもりだ。」

北「とんだ事をいふ。お前こそ今宵は精進でもしてやりなせへ。可愛さうに、死んだ囃衆があればどに思つて、どうぞ早く冥途へ來い、やがて迎ひに來やうと深切にいふぢやアねへか。」

彌「ヤレそれをいつてくれるな。迎ひに來られて堪るものか。」

北「それだからお前はよしな。サアおふくろ、おいらに定つた」トいちこの娘にしなだれかよるを、突き放して逃ける。

韋駄天―足の早き神、  
佛法守護神なり

いちこ、「ア、なごりをしや。かたりたいこと、問ひたいこと、數かぎりは盡させねど、冥途のつかひしければ、彌陀の淨土へ」トうつむきて、巫女あづさの弓を鳴らす。

彌「コレハ御苦勞でござりました」ト鳥目貳百文はりこみ、紙にくるみて出す。

北「暗闇の恥をとうぐあかるみへぶちまけて仕廻つた。ハ、ハ、ハ、時に彌次さん、お前とんだ鬱ぐの。ナント一ぱい飲まうぢやアねへか」

彌「それもよからう」ト手を叩き女を呼び、酒肴をいひつける。

いちこ、「今日はお前様がたア、どこからお出でなさりました」

彌「アイ、岡部から來やした」

いちこ、「それはお早うおざりました」

彌「ナニわつちらアあるくこたア韋駄天さまさ、サアといふと十四五里ヅツはあるきや

す」

北「その代りあとで十日ほどは役に立ちやせぬ。ハ、ハ、ハ」ト此内、酒と肴を出す。

彌「ちとあがりませぬか」

いちこ、「わたしは一向下さりませぬ」

しい。質は逆にやア流れ申さぬ。」

彌「その代り、手めへは結構な處へ行つてゐるだらうが、おれは米だに苦勞がたえぬ。」  
いちこ「ヤアレハアなにが結構でござらう。友だち衆の世話で石塔は立てて下さつたれど、それなりで墓參もせず、寺へ附屆もして下されねば、無縁どうぜんとなつて、今では石塔も堀の下せきたふの石いしがけとなりたれば、折をりふし犬いぬが小便せうべんをしかけるばかり、つひに水みづひとつ手たぢめ向むかられた事ことはござらぬ。ほんに長死ながじにをすれば、いろ／＼な目めに逢あひますぞや。」  
彌「尤もつこもだく。」

長死—俚諺  
長生すれば  
恥多しをも  
ぢりしなり

いちこ「その辛い目めに遇あひながら、草葉くさばの陰かげでそなたの事ことを片時かたときわすれぬ。どうぞそなたも早く冥途めいずへ來きて下くだされ。やがて私わしが迎むかひに來きませうか。」

彌「ヤアレとんだ事ことをいふ。遠とほい處ところを必ず迎むかひに來きるにやア及およばぬ。」

いちこ「そんなら私わしが願ねがひを叶かなへて下くだされ。」

彌「オ、何なんなりと何なんなりと。」

いちこ「この巫女いづこどのへ、お錢めしをたんと遣やらしやりませ。」

彌「オ、やるとも、やるとも。」







めんくー工  
面の逆言葉

日なし一日  
なし金の略  
日毎に若干  
づつ返済せ  
しむる約定  
の貸金

彌「ハ、アおふくろか。そんなにやア用はない。」

いちこ「ハアレからのかどみどんぢやア用はおざらないか。わしやアそなたのまくらぞひぢや、厚がましくも能くぞ問うて下さつた。そなたのやうな意氣地なしにつれ添つてわしや一生食ふや食はず、寒くなつても裕壹枚着せてくれた事はなし、寒の冬も單物ひとつ、ア、うらほしや。うらほしや。」

彌「堪忍してくれ。おれも其時分はめんくが悪くて、可愛さうに、苦勞をし死にしやつたが残り多い。」

北「オヤ彌次さん、おめへ泣くか、ハ、ハ、ハ、こいつは鬼の目に涙だ。」

いちこ「忘れもせない。そなたが瘡を病はしやつた時、わしは生憎ひつをかく。瓜の蔓の次郎どのはよいく病、たつた一人の子實は、脾胃虚して骨ばかりに瘦せこける、米はなし、日なしはせがむ、大屋どのの店賃やらねば、路次の犬の糞にすべつても小言はいはれず。」

彌「もうくいつてくれるな。胸がさけるやうだ。」  
いちこ「それにわしが奉公して、折角ためた着物まで、そなた故に置きなくしたが口惜

持國天、増  
長天、廣目  
天、多聞天

五道一天、  
人、地獄、畜  
生、餓鬼

まくらぞひ  
どのーつれ  
あひ

にいたれば閻魔法王、五道のみやうくわん。わが朝は神國のはじめ、天神七代、地神  
 五代のおんかみ、伊勢はしんめい天照皇大神宮、外宮には四十末社、内宮には八十末社  
 あめの宮、風の宮、月よみ、ひよみの御みこと、北にべんくう鏡の社、天の岩戸大日如  
 來、淺間嶽ふく一まん虚空藏、その外日本六十餘州、總じて神のまんどころ、出雲の國  
 の大社、神の數は九萬八千七社の御神、佛の數が一萬三千四靈の靈場、冥道をおどろか  
 し、此に請じ奉る。ハアおそれありや、この時にこのく方かたのそしやうりやう、代々の  
 ぶつちやうし、弓と矢のつがひの親、一郎殿より三郎殿、ばんもかはれ、水もかはれ、か  
 はらぬ物は五尺の弓、一打うてば寺々の佛壇に響くなふじゆ。ヤアレハアなつかしや、な  
 つかしや。よく水をむけて下さつた。わしが弓取のまくらぞひどのも出やらうけれど、  
 娑婆にゐた時精進がきらひで、肴は骨まで食やつたむくい、今は牛鬼になつて地獄の門  
 番をしてゐらるゝゆゑ隙がない。それで私ばかり出ましたぞや。」  
 彌「お前誰だ、わからねへ。」  
 いちこ、「ハアわしは水をたむけどんの爲には、からのかどみぢや、子寶どの。」  
 北「からのかどみたア、彌次さんお前のおふくろのことだ。」

巫女―死靈  
生靈をよび  
其意を己が  
口に寄せて  
のぶるもの

七ツ―午後  
四時

四大天王―

り、

彌「時に女中、奥の客は女ばかりだが、ありやア何だ。」

女「みんな巫女でおざりまさア。」

北「ナニ巫女だ、コリヤおもしろへ。ちと生口を寄せて貰ひてへもんだ。」

彌「もう遅からう。七ツからは寄らぬといふことだ。」

女「ナニ、まだ八ツ少し過ぎでおざりまさア。」

彌「そんなら聞いて見てくんな。おいらが山の神を寄せて貰はう。」

北「コリヤをかしい。」

女「いんま聞いて上げうずに」ト此うち膳もすみ、女奥の間へゆき、かの巫女にその事

を聞きあはす。巫女承知のよしなれば、やがて彌次郎北八おくの間へはいりたのむと、巫

女例の箱を出してなほすと、さしこよろえて宿の女水をくみ來る。彌次郎過ぎさりし女

房のことをおもひ出して、しきみの葉にみづをむけると、巫女はまづ神おろしをはじめ

る。

いちこ「そもく、謹みうやまつて申したてまつるは、上に梵天、帝釋、四大天王、下界

ないらー馬の病氣

錦袋圓―下谷池の端仲町にて賣りし當時有名なる賣藥

北「ソリヤアお前、ないらの起つたのだ。豆を食やアなほる。」

彌「エ、悪くしやれすと、早く出してくれろへ。」

北「そんなら眞面目に、ソレ田まちの反魂丹。手を出しな。」

彌「二つばかりくりやれ。がりくく。コリヤ胡椒だは。ア、辛いく。」

北「ハ、ハ、待ちなよ。イヤもう無い。イヤこよに錦袋圓がある。ソレよしか。」

彌「からかみのかけで、まつくらだ」トつつみがみを開けて、薬をとり出し。がりくく。

彌「ア、又何をか食はしやアがつた。ベツく。」

北「ドレ見せな、イヤア是は觀音様だ。」

彌「ほんに觀音様の頭ア噛み碎いてしまつた。ハ、ハ、ハ。」

女「御膳を上げませう。」

北「イヤ三ぜん食やア澤山だ。」

彌「よく口を叩く男だ。喧しい黙つてしやべれ。」

北「しづかに騒げがあきれらア」トこのうち膳も出て、いろくしやれながら食ひかよ





には花を賣る家の角には大抵柳の樹を植ゑたり

八ツ—午後二時

ひりやうす—がんもどきの類、飛龍頭と書く

彌「ナニ飛んだ事をいふ。まだ八ツにやアなるめへ。今から泊つてつまるものか」  
 旅籠屋のぼく「この雨ぢやア行かれまじない。泊らしやりませ」  
 北「イヤ、こりや泊りたくなつた。彌次さん見ねへ。奥にたほが、でへぶとまつてるる」

彌「オヤドレく、こいつ話せるはへ」

旅籠屋のぼく「サアお前ち泊らしやりませ」

彌「さうしやせう」トこよにて彌次郎北八足をあらひ、すぐに奥の次の間へ通り、

彌「コレく女中、素湯があらば一ぱいくんな」

女「ハイく、今上げうす」

北「ひりやうすが聞いて呆れらア」

女「ハイおさゆ」

彌「よしく。北八、昨日の薬をくりやな」

北「何だ、しんりいあんかん丹か。待ちなよ。ありのとわたりから捻り出してやらう」

彌「エ、ばかアいやんな。腹が痛くてならぬ」

無間の鐘—  
昔無間山觀  
音寺にあり  
しと云ふ鐘  
之を撞けば  
現世にて無  
量の財寶を  
得れども未  
來は無間地  
獄に墮落す  
と云ふ  
はなやの柳  
—舊幕時代

北「エ、猶なほいまくしい。おらアもう降りて行かう」トこよより駕かこをおりこよ迄までの賃ちんげん錢せんを拂はらひ、駕かこを返かへし、たどり行くに、雨あめはしきりに降り出しければ、坂道さかみちすべりて、やうやうと小夜さよの中山建場なかやまたてはにいたる。こよは名なにおふあめの餅もちの名物めいぶつにて、白しろき餅もちなり。水みづあめをくるみて出す。この二人酒飲ふたりさけのみなれば、漸やうやく一ツ二ツ食くひける中うち、雨あめだんく強つよくなりたるに、

爰こゝもとの名物めいぶつながらわれくは、ふり出すあめのもちあましたり。  
つたへ聞く、無間むけんの鐘かねはその寺てらに名なのみ残りて今いまはなしと。

この寺てらにむけんのかねもつきなくし、今いまは晦日みそかにうそやつくらん。

〔日坂より掛川へ一里十九町〕それより此坂このさかを下くだり、日坂ひつさかの驛むきにいたる頃ころ、雨あめは次第しだいに強つよくなりて、今いまは一足ひとあしも行ゆかれず。あたりも見みえ分わかぬほど、頻しきりに降ふりくらしければ、或ある旅籠屋はたごやの軒のきにたよすみ、

彌や「いまくしい、がうてきに降ふるは降ふるは。」

北「はなやの柳やなぎぢやアあるめへし、いつまで人の門かどに立たつてもゐられめへ。ナント彌や次じさん、大井川おほいゑがはは越こすし、もうこの宿しゆくに泊とまらうぢやアねへか。」

北「どこぞへ行つて、いゝ駕を借りて來さつし」

かこかき「こかア坂中で借りずとこがござらない。イヤよかことがある。ほうぐみ、主のしの禪へこをはづせ」

ほうぐみ「アゼ、どうせる」

かこ「ハテ己たれがせることがある。見みされ」ト自分じぶんの禪ぜんをはづし、棒組ぼうぐみの禪ぜんと二すぢにて、  
ござの上うへから駕かこの胸中むねなかをくよりて、

かこ「サア乗つていじやござれ」

北「とんだことをする。これで乗のられるもんか」

かこ「ハテ外ほかにせることがない。そん代だいにやア眠ねぶたくならしやつても、この禪ぜんで落おちすやうがござらない。不肖ふせうして乗のらつしやいませ」ト氣きの毒どくさうにいふ。北きた八やちもをかしく、  
これも話はなしのたねと打ち乗のれば、

彌や「ハ、ハ、白い禪ぜんで駕かこの胸中むねなかをくよつた所ところは、しつかいお屋敷やしきの葬禮まうらいといふものだ」

北「エ、いまくしい。そんな事ことをいひなさんな」

彌や「ハ、ア駕かこの内うちで、ものをいふから佛ほとけでもねへ、こいつ聞きえた、科人かじんだな」

どうせる—  
するをせる  
と云ふは此  
地方の方言  
なり

不肖して—  
我慢して

出しければ、古ごさ一枚駕の上からうちかぶせ、かつぎ出して早くもきく川の坂にかよると巡禮が二三人、

巡禮「ふだらくや、岸うつ波はみくまのの。アイお駕の旦那一文下さい。」

北「つくなく。」

巡禮「御道中御繁昌の旦那、この中へたつた一文。」

北「エ、つくなといふに、べらほうめ。」

巡「それにべらほうがいるもんか。そつちがべらほうだ。」

北「コノ乞食めが」ト力むはずみに、如何しけん駕の底すつほり抜けて、北八どつさり尻もちをつき、

北「アイタ、、、。」

巡「ハ、、、。」

かこかき「エレく、怪我アさつしやりませぬか。」

北「コレ手前たちやア、なぜこんな駕に乗せた。」

かこかき「許さつしやりませ。何とせるもんで。」

彌「ツヒやり損つた、いまくしい。ハ、ハ、ハ、」

出來合のなまくら武士のしるしとて、刀のさきの折れてはづかし。

この狂歌に雙方大笑となり、彌次郎兵衛北八爰をのがれ、いそぎ川端にいたり見るに往來の貴賤すき間もなく、此川のさきを争ひ越え行く中に、二人も直投とり極めて、蓮臺

に打乗りみれば、大井川の水さかまき、目も眩むばかり、今や命をも捨てなんと思ふほどの恐しさ、たとふるに物なく、まことや、東海道第一の大河、水勢早く石流れて、渡

るになやむ難所ながら、程なくうち越して蓮臺をおりたつ。嬉しさいはん方なし。蓮臺にのりしはけつく地獄にて、おりたところはほんの極樂。

斯くうち興じて金谷の宿にいたる。金谷より日坂へ一里廿四丁

兩側の茶屋女「お休みなさいまアし、お休みなさいまアし。」

かごかき「もどり駕のつていじやござい。」

北「コウ彌次さん、駕はどうだ。」

彌「イヤ氣がない。手前乗るなら乗つて行かつし。」

北「そんなら日坂まで乗らうか」ト駕のねだん極めてうち乗りたるに、をりふし雨ふり

いじやござ  
い乗つて  
行つては如  
何の意



がいにつな  
い—大層強

みなのや四  
郎俊國—檀  
の浦の戦の  
時、國俊太  
刀を折りた  
る話あり

彌「イヤ侍に向つて、ばかアいふなとは何ぢや。」

とひや「ハ、ハ、ハ、がいにつないお侍だヤア。」

彌「こいつ武士を嘲弄しをる。ふとどき千萬な。」

とひや「こんた武士か。刀の小じりを見さつしやい」トいはれて彌次郎ふり返り、後を

見れば、刀のこじり、柱につかへて引きはだばかりの所二つに折れてゐる。皆々どつと

笑ひ出せば、さすがの彌次郎面目なく、しよけ返つてだんまりなり。

とひや「刀の折れたのをさす武士がどこにあるもんだ。こんた衆問屋を騙りに來たぞ。

そんではハイ濟ませないぞ。」

彌「イヤ身どもは、みなのや四郎俊國が末孫だから、それで刀の折れたのを差しをる

て。」

とひや「戯言いふとくよし上げるぞ。」

北「コウ彌次さん、をさまらねへ。早く行かう」ト手をとつて引きずられ、彌次郎それ

をしほに、こそくと逃げ出す。

とひや「ハ、ハ、ハ、途方もない氣違だ。」

本馬―三十  
六貫を一駄  
とする馬

蓮臺―川を  
渉る人々の  
するもの、  
板に棒二本  
をつけて擔  
ふ

す。……

彌「本馬が三疋、駄荷が都合十五駄ほどありをるが、道中邪魔だから、江戸表において来た。其かはり身ども、駕陸尺が八人、そこへ記しめさる。」

とひや「ハイ、おさぶらひ衆は。」

彌「侍共が十二人、やりもち、挟箱、ざうり取、よいかく、合羽かご、竹馬、都合上下三十人餘ちや。」

とひや「ハイく、その御同勢はどこにをります。」

彌「イヤサ、江戸表出立の節は残らず召しつれたが、途中で追々麻疹をいたしをるから宿々へ残しおいた。そこで只今川を越さうといふ同勢は、上下合せてたつた二人ぢや、臺越にいたさう。なんぼぢや。」

とひや「ハイお二人なら蓮臺で四百八十文でござります。」

彌「それは高直ちや。ちとまけやれ。」

とひや「エ、此川の賃錢にまけるといふはないヤア。ばかアいはずと早く行くがよからず。」

ひきはだ一  
藝肌皮、し  
ほみ皮とも  
いひ縮緬皺  
のよれの  
革、道中差  
の鞘の上に  
かぶせしも

彌「ナント北八、あいつらにからかふが面倒だから、いつそのこと問屋へかよつて越さう。手前の脇差を借しやれ。」

北「なぜ、どうする。」

彌「侍になるは」ト北八が脇差を取つてさし、己の脇差のひきはだをあとの方へのばし、長くして、大小さしたやうに見せかけ、

彌「ナント出来合のお侍、よく似合つたらう。此布呂敷包を手前一しよに持つて、供になつて來や。」

北「こいつは大わらひだ。ハ、ハ、ハ」ト彌次郎が荷物を一所にして、北八肩にひつかけ、やがて川問屋にいたり、彌次郎お國ことばの聲色にて、

彌「コンリヤ問屋ども、身ども大切な主用でまかり通る。川ごし人足をたのむぞ。」

とひや「ハイ畏まりました。御同勢はおいくたり。」

彌「ナニ同勢な。」

とひや「さやうでございます。旦那はお駕かお馬か、お荷物はいくだほどござりま

かく詠みて北八も笑をもよほし、田舎者と侮りて、とんだ意趣かへしをしられたるもをかしく、爰を出でて行くほどに、大井川の手前なる島田の驛に至りけるに、島田より金

谷へ一里 川越ども出迎へて、

川「旦那衆、川をたのんます。」

彌「貴様川ごしか、二人でいくらで越す。」

川「ハイ今朝がけにあいた川だんで、肩車ちやアあぶんない、蓮臺でやらすに、お二人

で八百下さいませ。」

彌「途方もねへ。越後新潟ぢやアあんめへし、八百よこせも凄じい。」

川「すんだら、いくら下さるヤア。」

彌「いくらも楠木もいらねへ。おいらが直に越すは。」

川「オ、川ながりやア二百つけて寺へやるから、何ならさうさつしやい。流れた方が、安くあからア、ア、ハ、ハ、ハ。」

由 姪を賣れる

すぎ、

彌「ばかアぬかせ。問屋へかよつてお越しなさるは」ト云ひすてて、あしばやに行き

彌「しかたがねへ、手めへ拂をしや。アノ親仁めがくやしんほうで、手めへに意趣返しをしたのだはな。」

北「それでもナニ己ばかりかぶるもんだ、いまくしい。せつかく酔つた酒もみんな醒めてしまつた。」

みんな醒めてしまつた  
—みんな嘗めてしまつたの洒落也

彌「次郎どんの犬と太郎どんの犬と、みんな醒めてしまつたか。」  
北「エ、しやれなさんな、そこ所ぢやねへ。まあ何にしろ幾何だね。」  
てい主「ハイく、九百長五十でござります。」

北「驅にあつたとおもつて、わうじやうして拂ひやせう。いやアいふほど、智慧のねへ話だ。」

彌「さういつてもこな親父だ。いよことをしやアがつた。コウ北八、手めへの貌で一首うかんだ。」

御馳走とおもひのほかの始末にて、腹もふくれた頬もふくれた。

北「へ、業腹な、生馬の目を抜きやアがつた。」  
有難いかたじけないと禮いうて、いつばいたべし酒の御馳走。

り、長五十といふ時は夫へ一文錢二個を加ふ



彌「エ、、引山に切つころばした松の木丸太の様でも、妻と定めたら、まんざら憎くもあるまいし、やとせのせ、やとせのせ、おもしろへ、おもしろへ。時にこの親父のべらさくめはどうした。」

北「ホンニ長い雪隠だ。モシ女中、爰に居た爺様はどけへ行つたの。」  
女「たしか表の方へ。」

彌「ハテノ、こいつどうか變ちきだはへ」ト待てども待てども、此親父どこへ行つたか一向に歸らず、雪隠を探せども行方しれず。

北「モシ女中、今の親父が、爰の拂をして行つたかの。」  
女「イ、エまだ頂きませぬ。」

彌「ヤアくくく。」

北「いつぺいおこはにかきやアがつたな。追つかけてぶちのめさう」トとんで出たれども、どつちへ行きしやら、一向雲をつかむが如く、殊に親父は此近在のものゆゑ、わき道へ入りしにや、更に行へしれず。北八しよけて立歸り、

北「彌次さんどうも知れねへ。とんだ目にあつた。」

おこはにか  
きやアがつ  
たな―だま  
したなの意

簡ノウしてくれさつたのし。

北「コレ、わつちもツヒ虫のるどころがわるくつて、いひすごしました。まつびら御免。」

彌「そこは旦那ども野暮ぢやアねへ。モシこいつはどうせ味噌喰べつたり焼生薑といふ男だから、せうどはなしさ」トたど飲む酒ゆる、追従たらしく闇雲にひつかける。このうち勝手よりもいろくもち出で、膳も出て、彌次郎北八少しは氣の毒ながら、これも食つてしまふ。おやぢ小便に立つて行く跡にて、

北「コウ彌次さん、お前こよの割合を己によこしなせへ。おいらがアノ親父をいぢめたればこそ、お前がうてきにやらかしたぜ。」

彌「おきやアがれ。さういつても満更ぢやアねへ。アノ親仁の來ぬうち、後に飲む分もやらかさう。」

北「おらア此茶碗についてくんな。オットきたくきたさの、きたさの、きたさの讚岐のこんぴら、たかが高瀬の船頭の子ぢやもの、おさへてどうす。ジャジャン、ジャジャン、ジャジャン。」

北「イヤまづ酒にしやう。オットあります、あります。時にこの吸物は何だ。たよみ鱈のせんば羹か。おほかたこの跡ぢやア、南瓜のごまじるか、薩摩芋のよごしが出るだらう。」

彌「サア悪くいふぜ。コレ此海老を見や。かう跳ねかへつた所は、がうてんじやうの天人といふ身がある。」

豊後ぶしー  
常磐津の一派  
北「イヤ豊後ぶしのことかアいなア、引といふ所もありやす。ハ、ハ、ハ、時に親父さん上げやせう。」

へさいませ  
うーおさへ  
ませうの訛  
おやぢ「イン子へさいませう。今肴が来ずに。コリアあんねい、あんねい、さつきからハイへし折れる程腕をたよくに、あぜ肴アつん出さない。」

女「ハイく只今あけずに」トやうくに大平とはちざかなを持つてくる。  
おやぢ「やらやつと持つて来た。平は何だ、卵のふはくか。」

無鹽一なま  
北「こいつは無鹽だ。奇妙々々。」

おやぢ「たんと飲んでくれさつしやい。そなたア私が爲にやア命の親だ。よく先刻ア了







じやうに—  
方言、澤山  
の意

すんだら—  
そんなら—  
よからず—  
よからう

れヤア」トむりに彌次郎北八の手を取つてひきすりこむ。二人もなる口ゆるゑ、酒ときよて少し心ひかされて、

彌「えいは、北八一ぱいやらかさう。しかし親父さん、おめへの御馳走ちやアきのどくだ。」

おやぢ「ハテコリヤよいといふのに。御亭のく、肴アじやうにつん出してくれない。時にコリヤハイ、こよはあんまり端つほど。奥座敷へ行かすかヤア。」

ちや屋の女「サアあつちイござらしやいまし」ト出しかけた銚子さかづきを奥へもつて行くと、三人も中庭からまはり、奥座敷のえんがはに、わらぢのまよあぐらをかき、彌

次郎兵衛

彌「サア親父さん始めなせへ。」

おやぢ「アイ すんだら毒味ノウしませす。オト、よからず、よからず。さて先若いのへ進ませせう。」

北「アイ わつちやア酒よりかア腹がへつた。」

おやぢ「アニ腹がへつた。ソリヤア飯を食はつしやい。ぢつきによくなる。」

染飯！強飯  
を山梔子に  
て染めて摺  
りつぶし小  
判形に薄く  
して干した  
るもの  
ありやうは  
—有様はに  
て、事の有  
體をいへば  
の意

頭にのつてきた八に今たよかれし、藥罐あたまたの親仁へこんだ。

打笑ひつゝ瀬戸川を打越え、それより、しだ村、大木の橋を渡り、瀬戸といふ所にいたる。爰は建場にて染飯の名物なれば、

やきものの名にあふせとの名物は、さてこそ米もそめ付にして。

斯くてこの町はづれの茶屋に、さきの田舎親仁休みるたりけるが、二人を見つけて呼びかけ、

おやち「エレく、さつきやア無禮ノウしました。私もハイありやうは、一杯飲んだ元

氣でづない事もいひ申したが、そんな衆が了簡ノウしてくれさつたから、へこたらずに歸村ノウしますは。マアあんでも禮に酒ウ一つ進ませませう。こよへ寄らつしやいまし」

彌「ナニわつちらア酒も飲んで來やした」

おやち「エレチャア、せつかく私が思ひだアのし。是非一ツよからずに、コリヤく御

亭の、味よい酒ウ出さつしやいまし」

北「イヤお心さしは、忝いが、サア彌次さん行かう」

おやち「ハテコリヤ、情のこわい人だヤア。ちつきにやらずに、ちよつくり寄つてくれさ

も仕様がな  
久米の平内  
—淺草寺境  
内にある石  
像

けられなく  
—方言、心  
無くの訛、  
古今集に甲  
斐が嶺をさ  
やにも見し  
がけられな  
くよこほり  
ふせる小夜  
の中山  
荒神まさ—  
後立をする  
者

りに來やうが、石尊さまが、猪の熊の似づらをかよせた提燈で、路次口から溝板の上へ  
這ひかどんで來ても、聞かぬへといつちやア、久米の平内を居ざいそくにやつたよりか  
ア、またびつくとせぬ奴様だア」

おやち「ソリヤアハイ、あにかしちむづかしい事をいはつしやるが、私らにやアハイ、  
かいもくに知れ申さぬ。わしもハイこの近在の長田村ぢやア、名主役も勤めた家筋だん  
で、お地頭さまの年頭にやア上席ノウせる男だ。あにもがいにけよれなく、雑言ノウし  
めさるこたアござんないヤア」

北「エ、悪くしやれらア、尻がかいよはへ。頭のかけでも拾はせてやらうか」

おやち「エレく、そなたアづない人だヤア。わしにもハイ荒神さまがついてるずに、が  
いに頭ノウ叩かしやんな」

北「エ、此すりこ木め」ト食はせにかよる。彌次郎兵衛見かねてやうくに引きわけて、

彌「北八もう了簡しろへ。とつさん、おめへが全體龜相しながら氣が強え。もういよか  
ら行きなせへ」ト北八をなだめるうち、おやちは面をふくらかし、ふしようぶしように  
行過ぎると、彌次郎、

街道かいだうの松まつの木この間まに見みえたるは、これむらさきの藤ふたぢえだの宿しゆく。

藤枝より島田へ二里八丁

此宿このしゆくの入口いりぐちにて、風呂敷包ふろしきづみちよいと肩かたにかけたる田舎ひななのおや

ぢ、馬うまの跳はねたるに驚おどろき逃にける拍子ひやうしに、北八きたへつきあたる、北八水きたたまりの中なかへころ

けて、大おほきにあつくなり、起たき上ありて、田舎者ひななをひつ捕とらへて、

北「コノ親仁おやぢめ、眼まなこが見みえねへか。寒鳥かんがらすの黒くろ焼やきでも食くらやアがれ。」

おやぢ「コリヤハイ御免ごめんなさい。」

北「ヤイ御免ごめんなさいぢやアすまねへはへ。コノ野郎やろうは小粒こつぶでも、ぎやつといふから金かねの

鯪しやちほこをにらんで、産湯うぶゆから水道すゐだうの水みづを浴あびた男おとこだ。」

おやぢ「イン子こハイ、水みづをあびたならようござるが、そんたの轉こけた所ところは、馬うまの小便せうべんの

たまりだもし。」

北「エ、その小便せうべんのたまつた所ところへ、なぜ突つつこかしゃアがつたへ。」

おやぢ「そりやハイ、わしもがらい馬うまにつつ跳はねられて、そんたに行いき合あつたのだ。ど

うもせず事ことがない、堪忍かんにんさつしやい。」

北「なんだ堪忍かんにんしろ、いやだはへ。ほんのこつたが、大江山おほのやまの親分おやぢが、鐵棒かねぼうひいてわた

がらい一つ  
ひ  
どうもせず  
事がない  
方言、どう

あつくなり  
怒りて

言葉の終に  
のしを附す  
又もしも  
云ふ、申す  
の變形なり

おだぶつ—  
お陀佛にて  
魚の臭くな  
りしをいふ

彌「ハ、アねぎまといふから、江戸でするやうだと思つたら、コリヤアきじやきを焚た  
のだな。よし〜」

北「はじめやう。オト、ハ、ハ、イヤ此肴はおだぶつだぜ。コリヤ昨日の鮪だな。」  
てい主「インチハア、昨日の魚ぢやアござらない。」

彌「それでもさつぱり食へぬ〜」

てい主「ハア昨日のが悪かア、一昨日のを進ませませう。其代にやア酔ふこたアうけ合だ  
もし。」

北「エ、酔つてたまるものか。そしてこの酒は半分水だ。ベツ〜。時にいくらだ  
の。」

てい主「ハイ、肴が六十四文、酒が二十八文。」

北「甘くねへ代りに高いもんだ。サア行かう」ト錢をはらひ、爰を立出で、早くも釣か  
淵といふ所に至り、例のすきの道なれば、彌次郎兵衛取あへず、

爰もとは鞍のあぶみがふちなれど、踏んまたがりてとほられもせず。

それより平島口田中を打過ぎ、藤枝の宿近くなりて、





東海  
の大井川  
の風景



馬士のうた「うらがお長松の唄はたこよナア。あぜさ蛸だとおもしろやるへ。八間まなかに足だらけ。しよんがへ。ドウく」馬ヒインく。

馬士「旦那衆馬いらぬか、二百だが安いもんだい。なんなら錢さへくんさりアたどでも行かずに」

北「エ、二百出しやア夜の馬にのらア。くそたれめが」

馬かた「ヤイクそつたれたアあんだい。うらが何日くそを食う」馬「ヒ、ヒンく」

彌「ナントちよつほり飲んで行かうか。コウ姉さん、いよ酒があらばちつと計出してくんな」ト茶屋へ入る。

茶屋の女「ハイかんをして上げずかヤア」

彌「さうさ、時に肴は何がありやす」

てい主「アイ、ねぶかと鮓の煮たのばつかし」

北「イヤねぎまのふるふきソレよからう」

てい主「イン子ふるふきぢやアござらない。たんだ醬油で煮たのだアのし」トいひつと銚子盃をもち出で、鮓を皿にもつて持ち来る。

煮たのだアのし—遠参方言にては

膝栗毛三編 卷之上

岡部より藤枝へ一里二十六丁

往來の旅人互に道を譲合ひ、泰平をうたふつどら馬の小室節ゆたかに、宿場人足其  
 町場を争はず。雲助駄賃をゆすらすして、盲人おのづから獨行し、女同士の道連、ぬけ  
 参りの童まで、盜賊かどはかしの愁にあはず。かよるありがたき御代にこそ、東西に走  
 り南北に遊行する雲水のたのしみえもいはれず。爰にかの彌次郎兵衛北八は、大井川の  
 川支にて、岡部の宿に滞留せしが、今朝御狀箱わたり、一番越もすみたるよし聞くとひ  
 としく、そこくに支度して旅籠屋を立出でけるに、はや諸家の同勢往來の貴賤櫛の齒  
 を挽くがごとく、問屋駕宙をかけり、小荷駄馬飛んで走る街道のにぎはひ勇しく、二人  
 もともに浮かれたどり行くほどに、朝比奈川をうち越え、八はた鬼島を過ぎ、白子町に  
 至る。爰は建場にて兩側の茶屋女、  
 「お茶アまるるはア。一膳飯ヲまるるはア。お休みなさいいまアしお休みなさいいまアし」

ぬけ参り―  
 親又は主人  
 の許を得ず  
 かくれて伊  
 勢参宮する  
 を云ふ  
 御狀箱わた  
 り―川留の  
 あげし時は  
 將軍の御用  
 の狀箱第一  
 番に越す習  
 なり





彌「そんならさうしやうか」

北「おめへ何屋だ」

やと引「相良屋と申します。すぐにお供いたしませうし、お供つれて急ぎ行くほどに、

早くも大寺がはらの坂道をうち越えて、岡部の宿に至りけり。

豆腐なるをかべの宿につきてけり、あしに出来たる豆をつぶして。

まづこの驛に宿をとりて、川のおくまで、暫く旅のつかれをぞ休めける。

をかべー豆  
腐の異名、  
もとは女房  
詞

こつちへ轉ころけて、大騒たほさわぎとなる。

彌やま「こいつははじめらねへ。先さきへ行いかうか」トをかしさをこらへて爰こゝを立た出いづ。

北きた「とんだ手てやいだ。アノとろ汁じゆで一首詠しゆみやした」

けんくわする夫婦ふうふは口くちをとがらして、薦せんじとろよにすべりこそすれ。

それより宇津うづつの山やまにさしかよりたるに、雨あめは次第しだいに篠しのを亂みだし、薦つたのほそ道心みちこころほそくも、

杖つゑを力ちからに十團子じゆたんごの茶屋ちやや近ちかくなりて、彌次郎やじろうおもはず坂道さかみちにすべり轉ころびければ、

降ふりしきるあめやあられを十じゆだんど、ころけて腰こしをうつの山やまみち。

岡部宿おかべしゆくの宿引やせひき、待受まちうけて、

「お泊どまりでございますか」

彌やま「イヤわつちらア、今日けふ川かはを越こさにやアならねへ」

やど引たほひ「大井川おおいは止どまりました」

北きた「なむさん、川かはが支つかへやしたか」

やど引やう「さ様やうでございます。先さきへお出いでなさつても、お大名だいにやうが五いつかしら島田しまだと藤枝ふぢにお

泊どまりでございますから、あなた方あなたのお宿やせはござりませぬ。先岡部まづおかべへお泊どまりなさいませ」

十團子一宇  
津山の名物  
、許六の句  
に  
十團子も小  
粒つぶになりぬ  
秋の風

おへないひ  
やうたくれ  
めだ―仕方  
のない馬鹿  
だ

てい主「かまふな。おれが事よりうぬが、ソリヤ海苔がこけらア」  
女房「ヤレヤレ喧しい人だ。コノ又がきや、同じやうにほえらア」  
てい主「コリヤ摺鉢を捕へてくれろ。エ、さう持つちやアすられないは。おへないひやうたくれめだ」

女ばう「アニこんたがひやうたくれだ」

てい主「イヤこの女ア」ト榎木で一つくらはせると、女房やつきとなりて、

女ばう「コノ野郎めは」ト榎鉢を取つてなけると、そこらあたりへとろよがこぼれる。  
てい主「ヒヤア、うぬ」トすりこ木を振りまはして立ちがよりしが、とろよ汁に辻つてど

つさりど轉ぶ。

女ばう「こんたに負けてゐるもんか」ト握みかよりしが、是もとろよにすべりこける。  
向のかみさんが驅けて來り、

「ヤレチャ、又見たくでもない争か。マア静まりなさろ」ト兩方をなだめにかより、これ  
もすべり轉んで、

「コリやハイ何たるこんだ」ト三人が體中とろよだらけにぬるくして、あつちへ這り

さつとおろしかより、

ていしゆ「おなべ、ヤレくこの忙しいに何ヲしてゐる。ちよつくり来いく」トけはしく呼びたつるに、裏口より小言をいひながら来るは女房と見え、髪はおどろのやうに振りかぶりたるが、背中にちのみ子をせおひ、藁草履ひきすり来り、

「今彌太アのとこのおんばアどんと、はなしよヲしてゐるに、喧しい人だヤア」

ていしゆ「アニハイ喧しいもんだ。コリヤそこへお膳を二膳こしらへろ。エ、ソレ前垂がひきすらア」

女房「おまい、箸の洗つたのウ知らずか」

てい主「アニおれが知るもんか。コリヤヤイ、その箸ヲよこせヤア」

女ばう「これかい」

てい主「エ、箸で芋がすられるもんか。榎木のことだは。コリヤ扱まごつくな。その膳へつけるのちやアないは。こよへよこせといふ事よ。エ、埒のあかない女だ」ト榎木を取つてごろごろと芋をする。

女房「ソレおまい榎木がさかさまだ」

りて賃錢ちんせんをやり、

彌「ソレ別に酒手さかてが十六文もんヅツ」

川か「ヘイコレは御機嫌ごきげんよう」ト川かごしは、すぐすに川上かほかみの浅い方あさひを渡わたつてかへる。

北「アレ彌次やじさん見ねへ。おいらをば深い所ふかところを渡わたして、六十四文もんヅツふんだくりやアがつた」

川かごしの肩車かたぐるまにてわれくを、深いところへ引きまはしたり。

半合羽はんがつ一丈短はんがつきもの、享保きやうほうの初はつり行ゆはる

夫それより手越てごしの里さとにいたるに、又またもや俄雨にわかあめふり出して、たちまち車軸しゃぢくを流ながしければ、半合はんがつ羽は取出とし打ちうちかづぎ、足あしをはやめてほどなく鞆子たづこの宿しゆくにいたる。

九丁くぢやう「こよにて支度しだくせんと茶屋ちややへ入り、

北「コウ飯めしを食くはうか、爰こゝはとろよ汁じるの名物めいぶつだの」

彌「さうよ、モシ御亭主ごていしゆ、とろよ汁じるはありやすか」

ていしゆ「ハイ今いまできず」

彌「ナニ出来できねへか、しまつた」

ていしゆ「ハレぢつきに拵こしらへずに、ちいと待ちまちなさろ」ト俄にわかに芋いもの皮かわもむかずして、さつ



川ごし「昨日きのうの雨あめで水みづが高いたかから、一人ひとりまへ六十四文もん」

北きた「そいつは高いたか」

川ごし「ハレ、川かはをマアお見みなさい」ト打ちつれて川かはばたへ出いで、

彌やま「なる程ほどがうせいな水勢すゐせいだ。コレ落たすめへよ」

川ごし「ナニお前まへ、サアそつちよつん向むきなさろ」ト二人ふたりを肩車かたぐるまにのせて川かはへざぶ

くと入はいる。

北きた「ア、なんまいだ、なんまいだ。目めが廻まるやうだ」

川ごし「しつかり私わたしが頭あたまへとつつきなさろ。ア、コレ、そんなに私わたしが目めを閉ふがつしやる

な、向むかう見みえない」

彌やま「なるほど深ふかいは。コレ落たして下くださるな」

川ごし「アニ落たすもんかへ」

彌やま「それでもひよつと落たしたらどうする」

川ごし「ハレ落たした所ところが、たかでお前まへは流ながれてしまはしやる分ぶんのことだ」

彌やま「エ、流ながれて堪たまるものか。イヤもう來きたぞく。ヤレく御苦勞ごくろうく」ト肩車かたぐるまよりお

安部川餅―  
安部川東岸  
の茶屋にて  
賣る名物の  
餅なり

そのうち若い者床をとりて、二人ながら引き分れて暫くまどろむ。斯くて一睡の夢はさめて曉のなごりを惜しみ、彌次郎床を起出づれば、北八も目をすりながら爰に來りて打連れ立ち梯子をおりるに、皆々送り出で、挨拶そこく、に引き分れ、傳馬町さして急ぎかへり來りければ、早くも宿には朝飯の用意とよのへ、膳をすうるに、支度あらましにして、やがてこの驛を打ちたちけるが、今もどりし道をますぐに、ほどなく彌勒といへるに至る。爰は名にあふ安部川餅の名物にて、兩側の茶屋いづれも綺麗に花やかなり。

茶屋女「名物餅をあがりやアし。五文どりをあがりやアし。五文どりをあがりやアし。」  
彌「おいらア昨夜、二朱がもちを食つて來たから、モウ爰では食ふめへ。」  
北「さうさく、」下此内、あべ川の川ごし、道に出でむかへて、

川ごし「旦那衆おのほりかな。」

彌「オイ、きさま何だ。」

川ごし「川ごしでござります。安くやらすにお頼ん申します。」

北「いくらだ。」

とこ夏「すんなら夏菊さん、出して上げさしやいまし」ト常夏のさしづに、隠したるつけ髪を出して渡せば、

客「ヤアまだ足らない。」

なつぎく「モウそればつかし。」

客「アニハイ、まだかた小髻がそこらにやアないか、尋ねてくれなさろ。」

女郎「コレカ、あるヤア。」

客「それだく」ト自身に頭をさぐり廻して髷先をさぐりまはして、髷先をよこちよにくつつけ、溜息をつきて、

客「ヤレく、えすい目にあつた。」

みなく「オホ、、、」トこれより中なほりの酒になりて、いろくあれども事長ければ略す。彌次郎北八は腹の皮をよぢり、

彌「いづくの浦でもあるやつだが、餘程おもしろかつた。ちやうど去年の春、一九が中

田屋の勝山にしばられた時、あんな様であつた。業ざらしな」ト此内若い者來り、

「モウお床にいたしませう。チトあつちらへ」ト北八は自分のあひ方の部屋へ行くと、

業ざらしな  
— 外聞の惡い

けんつう—  
髪の薄き事

と、夏「ソレ切らずに。」

客「ヤアレこりや〜」ト逃げだすを、取り巻きて逃がさばこそ、寄つてかよつて頭を  
むしり散らかす。一體此客人けんつうにて、みな付髪なれば、鬘も髪も落ちてしまひ、  
客あたまを撫でまはし、

客「ヤアこりや、ハイ頭ア筆りなくしたは。」

女郎みなく〜「ばあチャ、オホ、〜、」

客「ヤレ笑所ぢやアない。コレ私はハイ、丁字屋へは行くまいから、頭ア出してくれ  
なさろ。」

と、夏「わしやア知りません。」

客「アレハイ夏菊どのが隠した。サア頭アはやく出しなさろ。」

と、夏「お前ハイ、是でも丁字屋へ行かずか。」

客「モウ行かない行かない。」

と、夏「ほんとうにかヤア。」

客「天照皇大神宮さまかけて行かない。」

と、夏「何もかんにせず事アおざりまじない。わしもハイ此内では、あんねい、あんねいといはれる女郎でおざいます。こんなアに貌をへし潰されちやア、朋輩衆の前へ立たずやうがおざりまじない。とてもハイ是つきりの縁なら、お前ちのやうな性根のわるい客衆は、見せしめのため、私がせず事を見さしやいます。ソレ夏菊さんさつきの剃刀を持つておざいます。」

容「ヤレそれやアわしよヲどうせずと思つて。」

常夏「どうせずもんか、髪を切らずにヤア」トかみそりを持つて立ちかよれば、客はうろたへ頭をかよへて、

客「ヤアレコリヤさて待ちなさろ、待ちなさろ」新造ども口々に

新造「待たず事アおざいませない。」

客「そんだアとつて、此ちつほけな鬚のちよん先さへ切らないに、そりよヲハイ切らずこたア許しなさろ。」

と、夏「ナニ許さずもんで。」

客「アレこりや。」

髪をきらず  
に―髪をき  
るのだ



女郎「お前まへこん中ちゆうからこつちイはなぜ來きましない。」

今一人の女郎「丁字屋ちやうじやへばつかしおざるから、常夏さこなつさんが腹はらアつツ立たつても無理むりぢやアおざりましない。」此客人このきやくじんは山家やまがの人ひと

がらい一つひ

客「ヤレさて私わしはハイ、一昨おつせい日も昨きのう日も、來こずくと思おもつたが、がらい用もちができて來これなくなつた。ソリアハイ丁字屋ちやうじやへも川かはなべの伯父おんぢいどんの附合つきあひで、行いかすこたア行いつたアけれど、アニハイ爰こゝの常夏さこなつ姉あねと申まうしかはした事ことアあるし、日天にってんさまかけて不味まずい心こころぢやアおざらないヤア。」

不味い心一惡意

女郎「ばやチャ、それでも丁字屋ちやうじやの花山はなやまさんに馴染なじんで、行いかすこたア違ちがひはおざりましないは。」

客「アニハイ、そんだ事ことアないこんだが、上づな無くさういやアせず事ことがない」トしをれ返かへつてゐる。爰こゝの内うちのあね女郎ぢやうぢやう、名なは常夏さこなつうちかけを撮つまみあげ、煙管きせるたばこ入いれを持ちもちそへ悠いゆう悠いゆうとして座敷ざしきへはいり、

と、夏なつ「彌弟やていさん、よくおざいました。」

客「よかア來きましない。堪忍かんにんしなさろ。」

此内、若い者二人と遣手がつれだち、八寸の上に何か重箱をさけて持ちいで、

やりて「たゞ今は有難うおざります」。

わかいもの「わたくし金太と申します。是は権右衛門、已後はおたのみ申します」ト丁寧

に禮をいつて立つ。

彌「ハ、ア爰では花も、ひつばらにもらふ極とみえた。若い者に金太権右衛門といふ名

も珍しい」。

北「コノ重箱はなんだ。ハア阿部川の五文どりか。是が二朱のかへし紀の字屋の臺とい

ふものだの。ハ、ハ、」ト此内、廊下何かさわがし。大勢の聲にて、濟むの濟まぬのと

わめきて、隣座敷へ皆々はいる。

北「さうぐくしい何だ」。

いさ「何でもおざりません。アリヤア性のわるい客衆をめつけて、連れて来たのでお

ざいますヤア」。

彌「こいつはおもしろい。ドレ〜」ト襖を少しあけて、隣座敷をのぞき見れば、大ぜい

の女郎が客一人を中にとりまき、

紀の字屋  
吉原の料理  
臺の物を調  
ふる家





たをもち出で、おさだまりの盃も夫々すんでしまひ、

彌「わけへしゆ一ツ飲みな」

わかいもの「ハイ」

なんりやう

—二朱銀

彌「ソレさかな」トなんりやう一つはずむ。

わかい「是は、ハイ」ト頂いて立つてゆく。入りかはりて禿小さめ驅け來りて、

かぶる「アノヤ、今吉野屋から磯次さんがおざいまして、お前に用がありますから、ちよつくり來さしやいましてさヤア」

いさ川「今行かずに」

小ざさの「ハレ小さめヤア、久能の仙さんはおざつたか」

小さめ「イン子」

つるくる—  
つるくる—  
だます  
小ざさの「ばあチャおらやだア、此中から行かすくといつてよこして、がいに人をつるくるヤア」

北「コウお前がたア、もつとこつちへ寄つて一ツ飲みなせへ」

いさ「アイ、まあ御前方あがりますし」



た女郎ぢやうらうを註文ちうもんすると、すぐそのへに其部屋やへつれ行く。あたりを見れば、床とこの間に琴こごもあり、花はなもいけてあり。すべて吉原よしはら小店こみせの部屋へやもちの如ごとし。こよは酒代さかだいべつにかよると見え

て、  
若いもの「御酒ごしゆはどう致いたしませう。」

北さけ「酒だも出してくんな。」

わかいもの「ハイ、取とつてあげませう。」ト此内このうち、彌次郎やじちろうがあひかた名なは小ざさの、うへだの小袖こそで、縞縹しまじゆす子の帯たび、空色そらいろちりめんの襦袢うちかけ、北八きたが相方あひかたいさ川がは、縞縮緬しまぢりめんにきんもうるの帯たび、黒くろちりめんの襦袢うちかけ、いづれも皆みなもみ裏うらなり。座ざにつくとときじろ色の煙草たばこほんを控ひかへて、

小ざさの「よくおございました。」

いさ川「エ、見みたくでもない。アノがきやアまだ煙草たばこも入れないヤア。小こざさめヤア引ひ小こざさめヤア引ひ。」

硯いんぶた一口  
取と着ちやくなどを  
盛もるひろぶ  
たの類るい

彌や「サアお前めへがた、もつとこつちへ寄よんなせへ。若わへ衆酒しゆさけを早はやく。」  
わかいもの「かしこまりました。只今ただいま」トいひすてて行く。程ほどなく盃さかずきだい、銚子てうし、硯いんぶ

ア。せいの短い女らだ。梶原の馬が食つた笹葉を見るやうに、半分しかア育ててないは。」

今一人の地廻り「こよの内の着物は、みんな七間町の硯蓋のやうだナア」  
この梶原の馬が食つた笹の葉といふは、狐が崎の梶原堂の故事也。又七間町の硯ぶたといふは、きじろ色に油繪のかいてある駿河細工の硯蓋の事なり。着物のもやうをか油繪に見たてての洒落なるべし。

彌「ナントどこぞへ上らうか」

一分、拾匁  
二朱—銀錢  
の高、小判  
一兩の六十  
分の一を—  
匁とす、又  
一兩は四分  
一分は四分  
なり

北「待ちなよ、たしかに爰は壹分と拾匁と貳朱だけな。壁の方にしやう。大かた拾匁だらう。向の暖簾はなんだ。しなのや、こちらが丁字屋、こよが大和屋だな。しかしどうして上るのだ。勝手が知れねへ」ト格子先をうろついてる内、客人一人あがるを見すまして、

北「よし、サアこよにしやせう。彌次さん見たてねへ」

彌「オツトきまつた。サア上らう」トつれ立つてすつと暖簾の内へ入ると、  
若いもの「コレハよくお出でなさいました、先上へ」ト二階へ案内する。二人は見たて

すがきき—  
清搔、女郎  
屋にて店を  
はる時内藝  
者が引く三  
味線なり  
そくり—遊  
客、ひやか  
し歩く客  
ぢまはり—  
其近邊を繩  
張として歩  
きまはる遊  
人などを云  
ふ

をならべて、弾き立つるすがよきの音賑はしく、見せつきの趣は、東都の吉原町におほよそ似たり。客とおほしきが、黒き木綿に紋のついた羽織など着て、手拭のききを結ばずにかぶり、おくり行く茶屋の女は、焼すぎの駒下駄をひきすり、客人の神と見えしは、おほくは股引草鞋にて、いづれも祖父ばしよりなり。そよりでやいに前垂かけの競あれば、棒の先に、もつかうなぎ括りつけて、擔ぎ歩くひやかしあり。行きかふ男女は開帳参りの人のごとく、更に風俗定まらず。又繁昌は言ふばかりなし。向より來るは地まはりで見えて、肩のしまがら、變りたる襦袍を着て、山だしの低き角下駄に、竹のかはの鼻緒をすけたるをはき、酒しの手拭をろくびに被り往來の人に行きあたりて、

「あんだい、コノおんぢいは、眼をはだけて通りやアがれ。アゼおれにぶつかつた」

後から來る地廻り「ヤイ市イ、あんとした。そいつ、へこたらししてやらすい」これはへこませるといふがごとし。

先の相手「暗がりですヒがらゝ行合ひました。かんになさい」ト行過ぎる。それより此てやい、格子先をのぞき、

地廻り「アノ壁のきしにゐる女のつらは、淺間様の天の面のやうだ。アリヤ立つて行か

阿部川町一  
府中の遊廓  
二丁町とも  
いふ

ムニヤク。

此はなしに彌次郎北八も大きに興に入り、歩むともなしに府中の宿につく。府中より鞠

子へ一里十六丁 先傳馬町に宿をかりて、それより彌次郎がしるべの方へ訪ね行く。こ

こに金子の才覺とよのひ、大きに勇み出して宿へ歸り、何でも今宵はかねて聞きおよび

し安部川町へしけこまんと、北八もろとも其支度をして、宿の亭主をまねぎ、

彌「モシ御亭主、わつちらア是から二丁町とやらへ見物に行きてへもんだが、どつちの

方だね。」

てい主「安部川の方でござります。」

北「遠いかね。」

てい主「爰から廿四五丁ばかりもありません。なんなら馬でも雇てあげませうか。」

北「こいつはいよ。」

彌「から尻に乗つて女郎買もおもしろいおもしろい。」

頓て爰より殼尻馬に打乗りゆくほどに、かの安部川町といへるは、安部川彌勒の手前に

て、通筋より少し引つこみて大門あり。爰にて馬をおり、廓に入りて見るに、兩側に軒

から、馬ば取とつた分ぶんで駄賃だちんやらうと、又また二百ふたひゃく下くださつた。あんなえい旦那だんなはめつたにやア無いもんだ」ト話はなしのうち、此馬このひまに乗のつてゐる旅人たびびと、馬ひまの上うへにてそら船いざなをかく、ゴウ／＼ゴウ、

馬士ばし「オイ旦那だんなあぶない。目めをさましなさろ。」

旅人たびびとおこされて目めをひらき、

「馬ひまが埒らちが明わかぬから眠氣ねいきが出でた。きのふ三島しまから乗のつた馬ひまはよい馬ひまであつた。そして馬ば士しがとんだ氣きのよい男おとこよ。三島しまから沼津ぬまづへ百五十ひゃくごじゅうで値ねをして乗のつた所ところが、馬士ばしがいふには、旦那だんなはこんな早はやい馬ひまに乗のつて、今いまに落たちやうか、イヤめつたに居眠いねぶりもならぬなどと、心遣こころづかひしてゐるさしやるだらう。それが氣きの毒どくだから、駄賃だちんはモウもらひますまいといひをる。それから三枚橋まいはしへ來くると、旦那だんなは馬ひまのくらで腰こしがいたみませう。ちと下くだりてお休やすみなさい。酒さけてもあがるなら酒手さかてはこつちから上げませうと、馬方じまかたの方ほうから百五十ひゃくごじゅうくれで、沼津ぬまづへ來くると、さきの宿しゆくまで送たくつて上げたいが、わしが馬ばは跳はねますから、外ほかに馬ばをとつて乗のつて行いかしてやれ、駄賃だちんはわしが進しんませうと、又また百五十ひゃくごじゅうたどくれた。あんな氣きのよい馬士ばしもないもんだ」ト話はなしのうち、此馬このひまをひく馬方じまかた歩きながら、ゴウ／＼／＼



がらうつ  
ひ  
しよつばい  
やつ一吝嗇  
者

氣がづない  
一氣が大きい  
の意

場の脊戸に繋いでおいたら、雪隠の屋根ヲ、がらう皆くらやアがつた。」

先へ行く馬方「アノ酒屋の喚めはしよつばいやつよ。うらがあしこにゐる時分にあア、飯の中へ寸莎をまぜて食はしやアがつた。それに何だかハアうらを見ると、むしやうに字を書きならへの、イヤ算盤をかじれのと、いろくな戯言を吐きやアがつて、うらをあしこの番頭にしやうといやアがつた。其手を食ふものか、業ざらしナ。ドウ〜。」

北「まごどん、火を借してくんなせへ。」

馬士「アイ〜御前方アお江戸だな。お江戸衆は氣がづない。昨日、うらが府中から江尻へ三百で乗せた旦那が、お江戸衆でえい旦那よ。長沼迄來ると、その旦那がいふにや

ア、江尻まで三百ぢやア安いから酒手を二百ましてやらう。其代酒は別にこつちから買

つて飲ませると、言田の的ばでたらふく酒を振廻しやつた。それから又いはしやるに

やア コリヤ馬士、主ア一日おまを引いて歩いて歩いて草臥れたらう。是からうらが下りて

主を此おまに乗せやうといはつしやる。コリアハア何たる事だ。我等やアだといつても

聞かない旦那よ。是非うらに乗れとつて、そんない乗賃を二百やらうと、梅の木の立場

からとうぐうらを追ひ乗せて江尻へ來ると、興津まで馬ア取るのだが、草臥れたらう

彌「ア、惜しいもんだ」ト残らず犬に遣つてしまひ、胸を悪くしてこよを立出で、たどり行くに、猶雨はしきりに降りつゞきて、一向しやれも無駄も出でばこそ、たどとほくと歩みなやみて、ほどなく江尻の宿をうち過ぎけるに、こよにて雨も晴れければ、

江尻より府中へ二里廿七丁

降りくらし富士の根ぶとを打ちすぎて、江尻にあめの霽れあがりたり。

雨やみたれば、おのづから行きかふ人の足もかろけに、からしり馬の鈴の音も勇しく、シヤン／＼シヤン。

馬士のうた「よんべナアしのんだらアエ、おさんどなア、まづいいあせさねてゐたから、いよなべの飯がすぎてつつぶした、ア、へ引。エ、このほつてばらア、またばりをこきやアがる。尋に我等もやらかさすべい。シヤア／＼／＼一先へ行く馬方、後を振向きて

馬方「次郎ヤイ、主が馬ア、だがおまだ」

あとから行く馬方「コリヤア下町の酒屋のおまよ。彼所のやらうめが、がいにななを使やアがつたんで、おまア強い。昨日も清水へ四くら行つて歸ると、役が當つて府中までとつ走らかしたア。駄賃は皆うらが呑んでしまつて、がら馬に食はせべい物アなし、丁

からしり馬  
—宿驛にて  
出す馬にて  
三十六貫を  
一駄となす  
ものを本馬  
と云ふに對  
し其半量十  
八貫を以て  
一駄となす  
を輕尻馬と  
云ふ  
府中—今の  
静岡

彌「そんなら孫か。」

ば「イン子、子が無けりやア孫もおざんない。」

彌「ハテノ、お前の孫でなけりやア、たしかどこかの孫であつた。」

ば「イン子馬士ぢやアおざんない。隣のかごやの子でおざるは。」

彌「ハアさうか。コウあの子、團子が二つ餘つた。ソレ食ひな。」

かごやの子「うらアやアだ。」

彌「ナゼ嫌だ。」

かごやの子「ナニ糠アつけた團子はやアだ。」

彌「ナニ糠をつけるものか。コリヤ黄粉だ。」

ば「イン子私らがとこぢやア、糠ア付けてうり申す。」

彌「エ、道理でざらくすると思つた。ベツく。そんなら犬にやらう。コ、コ、コ、コ。」

犬「わんく。」

彌「ソリヤやるは。あんといへ。」

犬「あアん。」

うらア—お  
らの訛

## 二編 卷之下

それより由井川を打越え、倉澤といへる立場へつく。爰は蛇漿螺の名物にて、蟹人すぐに海よりとり來りて商ふ。ことにて暫く足を休めて、

爰もとに賣るはさどえの壺焼や みどころおほき倉澤の宿

それより薩埵峠を打越え、たどり行くほどに、俄に大雨ふり出しければ、半合羽打ちかたぎ、笠深かかたぶけて、名におふ田子の浦、清見が關の風景も、ふりうづみて見る方もなく、砂道に踏込みし足もおもけに、やうやく興津の驛にいたり、  
興津より江尻へ一里

二丁 ころに怪しけなる茶店にたち寄り、

北「オイ婆さん、ソノ黄粉をつけた團子を二三本くんなせへ」

彌「さてく、久しぶりでお前の貌を見たは、いつもお達者でめでたい。時にこの子は、ちつさな時見たよりかア大きくなつた。姉御は達者かの」

ばら「わしは子供はおさんない」

薩埵峠一薩  
陀の像この  
濱より漁夫  
の網にかゝ  
りて上りし  
より名あり

あじやらし  
いこと―戯  
れ事

解わけをしてゐるうち、上うえから婆はなが降りて來り、

ばく「イヤくさうぢやアござらない。わしもハア六十になり申まうすが、どこの國くににか何なにヲすべいと思おもつて、わしが懷ひへ這こひこみめさつた。」

おやぢ「ヤアく、こんなア氣きが違ちがやアせぬか。わしどもは二十年ねんもこつちい、そんなあじやらしい事ことア中絶ちゆうぜつのウしてゐますにア、皺しわくた婆はなが所ところへ這こむといふは、イヤはやこんなは見たみたくでもない人ひとだ。」

北きた「イエもう御免ごめんなせへ。コレ彌次やじさん寢ねたふりをしてゐるすと起たきてくんな」トゆり起たされて、をかしさを隠かくし、

彌や「どうも若わへ者ものといふもなア、後先あとさきの考かんがへがござりやせん。どうぞ了簡れうけんしてくんなせへ」ト六部むくや巡禮じゆんれいもともぐ口くちを添そへて、やうくとをさまり、北八きたも單衣ゆかた一枚賣まい代うりしろなして、天井てんじやうのつくろひ賃ちんせう少々い出し、さらりと濟すんでしまひければ、程ほどなく夜よがあけて、彌次郎やじらう北八きたさうく、に此所このところをたち出いでて、又またたどりのく道みちすがら、

彌や「北八きた、でへぶふさぐの。小田原おだはらの泊とまりでは、水風呂すゐふろの底そこをぬいて貳朱にしゆふんだくられ、又またゆうべは二階にかいをふんぬいて三百取ひゃくられたも智恵ちゑがねへぞ。」



にかけ出でんとするに、はや燈をともして内のおやぢ、

「何だか佛様のなかへ落ちたさうだ」ト佛壇の戸をひらき見れば、思ひがけなく北八が  
はひ出たるゆゑ、肝をつぶし、

おやぢ「イヤ此人は、」

北「モシ身延様へはどうまゐりますか。」

おやぢ「馬鹿アいはつしやい。こんたアまあ、アゼニそこへ入らしやつた。」

北「イヤわつちは小便におきた所が、ツヒ戸までひして。」

おやぢ「アニ戸までひをした。イヤこの人は佛様の中へ小便をしやせぬか」ト佛壇の内  
をのぞき、

おやぢ「ヤアく、こんたア天井から落ちめさつたな。」

北「アイサ、つひアノ猫に追はれて落ちやした。」

おやぢ「アニ、こんた鼠ぢやアあるまい。猫に追はれたたア何たる事だ。そしてアゼ天井  
へ上らしやつた。」

北「イヤ私は禪を鼠に引かれたから、もしや二階にでもあらうかとそれを探しに」ト辯

身延様一甲  
州身延山に  
ある日蓮宗  
の總本山な  
り



こけるー、  
るぶ

ムニヤ。時分はよしと北八そつと起き上れども、燈はなし眞暗闇、そこらあたりを探り廻して、やうくと楷子に取付き二階へ上り見れば、天井は竹の簀子にてその上に筵をしかたれば、歩くとミシリくと鳴るに驚き、やがて四ツ這になつて探りまはり、娘と思ひ婆が寝てるる蒲團の中へ這ひこみ、そろく撫でまはしゆすり起せば、婆眼をさまして、

ばく「だれた、何ヲする」トいふ聲に、北八うろたへ、さては間違せしと逃げだす拍子に、足へ竹のとけを立ててばつたりこけると、竹簀子を踏みぬき下へどつさり落ちる音ミシく、ガラくストウン。内のおやぢ目をさまし、

おやぢ「あんだく」

二かいのばく「何だか知らないが、とつ拍子もない。皆起きなさろ起きなさろ。」

この音に六部も巡禮も起き上り、

六部「どえらい音がした。燈をつけなさろ。眞黒くて何だかんだか知れないぞ。」

こゝに怪しいかな。北八天井をふみぬき、下へ落ちたところが、何か箱のやうな物の中へおちて、一向にわからず。足にころくと何だか引つかよる故、さぐりて見れば、佛

さまのごくわうなり。さては佛壇の中へおちしと、苦しき中にもをかしさ半分、この間

そべる一寐  
る

紙帳一紙製  
の蚊帳

ば「サア皆そべらしやいませ。内ががいに狭いから、わしと巡禮の女の衆は、天井へ上つて寝ますべし。」ト九ツ楳子を二階へかけて、巡禮の娘とつれて上る。六部は笈のうちより紙帳など出しかぶる。主の親父も巡禮も薄べらなる蒲團のやうなるものを引つぱり、爐の端へころけて寝る。

北「コリヤア小便が漏るやうだ。」

彌「おいらも一所に行かう」ト裏口へ出る。

彌「アノ巡禮め、ぶつちめやうと思つたら、二階へ行きをつた。いまくしい。」

北「さつきから咄してゐる内、そつと手を握つたり尻を抓つたりして、痴話をしてゐるたがお前知るめへ。」

彌「嘘をつくぜ。」

北「嘘でない。今夜アノ娘をぶつちめて見せう。」

彌「早い男だ」トうちへ入り、裏口をしめて寝る。かゝる木賃泊りのわびしきも、話の種とはいひながら、凌ぐべきむしろ屏風も、破壁をもる風の音いたくも更けゆく鐘に目覺めて、北八あたりを伺ひ見れば、みな旅づかれのかけ合膳ゴウく、スウく、ムニヤく

熊野の浦は  
鯨の多き所  
なり

ア天竺の親方どのから、夕立の時分は手傳つてくれろとつて、夏の中は頼まれて行きやり申したが、ふと夏上方さアへかせぎに行くとして出たなりけりで歸らぬと思ひなされる。剩へ、其時私が娘は孕んでゐるし、あにがハア案じをるまい事が、大方どこぞへ落ちて、腰骨がなぶん抜いて病つてでもゐるだんべいと思つたばかりで、便聞くべいにもあてづつばうなり、コリヤハア何たる事だと思つてゐるうち、友達の雷どのが来て、これの婿どのはハア熊野浦へ落ちて、鯨にがらよ呑まれたとの話。ヤレさて悲しい事だと娘も泣きやる、わしもハア片腕のウ腕がれたやうに思ひをりましたが、何とすべい、せうことがない。其代にやア娘が雷どどの種を孕らんだから、鬼子でも生みをるべい。それにハア親雷の跡を繼がせべいと楽しんで、何でも鬼の子を生むやうにと氏神様へ願のウかけて祈つた所が、因果なこたア生れた子が此娘でござり申す。そこでハアわし共も力のウおとして、是ほど祈つたのに鬼は生まず、しかもこんなに満足な人間の子を生むといふは、よくくの因果だと諦めて、罪ほろほしに、こりよつて巡禮と思ひ立つたアもし。私ども程因果なもなアないと思やア、咄ヲするさへ胸がつぶれ申すは「ト涙ながらに話すうち、はや夜も更けければ、主の婆それくくに寝ござなどあてがひ、



發起―心を  
改めて佛道  
に入る事

それ様たち  
―あなた方  
ふと夏―  
夏、ある年  
の夏

がらり―つ  
ひ

六部「イヤ一つも賣れまじない。そこで私もハア是ほどまでに工夫のウして是非まうか  
るべいと思つた事がつづばづれ申したから、所詮ハア、何條しても行かないこんだと發  
起のウして、六部になり申した。兎角世界は思ふやうにやアならないもんだアもし。」  
北「ハア感心なお話だ。時に又巡禮さん、お前はどいふ事から思ひついて巡禮にやア  
出なすつた。」

巡禮「コリヤハアわしも序に懺悔話のウしますべい。この娘はコリヤア一人の孫でござ  
るが、わしどもはハア變つたこんで佛縁のウ結びまうした。わしは日光の方でござる  
が、さだめてそれ様たちも話にも聞てるやり申すだんべいが、私どもが國などは、雷が  
たくさんで、此二十年ばかりも後のことであり申したが、ふと夏、でかく雷が鳴りし  
て私どもが脊戸口さアへ落ちたと思ひなさる。さうするとハア其雷どのが、榎の株つ  
ちいで、でかく尻をうち申して、痲氣が起つたと騒ぎやる事よ。あにがそこで、天竺の  
ウへ歸るべいことも出来ないから、わし共の内うちで養生のウしてゐる内、恥さアかたり申  
さにやア理が聞え申さないが、その雷が私どもの娘とがらり懇ねんころのウしまして、互たがひにハア  
離れべい様子もおさんないから、すぐにその雷どのを婚むこに取つたと思ひなさる。そこでハ

とつけもな  
い―途轍も  
ない

ていろく、首さアひねくり廻いて、とつけもない事を思ひついたアもし。」

彌「はての。」

六部「イヤサ箱屋をおつばじめ申したは。あにが重箱だアの櫛箱だアのと、いろく箱どもをづなく買ひこんで賣るつもりだアもし。」

彌「ハテ風が吹いたによつて、箱屋とはどういふ案じだの。」

六部「さればさア、わしがハア 思ひつきにやア 何が扱、毎口く途方もなく風がふいてお江戸ではがいに砂埃がたち申すから、おのづと人さアの目まなこへ砂どもが吹きこんで、眼玉の潰れるものがたんと出来るだんべいと思つたから、そこではアわしが工夫のウして、せけんの俄盲が外に何條せう事はなし、みんな三味のウ習はしやるだんべいさうすると三味線やどもが繁昌して 世界の猫どもが打殺されべいから、そこで鼠どもが無上あれて、何でも世間の箱共のウ 皆かじりなくすべいたア目の前だアもし。コリヤハアこよで箱屋商賣のウおつ初めたら賣れべいたア遣はないと、あにがハア身上ありぎり、箱ツどものウ仕入れたと思はつしやい。」

彌「コリヤアいと思ひつきだ。大かた賣れやしたらう。」

彌「ソレは暖かのでよからう。」

ば「インチ、こんた衆のことぢやアござらぬ。コリヤアこの衆の粥だアよ。」

巡禮「イヤけふ貰つた米ア、しひな計したんとあつて、そして半分は石ころだアもし。

こりよヲ食つたら腹が重くなるだんべい。」

ば「六部さんの三合計しやアあつたんべい。そこ、分けて食ひなさろ」トこの内巡

禮六部も、てんぐくに茶碗を出し、もつて食ふうち、だし合の米なれば、彌次郎北八はた

だ見てゐるばかりで、手持なくて煙草入の底をはたく。六部はやがて食ひしまひて、

六部「二人の衆はさだめしお江戸の衆だらうが、私どもはお江戸で、てんこちもない

目にあつたアもし。」

彌「どうしなさつた。」

六部「わしがハアこの六部になつた因縁のウかたり申すべいが、ヤレ扱人といふもなア

はあ運がなくちやア持ちあげべいにも、何として頭アあがり申さない。わしがハア、わ

かい時分にお江戸に居申したが、その時何でもハア夏のとつつきから秋へぶつかけて

毎日くづなく風の吹いたことがあり申した。其じぶんハア何でも金儲のウすべいとつ

てんこちも  
ないーある  
まじき事、  
とんでもな  
い

六部―諸國の社寺を巡拜行脚するもの、六十六部の納經をするより起れる名

壇だんひとつと破やぶれつどらひとつの身代しんたい、あるじは七十ちゅうじゅう近ちかきおやぢ、るろりの際きはに藥わらをなつてゐる。じざいにてつるしある鍋なべに、何なにかくつくゝ煮にえるそばに、六部むくが一人ひとり巡禮じゆんらいふたり、一人ひとりは六十餘よそのおやぢ、一人ひとりは十七八じゅうしちはちの娘むすめ、笈たひつるを着きたまよ、鞆あかやれだらけの足あしをのばし、火ひにあたつてゐる。此家このやのばよア、松まつの枝えだをへし折をり爐いろりへくべながら、

ばよ「こつちへ入はいらしやりませ」

北きた「わしらを今夜こんや泊とどめてくんませへ」

おやぢ「上あがらしやりませ。ソレそこに水みづがある。足あしヲゆすぎなさろ」足あしを洗あらひながら、

北きた「彌次やじさん見みねへ。いよ巡禮じゆんらいが泊とどつてゐる」

彌や「ホンニこいつ唯ただはおかれぬ。ひだるい時ときにやアまづい物ものなしだ」ト打笑うちわらひ足あしを洗あらひ

て上うへへあがる。

六部むく「サアこよへ來きてあたりなさろ」

北きた「コウ彌次やじさん、もつとそつちへ寄よりな」ト娘むすめの側そばへわりこんで坐すわる。あるじの婆おばは

るろりの鍋なべをおろし、

ばよ「サア粥かひができた。皆食みんなくひなさろ」

ぼうばな  
宿はづれ

とつげし  
一番はづれ

彌「それだどつて、手前が金玉や何かを洗つた手拭だものを、ア、胸がわるい。ヘフヘフ。」

北「ハ、ハ、時に宿はづれへ行つて木賃と出やう」トうちつれて此宿のほうばなへ出でそこらあたりをまごつくして、

彌「コウ、どうぞいききな女のある内へ泊りてへの。」

北「ナニ木賃でとまる内に、いきも瓢箪もあるものが、ハテどこだか知れねへ」トあつちこつちの内を覗きあるき、軒の下にねてる犬の脚をふんで、大きに食ひつかれ、

北「アイタ、ハ、ハ、」

犬「キヤアシ〜。」

すし賣の聲「あぢのすウし、さばのすウし。」

北「コウすしやさん、こよらに木賃宿はねへかの。」

すしや「アイ向のとつげしの内よ。」

彌「アイおせわ」ト教へられたる内の門口から、

北「チト御免なせへ」トすつと入り見れば、疊の四五疊も敷かれやうといふ内にて、佛



して

彌「北八か」

北「オイ〜」

彌「どけへ行つた」

北「へ、おらア飯を食つて來たが奇妙か」

彌「エ、どこで」

北「本陣で、どさくさまぎれに五六はいやらかして來た」

彌「ソリヤアいと事をした。しかし手前も實のねへもんだ。なぜおいらも連れて行かぬ

〜エ」

北「イヤお前にやア土産をもつて來た」ト手拭につよみし飯をい出す。

彌「何だ、めしか。有がてへ。イヤなか〜手前氣がきいてゐるはへ。ア、うめへ〜」

ト残さず食つてしまひ、かの手拭をうちふつて、

彌「ヤアこれは手拭に包んで來たな。エ、汚ねへ」

北「ナニ汚ねへものか」

一もん一文と  
なかけたり

雀色時一薄  
暮、馬子唄  
に竹に雀は

品よくとま  
る云々

御本陣一貴  
人のとまる  
旅箱

ちやつと一  
早く、急い  
で

今會我に機縁をむすぶわれくは、ほかに一家も一もんもなし。  
富士川のわたし場にいたりて、彌次郎兵衛、

ゆく水は矢をいるごとく岩角に、あたるをいとふふじ川のふね。

此涉を打こえけるに、はや日も西の山の端にちらつき、おのづから道急ぐ馬子唄の、竹

にとまる雀色時、やうく蒲原の宿にいたる。「蒲原より由井へ一里」此宿の御本陣にお

大名のお着と見え、勝手は今膳の出る最中。北八外よりさし覗きて、

北「コウ彌次さん、ちよつと此風呂敷包を持つてゐてくんない」

彌「どうする」

北「イヤちつとの間だ」ト彌次郎に包をわたし、御本陣へすつと入り、勝手のどさくさ

の中へあがり、片隅の方へすわると、本陣の女だんく膳を持運び大勢の者にすゑる。

北「オイ、こよへも一膳」

女「ハイく」トするゑる。かゝる混雑の中ゆゑ、人も気がつかず。北八思ふさま食つて

しまひ、すきまを見て、手拭をひろけ、椀に盛りたる飯を一膳ちやつと打あけ、手拭に

引つよみ、やがてこそくくにけ出で、まごつく内、彌次郎は向の軒の下に待ち、退屈

北「ドレこいつは甘へ。この餅はいくらだよ。」

小僧「ソリヤア五文どりよ。」

北「五文ヅツなら、かうと、二人で六ツ食つたから五六十五文、ソレやるぞ。」

小僧「イヤこの衆は、モウ塵劫記ぢやア賣りましない。五文づつ六つくれなさろ。」

北「ヤアくくく、錢があるかしら。」

小僧「こよへ出しなさろ。一ツニツ三ツ四ツ」ト五文ヅツひとつくに數へて、めのこ

算用にひつたくれ、

彌「こいつは大笑だ。」

北「とんだ目にあつた。サア行かう」ト立ちあがり、四五間も行きすぎ、

北「ア小僧は如才のねへやつだ。アノ餅がナニ五文取なものか。二文か三文の餅だらう

に、高く賣つて、初手の損をうめやアがつた。」

彌「いまくしい。今食つた餅がのどにつまつた。ゲツく」トをかしさ半分、子ども

と侮つてぢきに報つたと打ちわらひ、たどり行く。それより久澤の善福寺といへるに、

會我兄弟の石牌あるを拜みて、北八、

塵劫記—九  
九など記せ  
る珠算の本

菓子くわしなどならべて遊あそぶ片手かたてに旅人たびびとをよびたつる。

小僧こそう「お休やすみなさいませ、お休やすみなさいませ。」

北きた「サア彌やじ次さん、菓子くわしでも食くはねへか。」

彌やじ「チト休やすまう。」ト堤さてのうすべりの上うへへ腰こしをかけ、二人ふたりながら菓子くわしをしてやり、

北きた「小僧こそう、この菓子くわしはいくらづつだ。」

小僧こそう「アイ貳ふた文もんヅツ。」

彌やじ「五ごツ食くつたからいくらだ。」

小僧こそう「私わしはいくらだか知りません。」

北きた「そんなら、かうと五ごツで二五にごの三文さんもんか。これこゝに置おくぞ。」

彌やじ「ヒヤア、こいつは安やすいもんだ。もう一つ食くはう。コリヤいくらだ。」

小僧こそう「ソリヤア三文さんもん。」

北きた「ドレ〜甘うめへ〜。小僧こそう、せんぜんの錢ぜにはすんだぞ。後あとの菓子くわしが四よツ食くつたから、三

四よの七しち文もん五分ごぶんか。エイは、五分ごぶんはまけろまけろ。」

彌やじ「イヤ餅もちもあるな。」

浪人「そんなら、コレ附つくなく」トさうくくに行過ゆぎる。二人もをかしく打うちわらひつゝたどり行くに、村むらはづれに小屋こやがけして、觀音くわんおん様さまのかけぢをかけ、麻あしの破衣やぶれころもをきた

る坊ぼうさま、居眠いねみをしてゐたりしが、旅人たびごを見ると、俄にはかに鈴りんをうちならし、

はうす「妙めう法蓮華經普門品第始終ふれんげきやうふもんほんだいいしじうつた忽多闍世間子息大分遊興けんしやくたい毎まい晚ばん三味線さんまいせん音曲おんきよく滅多無正夜前めつたむせいやまへ

大食たいしよく翌日よくじつ頭痛じづつう八百羅利はちり古こ灰はい笑せう止し千萬せんばん近邊きんべん醫者いしや早速そくそく御見舞みまひ調合てうがふ煎藥せんやく吞の多羅久多羅腹張多心たらくたらはらふちん

經ぎやうチちインいんく。鼻はなの下した空殿くうてんの建立こんりふ、お志こころざしをおたのん申まうします。」

北八「お經ぎやうがおもしろへから、寄進きしんにつきやせう。」

坊「ハイそれは御苦勞ごくろう、お名なを記しるしませう。」

彌「そんなら彌次郎兵衛やじろべゑとつけなさい。」

坊「ハイ俗名彌次郎兵衛。」

彌「エ、まだ死しにやアしねへはな。」

坊「へいまだ死しなしやらんのかな、イヤ是こゝへは、お志こころざしの戒名かいみやうを記しるします。」

北「オイそんなら、そけへ書かいてくんな。釋しやく急難取きうなんしやくつめ佛果菩提ぶつぐわくだいのため、ソリヤ一文もん

ト投出なげだして行過ゆぎる。松原まつはらの中なかほどに、十四五しじうごの前髪まへがみ、堤つてをくづしてやくわんをかけ、

はなのした  
空殿—鼻の  
下は口、空  
は食ふにか  
けたり







云「かしは餅にかけておもしろくいひしなり

ひろひやせう―歩きませう

かくて吉原の驛につく。も黄色なる聲々に、

女「お休みなさいやアせ。酒ウあがりやアし。米の飯をあがりやアし。こんにやくと葱のお吸物もおざりやアす。お休みなさいやアし。」

かこかき「籠よしかな、かご。」

馬かた「ナイ旦那衆、馬アどうだ。戻りだから安い。」

彌「今迄乗りづめに乗つて来たから、ちよつと是からひろひやせう。」

北「ころびやせうが聞いてあきれア。」

それよりこの宿はづれに、破れ編笠をきたる浪人者とおほしく、扇をもちて、

謡「いざく酒を飲まうよ。さてお肴はなに〜ぞ。ころしも秋のやまくさ、ききやう、

かるかや、われもかう、しをんといふは何やらん。道中わづらひまして難儀をいたしま

す。なにとぞ路錢の御合力を願ひます。」

北「イヤモウわつちらア昨夜ごまの灰に路用をとられて壹文なしだ。どうぞ貰ひだめが

あらば、こつちへ御合力ねがひます。」

〔吉原より蒲原へ二里二十五丁半〕

棒ばなの茶屋女ども、いづれ

ツ口をやけどした。餘りあついで。どうぞ蕎麥をちつとうめて貰ひていもんだ。

北「コレく若へ衆、たびく氣の毒だが、藥を飲むからもう一つ湯をくんな。」

そばや「ハイく。」

北「コレたつぶりだよ。オットよし。しかし私が飲む藥は、したちの入つた湯でなければきかねへから、とても事に若へ衆、したちを少しさしてくんな、オットよしく」  
ト鯛の水を呑むやうにくつくくと呑んで、「サア行かう。」

彌「大分心がたしかに成つた。」

今食ひし蕎麥は富士ほどやまもりに、すこし心もうきしまがはら。

それより新田といへる建場にいたる。爰はうなぎの名物にて、家ごとに煽ぎたつる蒲焼の匂に、二人は鼻の先をひこつかし、

蒲焼のほひを嗅ぐもうとましましや、こちら二人はうなぎのたび。

頓て元吉原を打過ぎ、かしは橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見えて、裾野第一の絶景なり。彌次郎取りあへず、

餅の名のかしは橋とてたびびとの、あしをさすりて休みやすらん。

## 二編 卷之中

〔原より吉原へ三里六丁〕

くはず沼津  
まだ飯もくはず沼津をうち過ぎて、ひもじき原の宿につきたり。

―食はず飲  
北「エ、おめへ、まだそんなしみつたれをいふは。今の錢で蕎麥でも喰ふべい。」

ます  
彌「ソリヤアよかろく」ト蕎麥屋へ入り、

北「オイニぜん頼みます。」

そばや「ハイく」トやがて蕎麥ニぜんを出す。

彌「太い蕎麥だ。食ひでがあつていよはへ。北八もう一杯かへやうか。」

北「イヤく、さう一時に錢を使つてはならぬ。又さきへ行つて、何ぞやらかしやせ

うから、湯でもおもいれ飲みなせへ。」

彌「そんなら若へ衆、湯を一つくんな。」

そばや「ハイく。」

彌「ア、甘へく。北八飲まねへか。オイくもう一杯くんな。オットオット、アツ、

おもいれ―  
思ふ存分



侍「ハア、三百には若<sup>わ</sup>へ男<sup>をとこ</sup>だ。」

みなく、「アハ、ハ、ハ、ハ、」此<sup>この</sup>話<sup>はなし</sup>にまぎれて、歩<sup>あゆ</sup>むともなしに小<sup>こ</sup>すは大<sup>おほ</sup>すはを打<sup>うち</sup>過ぎ、ほ  
どなく原<sup>はら</sup>の宿<sup>しゆく</sup>へつく。こゝにてつれ<sup>つれ</sup>の侍<sup>さむらい</sup>にわか<sup>わか</sup>れる。

いっちー  
番

澤村宗十郎  
—四代宗十郎なるべし、文化九年十二月二十九才にて歿す、立役の俳優也

侍「身ども當年巳の年で、四十二才にまかりなる。」

北「それはお若うござります。」

侍「コレハ御挨拶。しかし身ども相役の園原作野衛門、米木津甚大夫など、みな同年で

まかりあるが、その内で、身どもがいつち若へ〜といひをるて。」

北「さやうでござりやせう。」

侍「それに又家中うちの若へ女どもなどが、身どもがことを澤村宗十郎に似てをるな

ぞと申す。」

北「ハ、アなるほど。」

侍「時にお手前はいくつぢや。」

北「旦那お當てなされてごらうじませ。」

侍「ムウ、お手前年な、かうと廿七八にもなりをるか。」

北「イエ、ちやうどでござります。」

侍「ナニちやうど、アノ百か。」

北「イヤ  
是でござります。」

から飛ぶ—  
思切る事、  
清水は京都

の清水寺な  
り、狂歌に

清水の舞臺  
はおるか筑

紫まで一飛  
にする梅の  
花笠

つばまり—  
まとまり

北「イヤモウそんな一文ヅツお買ひなさつては御相談ができません。かういたしませう、丁度にお買ひなさつて下さりませ。」

侍「丁度とはなんほぢや。」

北「ハイちやうどと申すは、百につばまりましたことをちやうどと申しますから、百文なら差上げませう。」

侍「ム、なにか、百のことをちやうどといふか。しからばちやうどに求めて遣さう。」

北「それは有難うござります。」ト巾着をわたし、百文取り、

北「モシ、是は安いものでござります、捨賣にしても根付ぐるみでは、四五百がものは

つばります。」

侍「イヤ身ども忤どもが兩人罷在るが、是は總領へのよい土産ぢやて。」

北「へい、あなたはまだお若うお見えなさいますに、お子達がお二人とはよいお樂みで

ござります、無駄ながら、もうおいくつでござります。」

侍「あててお見やれ。」

北「ハイ、あなたは、カウト三十七八にもおなりなされますか。」

し合せ―諺  
胸算用にも  
編笠未だ青  
青として損  
れもやらす  
ありけるを  
寶は身のさ  
しあはせ之  
を賣りて當  
座の用に立  
つとあり  
いんでん―  
印傳革も  
と印度より  
舶來したる  
もの、羊又  
は馬のみ  
がはにて作  
る

清水の舞臺

を賣りたうござりますが、お買ひなさつて下さりませぬか」ト腰にさけたるいんでんの巾着を出し見せる。

侍「ホウそれは氣の毒。途中でものを求むるはいかどしいが、お身たちの難儀とあれば求めて遣さう。價ななんほぢや。」

北「ハイ三百ぐらゐに差上げませう。」

侍「それは高直ぢや。」

北「少しはおまけ申しませう。」

侍「しからばソノ巾着共の價な、かうと六十文のつかはそか。」

北「それはあんまり。」

侍「六十一文の遣そか。」

北「もちつとお買ひなさつて下さりませ。」

侍「しからば六十二文のつかはそか。」

北「イエどうも。」

侍「左あらば清水チウ舞臺どもから飛んだと思つて、六十三文のつかはそか。」

侍「この歌を聞きて感心し、

侍「ヒヤアでけたく、お身たちは江戸のものだな。」

彌「さやうでござります。私どもは夜前の泊で、ごまの灰に取りつかれて、大きに難儀をいたします。」

侍「ハアそれは近頃氣の毒ぢや。なるほど、ごまのはひのさしたのは痛からう。」

北「イヤごまの灰と申すは、どろぼうの事でござります。」

侍「どろぼうとは何ぢや。」

北「ハイ泥坊と申すは、盜賊のことでござります。」

侍「ハ、アなにか、人のものを取りよる盜賊の事を泥坊といふか。」

彌「さやうでござります。」

侍「ソノ又どろぼうを、ごまの灰といふぢやナ。なるほど解せたく。」

北「ときに旦那へちとお願がござります。私ども右の泥坊にあひまして、さつぱり路用

は取られてしまひましたから、大きに難儀をいたします。府中までまゐれば如何やうと

もいたしますが、それまでの所に困ります。そこで財は身のさし合せとやら、どうぞ是



れき一方言  
そば、傍

供「いかさま、こちらの今笑ひよる女なぞも、よいやうでござります。」

侍「どれかく。ム、アノ柱のねきに横つてをる女がよいく。サア傳助今少しある、  
呑んでしまへ。」

供「ネイく。」

侍「サア勘定のいたさう。なんほぢや。コリヤく、この肴どもは手はつけないぞ。」

女「ハイく、四十二文でございますチャ。」

侍「オ、よいく。」ト供の者に拂はせ、こよを出かける。北八彌次郎は茶ばかり飲ん  
で立ちあがり、

北「サア行かう。」

彌「アイおせわ。」

女「どなたもようお出で。」トそれよりこよを立出で、二人はかの侍と後になり先にな  
りて、いろく話しつれてたどり行くに、ならの坂といふ所にいたり、千本の松原にて、  
北八がこじつける歌、

この景色見ては休まにやならの坂、いざたばこにや千本のまつ。

八ツ―午後  
二時

ちろり―酒  
を温むる金  
屬製の器

わごりよ―  
お前  
ネイ―方言  
ハイ

女「ハイ八ツでもおざりやしよ。」

侍「よい酒さけがあらば、ちくと出だしなさろ。」

女「ハイく、三十二文もんの上あげませうかやア。」

侍「今いますこし下直かちよくなのはなんほぢや。」

女「廿四文もんのおおざいます。」

侍「しからば、ソノ廿四文もんの酒さけと卅二文もんの酒さけと等分どうぶんに割わつて、一合がふしやく五勺ごしやく許かり出だしなさろ。」

女「ハイく」ト勝手かてより、ちろり、盃さかずきを持ちきたり、肴きかなの煮付につひなど出だす。

侍「コリヤく、此煮付このにつひよつた肴共さかなどもの價あたひなんほぢや。」

女「三十二文もんでおざいます。」

侍「こちらは。」

女「十二文。」

侍「ム、よいく。コリヤ傳助でんすけ、わごりよも一ツ飲のみやれ。」

供傳助「ネイ。」

侍「コリヤ、向むかうに火ひを焚たきよる女おんなどもは、奥田氏おくだの内室うちむろによく似によつた。」

彌「いくら程あるへ。」

馬士「たつた三里廿四五丁もあるだんべい。」

彌「ハツア、」トだんくたどり行く程に、やがて釜が淵といふ所にいたりて、かよる中にもすきの道とて又一首くちすさむ。されども歌もその身の苦しきまよなれば、

名を聞いてほしやこがねの釜が淵、くちに孝行したきゆるには。

こがねの釜  
廿四孝の  
一人郭巨の  
故事

此所にて餅などとよのへ、すこしは腹の虫をやしなひ、互に力をつけ合ひ、話ものして漸く沼津の驛につく。沼津より原へ一里半こよにてまづ足を休めんと、宿はづれの茶屋へ入る。

茶屋の女「お早うおざいますチヤ。お支度でもしなさいませぬか。」

北「イヤあとの建場でうんといふほど食つて來やした」ト此内、兩掛を人足にかつがせ、供を一人つれたる侍、お國風の大たぶさ、木綿を片面に染めたる小紋のぶつさき羽織を着たるが、この茶屋へはいる。

女「お茶あがりませ。」

侍「もう何時だの。」

建場―宿驛  
間の小驛、  
かごかきが  
杖をたてて  
休息する所

から狀じやうばこをかつきし人足にんそく、

人足「エイさつさ、エイさつさ、エイさつさ。」

やみと一無  
暗に

北「なんだ、野郎やろうの韋駄天ゐだてんさまア見るやうに、やみと驅かけて來やアがる。」

ふんだくに  
澤山に、

彌や「ア、羨うらやましい。あんなに驅かける勢いきほひだから、さだめてお飯めしもふんだくに食くつたらう。」

十分に

北「エ、おめへも乞食こじきじみた事をいふもんだ。」

御狀箱ごじやうばこの人足「エイさつさ、エイさつさ。」

北「ソレあぶねへ。こつちへ寄よんな。」

人足「エイさつさ、エイさつさ。」ト通りすがいに狀箱じやうばこのかどで、彌次郎やじらうが小びん先こまきへが

つたりと當あたる。

彌「アイタ、ゝゝ、」人足にんそくは委細ゐさいかまはず「エイこりやさつさ、エイこりやさつさ。」

彌「ア、ア、いたたいく。なんの因果いんぐわでこんな目めにあふか。おらア死しにたくなつた。」

北「エ、ばかアいひなせへ。ソレ馬ばが來たア。」

彌「馬士まこどん、先まきの宿しゆくまではまだ餘程よつほひあるかの。」

馬士「ナニちつきにそこだア。」

枯木に花―  
花咲爺の童  
話、灰にて  
枯木に花を  
咲かせし事  
を掛く

柄杓をふつ  
ても―巡禮  
して人の合  
力を受けて  
も

後にわづかのはした錢の残りたるをたよりに、早々にこよを出かけ、道々も心がけて  
ごまのはひの行方を探ぬれども、一向しれず。しやれも無駄もどこへやら、たどうか  
うかと辿りながら、

こよわさ 枯木に花は咲きもせで、目をこすらするごまの灰かな。

北「彌次さん、そんなに力を落しなんな。たかがかうだ」

うき沈みある世は次第どう尊、いのれるかひもなき護摩の灰。

彌「北や、おらアもう坊主にでもなりたい」

北「お前とんだことをいふ」

彌「いつそ江戸へ歸らうか」

北「ナニサけへる事があるもんだ。柄杓をふつても、お伊勢様まで行つてこにやア外聞

がわりい」

彌「それでも、モウひだるくて歩かれぬ」

北「ハテ待ちなさい。こよに江戸からことづかつて来た十二銅があるから、先へ行つた  
ら餅でも買つて食ひなせへ」トいひつと二人ながら、杖にすがりてえちらくくと行く向



―同類、漢書楊敞傳に、古與今如一丘之貉

亭主「これは無體な。ナニわしらが四斗樽を泊めませう。」

彌「泊めねへことがあるものか。昨夜から今のさきまで、こよのうちに寐てるたは。」

亭主「アノ四斗樽がかへ。」

彌「オ、サ四斗だる。イヤ〜ごまのはひだ、ごまのはひだ。」

北「コレ彌次さん、マア静にしねへ。可哀さうに、御亭主の知つた事ぢやアねへ。道づれにして來たはこつちが悪い。どうも仕方がねへと諦めなせへ。」

亭主「さやう〜。是がわし共が内へござつての相宿ならば、おつしやるも尤だが、何をいふも一所にござつたものを、申さばお前たちの御危相といふもんだ。」

北「違なしさ。コレ彌次さん、お前りきんでもはじまらねへ。どうも仕様事がねへはさ」  
トいはれて見れば、彌次郎もなる程と思つた處かつまらず、ふさぎ切つてだんまりである。終つかねば、

北「彌次さん、マア飯でも喰ひねへ。」

彌「飯も食へぬ。ナント北八かうだ。府中まで行けばちつたア算段する當もあるから、先一文なしで出かけやう」トつかひ殘の錢を集めて、やう〜とこよの旅籠をばらひ、



ごまの灰—  
旅人を欺き  
物を盗むも  
の

やたへほに  
よチ—屋臺  
骨を

おきのどく  
の人丸—お  
きのどくは  
柿の本の語

呂  
一ツ穴の狐

彌「イヤ貴様御亭主だの。コレ濟まねへぞ濟まねへぞ。あんなごまの灰に宿をかすからにやア、こなたもうはまへを取つたらう。なぜおいらに沙汰なしに先へ立たせた。」  
亭主「コレハけしからぬ。お連様と存じて泊めたのでございます。今朝立たしつたもさつぱり知りませぬ。大方うら道からでも。」

彌「うら道からも凄じい。そんなで行くのぢやアねへは。何でもアノごまの灰を出せだせ。コレエ野郎を見そくなつたか。お江戸でも神田の八丁堀で、とちめん屋の彌次郎兵衛様といつちやア、おそらく己が近付の人に、誰知らぬ者はねへは。悪くふざきやアがると、やてへほによチ叩きこはして、合羽千場の地請にたつのだ。足元のあかるい内、サアごまの灰めを爰へ出せ。サアだせくくく。」

亭主「これは御難題。さりとてはお氣の毒な。」

彌「ナニお氣の毒の人丸さまだ。イヤ四斗樽様があきれらア。サア四斗樽めをこよへ出せ。」

亭主「ナニしとだるとは。」

彌「イヤサ四斗樽を合點で泊めたからにやア、貴様も一ツ穴の狐だ。」

彌「ハテ合點のいかぬ。アノ野郎が風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寐てる内、立つてしまつたと見える。」

北「ヤアそんなら何ぞなくなりやアしねへか」トそこらを見まはし、「なにも別條はねへが。」

彌「イヤ〜別條があるやうだ」ト懷から胴巻を出し、ふるつて見れば、紙に包んだやつががつたりと落ちる、開けてみれば皆石ころ。

彌「ヤア〜〜」

北「どうした。」

彌「どうしたどころか。金が石になつてしまつた。エ、エ、」

北「こいつは大變々々」

彌「くやしい。今の野郎めにすりかへられた。コレ女中御亭主を呼んでくんな、早く早く」ト無上にのほせ返るに、女、さう〜立つて行くと、この様子をきいて、宿の亭主ねまきのまゝ驅來りて、

亭主「今承りました、さて〜飛んだ事でごさります。」

彌「ヤレくく、飛んだ日にあつた。」

北「イヤはや、奇妙希代、希有けれど、ちんじ、ちうやう、言語道断なことであつた。ハ、ハ、」トそこら取りかたづけ、まだ夜あけにも間もあればと、又も枕をかたづけ、暫くまどろみける中に、北八をかしさ半分、

よねー娼妓

よねたちとねたる側には泥龜も、はづかしいやら指をくはへた。  
おなじく彌次郎も痛さをこらへて、

石龜のちだ

すつほんにくはへられたる苦しさに、こちや石龜のちだんだをふむ。

んだー俗諺  
に雁が飛べ  
ば石龜もち  
だんだと云  
ふ

もはや其夜も明行けば、寺の鐘も勤行の聲もろともに響きわたり、求食鳥の軒ちかく鳴渡るに、みなく、目さめておき出づれば、勝手より膳もいで、それぐくに支度する内、宿の女「お一人は、どこへ行きなさつた。」

北「ほんに十公はどうした。」

彌「大かた雪隠だらう。さきへやらかせ」ト構はず飲を食ひかゝる。十吉は早いつの間にかは裏道より逃げ行きたれば、いくら待つても来るはずはなし。彌次郎あたりを見まはし、不思議さうに、



うちがへー  
底無き袋、  
旅行用の金  
入れ也

がさー方言  
泥龜の事

に入れておきしうちがへの金を盗み、かねて拵へおきたると見えて、石ころを紙にくるくる包みたるをすりかへ、胴巻へいれて、又もとの如くふとんの下へ入れおく。一體此十吉は道中のごまのはひといふ者にて、こんな事をするが商賣なれば、いつの間にかは、彌次郎が金を持つてゐるを見てより、途中よりつけ來りてかくのごとし。この内、宿の女房あかりを持ち來り、見れば彌次郎が手に泥龜がくつついて、振つても叩いても一向に離れず。宿の女房あわてて、

女房「ばやチャ、こよへはどうして泥龜が來たやア」

北「ハ、ア晝間の泥龜が、苞苴の中から這出たのだな。コイツすつぽんと抜けさうなもんだ」

彌「エ、しやれ所ぢやアねへ。アレ血がでる、痛い〜」

竹「何だと思つたら、がさだアもし。ソリヤア指を水の中へ入れめさると、ぢつきに放してつん逃げ申すは」

女房「ホンニさうなさいまし」ト雨戸をあける。彌次郎かけ出で、手水鉢の中へ指をつけると、泥龜はなれ泳ぐ。

らんと考へるうち、かの泥龜は北八が夜着のなかへ這ひこむと、北八びつくり目をさまし、

北「誰だく」ト頭をあけると、泥龜うろたへて、北八が胸のあたりへ驅けあがる。北八きやつといつて引握み投りなけると、彌次郎が顔へばつたり。これもきやつといつて目を覺し、うろたへて引握み、指先を食ひつかれて、

彌次郎「アタ、ゝ、ゝ。」相方お竹も目を覺し、

竹「ヤレうつたまけた。あじやうしたへ。」

彌「火を點してくれろ。アイタ、ゝ、ゝ。」

竹「何としたへ」ト探りまはす手さきが泥龜へさはり、バアチャハアと後へ倒れる拍子に、襖がはづれて共にばつたり。むしやうに手を叩く。

北「眞暗でねつかから分らぬ。」

竹「おたつどん、おたつどん。最前から客衆が腕を叩かつしやる。早く灯ヲ持つて來なさろ。」

彌「早くく。アタ、ゝ、ゝ。」ト無上にうろたへ騒ぐ。此ひまに十吉、彌次郎が蒲團の下

あじやうし  
たらー如何  
したら

竹「わしやハアお月さまの年だよ。」

彌「ム、十三七ツで二十といふことか。大分おしやれだの。」

竹「ホ、、、、、私らア此中追分さアから来て、これのとこの客衆さア、あじやうした  
らよかんべいか。猶かお江戸の衆にやア氣がつまつてなりましない。おびのウ解きなさ  
ろ。そしてこの足さアわしが上へ乗つけなさろ。」

彌「オイ〜かうかく〜。」

竹「ヤレハア寢づらいこんだよ。そしてがいに後へさがりやることよ。もつと上へつ  
ん出なさろ。」

彌「オット承知々々」ト夜着をこつほり被り、しばらく無言。此うち北八が相方のお  
つめも來りていろ〜あれども、これもくだくしければ略す。はや其夜も更けゆくま  
まに、助郷馬のすどの音もたえはて、脊戸になく犬の遠吼、しよを追ふ鳴子の音まで吹  
きおくる夜あらしの身にしむばかり、行燈のあぶらも盡きて、いつのまにかは眞暗闇。  
この時かの苞苴になし置きたる泥龜、床の間におきたる儘、それなりに忘れたるが、や  
がて藁つとを食ひやぶり、そろ〜はひ出で、ごそつき歩くに、十吉目をさまし、何や

し〜猪也

し、だんまりにて聞いてゐる。こゝにもいろくあれ共、餘りにくだくしければ略す。

おそべりな

さい—お寐

なさい

女「もうおそべりなさいませ。」

十吉「ホンニわしは次の間へ寐やせう。」

彌「ナニサ、一所にこけへ。」

十「コレハ迷惑な。」

女「サアお前がたも着かへて來なさいまし」ト夜着蒲團をはこび、床をとる。みなく

蒲團の上へあがりゐると、二まい折の小屏風にて間をしきる。この内彌次郎があひかた

來りて、

竹「モウそべらしやりましたか。がいに寒い晩だアもし。」

彌「もつとこつちへ寄りなさい。なにも遠慮はねへから、ちつと話でもしなせへ。」

竹「私らがやうな者ア、お江戸の衆にやア、こつ恥しくて、なにも語るべい事アござ

んなへもし。」

彌「ナニ恥しいも氣が強え、お前もういくつだ。」

ひけらかす  
—見せびら  
かす

ばあちや—  
おやまアな  
どに同じ、  
驚歎の詞

おつめ「わしらアはあ、がい<sup>の</sup>に飲みましねへ。ヤレさてこの衆<sup>しゆ</sup>は、がいにおつぎやるこ  
とよ。」

女「お竹<sup>たけ</sup>さん、お前方<sup>まへち</sup>のとこぢやア、みんなこれよヲさしてゐるの」トおたけが頭<sup>つら</sup>に  
さしてゐる金<sup>かん</sup>ながしの五大力<sup>だりき</sup>のかんざしを抜<sup>ぬ</sup>いて見る。

たけ「コリヤハアお江戸<sup>えど</sup>でもはやるけでの、わしらがとこの金彌<sup>きんや</sup>さんが、野尻<sup>のじり</sup>の彦十<sup>ひこじ</sup>さ  
んに買<sup>か</sup>つてもらつたけで、がい<sup>の</sup>に自慢<sup>じまん</sup>らしく、内ぢ<sup>うち</sup>うの者<sup>もん</sup>にひけらかすから、わしもはア  
あの衆<sup>しゆ</sup>のさすものを、さよないでも口惜<sup>くちや</sup>しいから、だてひきづくで、がらよ廿四文<sup>じふし</sup>うつ  
ちやつたアもし。」

女「おつめさん、お前<sup>まへ</sup>の櫛<sup>くし</sup>を見せなさろ」ト取りにかよるを嫌<sup>いや</sup>がりて、

つめ「おらア嫌<sup>いや</sup>だよ、ハ、ハ、ハ、」ト顔<sup>かほ</sup>をそむけるを、むりに取<sup>と</sup>つてみれば、朱塗<sup>しゆぬり</sup>の櫛<sup>くし</sup>  
に、きんぶんにて、だきめうがの紋<sup>もん</sup>がついてゐる。

女「ばあちやア、コリヤ札<sup>ふだ</sup>の辻<sup>つじ</sup>の太郎左衛門<sup>たろうざゑもん</sup>さんの紋所<sup>もんじころ</sup>だアよ。」

つめ「知<sup>し</sup>つちつたかやア」トひつたくり、手<sup>て</sup>にて叩<sup>たた</sup>くまねをして、頭<sup>つら</sup>へさす。この二人<sup>ふたり</sup>  
まことに此<sup>この</sup>あひだ追分<sup>たひわけ</sup>から來<sup>き</sup>たと見<sup>み</sup>えて、是<sup>これ</sup>は皆<sup>みな</sup>あつちの言葉<sup>ことば</sup>なり。皆<sup>みな</sup>々<sup>なく</sup>をかしさを隠<sup>かく</sup>



がいにしよ  
びきなさん  
な―あまり  
引つばるな

飯盛おたけ「アレハア一人つて行きます。がいにしよびきなさんな。」

今一人の飯盛、おつめ「どうせハア出べい處さア出にやアならない。サアおたけさん、つ  
ん出なさろ」トやうく二人ながら出かけて来る。一人は紺の木綿にけんかたばみの紋  
の付きたるを着て、ふとりじまの帯をしめ、今一人はべにがら色の、赤き糸の入りたる  
縦縞のぬののこに、これも帯はふとりの藍びろうど、紅木綿のふんどしちらくくと出し  
け、黒きらをの長煙管を、手に持ちて、座敷へすわる。

北「サアく爰へ來なせへ。時に女中、膳は引いて酒にしやせう。」

女「ハイ今に出します」ト膳を引いてしまひ、銚子、さかづき、肴を持ちいで、

女「サア一つあがりませ。」

彌「ドレく」ト一口のんで下におくと、女心えてお竹にさす。

お竹「コリヤハアわしにかへ」ト飲むまねして北八へさす。北八のんでおつめへ差  
す。

おつめ「おたつどんハアおりよけへだもし。」

おりよけへ  
だもし―は  
ばかりさま

北「ひとつ飲みなせへ。」

女「この間、木曾街道の追分から来た女郎衆が二人ございます。おさみしかアお呼びなさいませ。」

彌「こいつはおもしろからう、器量は。」

女「がいにえいと云ふでもおざりません。マア十人前でおざいます。」

北「ハ、ハ、ハ、十人前の飯盛か。おもしろい、呼んでくんない。」

女「すんなら只今。」トいひすてて立つて行く。此内、十吉湯殿より上りて、

すんなら一方言、そんなら

十吉「お前がたア何か野暮からぬお話だね。」

彌「ぬしやアどうだ。」

咄し合—相談

十吉「イヤ私はアノウちの女に少し咄し合がありやす。」ト此内、やどの女きたりて、

女「これは御如才でございます。サアお買へなさいませ。モシ今のが参りました。コレお

まいちアことへ来なさる。ドレ迎に行かずに。」ト女は立つてゆく。すべてこのあたり

より、駿河、遠州掛川あたり迄は、行かうといふことを行かずといひ、食はうといふ事を

を食はずといふ也。やがてかの女、襦のかけに覗いて立つてゐるを引っぱり出る。

女「サア、来なさる来なさる。」

に云々―假  
名手本忠臣  
藏中の文  
句、前後の  
人名も皆同  
書より出づ

てんつる云  
々―猪の出  
に使ふ鳴物  
の音

亭主「ハアそれはお力おとし。お輕さまは。」

彌「するぶん達者でゐます。」

亭主「そして狸の角兵衛さまや、めつばふ彌八殿はたしかあなたの御近所であつた。」

彌「さやう〜。」

亭主「アノ又猪はどこにゐられます。」

彌「ハア猪はどこだか。」

亭主「てんつるてんつる、てんつるてんはどう致しました。」

みな〜「ハ、ハ、ハ。」

亭主「イヤまづ御膳を上げませう。」

彌「いま〜しい、結句あつちに遊ばれた。」ト此内、宿の女膳を持ち來り、ならべ置

きて、

女「サアおあがりなさいませ。コレちやアおたんどんよウ、そこの飯櫃ウ持つてきな

さう。」

北「時にこよにやア代物はなしかの。」

十吉「時にかの薬苞は。」

北「床の間に置きやした。後の寐酒にこしらへて貰ひやせう。」

此内、彌次郎湯よりあがると、次に十吉湯に入り立つ。宿の亭主問屋の下役を連れて、帳面とやたてを持ち出る。これは宿帳とて旅人の國所をしるす也。

亭主「御免くだされませ。ハアお一人はお風呂か。宿帳を附けます。あなた方お國は。」

北「ハイわしは泉州。」

亭主「泉州はどこでございます。」

北「泉州堺、名は天川屋義平といひやす。」

亭主「へいあなたは。」

彌「わしかへ、城州山崎村與市兵衛と申しやす。」

亭主「扱は與市兵衛様とはあなたか。承りおよんだあなたの聲さま勘平様は、どうなされました。」

彌「勘平は三十になるやならず死にやした。」

勘平は三十

けんびきー  
痔癖(けん  
べき)の訛、  
癩の一種に  
て之を揉み  
て治療する  
意より按摩  
の術の稱に  
もいふ

ヤレちやア  
一人を呼ぶ  
言葉、沼津  
方言

あんま「アイタ、い、い、。眼つぶれが、べらほうめ。あんまアけんびきイ引」

焼酎賣の聲「焼酎は要りませぬか。目のまはる焼酎を買はしやいませ」

北「えいかけんにごこへ泊らうか」

はたごやの女「サアお入りなさいませ。おさんどんお泊りだよ」

やどやの亭主「コレハお早うございます。お連様はおいくたり」

彌「影法師共に六人」

ていしゆ「ヘイそれは。ヤレちやア三太郎はるぬか、お湯をとつて来い。おちやは煮えてあるか。ソレまづお風呂をひとつあけろ。お飯もわいた。すぐにお入りなさいませ」

此内、三人とも足を洗ひしまひ、すぐに奥へとほる。  
宿の女「お湯にお召しなさいませ」

彌「ドレお先へ参らう」ト裸になりて驅けいだし。  
女「モシそこは雪隠でございます。こつちらへ」

彌「ホイこれは」ト湯殿へゆく。



何だ。

彌「よからう。ナント小僧、その泥龜を賣らねへか。」

子供「こんたしゆ、要るならうちくれべい。そんたい錢ヲくれさるか。」

北「やらうとも、ソリヤ大きな錢をやるは」ト四文せん廿四文ばかり抜いてやり、やがてあたりの薬をひろひ、かのすつほんを薬づとに入れて引つさけ、

北「奇妙々々。」

十吉「こいつは面白い。時に日が入らしつた。ちと急ぎやせう」ト足早に三人たどる。

既に其日も暮に近づき、入相の鐘幽にひどき、鳥もねぐらに歸りがけの駄賃馬追立てて、

泊を急ぐ馬士唄のなまけたるは、ほてつばらの淋しくなつたる故にやあらん。此時、漸

く三島の宿へつくと、兩側より呼びたつたる女のこゑぐ、三島より沼津へ一里半

女「お泊りなさいませ、お泊りなさいませ。」

彌「エ、引ばるな。こよを放したら泊るべい。」

女「すんならサアお泊り。」

彌「あかすかベイ引」ト逃けるはずみに、按摩に行きあたる。

くれさるか  
一方言、く  
れなさるか

ほてつばら  
馬子が馬  
を叱る時に  
云ふ言葉、  
こゝにては  
空腹なると  
かけたたり



沽券―地所の所有權を證する手形

裏行が四十間、角屋敷の土藏づくりで大層なものよ。

十吉「ハア、その裏でござりますか。」

彌「とんだ事をいふ。裏店はなしさ。わつちらが所一軒ですまつてるやす。」

十吉「ハアそんなら、惣地代で沽券はいくら。」

彌「沽券は千八百兩。」

十吉「おめへ直でござりやすか。口錢は何朱でも、二ツ割に致しやせう。」

彌「おめへ何をいふ。」

十吉「わたしは又、地面の賣買のお咄かと存じました。」

彌「ナニそんなこつちやアねへ。わつちらアちよつと出るにさへ、供の五人や十人はつ

れて歩きやすが、それぢやア氣がつまつておもしろくねへから、此男ひとりつれて、不

自由して歩くも物ずきだね。」

十吉「なる程さ様でござりませう。イヤ又あなたのお母親様なぞは、私よく存じて居り

ますが、いつぞや淺草の門跡さまの前で、お目にかよりました時、なにか包をさけて、

杖にすがつてござる容子、大きにお年がよりました。」

つかる。べらほうめ、やらうの猪ぢやアあんめへし、そんなもんが着られるもんかといつたら、すんならこりよヲ着ろとつて、能い箆を一枚うつくれたと思へ。そのみしろを昨日の晩けに、畑で湯につつ入るとつて、ひん脱いで置いたら、聞きやれ、大事の着物を、がらう馬に食はれてしまつたア。いまくしい。」

彌次郎、北八、この手合の話をきいてるて、大きに興にいら、やがてこよを立出でゆくと、長坂大しぐれといへるあたりより、旅人一人紺の合羽を着て、風呂敷包、柳行李を肩にひつかけたるが、あとになり先になり、

大しぐれ  
大時雨坂

旅人十吉「あなた方はどこでござります。」

彌「わつちら江戸さ。」

十吉「私も江戸でござります。あなた江戸はどの邊でござります。」

彌「神田さ。」

十吉「神田には私もをりましたが、どうかあなた方は見申したやうだ。神田はどこでござります。」

彌「神田の八丁堀で、わつちらが内はとちめんや彌次郎兵衛といつて、間口が廿五間に

くたり諸白  
―諸白は酒  
の極上なる  
もの、奈良、  
池田、伊丹  
等に産する  
を以て下り  
といへる也

おしやらく  
―身なりを  
飾る事、お  
しやれ

おあがりやアし。お休みなさいやアし。お休みなさいやアし。  
彌「北八ちつと休んで行かう」ト茶屋へ入る。此内の庭につき立てたる竈の前に、雲介  
ども蒲團をからだに巻きたるもあり、澁紙を着たるもあり、或はねござ、あか合羽など  
を着て、寄りこぞり火にあたりるるト、表の方より竹の煙管をくはへて、一人の雲介す  
つと入る。

雲助「おへねへひやうたくれどもだ。あか熊やどぶ八めが、峠まで長持でやつたアな。」  
一人の雲介「えいは、其代あび手が四十に五十はふんだくるべい。」

この長持といふは六百の事、あびてといふは酒手の事也。

今一人「コレそりアえいが、コノ野郎がおしやらくを見ろへ。しつかり紋付を着やアが  
つた。」

酒ごもを着てゐる雲助「昨日小田原の甲州屋で、やらやつと一まい貰つて着たが、あんな  
り裾が長くて、お醫者殿のやうだとけつかる。」

丸裸の雲介「野郎めらア工面がえいから、好きなものを着やアがる。おらア此中内から  
丸裸でゐりやア、がら吉婆かぬかすにやア、古傘をやらうから、引つpegして着るとけ



あたじけれ  
へから一斉  
齧だから

北「ヤア、こりやア手拭ぢやねへ。越中禪であつた。」

彌「手前、昨夜ふろへ入るとき、襦袢を袂へ入れて、それなりに忘れたはをかしい。大方けさ手水をつかつて、顔もそれで拭いたらう。汚ねへ男だ。」

北「さうよ。道理こそ悪臭い手拭だと思つた。」

彌「ナニ全體手前があたじけねへから、こんな恥をかくは。」

北「なぜ。」

彌「木綿をしめるから手拭と取違へるは。コレおらア見やれ、いつでも絹の禪だ。」

北「それだとして、やね屋が長局のふきかへに行きやアしめへし、絹をぬることもねへす。エ、まよよ、旅の恥はかきすてだ。斯うもあらうか。」

手拭と思つてかぶるふんどしは、さてこそ恥をさらしなりけり。

それよりかぶと石をよめる、彌次郎兵衛、

たがこゝに脱ぎすておきしかぶと石、かゝる難所に降参やして、

斯くて山中といへる立場にいたる。爰は兩側に茶屋軒をならべて、

女「おやすみなさいまアし。くだり諸白もおざりやアす。餅ヲあがりやアし。一膳飯ヲ

はつつけー  
はつつけ野  
郎とも云  
ふ、罵辭、は  
りつけの詛

馬方「ヒヤア、出羽宿の先生どうだ。」

向より来る馬方「べらほうめ。おれが先生なりア、うぬははつつけだア。」

馬「ヒインく」又向より来るは、お大名のお國からお江戸入の女中たち、駕をつらせ  
て四五人づれ、騒ぎつれて来るを見て、彌次郎兵衛、

彌「オヤく、えらいく。」

北「ほんに是は皆生きた女だ。奇妙々々。ナント彌次さん。つかねへこつたが白い手拭  
をかぶると、顔の色が白くなつて、とんだ意氣な男に見えるといふ事だが、ほんとうの  
ことかの。」

彌「ソリヤア違なしさ。」

北「よしく」ト袂からさらしの手拭を出して、ぐつと頬かぶりにすると、通りすがひ  
の女中たち、北八が顔を覗いて見て、みなく笑ひ通りすぎる。

北「何とどうだ。今の女どもが、おいらが顔を見て、嬉しさうに笑つて行つたは。どう  
でも色男は違つたもんだ。」

彌「笑つた筈だ。手前の手拭を見や。木綿さなだの紐が下つてゐるから。」

ばい汲んで出す。

北「こいつは黒いく。」

彌「黒いやうで甘いは、遠州濱松ぢやアないか。」

黒いやうで  
甘い—廣い  
様で狭いの

語呂か

北「わりいく。コウお前なぜ飲まねへ。」

彌「おいらア嫌だ。その茶碗を見や。施主の氣がきかねへよ。朝顔なりにでもすれば

いよに。」

北「さうさ、是ぢやア強飯の香のものも、奈良漬ぢやあるめへの。」

おやち「香の物はござらねへが、むめほしよヲ進ぜますべい」ト皿にある梅干をいだ

す。

北「オイくいくらだへ。サアおせわ」ト錢を拂ひ出て行く。向より來る小荷駄馬、引

きも切らず。鈴の音しやんくく。

馬子の唄「富士の頭がつんもえる。なじよに煙がつんもえる。三島女郎衆にがらようちこ

み、こがれおしやつたらつんもえたア。しよんがへ。ドウく。」

がらようち  
こみ—すつ  
かりはまり  
込んで

こちらから行く馬かた、互に行きちがひて、

# 膝栗毛二編 卷之上

海道記一貞  
應二年京都  
より東海道  
を経て鎌倉  
に到れる紀  
行也、著者  
は長明とも  
云ひ光行と  
も云ふ、其  
宇度濱の條  
に、松に雅  
琴有て浪に  
つゞみ有り  
天人の樂今  
聞くに似た  
り

箱根より三島へ三里廿八丁

長明が東海道記に曰、松に雅琴の調あり、浪に鼓の音あり

と。息杖の竹笛をふけば、助郷の馬太鼓をうつ。膝栗毛二編の序びらき、ヒヤリく、

てれつくてれつく、すつてんてん。

狂言詞「かやうに候ふものは、お江戸の神田の八丁堀邊に住居せし、彌次郎兵衛、北八

と申すなまけものにて候。扱もわれく、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕さまへは月參の

大願を起し、ぶらりしやらりと出かけ、ねつから急がす候ふほどに、えいやつと箱根の

驛につきて候。

謡「玉くしけ箱根の山の九折々々、けにや久かたの醴賣や、さんしよ魚の、名所おほき

山路かな。」

醴賣のおやぢ「名物あがらしやいませ。醴飲ましやいませ。」

北「彌次さん、ちよつと休みやせう。オイ一盃くんな」ト床几に腰をかける。おやぢ一

して、これが爲に一雙の膝栗毛を養ふ。一疋の口の輕尻は綱に一冊子を負うて箱根にとどまり、伯樂顧みて本屋仲間の初市に價を倍す。今本馬卅六貫目中腹に撃ぐる才力を出して、一鞭たどちに京城にいたる。かばかり迅速のうちに驛路の情態を記して、全篇の功を成す。此膝栗毛、一日千里といふべし。

享和癸亥春

芍藥亭主人菅原長根題



序

予嘗て旅の賦を作る。其略に云、土橋を渡りて又土橋を見る。恰も深川にて友を訪ぬるが如く、並木を出でて亦並木に入る。殆淺草にて狐に魅るよが如し。卷藁に鮫立なせる焼肴には、今井四郎が討死をおもひ、強飯に群鳥なせる蒼蠅には、伊勢平氏の敗軍を歎く。木賃宿の居風呂は、鳧の脚短しといへども膝を越ゆる事なく、大井川の歩行渉は、鶴の脛長しといへども、胸をひやす事頻也。雲助は、裸蟲の長として、赤裸の境界に終り、出女は萬物の靈として、萬客の弄物に老い、見るもの都て意馬の頭を低れ、聞く事皆心猿の腸を斷てり。ざるをうきものの發語ともしらず、天地の逆旅に居て獨たのしく、日月の過客にしたがひて、そぞろうかれありくものは十篇舎の主に

膝栗毛

九〇

にしめたや  
うな―汚き  
形容、菜と  
煮染とを掛  
けたる也

お茶漬ちやづけのさいのかはらの辻堂つじだうに、にしめたやうな服装なりの坊ぼんさま。

それより、御關所おんせきしよを打過うちすぎて、

はる風かぜの手形てがたをあけて君きみが代よの、戸とざさぬ關せきをこゆるめでたさ。

斯かく祝しめくして、峠たうげの宿しゆくに悦よろこびの酒さけくみかはしぬ。

娘「ようお出でなさいやんした。」

北「ハ、ハ、ハ、ハ、三百のものを四百に買ふとは、新しいく。」

彌「それでも惜しくねへ。アノ娘は餘程おれに氣があつたと見える。」

北「おきやアがれ。ハ、ハ、ハ、ハ、」

彌「それでも初手からおれが顔ばかり見てゐるは。」

北「見てゐた筈だ。アノ娘の目を見たか、やぶにらめだ。ハ、ハ、ハ、ハ、」

こゝろにいがぐり頭の子供四五人ゐて、

子供「權現さまへ御代參、壹文やつて下されチャ。」

北「ナニ御代參とはなんだ。」

子供「此方しゆの代りに參るは。」

北「ナニおいらが代りに。いづれを見ても山家そだち、身がはりにする面があるもの

か。ろくな首は一つもない。イヤ時にアノ鉦はなんだ。」

彌「賽の河原へ來たぞく。」

辻堂はさすがに賽のかはら屋根、されども鬼はみえぬごくらく。

いづれを見ても山家そだち菅原傳授寺小屋の文句

ば「ハイ〜これでおんざりします。」

彌「エ、それでもねへ。コウ姉さん、お前の手に持つてゐるは何だ。」

娘「ハイ〜お煙草入でおざりやんす。」

彌「コレ〜、この事さ。時にいくらだ。」

娘「ハイ三百でおざりやんす。」

彌「百ばかりにしなせへ。」

娘「お前さんもあんまりな、あなたがたのお蔭でかやうに致してをりますものを、懸値はもうしやんせぬ。」ト彌次郎をじろりと見る。忽のろくなりて、

彌「そんなら貳百よ。」

娘「もうちつとお召しなまつて下さいませ。オホ、、、、」トねつから可笑しくもな  
いことを笑つて、彌次郎が顔をまたじろりと見る。

彌「そんなら三百々々。」

娘「もうそつとでござりやす。オホ、、、、」

彌「めんどうな四百々々。」ト一本はふり出して買ひ取り、「北八サア行かう。」

一本―錢差  
一本也







彌「ドレ、ふところを暖めておいてやらう。」

北「いめへましい。今夜のやうにうまらねへ事はねへ。火傷をして貳朱金はふんだくられる、そのうへアノ美しいやつをそばで抱いて寝られて、ほんに踏んだり蹴たりな目にあふは。」

彌「へ、、、。堪忍さつし。こんやアちつとうけにくからう。畜類め、こたへられぬ。ハ、、、。コレ北八もう手前ねるか。もつと起きて居ねへ」

北八は委細かまはず、ゴウくくく。

彌「もう來さうなもんだ」トひとり待ちくらしして、待てども待てども、音もなし。なまなかさまぎに中前金をやつて、棒にふるかと氣が氣ではなく、こらへ兼ねてむしやうに手を叩き立てると、宿屋のかみさま出てきて、

女房「お呼びなさいましたか。」

彌「イヤお前ではわかるめへ。さつきこよの女中にちつと頼んでおいた事があるから、何卒ちよつとよこしてくんねへ。」

女房「ハイあなたの方の方へ出ました女は、雇人でございますから、もう宿へ歸りまし

うけにくからう—承知し憎くからう

おへねへ—  
仕方の無い

めんよう—  
不思議に

ト手水てうづにたつて行く。此内このうちをんな女をんなきたり床こをとる。

北「コレあねさん、お前めへおらが連つれの男をとこに何か約束やそくをしたぢやアねへか」

女「イ、エ、オホ、ハ、ハ、」

北「イヤ笑事わらひごとぢやアねへ。コリヤア内證ないしやうの事ことだが、あの男をとこはおへねへ瘡かさかきだから、うつらぬやうにしなければ。おめへがしよつては氣きの毒どくだから言いつて聞きかすが、かならず沙さ汰たなしだよ」

ひそくもので眞實まことらしくいへば、女肝をんなかきをつぶせし様子やうす。北八きたづにのり、

北「そして足あしは年中ねんぢう雁瘡がんがさで、何なんのことはねへ、乞食坊主こじきぼうずの管笠すしがさを見みるやうに、所々ここらに油紙あぶらがみのふたがしてある。それに又またアノ男をとこの胡臭わきがのくささ、その癖くせひつこい男をとこで、かじり付ついたら放はなしやアしねへ。めんようアノ瘡かさつかきといふものは、口中こうちうの惡臭わるいいもので、おいらも竝ならんで飯めしを食くふさへ嫌いやでならねへが、仕方しかたがねへ。思おもひ出だしても蟲酸むしずかはしる。べつく」ト此内このうちはや彌次郎手水やじらうてうづより出でて來くるやうす。

女「もうお休やすみなさいませ」トさうく立たつてゆく。彌次郎座敷やじらうざしきへ入はいり、すぐまに夜着よぎをかぶりて、

出で、そこそこに食つて仕舞ひ、しやれも無駄も一かう云はず、たゞ茫然とだまりんなり。

彌「コレ、手前何もふさぐこたアねへ。大きな徳をしたは。」

北「なにが徳だ。」

彌「かまを抜いて貳朱では安い、葎町へ行つてみや。そんなこつちやアねへ。」

北「エ、ぶしやれなんな、人の心も知らずに。」

彌「イヤそれでも手前がそんなにしてゐると、おらア氣のどくな事がある。」

北「なにが。」

彌「さつきの女が後に忍んで来る筈にふづくつて置いたから、側で手前が氣を悪くし

て、なほの事ふさぐだらうと、それがどうも氣の毒だ。」

北「オヤほんにか。いつの間に約束した。」

彌「そんなことに如才のあるのちやアねへ。さつき手前が湯へ入つてゐるとき、けん

なまで先へおつとめを渡しておいたから、もう手つけの口印までやらかしておいた。何と

きつもんか。へ、へ、へ。さういつても色男はうるせへの、ハ、ハ、ハ、もう寐やうか。」

ふづくつて  
「手筈をき  
めての意、  
物事をとら  
のふること  
おつとめ—  
勘定



宿の亭主この音に驚き、裏口より湯殿へまはり、肝をつぶし、

亭主「どうなさいました。」

北「イヤモウ命にべつ別條はねへが、釜の底がぬけて、アイタ、ゝ、ゝ。」

亭主「コレは又どうして底がぬけました。」

北「ツヒ下駄でぐわたくくやつたからさ」トいふに、亭主は不思議さうに、北八が足を見れば、下駄をはいてる故、

亭主「イヤア、お前は途方もないお人だ。水風呂へ入るに、下駄をはいて入るといふ事があるものでございますか。埒もないこんだ。」

北「イヤ私も初手は、はだしで入つて見たが、餘りあついからさ。」

亭主「イヤはや、苦々しいこんだ」ト大きに腹をたてる。北八も氣の毒さ、こそくくと體をふいて、いろく言譯する。彌次郎きのどくに思ひければ、中へはいり、釜のなほ

し賃、南鐐一片遣はし、やうくと詫言して、

水風呂の釜をぬきたる科ゆゑに、やどやの亭主尻をよこした。

北「いめへましい」ト思ひがけなく貳朱ひとつ棒にふつて大きにふさぎる。此内膳も

南鐐一片  
二朱銀の一  
名

よめたー分  
つた

北「ばかアいよなせへ。辛抱しんぱうしてゐるうちにやア、足あしが眞黒まぐろに焦こけてしまはア。」

彌「エ、埒らちのあかねへ男おとこだ」ト心こころの内うちはをかしさ堪こたへられず、座敷ざしきへかへる。北八きたいろいろと考かんがへ、そこらを見廻みまわし、彌次郎やじろうが隠かくしておいたる下駄ひたをみつめて、ハ、アよめたと心こころにうなづき、すぐにその下駄ひたをはいて水風呂すみ風呂のうちへ入り、

北「彌次さん彌次さん。」

彌「なんだ又呼またよぶか。」

北「なるほどお前のいふとほり、入りしめて見るとあつくはねへ。ア、いよ心こころもちだ、あはれなるかな石童丸いしどうまるは、ツンレレ〜。」

此内このうち、彌次郎やじろうあたりを見れば、隠かくしておいたる下駄ひたがなき故ゆゑ、さてはこいつ見つけたなと、をかしく思おもつてゐる内うち、北八きたはさすがに尻しりがあつく、立つたり坐すわつたりいろ〜して、あまり下駄ひたにてぐわた〜と踏ふみちらし、遂つひに釜かまの底そこをふみぬき、べつたりと尻しりもちをつきければ、湯ゆは皆みなながれてシウ〜〜〜。

北「ヤアイたすけぶね、たすけぶね。」

彌「どうした、どうした、ハ、ハ、ハ。」

彌「サア這入らねへか。」

北「オットしめた」トさうく裸になり、一目散に水風呂へ片足つつこみ、

北「アツ、、、。彌次さん彌次さん、大變だ。ちよつと來てくんない。」

彌「さうぐいしい、何だ。」

北「コレお前、この風呂へはどうして入つた。」

彌「馬鹿め、水風呂へ入るに別に入りやうがあるものか。先そとで金玉をよく洗つて

そして足から先へどんぶりこ、すつこつこ。」

北「エ、しやれなんな。釜がぢきにあつて、これが入られるものか。」

彌「入られりやアこそ手前の見たとほり、今までおれが入つてゐた。」

北「お前どうして入つた。」

彌「ハテしつこい男だ。水風呂へ入るのに、どうして入つたとは何のことだ。」

北「ハテめんような。」

彌「むづかしいこたアねへ。初の内、ちつとあついのを辛抱すると、後にはよくなる。」

しやれなん  
な洒落な  
さるな

めんよう—  
不思議

呂一底一面に釜となり居りて、上に浮き居る板にのりて浴する風呂

風呂なり。彌次郎この風呂の勝手を知らねば、底の浮いてゐるを蓋と一よろえ、何心なく取つてのけ、すつと片足をふんごんだところが、釜がぢきにあるゆゑ、大きに足をやけどして、肝をつぶし、

彌「アツ、アツ、こいつは飛んだ水風呂だ」いろいろ考へ、これはどうして入るのだと聞くもばかばかしく、外で洗ひながら、そこらを見れば、雪隠のそばに下駄があるゆゑ、こいつおもくろいと、かの下駄をはきて湯の中へ入り、洗つてゐると、北八待ちかねて湯殿をのぞき見れば、いうくくと淨瑠璃、

彌「お半なみだの露塵ほども」

北「エ、あきれらア。だうりで長湯だと思つた。いよかけんに上らねへか」

彌「コレちよつと己が手をいぢつて見てくれろ」

北「なぜに」

彌「もう湯だつたか知らん」

北「いよきせんな」ト座敷へ入る。此内彌次郎湯から上り、かの下駄をかたかけへ隠し、そしらぬ貌にて、

いよきせん  
いよきせん  
機嫌

うんづらするあぶせりゆ

それよとんうちおけをおさ

まうののぬちうまき

ふいふいぬうあたる風呂

ありこれゆへは湯をこすふん

ぎまふよるびんういのま

ふらううううううううう

みるはちろきりそんくけううあ

ふらうううううううううう  
むね<sup>むね</sup>板<sup>い</sup>久<sup>く</sup>又<sup>また</sup>ううあ

あふのううううううううう





へちら風さ  
あひび  
ちよひ  
かきつらま  
そのへ  
りちやのび  
やれをやまの



て落馬するも鼻をうつを防ぐべし

腹がきた山  
—空腹の事  
腹が北山時  
雨の略

五右衛門風

て来いといふもんだ。」

北「エ、お前も詞とがめをするもんだ。夫ぢやア日の短い時にやア、煙草をのますに居にやアならねへ。」

彌「ときに腹がきた山だ。今飯をたくやうすだ。埒のあかねへ。」

北「コレ彌次さん、おいらよりやア、おめへ文盲なもんだ。」

彌「なぜ。」

北「飯をたいたら粥になつてしまふはな、米を焚くといへばいゝに。」

彌「ばかアぬかせ。ハ、ハ、ハ、」ト此内、女、煙草盆を持つて来る。

北「モシあねさん、湯がわいたら這入りやせう。」

彌「ソリヤ人のことをいふうぬが、何にも知らねへな。湯が沸いたらあつくて入られる

ものか。それも水が湯にわいたらへいりやせうとぬかしをれ。」此内、又宿の女、

女「モシお湯がわきました。お召しなさいませ。」

彌「オイ水がわいたか。ドレ入りやせう」トすぐに手拭をさけ、ふるばへ行きて見る

に、この旅籠屋の亭主、上方者と見えて、水風呂桶は上方にはやる五右衛門風呂といふ

亭「サアお泊りだよ。おさんくお湯を取つてあける。」

宿の女房「お早うございます」ト茶を二つ汲んで持つて来る。此内、下女たらひに湯を入れて持つて来ると、彌次郎女の顔を横目にちらと見て、小聲に北を呼びかけ、

彌「見さつし、まんざらでもねへの。」

北「あいつ今宵ぶつてしめやう。」

彌「太へごとをぬかせ。おれがぬるは。」

北「ソレお前、わらぢも解かずに足を洗ふか。」

彌「オヤ、ほんにかへ、い。」

北「エ、臺なしに湯を真黒にした」ト小言をいひながら足をあらひ、すぐに座敷へ通

ると、女、柳行李三度笠を持ちきたり、床の間に置く。

北「コレく女中、煙草盆に火を入れて来てくんない。」

彌「オヤ、手前も飛んだことをいふもんだ。」

北「なぜく。」

三度笠―三度飛脚のかぶりし笠、當時は旅人の常用となれり、其つくり深くし

北「煙草盆へ火を入れたら焦けてしまはア。煙草盆の中にある火入のうちへ、火を入れ

外郎—小田原の名物透頂香と云ふ藥也、八つ棟造の店を構ふ、餅にも外郎と云ふものあれば誤りたる也、三絃のトウチン香の其音は千里に聞ゆ虎屋外郎

彌「ハ、、、ツヒ口がすべつた。ハ、、、」トだんぐ打連れて、ほどなく小田原の宿へ入ると、兩側のとめ女（小田原より箱根へ四里八丁）

女「お泊りなさいませ、お泊りなさいませ」ト呼び二つる聲かしましく、彌次郎兵衛しばらく考へて、

梅漬の名物とてや留女、口をすくして旅人をよぶ。

此宿の名物、外郎店近くなりて、

北「オヤここの内は、屋根に大分凸凹のある内だ。」

彌「これが名物のうるらうだ。」

北「ひとつ買つて見やう。味へかの。」

彌「味へだんか、願が落ちらア。」

北「オヤ餅かと思つたら藥店だな。」

彌「ハ、、、かうもあらうか。」

うるらうを餅かとうまくだまされて、こは藥ちやと苦い顔する。

やがて宿屋へ着きければ、亭主さきへ驅け出して入りながら、

彌「女をんなはいくたりある。」

宿「三人にんござります。」

彌「きりやうは。」

宿「するぶん美うつくしござります。」

彌「きさま御亭主ごていしゅか。」

宿「左様さやうでござります。」

彌「内儀かみさま様はありやすか。」

宿「ござります。」

彌「宗旨しゅうしは何だの。」

宿「浄土宗じやうどしゆ。」

彌「寺てらは近所きんじよか。」

宿「イエ遠方えんぱうでござります。」

彌「葬さうらい禮らいは何時なんじきだ。」

北「コウ彌次やじさん、お前めへも飛とんだことをいふもんだ。」



川越―旅人  
を背負ひ川  
を渡すを業  
とする者

ようたり―  
四人に酔う  
たりをかけ  
たり

北「解いてはかけ、解いてはかけ。」

二人「ハ、ハ、ハ、」打笑ひつゝ歩むともなし、いつの間にか會我の中むら、小八幡八まん  
の宮を打過ぎ、酒匂川に差しかよりければ、

われくはふたり川越ふたりにて、酒匂の川にびてようたり。

此川を越え行けば、小田原の宿引、早くも道に待受けて、

やど引「あなた方はお泊りでござりまするか。」

彌「きさま小田原か。おいらア小清水か白子屋に泊るつもりだ。」

宿引「今晚は兩家ともお泊りがござりますから、どうぞ私方へお泊りくださりませ。」

彌「きさまの所は綺麗か。」

宿「左様でござります。此間建直しました新宅でござります。」

彌「ざしきは幾間ある。」

宿「ハイ十疊と八疊と、みせが六疊でござります。」

彌「水風呂はいくつある。」

宿「お上と下と二ツツ四ツでござります。」

北「ハ、ハ、そんな謎があるものか」

彌「べらほうめ、ありやアこそ懸けるは。解いて見ろへ」

北「どうしてそれが知れるものだ」

彌「知れざアいつて聞かせやう。これを色男が自分の帯をとつて、女にも帯を取らせると解く」

北「豪氣にむつかしい。その心は」

彌「ハテ解いた上で又解かせるから。なんと奇妙か。サアく酒を買へ、酒を買へ」

ちつくり  
一寸

北「まちなよ。意趣返しをやらかさう。己がのもちつくり長い。マアかいつまんだ所がかうだ。おいら二人が國所とかけて、是を豕が二疋犬ころが十疋と解く。その心はふた

二ながらきやんとをもの。これを又色男がじぶんの帯をとつて、女にも帯を取らせると解く。又其心は、解いた上で又解かせるから。サア是ナアニ」

彌「ハ、ハ、ハ途方もねへ長い謎だぞ」

北「どうだ彌次さん、知れめへがの。これを衣桁の禰と解きやす」

彌「その心はどうだ」

北「なぜ。」

彌「どうくゝだから。」

北「ハ、ハ、ハ。そんならおいら二人が國所ナアニ。」

彌「神田の八丁ほり、家主與次郎兵衛店と解くか。」

北「エ、おぶしやれんな。是を豕が二疋、犬子が十疋と解く。」

彌「その心は。」

北「ぶた二ながらきやん十もの。」

彌「おきやアがれ。コレ今度はむづかしいやつを云はう。そのかはり手めへ解かねへと

酒を買はせるが、いよか。」

北「解いたらおめへ買ふか。」

彌「しれた事よ。」

北「こいつアおもしろい。」

彌「ちつと長いぜ。マアかうだ。おいら二人が國所とかけて、是を豕が二ひき犬ころが

十疋と解く。その心はぶた二ながらきやんとをもの、サアこれなアに。」

おぶしやれ  
んな—下  
手に洒落る  
な  
ぶた二なが  
らきやん十  
もの—二人  
ながら關東  
者の語呂

山子の詩に  
十郎慷慨愛  
於兔、血氣  
武人犀甲  
軀、妾婦當  
時誓星舌、  
韻成此石似  
望夫、虎は  
大磯の遊  
女、曾我十  
郎と契る  
藪にも剛の  
者一俚諺、  
庸醫にも功  
者ありとの  
意、一説に  
藪にも香の  
物

彌次郎兵衛とりあへず、

去ながら石になるとは無分別、ひとつ蓮のうへにやのられぬ。

斯く打興じて大磯の町を打過ぎ大磯より小田原へ四里八丁 嶋立澤にいたり、文覺上人

が刀作と聞えし西行の像に向ひて、

われくも天窓を破りて歌よまん、刀づくりなる御影拜みて。

春の日の長欠伸に、願の掛金もはづるよばかり目をすりながら、

北「ア、退屈した。ナント彌次さん、道々謎を懸けやう。おめへ解くか」

彌「よからう、懸けやれ」

北「外は白壁、中はとんく、ナアニ」

彌「べらほうめ、そんな古いことより己が懸けやうか。コレ手めへと己とつれだつて行

くとかけて、サア何と解く」

北「ソリヤア知れたこと、伊勢へ参ると解く」

彌「馬鹿め、これを馬二ひきと解く」

問屋―宿驛  
にて人馬繼  
立の世話な  
どする家

彌「コウ、貴様たちやア藤澤か。アノ宿も大分綺麗になつたの。問屋の太郎左衛門どの  
は達者かの。」

さきぼう「よく旦那は知つてござる。随分達者でゐられます。」

彌「孫七ぎのは未だ勤めてゐるかの。」

さき「アイサア、旦那は何でも明いもんだ。」

あと「べらほうめ、知つてゐるやしやる筈だ。駕の内道中記を見てゐさつしやるは。ハ

ゝゝゝ」ト此内、早くも馬入の渡につく。北八こよは何といふ川と人にとひしに、た

だ渡場とばかり答へけるを、彌次郎聞きて、平塚より大磯へ二十七丁

川の名を問へばわたしとばかりにて、入が馬入の人のあいさつ。

沙利禮文の  
入我我入を  
馬入に掛け  
たる洒落、  
衆生即佛と  
いふ意

此川は、甲斐の猿橋より流れおつるよし。やがて向に渡り、たどり行く程に、此に白旗村  
といへるは、そのむかし義経の首こよに飛びきたりたるを祝ひこめて、白旗の宮といへ

る、今にありと聞いて、彌次郎兵衛、

首ばかりとんだ話の残りけり、ほんの事はしらはたのみや。

それより大磯にいたり、虎が石を見て北八よむ。

虎が石―羅



かこ「百五十にまけますべし」

彌「まけるか。ドレ〜此草鞋をそこへつけて下せへ」

かこ「おめへ乗るのかへ。百五十で昇ぐといはしやつたぢやアないか。そんだんで、片棒わしがかついで百五十とるのだ」

彌「ハ、ハ、ハ、こいつはいよ。エイは、そんなら二百か」

棒組一駕昇  
がその相手  
を呼びてい  
ふ

かこ「安いが行きますべし、ナア棒組。サアめしませ」トかこの値ができて、彌次郎兵衛ことより駕に乗つて出かける。

先ぼう「棒組や、旦那はかたいぜ」

あとぼう「しつかり構へていさしやるもんだんで」ト此内、茶屋の亭主駕かきの名を呼びながら、

てい主「オ、イ〜。梅澤の佐渡屋へちよつくり左様いつてくんさい。此中の新酒はあ

んまり水の交ぜやうが少い。今度から酒をちつと交せてよこして下さいといつて下さい

ヨ。ソレ何かおちたア」

かこ「アイ〜」トかつぎ出す。





彌「コレ手前てめこけたやつがよからう。」

北「ドレく」ト口もとへ當てがひ、「ア、ツ、ツ、。婆さんアツ、ツ、。とんだ目めにあはせた。コレ團子だんごに火がくつついて、ア、ひりくくする。」

彌「ハ、ハ、ハ、手前てめ暖かなのがよからうと思つて、火のついてたのを遣やつたは。」

北「エ、いめへましい。ベツく。」

彌「サア行かう、婆さんおせわ」ト茶代ちやだいを置き、こよを出で藤澤ふぢさはの宿へ入ると、兩側りやうがはの茶屋ちやや、口くちをそろへて、

茶屋女「お休やすみなさいやアし。酔よはない酒さけもござりやアす。ぱりくくする強飯こほめしをあがりややし。」

馬かた「だんな生きた馬うまはどうだ。安やすくやりませう。馬うまは達者たつしやだ。はねる事ことは受合うけあひだ。かこかき「かごよしかの。だんな戻り駕かごだ。安やすく行きませう。」

北「駕かごはいくらだ。」

かこ「三百五十。」

彌「たかいく。百五十なら己たれがかついで行いかア。」

ん

大福町、常座町云々

大福帳、常座帳より思

ひつける假

の名

埒もないく  
だらない

北「あれは、大福町に所帯を持つてゐらア。」

彌「大福町といふはどこだ。」

北「大福町は、おいらが通をまつすぐに當座町へ出て、判取町から店賃町を通つて、地

代屋敷の算術橋を渡ると、そこが大福町だ。」

親仁「そんな事よりやア、江の島へ行く道を教へてくんさい。」

彌「ほんにさうだつて。其地藏様から大福町を真直に行くとの。」

親仁「江の島へ行くにもそんな町がござるか。」

彌「イヤ、こりやア江戸の町だつて。」

親仁「エ、この衆は、おえどの事は聞き申さない。埒もない衆だ。ドレ先へ行つて聞き  
ますべし」トぶつくと小言をいひながら行きすぎる。

北「ハ、ハ、ハ、」ト此内、主の婆だんごを四五くし、盆にのせて持つて出る。

彌「こいつは黒い團子だ」トいひながら一串取りあげて見れば、消炭の火が團子にくつ  
ついてゐる故、わざと火のついてゐるを隠して、北八の方へさし出して、



北「道理で氣がきいてゐらア。」

親仁「モシく、其橋からどう行きます。」

彌「その橋の向に鳥居があるから、そこを真直に。」

北「まがると田甫へ落こちやすよ。」

彌「エ、手前黙つてゐろへ。ソノ道をずつと行くと、村はづれに茶屋が二軒ある處がある。」

北「ほんにそれよ。よく腐つた物を食せる茶屋だ。」

彌「ソリヤア手前のいふのは、右側だらう。左側の内はいよはな。去年おらがいつた時、

ぴちくする鯛の焼もの、それに大平が海老のはね出るやつに、玉子と慈姑と大椎茸に、  
そして。」

親仁「モシく、私はそんな物は食はずとようござる。そこから又どう行きます。」

彌「そこをずつと行きあたると、石の地藏様がありやす。」

北「アノ地藏様は瘡の願がきくさうだ。おらが方のへたなすが、あれで癒つた。」

彌「ほんに瘡といやア、新道の金箔屋のため吉めは、草津へ行つたつけがどうした知ら

大平—太平  
椀、平たく  
して大なる  
椀、又はこ  
れに盛れる  
料理を指す

# 初編 卷之下

藤澤より平塚へ三里半

はや藤澤に着きければ、まづほうばなの怪しげなる茶店に休み、

北「婆さん團子は冷てへか、チト暖めてくんな。」

茶屋の婆「ドレ燒きなほして進ぜますべい」ト消炭の火をかき探し、灰の立つをも構はず煽ぎたてる。此うち二人は埃をはたきはたき煙草のみみると、六十ぐらゐの合羽をきて、ふろしき背負つたるおやぢ、此店先に立ちとまりて、

親仁「モシちつとものを問ひますべい。江の島へはどう行きます。」

彌「お前、江の島へ行きなさるか。そんなら、こりよヲ眞直に行つての、遊行様のお寺の前に橋があるから。」

北「ほんに、橋といやア、たしかその橋の向だつけ、いきな女房のある茶屋があつたつ

彌「ソレく、去年おらが山へ行つた時泊つた内だ。アノ女房は江戸ものよ。」

山一相州の  
大山ならん

けがへも、無なくてはならぬその代かはり、古ふるいやつは手拭てぬぐひに、お使つかひなさるが徳用せきよう」

彌次「エ、喧やかましい。ソレやらう」トはや道みちより壹文もんはふ投りだす。

坊「コリヤ四文なみせん錢とは有難ありがたい」

彌次「ヤ四文もんぜに錢か。なむ三ばう、三文もんつりをよこせ」

坊主「ハ、ハ、ハ、いめへましい」

續いて来るお大名の長持、引きもきらず。

人「箱根さア引八里イはアなあんあへ。アツくどうだかどうだか。」

北「彌次さん見ねへ。重さうな物をよく擔ぐぜ。アノ尻を振るさまア。」

彌次「あの手合が尻を振りまはすを見たら、チトふさいで来た。」

北「なぜく。」

彌次「死んだ女房がことを思ひだして。」

北「おきやアがれ、ハ、ハ、ハ、」ト此内、向より、ちよんがれ坊主、破れた扇にて手を

叩きながら、

坊主「ヒヤア御繁昌の旦那がた、壹文やつて下しやいませ。」

彌次「つくなく。」

坊「とこくくくよいとこな。」

北「コレつくなといふに、錢はねへは。」

坊「ナニ無い事がござりやしよ。道中なさるお方には、なくて叶はぬ錢と金、まだも杖、

笠、蓑、桐油、なんほしまつな旦那でも、足一本ではあるかれぬ。その上、越中褌のか

ちよんがれ  
坊主！あほ  
だら經の如  
き唄をうた  
ひあるく乞  
食坊主

かゆき所へ  
手のとゞく  
—俗諺の内  
に半風子の  
意を寓せる  
也

助郷馬—夫  
役に當れる  
宿驛の近郷  
より助に出  
せる馬

きをするので、もう親子の縁が切りたくなつた」ト此内に膳も出で、いろくあれども、あまり事なげればこよに略す。なまなか親子の挨拶にて、旅籠屋の女まことと思ひ、何をいつても、取りあけねば、今更ひとり寢の枕さみしく打臥しけるが、夜も更けゆくまよに、勝手もしづまり、やまの神の小言いふ聲のみきこえて、此ふたり寢もやらず、着たる夜着の垢つきかけて、千手觀音の利生あらたに、かゆき所へ、襖もる風の手の届くもうるさく、ほろ酔の酒もさめて、今おもひ廻らせば、獨寢におはちの廻らざるも、飯もりの杓子あたり悪きゆるにや。假の親子の遠慮ありしは、却つて鳥目の得附きたりとをかしくて、

一筋に親子とおもふをんなより、たゞ二すぢの錢まうけせり。

斯く口ずさみて打笑ひつゝ傾けし箱枕も、耳の根にいたくも響く夜明の鍾、はや表には、助郷馬の嘶く聲ヒインく、馬の屁の音ブウくく、長持人足の歌、

人、竹にさあ引雀はアなアんあへ、オイくどうするどうする。」

此内、彌次も北も起き出づれば、やがて膳も出で、こよにもいろくあれども、餘りくだくしければ略す。それより二人は、そこくに支度してこよを立出づると、向より



なる口一飲  
める口

あひのおさ  
への一酒盃  
の獻酬をい  
ふ

北「もう來さうな物だ」ト此内、女が銚子をもつて來ると、二人ながらなるくちゆる、あひのおさへのと飲みかけ、だんく酒がまはつて、親子の挨拶もなんだかむちやくちやと成り、

北「コウ姉さん、ちツと合をしてくんな」

女「私は一向たべませぬ」

北「はてさ、コレさういはずと、そしてこん夜お前と、ちよつとナ、これがかための盃だ、ノウとつさん」

彌次「せがれめは、もう酔つたさうな」

北「ナニ酔つたも氣がつえよ、アノ親仁の面はよ、ハ、ハ、ハ、」ト卷舌にてしやれる。女は肝をつぶしながらも、受けた盃を飲みほして、彌次郎兵衛かたへ差す。

北「エ、親仁の畜生め、思ひざしに預つたな。コウ女中、後に頼みます」トしなだれかかる。女はあきれて早々にけ出して行く。

彌次「コウ、きさまア悪い男だ。女の前であんな事をいふなへ」

北「ナゼ、いつちやア悪いか。悪かアいふめへ。おらア、アノたへもんめがをかきな目つ

白板―蒲鉾  
の蒸したる  
まゝにて焼  
かざるをい  
ふ、鯛、ひら  
めは上品、  
鮫は下品と  
せらる  
いづち―一  
番

らけだ。まよよ。サア初めねへ」

彌次「もうとつくに初めてゐらア。ドレもう一つ初直してから差さう」

北「イヤおいらはこれだ」ト茶碗について、息なしにぐつくとやらかし、

北「ア、いと酒だ。時に肴は、ハ、ア蒲鉾も白板だ。鮫ぢやアあんめへ。漬せうがに車えび、野暮ぢやアねへ。コウとつさん、此しその實がいつちうめへ。おめへは是はばつかり食ひなせい」

彌次「ばかアいへ。そりやア後へ残るに極つたもんだ。時にもう吸ものが出さうなものだ」

北「待ちなよ」トふすまの間から勝手の方をのぞき、「でるく、今よそつてゐらア。オヤなむさん神様へ上げたのだ。イヤア来るぞく」ト膝を直してゐると、やがて女吸物をもつて出で、

女「お銚子をかまへませう」ト持つて行く。二人ながらすぐに吸物の蓋を取つて、

北「オヤ赤味噌だア。しやれるは、よもや玉味噌ぢやアあんめへ。時に銚子はどうか」  
彌次「せはしねへ。たつた今もつて行つたは」

てい主「是は何もござりませぬが、一つ召し上りませ。」

彌次「イヤ御亭主さん、これでは迷惑だ。」

てい主「イエ時にかやうでござります。私かたは、今迄外商賣をいたして居りましたが、今度旅籠屋になりました。すなはち今日が店開でござります。あなたがたははじめのお客ゆゑ、それで祝つて一つさし上げますのでござりますから、別に御酒代を頂くのではござりませぬ、お心置なく召し上つて下さりませ。」

彌次「イヤ夫は先おめでたい、しかし御馳走になつては近頃きのどくだ。」

てい主「ナニサ御遠慮なう、今にお吸物もできます。」

彌次「イヤもうお構ひなさるな。」

てい主「ハイ御ゆるりと」トいひすてて立つて行く。北八ふろより出て、

北「やうすは残らすあれにて聞いた。親方、たどとは有難へ。」

彌次「コレ洒落れずと、もう一ぺん湯へ這入つて來や。その内に皆おれが飲んでしまは

やうすは云  
云一役者の  
聲色をまね  
しなり

ア」

北「左様だらうとおもつて、湯へはいつてゐても洗ふそらアねへ。オヤ足はまだ土だ

色の石

あやまるー  
閉口だ

硯ぶたー肴  
などを盛る  
ひろぶた

北「そりやアさうと彌次さん。」

彌次「ソレ女が来たは。」

北「オットとつさん、湯へ入らねへか」ト此内、女さかづきを持つて来る。

彌次「オヤ酒か。江戸者と見ると、どこでも斯うするにはあやまる。」

北「ナゼ、酒を出しやア別に錢をとるか。」

彌次「知れた事よ」トいひながら手拭を取り、湯へ入る。女、硯ぶたと銚子をもち出

し。

女「おひとつ召し上りませ。」

北「是は御ちそうだ。コウ、おいらが親父に、早く上らつせへといつてくんない。」

女「ハイさやう申しませう」ト立つて行く。此内彌次郎兵衛湯より上りて、

彌次「ハ、ア何だ、コリやア飲めるは。コレ手前はやく湯に入つてきや。」

北「イヤ飲んでから入らう。」

彌次「エ、手前も意地のきたねへもんだ。這入つて來やな。」

此内、北八も湯へ入る。てい主出て、

てい主「お二人かへ、お泊りなされませ。當宿は、やどやは皆ふさがりましたが、私か  
たばかり當りませぬ」

彌次「こんな綺麗な内をなぜ當てねへの」

てい主「私方は新宅でござります、ソレおなべお湯はどうだ」トこの内、女、たらひ  
に湯をくんで來り、柳行李、風呂敷包を座敷へ運ぶ。

北「コウ、彌次さんぢやねへ、とつさん、お前わらぢも一所にしておかう」

彌次「オ、そしておれが脚半もざつと濯いでおきや」

北「ナニ脚半をいすけか」ト顔を見ると、彌次郎兵衛目つきで知らせる故、口小言をい  
ひながら脚半を洗ひしまひ、

北「あねさん、茶を一つツツくんな」

下座敷へ通ると、盆に茶を二つもつて來り、

女「すぐにお湯にお召しなさいやせ」

彌次「コウ、あの女の面ア見たか。真中がへこんで、何のことはねへ、踏みけへしの馬  
蹄石といふもんだ」

馬蹄石一庭  
の置石など  
にする蒼黒



か。

北「とつさんや。」

彌次「なんだ。」

北「こよぢやア、ねつからお泊りなせへといつて引つぱらねへの。」

彌次「ほんにその筈だ。爰はどなたかお泊りと見えて、みな宿屋に札が張つてある。」

北「コウ、向の内がいきだぜ。」

彌次「コレあねさん、泊めてくれる氣はなしか。」

はたごや女「イエ今晩はおとまりで、合宿はなりません。」

彌次「なむ三、さうだらう」トだんく宿をさがせども、皆ふさがつて泊めぬゆる、大

きこまに困り、まごつき歩き、

とめざるは宿を疝氣としられたり、大きなたまの名ある戸塚に。

それより宿はづれにいたるに、漸くはたごやの合宿なき體に見ゆるあれば、やがてこよ

にたよりて、

彌次「なんとわしらを泊めてくんなせへ。」

大きなたま  
云々この  
頃戸塚に大  
畢丸の乞食  
ありて有名  
なりき

は―戸塚前  
ではを取捉  
へてはに掛  
けたる洒落

飯盛―旅舎  
にて下女と  
娼妓を兼ね  
たるもの

たば―別嬪

と、打笑ひ過行くほどに、品野坂といふ處にいたる。これなん武州相州の境なりと聞けば、

たまくしけふたつにわかる國境、所かはればしなの坂より。

すではや日も西の山の端にちかづきければ、戸塚の驛になん泊るべしと、いそぎ行く道すがら、

彌次「コレ北や、待たつせへ。話があらア。なんでも道中は飯盛を勤めてうるせへから、こよに一つはかりごとがある。おいらは親仁なり、ぬしやア廿代といふもんだから、親子といつてもいふ位だによつて、是から泊々では、なんと親子の分にしやうぢやアねへか。」

北「オ、これは妙だ。なる程それぢやア勤めねへでいよ。そんならお父さんといふのか。」

彌次「さうさ、貴様は諸事を息子きどりだが承知の助か。」

北「よし、さういつて又いよたほでもあつたら、此息子をだしぬくめへよ。」

彌次「エ、ばかアいはつし、オヤもう戸塚だ。戸塚より藤澤へ二里、笹屋にしやう

きさい一方  
言、來なさい

與茂作一奥  
州白石噺中  
の人物の名

「オ、イ、オ、イ、長松ヤイ 長松ヤイ」

奴の伊勢參「きさいく」

ツレ「ぬしやア餅ヲ己にもくれさい」

イセ「さきへ行く人に買つてもらへ。何でもあの衆が國さアの話をするを、オイくといつてゐると、ぢきに買つてくんさるはちやア」

ツレノイセ「オイうらにも買つてもらうべい」トかけ出して彌次郎に追付き、「わしにも餅ヲ買つてくれさい」

彌次「手前はどこだ」ト笠のかきつけを見て、「ハ、ア是も奥州下坂井村、コレ手前の村に、與茂作といふ親仁があらう」

イセ「先餅ヲ買つてくれさい。さうせないけりやア、此方のいふことが當り申さな

い」  
彌次「おきやアがれ。ハ、ハ、ハ、」

北「こいつは擔かれた。ハ、ハ、ハ、」ト打笑ひて行くほどに、はや程ヶ谷の驛につく。  
程ヶ谷より戸塚へ二里九丁 兩側より旅雀の餌鳥に出しておく留女の顔は、さながら

イセ「お母様ア女でござり申す。よく知つてゐめさる。」

彌次「今ぢやア何といふか知らねへが、おいらがゐる時分は、名主さのは熊野傳三郎といつてな、その内儀様が内に飼つておいた馬と色事をして、逃げたつけが、さうした知らん。」

イセ「それよさアよく知つてゐめさる。庄屋さんのお母様ア、内の馬右衛門といふ男と突つ走り申した。」

北「イヤ妙々。」

彌次「コリヤ小僧よ。なぜ後へさがる。くたびれたか。」

イセ「私はひだるくてなり申さない。」

彌次「餅でも買つてやらう。こいく〜」ト五文もち五つ六つ買つてやりながら、いよいよ圖にのり、

彌次「なんと小僧、よく知つてゐるだらう。」

イセ「アイ〜」ト餅をしてやる。この内つれの伊勢參、これも十四五の前髪、後から呼びかける。

前髪—元服  
前の男

くれさい—  
くれなさい

隣さア—さ  
アは奥州の  
方言、さま  
の略にて方  
角を示すに  
も又意味な  
きにも用ふ

彼是と興じて爰を立出で、いろく道草を喰ふ驛路の氣さんじは、高聲に話しものし  
で、たどり行くほどに、此宿はづれより十二三才許の伊勢參、後になり先になりて、

イセ參「だんなさま壹文くれさい。」

彌次「やらうとも、手前どこだ。」

イセ「わしらア奥州。」

北「奥州はどこだ。」

イセ「笠に書いてあり申す。」

彌次「奥州信夫郡幡山村長松、ム、幡山か。おいらも手前たちの方に居たもんだ。幡山

の與次郎兵衛どのは達者でゐるか。」

イセ「與次郎兵衛といふ人さア知り申さない。與太郎どんなら、わしらが隣さアにあり

申す。」

彌次「オ、その與太郎よ。其又内にのん太郎といふ年寄の祖父様がある筈だ。」

イセ「ぢよいはあり申す。」

彌次「そして與太郎どのの内儀様は、たしか女だつけ。」



なさいやアせ。」

二人はこよにて、一ばい氣をつけんと、茶屋へ入りながら、

彌次「北八見さつし、美しいたへもんだ。」

北「ハ、アいかさまいと娘だ。時に何がある」ト北八そこらを見廻し、肴をさしつして

酒をいひつける。娘前垂て手をふきふき、鹽焼の鯨をあたよめ、銚子盃を持ち出し、

娘「これはお待遠さまでございやした。」

彌次「おめへの焼いた鯨なら味からう」ト、娘フ、ンと笑ひながら、表の方を向いて呼び

ながら行く。

娘「お休なさいやアせ。奥が廣うございやす。」

北「奥が廣いはずだ。安房上總まで續いてゐる。」

彌次「北八見さつし、此魚はちとござつた目もとだ」ト打返し見て、彌次郎、

ござつたと見ゆる目もとのおさかなは、さては娘が焼きくさつたか。

北八是を聞き、同じくこじつける。

味さうに見ゆる娘に油断すな、きやつが焼きたるあぢのわるさに。

たへもん一  
美しき娘、  
子供唄にイ  
ツチクダツ  
チクたへも  
んの乙姫様  
が云々

押つ倒れた  
— 損をした

ぼうばな—  
宿はづれ

コノ野郎みやアと、おりよヲ突こかしやがつたんで、エ、如何しやアがると、横顔ア一つぶん殿つて、既の壁へおつ倒して、乗つかよつたと思へ、まだ小言を抜かしやアがるから、うらが親方の子にやらうと思つて、餅ヲ買つて來がけだから、その餅ヲ二ツ三ツ、鼻めが口へねぢこんだら、むちやむちやと食やアがるから、其内に打つちめた。さうすると最つとくれろといやアがつたんで、己もそこらア探廻して、馬の糞たア知らずに、あいつが口へ押しこんだら、胸ヲわるがつて、腹ア立ちやアがるまいか、己もあんまり可愛さうだんで、とうく焼杉の下駄ア一つ押つ倒れたはな。いまくし  
い。

この話に、二人も大きに興を催し、はや加奈川のほうばなへ着く。夫より二人とも馬を下りてたどり行くほどに、金川の臺に來る。〔加奈川より程ヶ谷へ一里九丁〕爰は片側に茶屋軒をならべ、いづれも座敷二階造、欄干つきの廊下棧などわたして、浪打ぎはの景色いたつてよし。茶屋の女かどに立つて、

女「お休みなさいやアせ。あつたかな冷飯もございやアす。煮たての肴の冷めたのもございやアす。蕎麥の太いのをあがりやアせ。鱧鮓のおつきなものもございやアす。お休みな

じば一馬千の符牒、二百文の事

馬かた「さか手で行かう。じばで乗つてくんない」ト馬の値段も相談ができて、彌次郎も北八もこよより馬に乗ると、二匹並べて牽出す鈴の音しやんくくく、馬ヒンくくく、向より来る馬かた「へエ畜生め早いな」

こちらの馬かた「くそを食へ」

さきの馬かた「うぬ尻でもしやぶれ」トこれが此手合の行きちがひの挨拶、互にあくたいをいつて義理をのべ別れる。彌次郎兵衛を乗せたる馬かた。

馬かた「コレ伊賀よ、昨日手前と飲んでゐた野郎は、アリヤ上の宿の房州だな」此手合、

常に名をいはず、みな國所の名をよぶ。北八を乗せたる馬かた、大道にひよぐりながら、

「先度のばんけにな、アノ房州めが鼻がな、うらが親方の脊戸口に、尿をこいてゐたと

思へ。何がシヤアくといふ音を聞くと、うらも氣が悪くなつたもんだんで、こいつなア

構ふこたアなへ、打ちちめてやらうと思つて、打ちくらつた元氣で、いきなりにうちよ

テ捻上げて、そこへ打ち倒したと思へ。さうすると、鼻めが肝を潰しアがつて、コリヤ

ア何ヲすると抜かしやアがつたから、エ、何ヲするも犬のくそもいるもんかへ。擲つ

てしめるのだ。黙つてけつかれといふと、何がアノ圖體だから、ひどへ力のある女よ、

脊戸口一裏口

打ちくらつ

た元氣で

酒を飲みし

勢にて

うちよ一腕

九紋龍—水  
滯傳中の人  
物、背高し

葭町—かけ  
ま茶屋のあ  
りし所

先拂「あとの人、せいが高いぞ。」

彌次「おいらがことか、高いはずだ。愛宕の坂で九紋龍と肩をならべた男だ。」

北「しやれなさんな。飛んだ目にあはうぜ。」

彌次「アレ見やれ。どれもいと奴だ。巻端折で豪勢に尻がならんだは。何の事はねへ、

葭町しんみちの土用干といふもんだ。」

北「オヤ、く、弓をかついでる人の笠を見ねへ。あたまと延引してゐらア。」

彌次「そしてアノ羽織の長さは。暖簾から金玉がのぞいてゐる。」

北「殿様はいと男だ。さぞ女中衆がこすりつけるだらう。」

彌次「べらほうめ、いろく、なことに世話をやくは。あなたがただとつて、やたらそんな事をしてつまるものかへ。」

北「ナゼ、それだとして、ソレお道具を見ねへ。アノとほりに立ちづめだは。ハ、ハ、ハ、サアお駕がとほつたから行かう。」ト立つて行過ぎる宿はづれに、

馬かた「親方、かへり馬だに乗つてくんない。」

彌次「安くば乗るべい。」

彌次「アリヤア鯉こひの瀧たきのほりよ。」

北「おらア又また鮎あなが素麩すめんを食くふのかと思おもつた。」

彌次「コウ無駄むだをいはすと、早はやく喰くはつし。汁じゆがさめらア。」

北「オヤいつの間に持もつて來きた」トならちやをあり切りさらくとしてやり、

彌次「もうお櫃びが零落れいらくした。」

北「又先またへ行いつてうめへ物ものをしてやらう」トそれより二人ふたりは錢ぜにをはらひ、こゝを立たち出い

でて行くに、向むかよりお大名だいみやうの行列ぎやうれつ、先拂さきほらひの男おとこ一人、六十位むそゐのおやぢ、一人ひとりは十四五しよごの奴やつこ

いづれも宿やどの人足にんぞくなり。

先拂「したアに、したアに、かぶりものを取とりませうぞ。」

北「かけおちものは下座ひざをしねへでもいよと見みえる。」

彌次「なぜ。」

北「ハテ、かぶりものは通とほりませうぞといふは。」

先拂「馬士馬まこけまのくちを取とりませうぞ。」

北「馬いまの口くちも取とりはづしが出來できるか。ハ、ハ、ハ、ハ。」

ならちや一  
奈良茶飯の  
暑、茶飯に  
大豆、小豆、  
粟等を加へ  
しもの  
零落—空に  
なりたるを  
いふ



さみづー鮫  
洲に淡水を  
かけたり

鈴ヶ森ー江  
戸の刑場

支度ー腹の  
支度にて食  
事をなす意

めんようー  
不思議に

海邊をばなど品川といふやらん。

と難じたる上の句に、北八とりあへず、

さればさみづのあるにまかせて。

いとおもしろく歩むともなしに、鈴が森に至り、彌次郎兵衛、

おそろしや罪ある人のくびだまに、つけたる名なれ鈴がもりとは。

大森といへるは、麥藁細工の名物にて、家ごとに商ふ。

飯にたく麥藁さいく買ひたまへ、これは子どもをすかし屁のため。

それより六郷の渡を越えて、萬年屋にて支度せんと腰をかける。川崎より加奈川へ二

里半

萬年屋の女「お早うございます。」

彌次郎兵衛「二ぜん頼みます。」

北八「コウ彌次さん見なせへ。今の女の尻は、去年までは柳で居たつけが、もう白にな

つたア。どうでも杵にこづかれると見える。そしてめんよう道中の茶屋では、床の間に

干からびた花を活けておくの。あの懸物を見ねへ。なんだ。」

高輪へ来て忘れたることばかり。

と詠みたれど、我々は何ひとつ心がかりの事もなく、獨身の氣さんじは、鼠の店賃いだ

すも費と、身上のこらす風呂敷包となしたるも心やすし。去ながら旦那寺の佛餉袋を

和かにつめたれば、外に百銅地腹を切つて、往來の切手を貰ひ、大屋へ古借を濟した

に同じ 踏めるもの 踏めるもの 踏めるもの 踏めるもの

代り、御關所の手形を受けとる。踏めるものは、見倒屋へさづけて金にかへ、がらくた

物にても値に 踏める物の 踏める物の 踏める物の 踏める物の

も、繩すだれと油壺は向へ譲りて、何ひとつ取り残したる物もなく、まだも心がかり

は、酒屋と米屋の拂をせず、出抜にしたれば、さぞや恨みん。氣の毒ながらも、是も古

き歌に、 さきの世にかたりをなすか今かすか、いづれむくいありと思へば。

打笑ひつよ、彌次郎兵衛また狂詩を口すさむ。

雖非亡命可奈何 借金不報擗尻過

夫居本貫掛乞衆 將是川向成干戈

と打興じて、ほどなく品川へ着く。

品川より川崎へ二里半 彌次郎兵衛

本貫一故郷

きりぎりす

後のみん

親船

見ふりたう

下り川





初編 卷之中

富貴自在云  
云一琴唄落  
組の文句

聖代一青黛  
にかけたる  
なり  
打がへ一底  
なき袋、う  
ちちがへて  
帯ふるより  
名づく  
のふくらも  
の一道樂者

日本橋より品川へ二里

富貴自在冥加あれとや營みたてし門の松風

琴に通ふ春の日の

麗さ、けにや大道は髪のごとと、毛すぢ程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴く吾

妻錦繪に、鎧武者の美名を残り、弓も木太刀も額にして、千早振神の廣前にをさまれ

る、豊津國のいさをしは、堯舜のいにしへ延喜のむかしも、目前見る心地になん。いざ

や此とき國々の名山勝地をも巡見して、月代にぬる聖代の御徳を、藥鐘あたまの茶吞ば

なしに貯へんものをと、玉くしけ二人の友どち誘ひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、臍

のあたりに打がへの金をあたよめ、かの彌次郎兵衛といふのふらくもの、食客の北八も

ろとも、朽木草鞋の足もと軽く、千里膏のたくはへは何貝となく、蛤のむきみしほりに

對の單衣を吹きおくる、神風や伊勢參宮より、足引の大和めぐりして、花の都に梅の浪花

へと心ざして出で行くほどに、早くも高輪の町へ來かより、川柳點の前句集を思ひ出せ

ば、



大屋「さてく、今聞きましたが大變な事でございます。何にいたせ、死んだ者の首の無いといふは」ト早桶の内をのぞき見て、「イヤく親父どの、氣遣さつしやるな、首は有りません。」

親「有るとはどこに有ります。」

大屋「コリヤ佛を逆さまに入れたのでござる。ハ、ハ、ハ、ハ。」

親「ハアそれで落着きました。コリヤどなたも御大儀でござる」トこれより夜に入りて葬禮ばなし、後ねんごろに弔ひけるが、さてしも北八は、せつかく辛抱せし親方の内を出されて、又彌次郎のかたに居候となり、互につまらぬ身の上に厭きはて、いつその事まんほしに、二人づれで出かけまいかとの相談をなし、友だちに頼みて金子を借受け、先づその年はめでたき春をむかへて二月の半より、伊勢參宮と思ひたち、東海道へと出かける。

かしまだちの狂歌

難波江のよしあしよとも旅なれば、おもひたつ日を吉日とせん。

まんほしに運の悪きを直す爲に

うらが娘  
うらはおれ  
の訛

インネく  
| 否々  
えすい目  
| 恐しい目

彌次「ナニがちがつたア、何が違ひやした。」

親「佛がちがひ申した。此佛にやア首がござらない。そしてわしの娘は女でござるに、コリヤハア男の死人と見え申して、胸髭が生へてござらア。」

いも「ナニ首がないとは、ドレくほんにコリヤ首がねへ。彌次さんおめへどうした。」

彌次「ナニおいらが知るものか。そこらにやア落ちてゐねへかへ。」

親「ヤレハア此衆は飛んだ人達だ。サアうらが娘はどうさつせへた。死んだの何のと嘘ばつかしつかつしやる。サア娘をこゝへ出しなさろ。」

彌次「出せとつて外にやアねへ。途方もねへ親父めだ。」

親「コリヤハア濟まない、濟まない。」

北「なる程父さんのいふのは尤だ。何にしる首がなくちやアつまらねへ。」

親「インネく、田舎もんでこそあれ、うら頭百姓もしたもんだ。お家主どのへ断つて、えすい目に會せてくれべい」トだんく、聲高になり、喧しくいふ故、そばに居あはせし人をいろく、なだめても一向きよ入れず。大屋様がこの様子を委細に聞いて驅つけ、

北「かはいさうに洒落所ぢやアねへ。サアくはやく片付けてくんなせへ」ト牛酔大勢寄つてたかつて、無駄やら洒落やら出放體な事しやべりながら、佛を桶の中へ納めて、香花を手向ける所へ、おつほの父親、涙をふきく訪ね來りて、

親「アイ許さつしやりまし。わしはハアおつほの親でござらア」

北「是はようこそ、先づこちらへ」

親「ヤレく憂いことをしました。わしやハア田舎もんでござるから、義者ばつて、むげちなく、ほい出しましたが、こんなになるべいたア思ひをりませなんだ。ドレく娘はどこに居をります。ちよつくり顔サア見せてくれさつしやりまし」

綱次「エ、おめへモウちつと早く來なさればいよに、モウ桶の中へさらけ込んでしまつたものを、のう芋七」

いも「イヤしかし、とつさんの身では見たいは道理々々、だうりよ、狐の子ぢやものをとけつかるハ、ハ、ハ、さらばお開帳致さうか」ト棺桶の繩を解き、蓋をあけて見すれば、おやぢ眼鏡をかけ、つくなくと見て悔りし、

親「コリヤハア違つたアもし」

狐の子ぢやものを一葛の葉の淨瑠璃文句、親子の別に縁あり

ぬかる一  
手  
抜かる

しんいでいこ  
いうれんさ  
う、ばげぎ  
—新大根、  
渡、葎、分  
葱の洒落

歩を取つて、芋七を引連れ、早桶その外の入用の品をとよのへて來ると、

彌次「オヤ手前も氣のきかねへ、序に酒も買つて來ればいよ。」

北「それをぬかるものか」ト早桶の中から、一外徳利に鮪の刺身を取り出し、まづ飲みかけてゐる所へ、合長屋の者だんく、大酒盛と成り、酒も後から買ひたして、のこらず生酔となり、卷舌にて、

いも「サアくこの元氣で佛を桶へさらけ込んでしまはう。時に寺はどこだ。」

彌次「馬鹿アいへ。おいらが内に寺があつて堪るものか。」

北「そいつは詰らねへ。」

彌次「構ふこたアねへ、何でも持出しさへすりやア、どこか知ら寺があるだらう。」

北「それだとなつて、葬禮をかついで寺町を呼つて歩いたとなつて、買人はあるめへ。」

いも「イヤそれもおもしろからう。わしは寺町へばかり商賣に行くが、呼びやうが町とは違ひやす。マア今頃の代物なら、しんदैいこ、しんदैいこ、いうれんさうや、ばげぎや、ばげぎや、卒都婆の干物に、石塔のたちうりなぞはよく賣れるから、葬禮も買人がありませう。ハハ、ハハ、ハハ。」

七里潔敗一  
七里結界の  
訛にて悪覺  
を拂ひ遠ざ  
くる文句

訴訟一詫言

さまざま取成をいつて見たが、どうでも貴様は内儀さまへ、何ぞいやらしい事でもいつたと見える。さうかして、日頃からいけすかねへ面の皮の厚い男、貌を見るも嫌だと、きさまの事を悪くいつて、七里潔敗いやだ〜といつてござるから仕方がねへ。モシ彌次郎兵衛さまはあなたか。只今お聞の通でござりますから、北八どのは是でおわたし申します。

彌次「承知致しました。コレ北八、あの通だがそれでいよか。」

北「イヤもうよくても悪くても仕方がねへ。しかし其筈ではねへつもりだに。」

彌次「くれぐれもいめへましい業さらしな野郎めだ。いつその事何も角もぶちまけやうか。」

北「ア、コレ〜誤つた。をがむ〜。」

與九「また折を見て訴訟のしかたもあらう。何にしろ今日は内が取込んでゐるから、又そのうちに」ト挨拶そこ〜にして與九八は出てゆくと、引違へて芋七立歸り、

いも「サア〜親元へは知らせて来たが、是から買物をせずばなるめへ。」

北「御苦勞御苦勞。逆ものことにわつちと一所に来てくんねへ」ト彌次郎にわたした二



頼れたから、こよの内へ仲人したが、今聞けばおめへの女房とは如何した理窟だ。」

北「マアくあとでわかる。其肴屋といふは、おいらが親方の所の出入、預けて置いたはやつぱりおいら。マアそれよりか早く親の所へ知らせてへ。それもその肴屋まで知らせると、親の内へあそこから知らせてくれる。」

いも「そんなら行つて来やせう」トいも七は出てゆく。近所の人々手傳ひて、そこら取片づけ、めいめい悔をのべ、挨拶して、皆々一先づかへる。

北「何にしろわつちは一寸行つて来やう。ゆうべそつと出た儘だから、後はいよやうに頼みます」ト紙入から金二歩出して、彌次郎に渡し、出かけんとする所へ、傍輩の與九八來り、

與九八「オヤ北八どの爰にか。親方がとうく今朝がた御臨終なされた。」

北「さうだらうとも。」

與九「それに付てお内儀様がおつしやるには、北八に暇をくれる。あれは平生心ざしのみだらなもの。旦那どのが死なれたら、猶の事女の主とあなどつて、どのやうな不埒をせまいものでも無いから、さうさう請人の所へ引き渡して遣れとのこと。それはと傍から

いぢらしい  
—可哀さう  
な

さつぱり  
—すつかり  
全く

隣「マアなんにしる何方のだから知れないお内儀様ヤアイ、お内儀様ヤアイ。」  
いも「コリヤ冷くなつた、もういけねへ。」

北「エ、いぢらしい事をした。彌次さん醫者を呼びに遣つてくんなせへ。」

隣「わたしが元宅さんでも呼んで来て上げませうか。」

彌次「その次手にお寺へも行つてもらひてへな。」ト此内醫者が来るやら、灸をすゑるやら、寄つてたかつてさまんくにして見れども、わさんやおつほは顔の色かはり、さつぱり息は絶えたる様子に、北八思はず泣きいだし、

北「可愛や只の身ではなし、今の騒に血があがつたのだらう。しかたがねへ。時に彌次さんおめへも腹が立つたらうが、どうぞ了簡してこの取始末をしてくんなせへな。」

彌次「おれをばいろくな目にあはせる。」

北「なんほ勘當同然にした女でも、斯うなつては親の所へも知らせすばなるめへ。誰を遣つたものだらう。」

いも「ソリヤアわしでも行つてやらうが、ぜんてへ是はどういふ譯かさつぱり分らねへ。おらが新道の肴屋に預つてゐた女、餘所の隱居の妾だが、片付けたい、世話してくれろと

とりさへて  
も一仲裁し  
てもの意

彌次「なんの事だも凄じい。ふてへやつらだ」ト又芋七に取つてかゝるを、芋七腹をたて、小力のあるにまかせ、彌次郎をねぢ伏せる。北八とりさへても聞かず。ごつた返して煙草盆を踏みくだくやら、土瓶の茶をぶちまけるやら、三人やたらみつちやと騒ぎたつる物音に、近所となりの人々おひく／＼驅けつけ、かれこれと取りさへるうち、おつほはそこらをのた打ちまはり苦しみたるが、つひに血をあけて目を廻したふれる。

北八「ヤアおつほ、どうしたどうした。コレ芋來てくれ。可愛さうに如何かしたさうな。」  
いも「コリヤ目を廻したのだ。コレく／＼水だく／＼。」

北「おつほヤアイ、おつほヤアイ。」

隣の亭主「おつほさまとは誰の事だ。モシ爰のかみさまはへ。」  
いも「コレこの目を廻したが内儀様。」

隣「ハア彌次さん、おめへのお内儀様か。」

彌次「アイわつちの女房のやうでもあり、又無いやうでもあり。」

隣「ハアきこえた。北八さまの内儀様か。」

北「アイわつちの鼻のやうでもあり、又無いやうでもあり。」

さらけ出し  
— 追出し

彌次「いよとは何のことだ。コレ其金ゆゑに、おらア女房をさらけ出してしまつて、今夜から獨で寐にやアならねへは。」

北「その代また若い女房を譲つたから申分はあるめへ。」

彌次「戲言つくしやアがれ。あの女の面が二目とも見られる面か。いめへましい野郎だ。」トまつくろになつて腹をたて、一つ二ついひ募りて、彌次郎堪へず、北八にぶつ

まつくろに  
なつて—眞  
赤になつて  
といふべき  
をしやれた  
るなり

てかよる。北八も躍起となつてからかつて居るうち、おつほは頻にむしがかぶると見え、ウン／＼唸つて苦しがるをも構はず、こなたにはやみくもと、掴合うてる中、夜

やみくもと  
— 夢中に

あけてなかうどの芋七、商買物のかひ出しに行くとして、こよのうちへ訪づれたるが、何やら内にはばつたくさ音して、女のうめく聲も聞ゆるにぞ、芋七これはと外より戸を明けんとするに聞かず。たよいても開けざれば、やにはに外より引きはづして入ると、彌

次郎見るより、

彌次「ヤア芋七か、よくもよくも此野郎めと馴合つて、おれをはめたな、はめたな、合

點しねへぞ。濟まねへぞ、濟まねへぞ。」

いも「ナニはめたとは何の事だ。」

はめたな—  
二人にてた  
くみて己を  
わなに陥れ  
たりと也

親方さま―  
北八の主人  
を指す

引負―借錢

つば「ハイわたしは此北八さまのござる内に、お飯たきをしてをりましたもの。いやだといふを無理無體に、北八さまに口説かれまして、ツヒ逢ひまして、かうした身になりました故、お隙をもらひ親もとへ歸りまして、物がたい親、うちへは入れず、北八さまの貰分にて、親の手前を引きとられ、餘所の内に預られてをりましたが、此事親方さまの耳に入らぬうち、わたしに拾五兩の金をつけて、外へ片付けたいと相談、わたしは逆も斯うなるからは、いつ迄もはなれぬ氣でゐましたけれど、それではあなたのお爲になるまいと、得心づくで思ひきり、心にそまぬこゝへ嫁入して來ましたのでござります」ト苦しい中に、なみだ半分、委細のはなし。彌次郎肝をつぶし、

彌次「ヤア〜そんなら親方のうちの引負、拾五兩なくては償れぬといつたは、引負ではなくて、この女を片付代の十五兩か。」

北「さやう〜」

彌次「エ、おきやアがれ、このべらぼう野郎め、よくおれを飛んだ目に會せやアがつた。」

北「ナニ飛んだ目に會ふものか、金さへ借らねへけりやアいよぢやアねへかへ。」



つば「モシくどうぞして下さりませ。腹が痛くてどうやら産みさうになりました。ア苦しいく」ト無上にうめき出せば、彌次郎大きにうろたへ、

彌次「エ、そいつは困つたものだ。コレく北八、手めへ子を産む女の手傳をした事はねへか。」

北「ナニ飛んだことを。イヤ、かみさんがいつの間に孕んだのだ。さつぱり知らなんだ。隣のかみさんでも起して来て頼むがいよ。」

彌次「イヤくちつと譯があつて、隣へも沙汰なしにこつそりとやりてへ、マアそこへ湯でも沸してくれ。」

北「それは承知だが、なぜまたあんな窮屈な所へかみさんを入れて置いたのだ。サアサア出なせへ、出なせへ」ト飯櫃の中から女の手をひつぱりて、引き出さんとしけるに、おつば北八を見て、

つば「ヤアお前か、嬉しやく。わしが産月を心元なさに、こよまで尋ねて来て下さりましたか」トしがみつくに、北八はびつくりした顔。彌次郎不審晴れず、

彌次「コリヤ北八、手前この女と近づきか。」





辯也

居さつし—  
江戸詞、居  
なさい

心當こころあたりがあるから、算段さんだんしてやらうと言いひなさつたによつて、ぢつと待まつてゐるたが、今いまもつて沙汰さたがないから、あんまり氣きづけへさに、寢所ねどころからそつと抜ぬけて來きやしたが、いよいよ其金そのかねは出來できやせうかね。」

彌次やじ「知しれたことよ。あした晝ひるまでには屹度きつまで出でかしてやる。そこへ行いつちやア男おとこだ、何なん程ほどこんなにしみつたれな暮くらで居ゐても、さあといへば十兩りやうや十五兩りやうの目めくさり金かね、工面くめんせうと言いつたがせうかにやア、ちけへはねへから落着おちついて居ゐさつし。」

北きた「そいつはありがてへ。其そのかはり百倍ひゃいにして此恩このたんを返かへしやす。此間このあひだからいふ通とほり、番頭ばんとうはなくなる、親おやかたも今いまにめでたくなりやすから、跡あとで後家御ごけごを手てに入いれさへすりや、すぐになつちが旦那だんなさま、どうか芝居しばゐの敵役かたきやくが言いふ様やうなこつたが、是これはつかりはちけへなし。極々ごくごく内々ないないの所ところはもう出來できかよつてゐやすから、今いまがでへじの所ところ、こよで拾五りやう兩かねの金かねがねへと、しくじつて蛇あぶも取とらず蜂はちも取とらずだから、どうぞお頼たのみ申まうしやす。」

彌次やじ「おれも手てめへを思おもふは身みを思おもふだから、其咄そのはなしの通とほりに行いきさへすると互たがひの爲ためだ。あすの晝時分ひるじぶんには耳みみを揃そろへて拾五兩りやう、きつと間まにあはせてやるぞ」トこの話はなしのうち、飯櫃はんびつの蓋ふたを内うちより押おし上げて、

ひよんなこと一困つた事、すべて物の不好事を云ふ

やせぬ一ますをやす、ませぬをやせぬと言ふは江戸者の

彌次「コレくひよんなことがある。此長屋の作法で、長屋のものが嫁を取ると、長屋中のものが来て、其嫁の尻をさすつて見るが定法。今そなたの来たことを如何して知つてやら、それでさすりに來をつたに違はない。そなたは懐妊のよし。同じくは、まだ今宵は來ませぬといつて見せたくねへが、どうであらう。」

つば「オヤく私はいやだのう。殊にたどの身ではなし、知らないお人に此おいどを撫でさせる事はいやだねへ。」

彌次「そんならどこぞへ匿してへものだが、此通二階はなし。オットあるぞあるぞ。窮屈ながらちつとの間、こよへく」ト賣残しのあき半櫃あるを幸、蓋をあけてかのおつほを入れ、もとの如く蓋しておき、やがて表の掛金をはづし戸をあくれば、案に相違して、北八せきこんで飛びこめば、

彌次「ヤア北八か。エ、今時分にどうして來た。」

北八「イヤもうく内に落着いてゐられやせぬ。此間からおめへに頼んだ十五兩の金の事、翌日は店おろしにかゝるゆゑ、せひくあすの朝迄、わつちが遣ひ込んだ穴を埋めておかねばなりやせぬ。それが出來ねへと忽ち百日の説法尻ひとつ。おめへのいふには随分



ぬかられへ  
—手ぬかり  
なし

ふりこんで  
—どなりこ  
んで

彌次「コレ芋七、持參金の沙汰がないがどうする。」

いも「そこはぬからねへの、今のさき駕から出た時そつと聞いたら、あしたの晝時分  
隠居の方からくる筈、間違はないといふことだ。ソリヤノ請合きづけへなしに、今夜は  
しつかり樂みなせへ」ト彌次郎がせなかを一ツくらはせて出てゆく。彌次郎兵衛門口を  
しめて、

彌次「コリヤア寒くなつた。時に茶漬でも食はねへか。」

おつば「イ、エ宜しうござります。」

彌次「そんならもう寢やうか。」

つば「お床を取りませう。」

彌次「オイ、おれが出してやらう」ト戸棚よりやぶれ蒲團搔卷などとり出す所に、表  
の戸をトン／＼／＼。

彌次「エ、今頃にだれだ／＼」トいひつよも、さては今おひ出した女房、此事をかぎつ  
けてや、ふりこんで来るならんか、但は親分いさくさをいひに来るか。何にもせよ見つ  
けられては面倒なりと、今の女房にむかひ小聲にて、

しいと、三人鼻つきあはせ、飲みかけてゐる折から、おもて口に息杖の音カツチ、カツチ。

いも「オヤもう来たさうな」トかどの戸をそつと開けてとんで出で、オツトこよだこよだ。駕の衆御大儀々々。コレ一はい飲んでござれ」ト有合のはした錢をやつて、かこの者をさつそく追ひかへし、乗つて来た女の手をとつて伴ひ入り。

いも「サア嫁御のお出でだ、お盃く」。

彌次「コレはいかいおせわ」。

いかい一大に、非常に

潮來—下總潮來よりばやりし俗諺

いも「サアお壺さんそけへ坐りなせへ。そこでお前から一ツ飲んで、御亭主へさしなせへ。お蛸お酌く。コリヤア四海浪しづかにと言ひてへが諺は知らず、あした来て潮來でもやらかしませう」ト此内、だんく盃もすみ、夜もふけたるに、おたこ「芋七さん、わつちらアもうお開きにいたしやせう」。

いも「ソレく、此狭い内に長居はおそれだ、コレおつほさん、今夜はゆるりと休みなせへ。又明日お目にかよらう」ト暇乞し、お蛸もろ共立出づれば、彌次郎送るふりして表にたち出で、

ちよつぴり  
— 少しばかり

ものは、いよく急に来る筈か、どうだく。」

いも七「イヤ来るはずとも、来るはずとも。おめへも金が急ぐといふ、さきも腹が落ちさうだから、一刻も早いがいよと、せきこんで居られるから、そこで今夜更けてから、そつと駕でこよへ向けて来るはずにしておいた。ちよつぴり酒でも出さにやアなるめへが、内に取つたのがありやすか。」

彌次「ヤア、今夜くるのか。エ、それはまた早急な。それと知つたら、けふ髪月代でもして置かうものを。ドレちよつと髭ばかりでも剃つて来やう。」

いも「ア、コレ、コレ、今頃どこに髪結床があるものだ。そんな事よりは酒の支度でもするがいよ。コレサおめへ何をまごくする。」

彌次「イヤ何もしねへが、ちよつと爪でも取つておかう。」

いも「ナニ埒もねへ、そんな事はしねへでもいよぢやアねへか。」

彌次「イヤそれでも十本みんな取らずとも、せめて二本の爪ばかりは。」

いも「ハ、ハ、おきやアがれ。大わらひだ」ト此内、俄にそこら取り片付けるやら、火鉢に消炭をおこしかけ、鼠いらすから五合徳利をとり出し、まづ待受到素面ではをか

一つ引つかよへ涙ながらしをくとして出て行くと、兵五左衛門大小を取つて投りいだし、

兵「ヤレ／＼重荷をおろした。ナント彌次さん、わしが仕打は妙でありませう。」

棒手振―品  
物を荷ひ歩  
く行人

彌次「駿河ものの詞おそれ入つた。るなか侍の出立、るなか後家の質屋へ見せても、百石取とは直打する男を、棒手振の芋七にして置くは惜しいもの。それに此又矢場のお蛸が、田舎娘の身振妙であつた。皆おれが自作の狂言で二人を頼んで、女房に一ぱい食はせ追出したも、あの陰氣ものに飽果てたからの事、一ツには急に十五兩といふ金がなければならぬへ事で、芋七、貴様へふつと咄したら、貴様のいふには、ソリヤ幸の事がある。さる所の隠居が、内の腰元に手をつけ、孕した故、聲や娘の手前しれぬ先にとて、表向いとまを出して、請人の所へ内證で預けて置かれたが、さうぞ腹の子ぐるめに、金拾五兩つけて片付けたいと、私がたのまれて居るから調度よいが、しかし女房のある上へは如何もとの話について、おれもその十五兩がほしい最中、たとひ腹には鬼の子がやぎつてゐるやうとも、金さへ持つてくれれば、年増女房にあきた所、こいつは妙だと此狂言を書いて、貴様だち二人を頼んで、まんまと上首尾にやりはやつたが、彼持參金のしろ





「孫はえん

さうがて

ぶざうまん

とまひん

あさう

まを

「まれし

とまひん

まを



私には千倍  
—此上も無  
くありがた  
し、何より  
も功德にな  
る

り、永の道中に恥をさらし、お國で若しも命に拘はることや杯あつては、わたしの悲し  
さ。モシ今お前のいひなさるには、たとひ此身はどうなつても、艱難辛抱した女房は  
捨てられぬといひなされたが、私には千倍。もう何にもいひませぬ。わたしには暇を下  
さりませ。あの妹御は駿河からの馴染とあれば、わたしよりはさきの事、添ふとおつし  
やるも無理ではない。サア斯うわけていふ上に、暇をもくれず、お侍さまの手にかゝる  
了簡なら、まづ私からさきへ死にます」ト泣々流元の庖丁を取つてひねくり廻すを、彌次  
郎おさへて、

彌次「コリヤ〜何を、馬鹿者め」

ふつ「イエ〜それでも」

彌次「ハテさて、それ程に思ひ詰めた事ならしかたがねへ、ちつとの間、暇を取つて、  
親分の所へでも行つてゐてくれ、でへじの女房を今去らうなどととは夢にもおもはねへ。  
はかねへ別をするも皆おれがわりいからだ」トさすがの彌次郎も、女房の手まへ氣の  
どくさに、片陰へまねきて、いろ〜にだましつすかしつ言ひふくめ、硯箱とりいだし  
三くだり半を書きてやれば、貧乏人のきさんじさ、着の身着たまよ櫛箱に風呂敷づつみ

縁さー縁に

歸られずか  
—歸られや  
うか

三枚におろ  
されー魚を  
料理するに  
頭を去り脊  
骨を界に更  
に二ツに分  
くるを云ふ

をすてよ、御奉公を大切に勤められよ、また妹おたご事は、假初にいひ約束せし男の外、他へ縁さつくまじとは、まことに貞節のいたりと、殿にも不便に思召され、下地より馴染たる男に添はせよとの御意、有難くお受申して、それより是まで罷越したる所、さきの男女房を持ちをるゆゑ、すごく、妹めをめしつれ歸りましたと、アニハイ兵五左衛門ともいはると侍が、生顔さけて歸られずか。ヤアサア妹めを妻にいたせばそのとほり、いやといへば、是非とも繩をかけて國元へ引きつれ、家老中へ此段を披露し、一旦約せし利金太かたへおのれを渡さねば、兵五左衛門武士がたよない。サアせずことがないと諦めて繩をかよれ。但は踏付けてめしとらずかヤア。

彌次「ハア成程さうおつしやれば聞えましたが、然しそれはおめへさまの方の得手勝手、たとひこの身は三枚におろされ、切刻まれて鹽辛にせらるゝ共、我を大切にして艱難辛抱する此女房を捨てて、妹御を女房に持たれるものか。しかたがねへ。どうとも御勝手になせへまし」ト覺悟して兩手を後へまはせば、兵五左衛門たちかより、すでに彌次郎を縛めんとするを、女房おふつすがり付き、ふつ「モシく段々の様子を承りますれば御尤な事、去ながら現在夫が繩目にかよ

歴的に

せず事が無い、  
仕方が無い

御一分をた  
てられ一男  
子たる面目  
を立てられ

り、此いんもうとを婦妻に貰ひたきよし、媒をもつて申しこした。身にとつては過分の  
 聲ゆるゑ、早速に同心して結納まで受納めた所に、いんもうとめは、一筋にこなたと夫婦  
 の契約をしたうへは、たとひ親兄弟の指圖でも、外へ縁につかずこたアいやだといふ。  
 身共魂消まいものか。ア、せず事がないと、それからその利金太かたへ使をつかはし、  
 彌次郎兵衛と申す者といんもうとめが、密通をいたせし事神もつて存せず、夫ゆる結納  
 も受納いたせし所に、いんもうとめは密通の男ならでは添はないと申す。しかれば妹が首  
 を切つてこなたへ持參仕らう。それにて御一分をたてられ、御了簡頼入ると申し遣せし  
 に先方も諸親類はじめ傍輩共へ、兼てこなた妹御を妻に申し受くる筈と吹聴せし上は、  
 世間體へ對し申譯のない仕合、女の首ひとつ受けたとて、何の役にもたよぬこと、此  
 上は其元とうち果すより外分別なし。明晩阿倍河原に於て勝負を決せずとの返事、元來  
 身どもも覺悟のまへ、いかにもと挨拶せし所に、家老中より雙方を召され、年來御主人  
 の御知行を頂戴いたし居ながら、私の宿意をもつて討果さんとは、殿へ對して第一不  
 忠、妹が兄にかくして夫を持ちしを知らずして、利金太に契約せしを不届とはいひが  
 たし。いまだ婚禮もせないうちの事、互に一分のすたる事は無い筈、自今以後兩人意恨

が、あんまり好しい男でもござりませんから、お前さんがたのやうに、跡を追うて来た人はひとつとりもござりません。この狭い内に女房がふたり三人あつたら、大屋から根太が堪らねへ、店を明けろと追出されるでござりませう。人の知らねへうちに、はやく連れてお歸りなされませ。」

エレハイ  
イヤハヤ

エレく  
ヤレヤレ

兵「エレハイ最前からつべらこべらと、此女中よくしやべるが、其方は先何者だい。」  
ふつ「アイわたしかへ、彌次郎兵衛の女房でござります。」

兵「アニ女房だい、見たくでもない。ヤアこれ彌次郎兵衛、お身女房を持つたか。エレエ是非に及ばぬ、繩をかよれ、國元へ引きていかずに」ト懐中より早繩を取り出し、たちかよれば、彌次郎やつきとして、

彌次「ナニ繩をかよれたアどういふ理窟、わつちが女房を持ちやア繩をかよらにやアなりやせんかへ。途方もねへ。モシエ鯨切を二本さしなさつたとつて、それが恐いものでもござりやせんはな。」

がいにかさ  
高に―甚高  
飛車に、高

兵「イヤお身、がいにかさ高にお出やるな。コリヤよく聞け。今度いんちうとを召しつれたは、家老中の指圖に依つて罷越したぞ。其譯といふは、相役の横須賀利金太方よ



添はせず—  
添はせんす  
の訛、遠参  
方言  
盃をさせず  
—同上、盃  
をさせやう  
まんまこと  
にして—誠  
にして、ま  
に受けて

も、たんだ一人のいんもうとがこと、どうした縁でがな、貴様でなくては添はぬと申すゆる、不便におもつて堪忍の胸を撫でて、すいた男に添はせずと思ひきはめ、わざくめしつれて参つておざる。ヤア此上からは、随分といんもうとめを不便がつてやつて下さい。まづ祝つて冷酒でなりと盃をさせずに、サアくはやくく。

ふつ「オヤくおめへさんは何方かは知らねへが、どこの國にかめつさうな、總體男といふものは、女に逢つて二世の三世の眞實らしくいひかけて、欺して見るは女を落すお定りの口上、それをまんまことにして、駿河からわざく其男に添はさうとつて、連れとお越しなさるといふは、馬鹿氣きつて居るぢやアござりませんか。又妹御も妹御、満足な男でもあることか、わたしは仕かたなしに添つては居ますけれど、色が黒くて目が三角で、口が大きくて髭だらけで、胸先から腹ちうに癬がべつたりで、足は年中雁瘡でざらくして、イヤまた寝た時寢息の嗅いとこ。」

彌次「ヤイくこいつめが、亭主を羅利骨灰にしやアがる。」

ふつ「オホ、く、く、それでも男といふものは廢らねへもので、女とさへいやア眼一でも鼻缺でも、たどは通さぬ氣性、さだめし念比しられた人も、邂逅にはありましたらう

どうぞこゝで仕損らさねへやうにしてへものだが、仕方がねへ。時に飯にしやう、何ぞ菜はねへか。」

ふつ「さつきの剥身殻汁さ。」

彌次「ナニ拔身が喰はれるものか。しかし、こいつもきらずとあれば氣遣なしだ。」ト此内日もくれたるに、行燈をともし、彌次郎茶漬を食ひかゝる時、としの頃五十あまりの侍旅装束にて、

侍「イヤ卒爾ながら、駿河の府中からおざつた彌次郎兵衛殿は爰元でおざるかヤア。」

ふつ「ハイこつちらでござりますが、どつちからお出でなさいました。」

侍「イヤハイ、氣づかひな者ではおさんないヤア。」ト三十ちかき女をつれてはいり、腰をかくるを見て、彌次郎肝をつぶし、

彌次「コレハ兵太左衛門さま、妹御をつれて、何として御出府でござります。」

兵「何としてたア曲がない。このいんもうとめを、貴様の所へ嫁入に連れてまるつたのでござる。ヤアかうばかり申ししては合點が參るまい、貴様國元にて、これなる身どもがいんもうとのお蛸と、密通をせられたといふこと、跡にて聞いて腹立はいたしたれど

曲がない  
つれない

彌次「エ、この畜生めは、願にかけておらが所の裏口に寐てるらア。おふつ、茶はわいてあるか。」

ふつ「オヤおめへ酒ばかりで、おまんまはまだかへ。」

彌次「知れてある事さ。居酒屋へは寄つたが居飯屋へは寄らなんだ。」

ふつ「そして喜太八さんの所から、なんでたびく呼びにくるのだへ。」

彌次「おれに金を貸してくれろとつて。」

ふつ「オヤばからしい、どうしたのだへ。」

假宅―出火  
後にて假越  
せる女郎屋

めでたくな  
る―死ぬの  
意

彌次「あいつめが假宅へでもはまつたさうで、親方の金をちつとばかり使ひこんだといふことさ。其尻が割れると仕損るはあたりまへだが、こゝで仕損つては理窟の悪いことがあるといふ。なぜだと聞いたら、あそこの番頭めが、此間疝氣が天窓へさしこんで、それなりに頭がしやつきりとなつて死んだといふ事だ。それに親方は年寄の癖に、美しい若いかみさんをもつて、腎虚して、もう今日か明日かといふくらゐ、是も今にめでたくなるは必定、さうすると喜太八めが、その後家を受合つて手にいれる仕様があるといつた。成程さう行けば、あいつめはお釜をおこす話だが、そこではおいらも悪い事はなし、

てんぐの内の前ばかり浚つて、長家のものは何だと思つてゐるやら、ノウおくんさん」  
 ト向のうちの唄衆へ水を向けかけると、あがり口に片足おろして、子どもに乳をのませ  
 分の家、自

おけんつう  
 一髪の薄い  
 女、罵辭

いつそ一江  
 打詞にて、  
 大層の意

てんぐの内の前ばかり浚つて、長家のものは何だと思つてゐるやら、ノウおくんさん」  
 ト向のうちの唄衆へ水を向けかけると、あがり口に片足おろして、子どもに乳をのませ  
 てゐる女房、やがておりて門口へ出かけて、

おくん「モシナあんまり大きな聲をして、そんなことを言ひなさるな。奥のおけんつう  
 が、今手水に行つたよ。アノおしやべりも又、大屋さんのおかみさんへ、いつそ追従は  
 かりいつて、長家のことを、どうめへつたかうめへつたと、いと苦勞性ぢやアねへか  
 へ。それに聞きなせへ、此間からあそこの内へ來てゐた居候は、アノかみさんの妹だと  
 いふこつたが、ナニあれがお屋敷に奉公してゐたも凄じい。ちよつと見ても知れてあ  
 りやす。ありやアおへねへ番狂はせものだよ。一昨日も、どこか下谷のお屋敷へ日見に  
 行くとつて、つくり立つて出て行つたが、ナアニよその隠居さまへ妾にいくので、支度  
 金が七兩來たとき、いやぢやアねへかへ。あの面で妾も氣がつよい。わつちらちこの額  
 のはけてうが無く、耳の際の痰癩がもうちつと小さいと、妾にでも出て支度金を取ら  
 うものを、ハ、ハ、ハ、おかみさん彌次さんはまだかへ。オヤノ、噂をいへば影がさす  
 と、ソレ旦那がおけへりだ」ト二人はおのが内へ引込むと、彌次郎立歸りて、







る雑仕、俚  
言集覽に御  
末日本女調  
飯所也と見  
ゆ、それら  
より出でた  
る名稱なる  
べし  
味噌桶のふ  
た云々―惡  
い聲には味  
噌の蓋をす  
又味噌が腐  
る(俗諺)

次郎を大事にかくる様子、此女房の奇特なる心ざしに、彌次郎夜もはやく寢て、するぶ  
ん機嫌をとりくらしけるが、うかくとしてはや十年計の星霜をはりけれども、薯蕷  
鰻にならず、相替らぬ貧乏、されども屈託せぬ氣性にて、売洒落にしやれちらし、近邊  
のなまけ者どもの遊所となりて、五合徳利の寢すがた流元に絶えず、べこべこ三味線の  
音、不斷味噌桶の蓋をあくる間とはなかりける。

あるじ彌次郎兵衛は留守と見え、女房おふつ、流元に明日のしかけて居ると、裏店の女  
房おちよま、細帯前垂にて、棚尻をふつて裏口よりさしのぞき、

おちよま「モシおかみさんへ、御無心ながら、醬油がすこしあらば、どうぞ貸しておく  
んなせへ。ホンニ昨夜は、でへぶお賑かでござりやした。わつちらが所の生酔どのを御  
覽じやれ。まだけへりやせんわな。此間の晩夜更けて、路次の戸を破れるやうに叩いた

とつて、大屋さんのおかみさんが、あの口で、こてへそうに小言をいひなすつたが、わつち  
らが所の野呂馬どのも野呂馬なりやア、あの又おかみさんも餘りぢやアござりやせんか

へ。ナント店賃の一年や二ねん溜つたとつて、一生やらすに置きやアしめへし、それを喧  
しくいふ位なら、溝板の腐つた所もどうぞするがいよぢやアねへかへ。そして犬の糞も

黄金の釜  
郭巨の故事  
を引きて陰  
に鼻之助と  
の契を記せ  
る也

足久保の茶  
— 芦久保は  
阿倍茶の産  
地

さいはじけ  
者—利發者

削り友達  
— 酒食に身代  
をへらす放  
蕩仲間

おすゑ奉公  
— 諸侯家の  
侍女に仕ふ

助といへるに打込み、この道に孝行ものとして、黄金の釜を掘出せし心地して、快び熾氣のありたけをつくし、果は身に途途方もなき穴を掘明けて留度なく、尻の仕舞は若衆と二人、尻に帆かけて府中の町を欠落するとて、

借金しやくせんは富士ふじの山やまほどあるゆゑに、そこで夜逃よにげを駿河すまがものかな。

斯く足久保の茶なることを吐散らし、頓て江戸にきたり、神田八丁堀に新道の小借家住居し、すこしの貯あるに任せ、江戸前の魚の貴味に、豊島屋の劍菱、明櫛はいくつとなく、長家の手水桶てりづに配り、終に右金を呑みなくし、是ではすまぬと鼻之助はなのすけに元服させ、喜多八と名乗らせ、相應あひまの商人方へ奉公にやりしが、元來さいはじけ者にて主人の氣に入り忽ち小錢こぜにの立廻る身分となり、彌次郎やじらうは又國元にて習ひ覺わたりし油繪あぶらえなどを書きて、其日ぐらしに、春米つばなの當座買たうざがひ、たよき納豆なつめ豆、あさりの剥身ひきみ、居ながら呼込んで喰つてしまへば、鑊錢びたぜに一文も残らぬ身代、田舎いなかより着つゞけの布子のそで、綿わたが出て、洗濯せんざの氣を付くる者もなく、是はあまりなる暮と、近所きんじよの削り友達せりともちが打寄つて、さるお屋敷やしきにおすゑ奉公勤めし女をんな、年高としかきなるを嫁して、彌次郎兵衛やじらうべゑにあてがへば、破鍋われなべに綾着あやぎが出来てから、狼おおかみの口くちあいたやうな綻あはれもふさぎてやり、諸事しよじ手まめに人仕事ひとしごとなどして、彌

東海  
道中  
膝栗毛

十返舎一九

初編卷之上

發端

武藏野の云  
云一武藏野  
は月の入る  
べき嶺もな  
し尾花が未  
にかゝる白  
雲續古今、  
秋上

武藏野の尾花がすゑにかゝる白雲と詠みしは、むかしく浦の苫屋、鳴たつ澤の夕暮に  
愛でて仲の町の夕景色を知らざる時の事なりし。今は井の内に鮎を汲む水道の水長に  
して、土藏造の白壁建つゞき、香の物桶、明俵、破れ傘の置所迄、地主唯は通さぬ大江  
戸の繁昌、他國の目よりは、大道に金銀も蒔きちらしあるやうに思はれ、何でも一かせ  
ぎと心ざして出かけ來るもの、幾千萬の數限もなき其中に、生國は駿州府中、枋面屋彌  
次郎兵衛といふもの、親の代より相應の商人にして、百二百の小判には、何時でも困ら  
ぬほどの身代なりしが、安部川町の色酒にはまり、其上旅役者鼻水多羅四郎が抱の鼻之

卷之下……………四四五

七編

序……………四七九

卷之上……………四八一

卷之下……………五二一

八編

序……………五六七

卷之上……………五六九

卷之下……………六〇八

九編

卷之上……………六五三

卷之下……………六九一

十編

卷之上……………七二三

卷之下……………七四七



東海  
道中

# 膝栗毛 目錄

序……………一

## 初編

卷之上(發端)……………一

卷之中……………三五

卷之下……………六〇

## 二編

序……………九一

卷之上……………九三

卷之中……………一二七

卷之下……………一五〇

## 三編

卷之上……………一七五

卷之中……………二一二

卷之下……………二五五

## 四編

卷之上……………二九三

卷之下……………三三二

## 五編

卷之上……………三六三

卷之下……………三八九

## 六編

卷之上……………四二一



# 序

鬼門關外莫道遠五十三驛是皇州といへる山谷が詩に據りて、東海道を五十三次と定らるよしを聞けり。亦箱根八里の長持唄には、猛き宰領の心を和け、竹に雀の馬士唄には、鬼殺を爛せしむ。是その歌の徳利酒呑めや謠の旅衣都をさして行がけの駄賃帳を繰返し、筆の建場に雲駕の息杖をして、えいやらやつと書編りたる、東海道五十三次の紀行に、無滑稽と方言の二割増重荷に僻言夷曲歌、それが中にも唯一夜鮮の飯盛押かけて商ふ戀の箱枕、そのあらましを宿帳の帖となしたるは、空尻の殻無體なるほんの噺の問屋場もどき。ハイ頼ます頼ますと、この本の鹿島立に序する事しかり。

東海道中膝栗毛の版本に三種あり、享和二年に初篇を出せる八篇本、文化六年の再刻八篇本、及び文久二年滑稽五十三驛と改題せる十篇本これなり。本書は就中最も挿繪多くして廣く世に行はると十篇本により、振假名漢字等を補ひ、假名遣、送假名等を正し、會話、俚謠等は一々地文より引きはなして通讀の便を圖れり。但し各地の方言訛語及び其振假名等は、特に嚴密の注意を以て、原本の儘に保存する事を努めたり。

明治四十四年五

校訂者

村 松  
千 葉  
茂 操

## 緒言

本編の作者一九、姓は重田、名は貞一、其嗜める香道に因みて十返舎と號せり。生國は駿河ともいひ又は遠江ともいふ。弱冠より大阪にありて放浪の生活を送る事十餘年、寛政六年三十歳の時遂に江戸に下りて小説戯作を業とし、天保二年六十七歳にて歿す。其著作は洒落本草雙紙の類にして其數實に三百十一種の多きに達す。其中本編東海道中膝栗毛は、彼が名の後世に記憶せらるゝ唯一の傑作にして、滑稽洒脱の妙を極め、我が戯文中稀有の逸品なり。馬琴のものしたる物の本作者部類に、廿餘年相似たる趣向の冊子の斯くまでに流行せしは前代未聞の事なりと記せるを見るも、當時如何にその好評を博したるかを知るべし。蓋し茲に廿餘年といへるは享和二年の東海道中膝栗毛の起稿より、類似道中記數種を完了したる文政五年までの間を指せるなり。



爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

シヨソソソ

PL  
797  
T6  
1907



東海  
道中  
膝

栗

毛

全





PL  
797  
T6  
1907

Jippensha, Ikku  
Tokaidochu hizakurige 2d ed.

G

PL  
797  
T6  
1907

TEIR CARD

SEARCHED FEB 24 1969



